博　士　論　文

朝鮮民主主義人民共和国の「主体思想」に関する研究

島根県立大学大学院北東アジア開発研究科

北東アジア超域専攻　博士後期課程

2018 年 9 月 3 日

崔 穎麗

（指導教員：福原 裕二）

＜目次＞

序章　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　第１節　研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　第２節　先行研究の紹介と検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
　第３節　研究の方法と構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

第１章　主体思想の形成背景：北朝鮮における一元的政治権力の形成略史・・・・・２１
　第１節　北部朝鮮地域における金日成の党権の形成過程・・・・・・・・・・・・・２１
　第２節　統一戦線、共産党組織の糾合と朝鮮労働党の成立過程・・・・・・・・・・２４
　第３節　朝鮮戦争と金日成の党権掌握過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
　第４節　北朝鮮の社会主義体制と金日成による政治権力の確立過程・・・・・・・・３２

第２章　「主体」の萌芽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
　第１節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
　第２節　朝鮮民族の情緒としての「情／恨」と主体・・・・・・・・・・・・・・・・４０
　第３節　金日成の革命経験と主体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
　第４節　解放後の金日成の政治活動と主体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６
　第５節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５

第３章　主体思想の形成と展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７
　第１節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７
　第２節　主体思想の起源・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８
　第３節　主体思想の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７０
　第４節　主体思想の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８３
　第５節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８８

第４章　主体思想の朝鮮的特質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９０
　第１節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９０
　第２節　毛沢東と金日成におけるマルクス・レーニン主義・・・・・・・・・・・・・９１
　第３節　マルクス・レーニン主義の具現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９５
　第４節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１１

第５章　主体思想の教化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１３
　第１節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１３
　第２節　北朝鮮における組織生活と教養体系・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１５

第３節　学校教育における五つの教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１９
第４節　成人に対する教養の一端・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３０
第５節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４６

補章　主体思想の生命力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４８
第１節　問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４８
第２節　生産現場と革命の首都における主体思想の現在・・・・・・・・・・・・１４９
第３節　一般市民における主体思想の現在・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６７
第４節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７２

終章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７３

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８０

資料１　主体思想形成年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８８
資料２　朝鮮社会科学院主体思想研究所研究員への聞き取り調査結果・・・・・・１９７

序章　問題の所在

第１節　研究の背景

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が建国されて 70 年目、朝鮮戦争が停戦を迎えて 65 年目にあたる 2018 年は、北朝鮮及び朝鮮戦争の停戦状況が劇的な変貌を遂げる契機となった一年として歴史に刻み込まれる可能性がある。この年の 4 月 27 日には、北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）国務委員長と大韓民国（以下、韓国）の文在寅（ムン・ジェイン）大統領が軍事境界線の板門店で首脳会談を行い、「韓半島の平和と繁栄、統一に向けた板門店宣言」に調印し、そこで「韓半島にこれ以上戦争はなく、新たな平和の時代が開かれたことを 8 千万の我が同胞と全世界に厳粛に宣言した」ことを謳い、3 条項 13 項目の宣言を行った[1]。また、同年 6 月 12 日には、金正恩国務委員長とアメリカ合衆国（以下、アメリカ）のドナルド・トランプ大統領がシンガポールのセントーサ島で史上初めての首脳会談を行い、「米朝共同声明」に署名し、そこで「トランプ大統領は北朝鮮に安全の保証を与えることを約束し、金正恩委員長は朝鮮半島の完全非核化への確固で揺るぎのない約束を再確認した」上で、4 項目の合意に達したからである[2]。

その一つの「板門店宣言」に見られるように、朝鮮半島は「冷戦の産物である長年の分断と対決」下に置かれてきた。周知のように、北朝鮮と韓国は同じ民族で構成され、「冷戦」という外部要因により国家の分断を余儀なくされた。それにもかかわらず、なぜ冷戦の展開過程における変容やその終結を経てもなお、「分断と対決」を克服することができず、和解へと至ることができないのだろうか。それは、北朝鮮も韓国も、冷戦を主導した米ソの後ろ盾によって建国された経緯を有するが、分断国家として相手方を回収するために建てられた国家であるといっても過言ではないからに他ならない。つまり、北朝鮮も韓国も自国主導の統一が国家の至上命題であり、とりわけ北朝鮮という国家を嚮導する朝鮮労働党の「当面の目的は、共和国北側で社会主義強盛大国を<u>建設</u>し、全国的範囲で民族解放人民民主主義<u>革命</u>の課題を遂行することにあり、最終目的はすべての社会を主体思想化し、人民大衆の自主性を完全に実現すること（下線部は筆者）」、すなわち「革命」と「建設」を行うことだからである[3]。要するに、「分断」は「冷戦の産物」であるものの、その後の「対決」はグローバルな冷戦的対峙に加えて、それとは別文脈の朝鮮半島の統一という極めて地域的な課題に収斂される対抗関係に彩られてきたからである。

それでは、北朝鮮が至上命題化する「革命」と「建設」とは何か。「革命」とは、社会主義革命と「全体朝鮮革命の重要な構成要素である」、「南朝鮮革命」のことであり、韓国（南朝鮮）を「米帝国主義の植民地である」と見なし、これを北朝鮮が解放し包摂することを

---

1 『労働新聞』2018 年 4 月 28 日付。
2 『労働新聞』2018 年 6 月 13 日付。
3 「朝鮮労働党規約」『労働新聞』2010 年 9 月 29 日付。

要旨とする[4]。また、「建設」とは、「社会主義建設」のことであり、国家を革命の強固な土台とするために、「社会主義経済制度を打ち立て、それを断ち切ることなく強固に発展させ、社会主義社会に見合う水準の生産力や文化を築き、人びとの古い思想を共産主義的に改造すること」である[5]。

北朝鮮はこの「革命」と「建設」を追求し遂行するために、国家を指導する党を樹立し、国家社会主義体制を確立して、社会を形成してきた経緯を有している。その下に存在する機構や制度、国内政策や対外関係、人びとの暮らしに至るまでその影響を直接的に受けてきた。そしてそれこそが、北朝鮮が「体制の保証」と言う際の「体制」の内実であり、それを固守しようとする固陋な言動と態度が国際社会との軋轢を生み出していると言えよう。従って、現在において北東アジア国際関係の不安定要因とされる「北朝鮮問題」を平和裏に解決するためには、北朝鮮を冷静に分析し、予断や当為なく北朝鮮の意志と論理を理解すべきである。

2011 年 12 月 19 日、北朝鮮において「偉大な領導者」とされる金正日（キム・ジョンイル）国防委員長が死去した。この際、国際社会においては、1994 年 7 月の金日成（キム・イルソン）主席死去時と同様に、「北朝鮮崩壊」説がまことしやかに囁かれることとなった。他方で、新たな「領導者」として登場した金正恩の若さに加え、彼のスイス留学経験などを持ち出して、改革を期待する希望的観測も見られた。

ところが、現実の北朝鮮を見れば明らかな通り、いずれの希望的観測も空転している。金正日の死去、すなわち金正恩政権が出帆してもなお、北朝鮮では「敬愛する金正恩同志と最後まで意志をともにしよう」とか、「全社会を主体（思想）化しよう」などの従来の指導思想にそくした政治的スローガンの継続的展開が見られるからである[6]。こうした志向性は、筆者の見聞でも窺うことができる。たとえば、板門店の朝鮮戦争停戦協定調印場には、2011 年 9 月にそこを訪れた際には、朝鮮戦争をともに戦った中朝の絆を称揚する写真や金日成、毛沢東の肖像画、当時の彼らの活動の様子を知らせる写真が数多く展示されていた。しかし、2014 年に同じ場所を訪れた際には、金日成、金正日、金正恩の功績を誇る写真に掛け替えられ、それらとともに「主体の革命偉業を、代を継いで継承し完成しよう！ 」とのスローガンが貼り出されていた。そこを訪れる外国人のうち、中国人観光客の数が圧倒的多数を占めていたにもかかわらずであった。2012 年 3 月 3 日には金正恩が板門店を訪れて、調印場にも立ち寄り現地指導を行っていることから、こうした展示の掛け替えは金正恩の承知しているところだろうし、大書きされたスローガンは彼の意志を強烈に発現しようとしているものと筆者には感じられた。そうであるとすれば、北朝鮮が執着している「主体」とはいったい何なのだろうか。

---

[4] 『政治辞典』平壌・社会科学出版社、1973 年、211-216 頁。
[5] 同上、535-537 頁。
[6] 図１～４を参照。

＜図1＞「敬愛なる金正恩同志と最後まで意志をともにしよう！」（平壌市街）

＜図2＞「全社会を主体思想化しよう！」（平壌市街）

出所：図１及び２は、いずれも筆者撮影（2014 年 8 月 20 日）。

＜図3＞「偉大な金正恩同志万歳」（平壌駅）

＜図4＞「偉大な金正恩同志万歳」（定州駅）

出所：図３及び４は、いずれも筆者撮影（2016 年 11 月 7 日）。

北朝鮮において「指導思想」とは、「党、国家およびその他の組織と人民らのすべての活動の事業において指導的指針となる思想」のことである。また、「すべての活動の事業」の中心に位置する「革命」の指導思想には、「人民大衆の自主的要求と歴史発展の合法則性、時代の要求が反映」されているという。従って、「永世不滅の主体思想は、ウリ（われわれ：筆者注）時代の革命と建設においてもっとも正確な指導思想たり得るのである」と北朝鮮では説明される[7]。

こうした指導者や党の思惑通りに、北朝鮮の人びとは主体思想を内面化して理解し説明する。北朝鮮のある住民は、「思想とは、すべての問題をどう考えるか、すべての問題をどんな中心によって考えるかということである。その際、この社会は人間社会であり、すべての問題を人間中心に考えるべきである。主体思想は、人間が自主性、創造性、意識性を持ち、すべての主人であり、すべてを決定するという思想である」と述べる[8]。またある住民は、「この社会は、神様ではなく、人類の歴史として存在している。技術の発展も人間が基本になって成し遂げられてきた。人間だけが高級動物である。従って、人間はすべての主人であり、すべてを決定する」と語る[9]。

このように限られた範囲ではあるが、筆者が北朝鮮で出会った住民たちは、誰もが「主体思想とは何か？」という問いに迷いなく答えることができる。その際、住民たちはほぼ画一的に、「人間はすべての主人であり、すべてを決定する」という言辞を口にする。この言辞は、主体思想の哲学的原理の根本とでも言うべき事柄であるが、北朝鮮ではこの言辞の範囲内では、自由に思考・行動することが認められているようである。言い換えれば、北朝鮮の人びとは、「『自ら』はすべての主人であり、（自らをめぐって）すべてを決定する」という、自分なりの理解・解釈に基づいて日常生活に適応していると考えられる。

さらに、北朝鮮の人びとは、「元帥様（金正日：筆者注）にも、将軍様（金正恩：筆者注）にも仕えるが、しかしもっとも仕えるのは首領様である。朝鮮民主主義人民共和国主席は永遠に金日成首領様である」と答えることがしばしばである。すなわち、金日成という存在とそれが創始した主体思想を絶対的な指針として奉じている。ちなみに、こうした思考は、筆者が北朝鮮で交流することが可能であった、国家から比較的に優遇を受けている人びとのみならず、いわゆる「脱北者」たちの証言からも窺うことができる[10]。

要するに、外部の人びとにとっては単なる統治の手段に過ぎない無味乾燥で虚構性が疑われる指導思想であっても、北朝鮮の人びとにとっては教化の内実であり、自らを拘束し、その存在を守り、自分なりの理解・解釈で日常生活に適応せざるを得ない、自らの血肉化された思考様式であると言える。

以上のように、北朝鮮において新たな指導者が登場したという現実には関わりなく、北

---

[7] 「指導思想」ウリミンジョクキリ http://www.uriminzokkiri.com、2018 年 8 月 16 日最終アクセス。
[8] 2014 年 8 月に平壌市内において筆者が行ったインタビューに基づく。
[9] 同上。
[10] 2015 年 11 月にソウル市内において筆者が行ったインタビューに基づく。

朝鮮では建国以降に形成してきた「革命」と「建設」という内在的な主張と行動、そしてその指針を体系化した指導思想に忠実な態様に変化はない。北朝鮮は政治指導者の無謬性を前提とした、その意味では硬直化した国家体制であるがゆえに、自らが掲げた「原則」（教示やマルスム（お言葉）、演説、談話、現地指導などを通じて下達される指導者の言動）に忠実である。つまり、それは国家行動の範囲を制約し、国民の行動規範や思考の枠組みに大きな影響を与え、さらに北朝鮮が執拗に墨守しようとする「主体」などを網羅する。従って、北朝鮮の行動と態度の理解には、原則＝指導思想の解明が必須である。

そこで本研究は、北朝鮮の指導思想の中核を構成する主体思想の政治史的な解明を課題とする。とはいえ、主体思想は北朝鮮の主張では 80 年以上、主体思想という言葉が初めて語られてから 50 年以上の歴史を有する思想である[11]。かつまた主体思想は、哲学的・社会歴史原理、指導的原則、反帝反封建民主主義革命と社会主義革命理論、社会主義・共産主義建設理論、人間改造理論、社会主義経済建設理論、社会主義文化建設理論、領導体系、領導芸術という広範な体系と内容を有する思想でもある[12]。従って、ここで解明の課題とするのは、哲学や（政治）思想的な内実ではなく、次のような一端に過ぎない。すなわち、主体思想の形成と展開を金日成の抗日闘争期にまで遡って跡づけるとともに、それがなぜ北朝鮮において誕生し、必要とされたのか、具体的な内容は如何なるもので、北朝鮮の政治・外交、経済・社会・文化の内実のなかでどのように理解されるべきものであるか、さらにこの思想が国家にとってどのような意味を持ち、国民に如何に教化され、どのような手法で国民に内面化されていくのか。加えて、主体思想が「北朝鮮」の思想であるという特質はどのような点に認められるのか。こうした問題意識を持ちながら、主体思想の形成と展開をあくまで内在的な理解に立脚しつつ、「主体思想とは何か？」という課題に迫りたい。

南北朝鮮は同じ民族で構成され、冷戦という外部要因により分断を余儀なくされた国家であるにもかかわらず、なぜ冷戦の終結を経てもなお和解に達することができないのかという問いは、裏を返せば、普遍的な論理も韓国の経験も、北朝鮮の行動原理を推し量り、改革開放へと導く参照体系にはなり得ず、北朝鮮の改革開放は北朝鮮式の改革開放しかあり得ず、北朝鮮問題の解法は北朝鮮式の解決の道しか存在しないことを示唆しているように思われる。その意味で本研究は、北朝鮮研究の立場から北東アジア地域の平和と共栄を構想するささやかな取り組みの第一歩である。

---

[11] のちに詳述するが、北朝鮮（朝鮮労働党）は主体思想の創始を 1930 年に金日成が中国吉林省卞倫の進明学校で行った、朝鮮革命の方針を示した報告であるとする。『偉大な首領金日成同志の革命活動略歴』平壌・朝鮮労働党出版社、1981 年、18-22 頁。また、主体思想という名称が初めて語られたのは、最高人民会議第四期第一次会議（1967 年 12 月）での金日成の演説である。『労働新聞』1967 年 12 月 17 日付。

[12] 「偉大な主体思想叢書を発刊するに際して」『偉大な主体思想叢書 1 主体思想の哲学的原理』平壌・社会科学出版社、1985 年、はしがき（頁数無）。

第 2 節　先行研究の紹介と検討

（1）研究資料の前提

主体思想研究の第一級資料としては、これを創始し発展させてきた金日成の『主体思想について』及び金正日の『主体思想について』であることは言うまでもない[13]。また、北朝鮮において「偉大な金日成同志の革命思想の構成体系をはじめとする主体思想、主体の革命理論、主体の領導方法を包括的に解説した」『偉大な主体思想叢書』（全 10 巻）もそれに匹敵するであろう[14]。しかし、かかる資料の問題点は、前者が金日成や金正日の主体思想に関わる部分の抜粋の演説集の形態をとっており、主体思想の強調点や論理の要旨把握には有益であるものの、主体思想として当時において語られた背景や経緯、意味などが捉え難いということがある。また、後者は、主体思想をめぐる一切の関連した内容を「包括的に解説した」資料であり、北朝鮮の内在論理にそくした理解には有意義であるものの、後年に整理されたものであるだけに、資料批判を加えなければ用いられない記述も多々存在するということがある。

従って、北朝鮮で研究され刊行された資料のみならず、他国で研究された二次資料、三次資料も活用しなければならない。ここでは北朝鮮研究が比較的進展している日本と韓国の先行研究の紹介を通じて、研究状況を明らかにしたい。その際、本研究課題にそくして、北朝鮮政治研究、北朝鮮思想研究、主体思想研究の順に検討を施すことにする。

（2）北朝鮮政治の研究（国家論や政治体制論、政治史など）

北朝鮮の指導思想のあり方を含む、政治体制をはじめとする独自の国家体制及びその形成と確立の史的展開に関する研究は、日本及び韓国において一定の蓄積がみられる。たとえば、日本では北朝鮮の国家体制を朝鮮の伝統思想とスターリン主義、そして主体思想に基礎を置く「唯一思想体系」の複合的産物である「首領」制とした鐸木昌之[15]や、北朝鮮では金日成の遊撃隊経験に基礎を置く国家建設が図られたとし、北朝鮮を「遊撃隊国家」とした和田春樹らの研究がある[16]。

このうち、鐸木は、「首領」制とは、「首領の領導を代を継いで継続的に実現することを目的とする体制」であると定義した上で、首領制の構造と論理を権力構造、イデオロギー、政治指導、そして権威と神話に焦点を当てて分析し、独自の構造と論理を有する体制とし

---

13 金日成『主体思想について』平壌・朝鮮労働党出版社、1977 年。金正日『主体思想について』平壌・朝鮮労働党出版社、1991 年。

14 『偉大な主体思想叢書 1～10』平壌・社会科学出版社、1985 年（各巻の執筆者は、第 1 巻：リ・ソンジュン、第 2 巻：パク・イルボム、第 3 巻：キム・チャンウォン、第 4 巻：キム・チャンハ、第 5 巻：キム・ヤンソン／チェ・チョルウン、第 6 巻：カン・ウンビン、第 7 巻：パク・ヨングン、第 8 巻：パク・スンドク、第 9 巻：キム・ミン／ハン・ボンソ、第 10 巻：ソン・ヨンギュであり、各巻すべて 1985 年 5 月から 8 月までに刊行されている）。

15 鐸木昌之『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会、1992 年。鐸木昌之『北朝鮮 首領制の形成と変容―金日成、金正日から金正恩へ』明石書店、2014 年（本書は 1992 年刊行書籍の増補改訂版である）。

16 和田春樹『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』岩波書店、1998 年。

て見出している。また鐸木は、金日成の抗日活動期にも着目し、北朝鮮が主張しているように、抗日闘争の時期に主体思想が創始されたわけではないが、主体性の重要性を認識したのはこの経験にあることは疑いないと指摘している。さらに、歴史的な派閥抗争は、解放後には党指導部内における権力掌握をめぐる闘争となり、同時に中ソというイデオロギー的正統性を掲げる共産党の支援を解放前から受けていたために、北朝鮮の「主体」の主張は、強大国に対する「自己肯定」、内発的に正当性を確保するために、革命史の創造、歴史の書き替えを必要としたと論じている[17]。

さらに、鐸木は別の論文で、主体思想の新たな内容である首領、党、大衆は、一つの生命として結合され、運命をともにする生命体であるということ、すなわち「社会政治的生命体」論を軸に、その内容、意義、背景並びにそれがもたらした社会主義と資本主義概念の変化について検討を行っている。その際、「社会政治的生命体」論は、首領、党、人民大衆を三位一体化する社会有機体論であり、金正日は従来の革命的領袖論を基軸に、首領、党、大衆の関係を、有機体的に体系性をもたせようとしていると断じた。また、「社会政治的生命体」論によって、社会主義社会は、階級的対立が清算され、あらゆる搾取と圧迫がなく、社会のすべての成員が党の指導のもとに首領の周りに結束し、一つの社会政治的生命体を形成し、その生命が宿る社会であると再定義されたと論じている。そして、「社会政治的生命体」論からすれば、共産主義社会は、首領、党、そして人民大衆からなる統一体が完成した社会にならざるを得ないと指摘する。したがって、共産主義社会において完全に具現化される首領、党、人民大衆の統一体は、キリスト教における三位一体と類比されることについても言及している。以上のように、鐸木は「社会政治的生命体」論が体系化された目的を、①ソ連および中国の改革理論が国内に浸透することを阻止しようとしたこと、②資本主義に対する社会主義の優位の回復を目指したこと、③北朝鮮は他の社会主義国家と異なり、南北朝鮮の統一が達成されていないことであると整理している。加えて鐸木は、「社会政治的生命体」論を内容とする主体思想は、マルクス・レーニン主義の継承であると同時に、現実の要求を反映した新たな独創的思想であると評価している[18]。こうした鐸木の議論は、膨大な北朝鮮刊行物を渉猟した上で検証されており、実証的で説得力を有するが、北朝鮮の独創的な思想展開がみられたのは、ソ連・中国などの体制変革と社会主義の優位神話の崩壊、それに伴う資本主義の上昇、そして韓国の相対的優位化という外部要因が強調され、対内的要因を軽視しているきらいがある。

一方、和田春樹は、金日成の生い立ちから死去に至るまでの道程を軸に、抗日闘争および建国、朝鮮戦争、社会主義建設という事象を絡めて北朝鮮政治史を総体的に論じた上で、北朝鮮の国家としての内実を遊撃隊式国家であると主張している。その過程において和田は、北朝鮮で主張されている金日成に関わる神話を中国、ロシアなどの第三国の資料を用

---

[17] 前掲、『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』6,229-238 頁。
[18] 鈴木昌之「北朝鮮における主体思想の新転回―「社会政治的生命体」論を中心に」『法学研究』第 63 巻第 2 号、1990 年。

いて検証し、その史実を解明するのに成功している。ただし、主体思想の萌芽となる「主体」演説に関して、党内闘争及び 1953 年から 55 年にかけての経済政策をめぐる対立を経た金日成らの満州派と、これに極めて近い甲山系が党及び政府を掌握するに至った点、また朴憲永（パク・ホニョン）の処理問題に関して、スターリン死後のソ連の新政府の調査団を内政干渉として拒絶したことについて、人事変動の点からのみ指摘するだけで、詳しい経過については触れられていないのが残念なところである。また、和田は北朝鮮における「土地改革」、「思想総動員」について、満州の抗日闘争経験の重要性を指摘しているものの、詳細な検討には至っていない[19]。

次に、韓国の先行研究について言及すれば、李鍾奭（イ・ジョンソク）や徐東晩（ソ・ドンマン）らの研究が代表的業績として挙げられる。李鍾奭は、北朝鮮社会の特徴を主体思想と「唯一指導体系」だとし、その思想的連関の解明を試みた。「八月宗派事件」を契機に主体概念の理論化が進み、その理論構築に基づいた党の一元的な思想事業の管理が北朝鮮思想の特質だとする。韓国における多くの研究は、北朝鮮の指導思想に反映された中国からの影響を指摘するにとどまるが、李は、「革命的首領観」と党規約などを中国のそれと比較するなどして、北朝鮮の特質をより詳細に説明することに成功している。李によれば、主体思想は 1950 年代に「主体」概念が登場して以降、1950 年代、1960 年代序盤から中盤、1960 年代後半から 1970 年代初頭、1970 年代中盤以後の四つの段階を通じて発展したという。このうち、1950 年代の主体の確立は、朝鮮民族に因襲されてきた事大主義と、当時北朝鮮指導層に蔓延していたソ連式模倣（教条主義）に対するアンチテーゼとして提起されたとする。すなわち、当時の主体確立は反外勢の性格を帯びていたが、それが提起された形式は、朝鮮労働党に影響力を行使していた中・ソとの直接的な対決ではなく、外勢の力を借りた内部勢力との闘争を通じた内在的主体の確立であったという[20]。この点は、北朝鮮政治のその後の展開に有益な視座を与える重要な指摘だけに、このことに関する詳細な背景説明がないのは残念である。なお、この主体の確立過程に対して詳細な検討を加えたものに、小此木政夫の研究がある[21]。

徐東晩は、北朝鮮の社会主義体制の成立過程を、①1945 年 8 月、「日帝」の植民地支配から解放された後、朝鮮人の自発的な結社により権力の空白が埋められ、ソ連軍の占領政策下で各道を中心に人民委員会が作られた時期、②上からの中央集権的動きと周辺の人民委員会の組織的力量が結合して、土地改革、重要産業国有化を完成し、北朝鮮労働党の創設を通じて「党＝国家体制」が成立したが、広汎な私的領域が残されていた時期、③朝鮮戦争を起点として戦時体制が作られ、農村の統治体制が大幅に再編された時期、④朝鮮戦争休戦から 1958 年の農業集団化が確立するまでに、戦後経済復興建設と全社会の社会主義的改造が完了した時期、⑤1958 年から 1961-62 年までに、「党の一元的指導体系」が全社会に

---

19 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』70-77 頁。
20 李鍾奭『朝鮮労働党研究―指導思想と構造変化を中心に』歴史批評社、1997 年。
21 小此木政夫「北朝鮮共産主義の誕生―その原型をめぐって」『ベトナムと北朝鮮―岐路に立つ二つの国』大修館書店、1995 年。

普及した時期の５つの段階に時代区分を行った上で､各段階の権力関係の変化過程を軸に、党と政府の関係、党と軍隊の関係、工業部門の管理体制、農業部門の農業生産体制および農村地域の統治体制など、四つの部門に目配りを利かせつつ分析を行った。このうち、徐は、とくに「主体」の提起について、解放後の北部朝鮮地域における経済建設路線、建国後の農業集団化問題、社会主義革命の宣言、民族解放運動をめぐる葛藤を軸に展開されたとし、金日成は彼に対して主な反対勢力であったソ連派を粛清するために、宗派問題や経済部門での批判だけでは限界があったので、思想事業を通じて批判を加えたものと論じている。それは当時、宣伝部門はソ連派が実権を掌握し、「ソ連式」（教条主義）の弊害を指摘しやすい分野であったからだという[22]。しかし、徐の研究では、国内発展路線をめぐる反対派の除去のためのソ連派粛清であったのか、あるいはソ連の影響（外勢）からの脱出を企図したソ連派の粛清であったのかという、「なぜ『主体』が標榜され、『主体』でなければならなかったのか」につながる重要なポイントへの検討が欠けている。

以上のような、日本及び韓国における研究蓄積のほかに、アメリカでは徐大粛（ソ・デスク）､C.K.アームストロングの研究などが存在する。徐は、金日成の生涯の記述を通じて、北朝鮮の政治史を浮き彫りにしている。具体的に徐は、金日成の革命家としての若き時代、権力の中枢を掌握するに至った経緯、祖国の再統一への努力、国内における権力闘争、中ソ両国との激しい路線論争の末に到達した自主朝鮮の思想、「自主独立」は達成したものの国際社会から孤立したことにより抱えた諸問題、第三世界の諸国のなかに入って展開した国際外交、祖国統一をめざして幾度となく企てた南侵のさまざまな冒険的工作、金日成支配下の北朝鮮社会、金日成の政治思想、息子に後継者教育を施すために行った政治権力の党から行政府への移行など、幅広い観点を挙げ叙述を行っている。こうした徐の研究の特徴は、金日成という人物とその政治手腕をめぐって、「事実」と「創作」とに選り分けた分析を行っていることであり、金日成が築きあげた支配体制を主に権力闘争の産物として分析することに成功している点である。ただし、その分析は「権力闘争の産物」としてだけであるという限界にも突き当たっている。ともあれ、こうした見解に基づいて、徐は金日成が初発的に主体あるいは主体思想を掲げたのは、ソ連派に対する批判を通じた反ソの立場からであって、必ずしもそれは反外勢一般を内容とするものではなく、ましてや反中国の思想でないことを主張している[23]。この点は徐独自の見解で興味深く、検討の余地がある。

C.K.アームストロングは、1945 年から 1950 年までの北部朝鮮及び北朝鮮の政治、文化、経済、社会的変化の軌跡を通じて、北朝鮮という国家の起源を検討した。そこでの新たな見方として、アームストロングは次の四点を明らかにしている。第一に、占領国であったソ連の影響と支援にもかかわらず、北朝鮮「体制」を独特なものとする「朝鮮式」要素が政権の初期段階から明らかにみられる点、第二に、1945 年以前の歴史と政治文化の重要性

---

[22] 徐東晩『北朝鮮社会主義体制成立史 1945 - 1961』ソウル・ソンイン、2005 年。
[23] DAE-SOOK SUH, *KIM IL SUNG: THE NORTH KOREAN LEADER*, Columbia University Press,1988.（邦訳は、徐大粛『金日成―その思想と支配体制』御茶ノ水書房、1992 年）。

を指摘する点、第三に、北朝鮮革命の全体主義的な野心を強調する点、第四に、人民らの間で新たなアイデンティティを作ろうとした北朝鮮の努力の形跡という諸点から、北朝鮮は単にソ連軍政の産物ではなく、日本植民地の遺産とソ連の影響に加え、朝鮮の革命伝統、中国における共産主義運動の経験による複合的産物であるという点である[24]。こうしたアームストロングの見解は、北朝鮮の内発的展開を重要視するものであり、本研究でも大いに刺激を受け、多大なる示唆を得ている。

（２）北朝鮮思想の研究（政治思想、指導思想、主体思想）

ここまでの先行研究の紹介と検討において、主として北朝鮮の国家論、政治体制論、政治史の業績について言及してきたが、それは北朝鮮研究においてその政治思想（指導思想、主体思想）が国家論、政治体制論などの研究の一部として扱われてきた傾向が濃厚だからである。とはいえ、北朝鮮の政治思想を主題にした研究も全く存在しないわけではない。ここでは、とくに北朝鮮の思想を主題に取り上げた先行研究を紹介し検討しておく。

日本では、北朝鮮の思想の内実を「革命的首領観」と「社会政治的生命体」論であると位置づけ、その内容を解明しようとした古田博司、北朝鮮における自主性の問題を詳細に検討した小此木政夫らの研究を挙げることができる。

古田博司によれば、主体思想の骨格には儒教、とりわけ朱子学の体系がみられるという。具体的には、①朱子学の自然観である「人間存在は万物のもっとも高度に完成されたあり方を示すものであり、他の万物は、その範型に照らすとき、さまざまな程度においてより不完全に発見された存在」という基調が、北朝鮮の主体思想に「人間が社会的に自主性を失うならば、人間とは言えず、動物となんら変わるところがありません」という形で受け継がれている。②北朝鮮が有機体的国家へ至る契機となった「社会政治的生命体」論は、「人間は二つの生命をもつ」ことを前提とする。「一つは父母からもらった肉体的生命、もう一つは首領が下さる政治的生命。後者を持たなければ動物と変わりなく、低級である。またこれを失えば屍と違いない」。この生命観が、「人間を精神と肉体に分け、精神の主宰者（魂という）と、肉体の主宰者（魄という）に分別し、この魂・魄が一致しているときを生きている状態とする。逆に言えば魂魄が分離するときが死の状態である」という儒教の死生観に結びついている。③主体論で述べられる「革命的首領観」は、儒教の父母に対する「孝」を用い、これに優越する孝を社会政治的生命の父、金日成首領に捧げるという形で解決しようとした。このように主体思想には儒教（朱子学）との共鳴が見られるという。さらに、古田は、儒教との比較を通じて主体思想の内在的独自性についても明らかにしている[25]。し

---

[24] CHARLES K. ARMSTRONG, *THE NORTH KOREAN REVOLUTION:1945-1950*, Cornell University Press,2003.

[25] 古田博司「主体思想とは何か―北朝鮮における儒教の伝統と現代」『文化会議』1991 年 8 月。古田博司「北朝鮮における儒教の伝統と主体思想の展開―金正日「七・一五談話」を中心に」『下関市立大学論集』第 34 巻第 3 号、1991 年 1 月。古田博司「忠誠と孝誠―北朝鮮イデオロギー教化史上の二大画期点、一九六七、一九八七―」『下関市立大学論集』第 36 巻 12 号、1992 年 9

かし、彼が論理的説明を施した主体思想とは、金正日の登場とともに定式化された主体思想（本研究では、これを広義の主体思想という）のことであり、1950 年代の「主体」の闡明化とともに形成が図られた主体思想（本研究では、これを狭義の主体思想という）ではない。また、「主体」の闡明化とともに形成が図られた主体思想では、その骨格に「人間中心哲学」が内包されていることが、これを体系化させた黄長燁（ファン・ジャンヨブ）によって明らかにされている[26]。したがって、主体思想の解明には「人間中心哲学」構造とともに、なぜ北朝鮮が「人間中心哲学」を受け入れたかを解明する課題も残っているのである。

この点、小此木政夫は、北朝鮮における自主性の問題を中心に主体の闡明化の背景について検討している。小此木によれば、スターリンの死後、ソ連でのスターリン主義に基づく重工業優先主義を修正したマレンコフの新経済政策は、北朝鮮に「外部からの挑戦」を意識させ、共産主義に対して独自の政治体系を構成すべく自覚を迫ることになった。それというのも、ソ連における非スターリン化は、スターリン死後のソ連の直接的な影響としてではなく、北朝鮮国内での反金日成派の形成を促したからである。ソ連派を中心とする反金日成派は、マレンコフの新経済政策を支持し、消費財重視の政策をもって、重工業を主張する金日成派の政策に反旗を掲げた。このことは単に経済政策をめぐる対立のみならず、金日成の権力に対する挑戦を意味した。これに対して、金日成は同時発展論、社会主義革命宣言、反教条主義、歴史修正をもって、反対派を排除することに成功した。国内でソ連派の追放とともになした主体の宣言は、同時に外勢に対する主体の形成へと導かれることになったと主張している[27]。しかし、こうした理解は、「実際はそうではなかった」と修正されつつあり[28]、「主体」の萌芽を真正面から検討しようとする本研究の重要な課題でもある。

（３）主体思想の研究

続いて、韓国では北朝鮮研究が国策的に進められてきたこともあり、政治思想に関する研究も質量ともに比較的豊富である。ただし、様々な形で反共主義の色濃い研究が見られることについては留意しておく必要がある。以下では、主な主体思想研究をいくつかの分野に分けて紹介し検討する。

（ｉ）主体思想の起源をめぐる研究

月。古田博司「北朝鮮における宗教国家の形成―大衆教化の技術的側面を中心に―」『筑波法政』第 20 号、1996 年 3 月。

[26] 黄長燁『私は歴史の真理を見た』ソウル・ハンウル、1999 年。

[27] 小此木政夫「北朝鮮における対ソ自主性の萌芽 1953-1955―教条主義批判と「主体」概念―」『社会主義政治体制の比較研究会』1972 年。

[28] 中川雅彦「金正恩の政治思想」中川雅彦『国際制裁と朝鮮社会主義経済』アジア経済研究所、2017 年、38 頁。

前節で述べたように、主体思想は一定の歴史と広範な体系及び内容を有するがゆえに、多様な研究アプローチ、観点、解明すべき事柄や議論が存在する。このうち、しばしば取り上げられる論点は、主体思想がいつ創始されたのかというということである。この主体思想の始源については、先述の通り、北朝鮮では 1930 年であると主張している。これに対して、韓国の研究は、1955 年を始源とみなすのが通説である[29]。ただし、韓基壽（ハン・ギス）は、1930 年の「卡倫」会議を端緒に主体思想を創始したという北朝鮮の主張は、1945 年以降に北朝鮮で刊行された文献により虚構であることを立証することができるとした上で、1955 年 12 月 28 日の金日成の演説「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立するについて」を主体思想の始原とするのもまた誤りであり、1956 年 4 月 23 日に開催された朝鮮労働党第 3 次大会での中央委員会事業総括報告であると論じている[30]。この主体思想の創始をめぐる問題については、第３章第２節において検討を施し、一定の見解を示すつもりである。

（ⅱ）主体思想の機能に関する研究

オ・ギョンソプは、金日成・金正日の権力掌握過程において、政治的な環境の変化により、主体思想の構造は政治的機能が「首領唯一体制」を正当化する内容に変化し、1990 年代には国家の総体的な危機状況が訪れ、主体思想の首領唯一体制の正当化機能を補完するために先軍思想が提起されたと論じている[31]。また、民族統一研究院の研究によれば、主体思想は、機能理論で説明できるように、家族と学校教育、大衆メディアなど、北朝鮮体制の社会化規制を通じて、自発的同意の形により内面化されると同時に、適切な統制を通じて内面化が肯定的に行われていると見なされるという見解を打ち出している[32]。

（ⅲ）主体思想とマルクス・レーニン主義の比較に関する研究

一般的に主体思想は、北朝鮮が公式的に主張するように、マルクス・レーニン主義を北朝鮮の状況に合わせて適用し、北朝鮮式に構想された思想であると考えられている。しかし、韓国の北朝鮮研究においては、主体思想の骨格を形成する論理に関連して、主体思想がマルクス・レーニン主義思想の「継承発展」ではなく、主体思想とマルクス・レーニン主義思想は互いに異なる思想であるという主張が根強く存在する。このように、主体思想がマルクス・レーニン主義から離脱したと評価する李（イ）ジンキョンは、その主な根拠

---

29 例えば、朴在圭編『北韓理解のハンドブック』ソウル・法文社、1999 年、51 頁。徐ザイジン『主体思想の離反：支配イデオロギーから抵抗イデオロギーへ』ソウル・博英社、2006 年、240 頁。呉ギョンソプ「主体思想の構造と政治的機能の変化」『世宗政策研究』2012-17 号、2012 年 8 月。金キュントン「北韓政権の統治イデオロギー批判研究（Ⅱ）―主体思想の形成、展開過程及び機能を中心に」『釜山政治学会』第 7 巻第 2 号、1997 年、250-267 頁。金昌順『北韓政治社会の理解〔第四版〕』ソウル・法文社、2006 年。

30 韓基壽「北韓主体思想の淵源と性格」韓国外国語大学博士論文、1992 年 2 月。

31 前掲、「主体思想の構造と政治的機能の変化」１-48 頁。

32 民族統一研究院『主体思想の内面化実態』（研究報告書 94-06）、民族統一研究院、1994 年。

として、主体思想の「人間中心の世界観といわゆる『人間（の属性）論』は、マルクス主義にはないもの」であり、また主体思想は「『時代の発展』に伴い浮上してきた新しい合理的要素を含むものでもなく」、「マルクスがすでに 1840 年代にフォイエルバッハから学んだものを、マルクスの思想的発展とともに批判視され、廃棄した『非合理的要素』を含むものに過ぎない」と主張する[33]。主体哲学は、マルクス・レーニン主義哲学とは矛盾する内容を含んでいるから、主体思想とマルクス・レーニン主義は本質的に異なる思想であるとする見解である。

他方、徐（ソ）ザイジンは、「主体思想はマルクス・レーニン主義の細部概念が実在する状況でマルクス・レーニン主義を廃棄した」と主張し、「マルクス・レーニン主義を主体思想で代替え」したので、「北朝鮮で実在するマルクス・レーニン主義を隠蔽するためのイデオロギー的スローガンとして活用された側面が強い」と主張している[34]。ソ連からの政治的影響を遮断するために、ソ連の指導理念であるマルクス・レーニン主義ではない北朝鮮の理念で新しく衣を纏おうとしたのが当時の主体思想であり、北朝鮮は未だマルクス・レーニン主義によって組織され、統治されているとの指摘である。

これに対して、「主体哲学とマルクス・レーニン主義の哲学だけを比較することにより、主体思想とマルクス・レーニン主義が根本的に異なるとの主張は、主体思想の比較心的要素とマルクス・レーニン主義の革新的要素を比較する過ちを犯している」と主張する研究も存在する[35]。

（ⅳ）主体思想と毛沢東思想の比較に関する研究

李（イ）キボンは、金日成が創始したとされる主体思想のみならず、「人間第一主義」、「主体戦法」、「統一戦略」など、金日成の多くの戦略及び主体思想の原型は、毛沢東の「革命戦争」理論に多大な影響を受け、これに若干の修正を加えた毛沢東思想の模倣であると主張する[36]。また、李崗石（イ・グァンソク）は、主体思想の「歴史的条件と民族的特殊性に合わせた適用」、「人間中心論」、「千里馬運動」と、毛沢東の「実践論」、「人力動員政策の理論的合理化」、「大躍進」を比較考察した上で、その類似性を明らかにした。その上で李は、金日成は主体思想を強調して、住民の危機感を煽らなければ体制が動揺することを十分に認識しているという点で、主体思想は体制を外部の影響力から保護する手段であると断じている[37]。

他方、李鍾奭は、主体思想の形成過程では毛沢東思想の影響を強く受けたものの、中国

---

33 李ジンキョン『主体思想批判 2』ソウル・ビョリ、1989 年。

34 徐ザイジン「北韓のマルクス・レーニン主義と主体思想比較研究 : 体制に及んだ影響と改革・開放論理を中心に」『統一研究叢書』、2002 年 12 月、1-176 頁。

35 鄭タイファ「北韓社会の理解―第四章 : 北韓の統治イデオロギー」http://politica.or.kr（2015 年 6 月 12 日アクセス）。

36 李ギボン『金日成和戦戦略検証』ソウル・タナ、1993 年。

37 李崗石「主体思想と毛沢東思想との比較」『安保研究』第 20 号、1991 年 6 月、45-63 頁。

の影響力は「北韓（北朝鮮：筆者注）的なもの」に触変して受容され、作用してきたと指摘している。その上で李は、主体思想と毛沢東思想は、実践的な側面でソ連共産党が要求するマルクス・レーニン主義に対する教条的な受容を拒否しながら発展した点、革命建設過程で思想を特に強調し、人間の役割を特に重視した点、大衆的実践の中で形成され、実践を理論発展の基礎とする点などに特徴を共有していると分析する。その一方で、主体思想と毛沢東思想は多くの差異も認められ、それこそが現代中国と北朝鮮の相違を形成した重要な要因だとしている。その差異とは、具体的には構成体系、党内位相と解釈水準を挙げているが、指摘に止まっているのは残念である[38]。

（ｖ）純粋イデオロギーと実践イデオロギーの概念からの主体思想に関する研究

楊（ヤン）ムジンは、主体思想研究に際して、フランツ・シューマンの純粋イデオロギーと実践イデオロギーの概念を適用して、その論理構成を検討した研究を発表している。楊によれば、北朝鮮は純粋イデオロギーとしての主体思想を高度に抽象化して存続させつつ、その後に登場した先軍思想は実践イデオロギーの役割を担い、北朝鮮の社会主義発展にとっての実践の原則と方法を提供しているという。また、純粋イデオロギーとしての主体思想を高度に抽象化させながら、こうして変容していったイデオロギーを通じて、体制の正当化を図り、このことが北朝鮮体制の新しい方向転換を象徴的に示していると主張している[39]。

また、郭承志（カク・スンジ）も、フランツ・シューマンのイデオロギー位相構造を北朝鮮に適用して主体思想を分析しているが、郭の場合にはマルクス・レーニン主義を純粋イデオロギーに見立て、主体思想を実践イデオロギーと見なしている。とはいえ、1980 年代に至ると、北朝鮮は主体思想がマルクス・レーニン主義に代替したと主張しているから、北朝鮮での純粋イデオロギーは主体思想そのものとなり、主体思想が時代状況の変化を反映する柔軟性を獲得する過程で、実践イデオロギーを相次いで生産していると主張する[40]。

（vi）主体思想と「人間中心論哲学」の比較に関する研究

統一政策研究所の研究によれば、1972 年に金日成が行った日本の『毎日新聞』とのインタビューにおいて、主体思想が黄長燁により肉付けされたことが明らかになったという。そこでの主体思想は、「自己運命の主人は自分自身であり、自分の運命を開拓していく力も自分自身にある」という、階級主義と決別した新しい人本主義の人間中心哲学を中心にするものであった。人間中心哲学は、個人主義と集団主義の結合、個人中心民主主義と集団中心民主主義の結合を通じて、現在の民主主義をより包括的に具現させる方案を探る実践

---

38 李鍾奭『新しく書いた現代北韓の理解』ソウル・歴史批評社、2000 年。
39 楊ムジン「主体思想と先軍思想：支配イデオロギー変化可能性」『韓国と国際政治』第 24 巻第 3 号（通巻第 62 号）、2008 年 9 月、57-93 頁。
40 郭承志「北、統治イデオロギー変わったか？『主体思想』の実践イデオロギー『先軍思想』提起され」『自由公論』第 40 巻 6 号（通巻 459 号）、2005 年 6 月、90-94 頁。

指向的哲学であった。ところが、金日成の唯一思想体制下、そして金英柱（キム・ヨンジュ）と金正日の権力闘争の峡間で、黄長燁の創案した主体思想は首領独裁を正当化させる政治的道具に変質したという[41]。

（vii）主体思想をめぐるその他の研究

近年の韓国における主体思想研究は、北朝鮮において金正日執権後に盛んに「先軍思想」が言及されてきた状況を受け、主体思想と先軍思想との関係を穿つ動向が顕著である。このうち、主体思想と先軍思想との関係を分析するにあたり、主体思想は先軍思想に塗り替えられたとする主張と、先軍思想はあくまで主体思想の発展形に過ぎないとの主張に分かれる。

徐ザイジンは、主体思想が先軍思想に塗り替えられたと主張する急先鋒であり、金日成の死後、先軍政治を手段とする強盛大国建設の主張は、主体思想を上書きする新たな統治理念の機能を果たしていると見なす[42]。他方、金（キム）ファンシュは、北朝鮮は主体思想を唯一的統治理念としてその包括性と総体性を維持しつつ、北朝鮮体制全般を指導する原理で、時代的特性と要求とに合わせ、自己修正的な変容をしてきた国家であるとする。その上で、抗日武装闘争がすべての思想理念的原型であり、主体思想と「社会政治的生命体」論に立脚した首領の地位と役割、党優位の政治を放棄しない限り、先軍思想は狭義の主体思想のような純粋イデオロギーとしての統治理念の位置を占めるのは難しいと主張する[43]。また、ブ・スンチャンは、主体思想と先軍思想の相関関係について、先軍思想は主体思想に基づいており、主体思想の基本原理を全面的に具現するような主体思想の従属的概念に過ぎないと見なす。その上で、主体思想の廃棄あるいは先軍思想の純粋イデオロギーへの格上げは、金日成-金正日-金正恩に繋がる世襲体制の放棄を意味すると同時に、北朝鮮体制の転換を意味する。従って、先軍思想は危機状況に対する統治手段あるいはその説明論理に過ぎないと主張する[44]。

これらの研究のほかにも、主体思想を宗教と見なし、キリスト教の教義との比較から思想的特徴を導き出そうとする研究もある[45]。また、すでに言及した研究群の観点と重複する

---

41 統一政策研究所『主体思想と人間中心哲学』ソウル・統一政策研究所、2003 年。

42 前掲、『主体思想の離反』293 頁。

43 金ファンシュ『思想強国―北韓の先軍思想』ソウル・ソニン、2012 年。

44 ブ・スンチャン「主体思想と先軍思想との相関関係」『社会科学研究』第 19 輯 2 号、2011 年、108-137 頁。

45 例えば、金炳魯『北韓社会の宗教性：主体思想とキリスト教の宗教様式比較』ソウル・統一研究院、2000 年。張吉星『キリスト教の主体思想』ソウル・ハンクル、1988 年。張吉星『主体思想の神学原理』ソウル・エデン文化社、1993 年。朴チョルホ『（キリスト教考体系による）北韓主体思想考分析」ソウル・ナヌム社、2012 年。孟ヨンキル『キリスト教の未来と主体思想』ソウル・キリスト教文社、1990 年。李シュウォン「北韓主体思想学習体系の宗教性研究―キリスト宗教活動との比較を中心に」『統一問題研究』2011 年上半期（通巻第 55 号）、2011 年 6 月。鄭タイイル『国家宗教としての北韓主体思想研究』韓国学中央研究院韓国学大学院博士論文、2011 年。

ものも含まれるが、主体思想の登場背景に関する政治的研究として、主体思想が中ソ対立の峡間で生き残るための戦略的及び政敵粛清の手段から胎動したことを明らかにしようとする研究[46]、主体思想の理論的・哲学的解明に関する研究として、主体思想の時期別発展過程とマルクス・レーニン主義との類似性、差異性及び具体的内容（哲学原理、社会歴史原理、指導原理など）を明らかにしようとする研究[47]、主体思想が結果的に北朝鮮体制と住民をどのように統制しているかというイデオロギーの機能に関する研究として、社会統制のための各種住民動員組織及び主体思想の教育課程に関する研究なども存在している[48]。

第 2 節　既存研究の問題点

以上俯瞰してきたように、本研究に関わる先行研究を整理・検討してみると、北朝鮮の指導思想に関する研究が政治体制研究の一環として扱われることが多く、指導思想そのものにメスを入れた体系的研究はごくわずかだということが分かる。これは前節 2 項の「北朝鮮思想の研究」で挙げた各業績においても、標題では主体思想研究を掲げながら、その実多くの頁数は政治体制の説明や政治史の展開に割かれていることからも明らかである。このことはしかしながら、北朝鮮政治の場合、政治体制と指導思想が分かちがたく表裏一体であり、研究の手順として必然的なのかもしれない。

また、僅かな思想研究の中では、主体思想の創始に関して重要な論点となる「主体」の発現を、北朝鮮国内のソ連派、延安派を粛清することによる大国の影響からの離脱を強調する、いわば外在要因を展開する傾向が強いことを特徴とする。言い換えれば、スターリンの死去を起点に玉突き的に主体の発現に至ると見なす主張が通説である状況を看取することができる。この通説に従えば、建国期依頼においてソ連の庇護を受けてきた北朝鮮の「主体思想」は、外在要因により形成が図られ、外勢に与しない「独裁体制」を構築するために確立された政治的便宜物に過ぎないということになる。そうした内発性を顧慮しない見方でよいのかどうかには甚だ疑問が残る。

さらに、主体思想を思想やイデオロギーとして俎上に載せる研究であっても、マルクス・レーニン主義思想や毛沢東思想との類似点を摘出し、単純な項目比較を基に評価するに止まっているような研究状況である。あるいは、主体思想は哲学的意味を有する思想と言えず、主体の決定者は金日成をはじめとする指導者に他ならず、その他の個人は非主体的な存在で、自ら考えることのできない人間を要求するのが主体思想だとの批判を弄する研究も依然として根強い状況である。そうであるならば、なぜ「主体」でなければならず、「主体」であることを選択し、国内論理として「主体」を用い、金日成は権力闘争を脱することや体制構築に成功したのか。また、1950 年代中盤の主体宣言に始まり、1965 年の主体思想の提起、1967 年の唯一思想体系の確立、1970 年代の金日成主義、唯一指導（領導）体系

---

46 例えば、鄭鎮渭、小林敬爾訳『平壌―中ソの峡間で』コリア評論社、1983 年。
47 金哲央『主体哲学概論』未来社、1992 年 4 月。
48 前掲、『主体思想の内面化実態』1 頁。

の構築、1980 年代の「社会政治生命体」論へと展開され、現在に至るまで「主体を全社会化しよう」などのスローガンの継続に何故進むことが可能となったのか。どの国においても統治の正当性やその国の国民を動員する論理は、それだけの妥当性を持たなければならない。その妥当性を構成する要素には、「想像の共同体」を国民に内面化させるだけの共同体成員共通の記憶と経験が欠かせない。その意味で北朝鮮の主体思想には北朝鮮の内在論理、朝鮮的特質が備わっているはずである。

本研究では、以上で述べてきたような先行研究の状況と水準、問題点などと、北朝鮮の指導思想をめぐる筆者自身の問題意識を踏まえた上で、とくに北朝鮮における「主体」の提起の持つ意味とそれが指導思想に昇華する過程と論理、そして形成されていった指導思想が国民に如何にして教化され、それが貫徹される領導芸術の手法、これらを包括している朝鮮的特質の抽出を軸に、「主体思想とは何か」の解明を試みる。

第 3 節　研究の方法と構成

本研究は、これまで述べてきたように、北朝鮮の対内外的な態度・行動と密接不可分な内在論理、独特な指導者の存在と統治体系、指導思想の機能と教化手段などの検討に基づいて、「主体思想とは何か」を考察する。したがって、オーソドックスな政治学や歴史学の研究方法とともに、社会学的な研究方法も用いたいところであるが、内部資料の入手が困難であるだけでなく、現地調査や聞き取り調査が限定的な形でしか実施できない状況に鑑み、北朝鮮の刊行物を主として利用した文献研究を研究の方法として採用する。これを補完する形で、限定的ではあるが幾度となく実施してきた現地調査や北朝鮮住民、脱北者へのインタビュー結果、朝鮮社会科学院主体思想研究所研究員への聞き取り調査結果、日本や韓国などの先行研究を資料として用いる。

また、本研究の構成は次のようになる。第 1 章では、主体思想が形成されてきた背景を素描するために、金日成と朝鮮労働党が一元的な政治権力を如何に形成していき、国家社会主義体制をどのように確立したのかという観点から、北朝鮮政治史を概述する。指導思想の核心たる主体思想の形成は、政治権力及び国家体制の成立過程と密接不可分だからである。第 2 章は、主体思想の発現の前兆となる「主体」の萌芽について議論する。そこでは、抗日戦争期にまで遡り、朝鮮民族の情緒、金日成の革命過程と解放後の位相が検討され、なぜ主体思想は「主体」でなければならなかったのかが明らかにされる。第 3 章は、前 2 章の論述を踏まえ、主体思想の形成と展開を詳述する。その中で、主体思想がなぜ北朝鮮で必要とされたのかを析出する。第 4 章は、北朝鮮の思想としての主体思想、すなわち主体思想の北朝鮮的特質の抽出に焦点が当てられる。そこでは、まずマルクス・レーニン主義思想の毛沢東思想及び主体思想への影響関係を取り上げる。その上で、毛沢東思想及び主体思想が如何にマルクス・レーニン主義思想を応用し、自国の政治過程で具現してきたかを分析する。これを踏まえて、主体思想は毛沢東思想と具体的に何が異なるのかを示し、主体思想の北朝鮮的特質を明らかにする。第 5 章は、以上のように形成され、北朝

鮮で必要となり、思想的な特徴を帯びた主体思想がどのように国民（人民）へ教化され内面化されていくのかが検討される。北朝鮮では主体思想を具現化し、人民大衆を動かす技術や方法を「領導芸術」と言う。この領導芸術の一端の解明を通じて、主体思想の教化の側面が明らかにされる。補章では、主体思想の内容や構造、論理が明らかになった上で、なぜこの思想が北朝鮮の主張では 80 年以上、実質的には 50 年以上もの長きにわたって北朝鮮のイデオロギーであり続けているのかについて検討を施す。そこでは、主に現地調査や聞き取り調査などの成果を用いて、議論を構成することにする。そして、終章では、改めて各章の論述を要約した上で、結論を提示する。

第1章　主体思想の形成背景:北朝鮮における一元的政治権力の形成略史

第１節　北部朝鮮地域における金日成の党権の形成過程

1945 年 8 月 15 日、日本の敗戦によりアジア・太平洋戦争は終結した。日本の敗戦は、大日本帝国が支配した植民地の解放を意味した。その植民地の一つである朝鮮半島は、解放による植民地政府の瓦解により、全ての領域で権力の空白が生じた。

朝鮮半島は、解放される以前に、連合国によって「朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、やがて朝鮮を自由かつ独立のものたらしむるの決意を有す」とされ（カイロ宣言：1943 年 11 月）、さらにヤルタ会談（1945 年 2 月）で「信託統治」が合意されており、日本が敗戦し解放された暁には、連合国による統治が既定路線化していた[49]。但し、このことは、戦時中はもちろんのこと、解放直後においても、朝鮮半島の人びとに知らされることはなかった。

米ソ両軍が朝鮮半島へ進駐するに先んじて、その領域における権力の空白を埋めたのは、概ね道（日本の都道府県に当たる行政単位）を単位とする各地域で自然発生的に形成された自治組織であった。とはいえ、そうした自治組織は、とりわけソ連軍が進駐した北部朝鮮地域では、各道を単位として当該地域の行政的な中心が形作られていく中でも、中心同士の有機的連携は成立していなかった。従って、1945 年 8 月末のソ連軍の進駐から 1946 年 2 月頃に至るまでの北部朝鮮の政治情勢は、行政的な中心と政治的な中心が併存して存在し、それが次第に平壌の政治的中心へ収斂されていく過程であると言ってよい。言い換えれば、「解放」への対応として独自に形成されていった各地域の土着政治勢力と自治組織は、外部勢力の手を借りて中心が創造されていく中で、各々の事情や紆余曲折を経ながら、統合されていったのである[50]。

北部朝鮮へ進駐したソ連軍当局がその地域に対する本格的な政策構想をどのように示したかということは、ソ連軍最高司令部が発した 7 つの項目にわたる布告から見て取ることができる。この布告には、第一に、朝鮮の領土内にソビエト及びその他のソビエト政権の機関を樹立せず、またソビエト秩序を導入しないことが謳われている。そして、第二に、北部朝鮮に反日的な民主主義政党、広範な団体の連合を基にしたブルジョア民主主義政権を確立することが標榜されている。つまり、信託統治に基づく北部朝鮮側の朝鮮人による「民主主義的な」政治勢力の結集と統合体の形成をさしあたりの課題として設定していたことが分かる。ソ連軍政の始発において、曺晩植（ジョ・マンシク）を中心とする朝鮮民主党との統一戦線を軸に、広範な政治勢力を結集した民族統一戦線に基礎を置くブルジョア政権の樹立を標榜したのもそのためであった。但し、ソ連軍当局にとっては、あくまで共産党が統一戦線の中心になるべきことは重要な前提であった[51]。

1945 年 10 月 8 日から 10 日にかけて、平壌において「五道人民委員会連合会議」が開催

---

[49] カイロ宣言、ヤルタ会談に関しては、神谷不二（編集代表）『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』日本国際問題研究所、1976 年、162-164 頁及び 243 頁を参照。
[50] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』59 頁。
[51] 同上、60 頁。

された。この会議を前後として北部朝鮮地域では、この後の方向を左右する重大な会合が幾つか進められた。10 月 5 日から 13 日にかけては、北部朝鮮地域を管轄する共産党組織を創設する問題について、南北朝鮮地域の共産主義者らの間で激しい政治闘争が展開された。ソ連当局の意向により、北部朝鮮地域に政権の基礎を築く政策が決定された以上、その作業の一貫として北部朝鮮地域に独自の党組織を形成すべきことは、ソ連軍政の当面の最も重要な課題となった。しかし、共産党組織の「一国一組織」原則がそれに大きな壁として立ちはだかっていたことも事実である。朝鮮半島には、1925 年に共産党組織がすでに成立し、共産党のソウル中央が存在していた。

ソ連軍の政策を体現し、共産党の南北分立を主動的に推進したのは、自らの勢力を中心にして共産党を再建すべく、中国共産党下で「共産工作団」を組織し帰国した金日成などのパルチザングループであった。金日成らは 9 月 19 日、ソ連軍とともに元山に上陸した。彼らは帰国する直前に、北部朝鮮各地に設置されたソ連軍衛戍司令部の副司令の肩書きで各地域に赴任する命令をソ連当局から受けていた。例えば、金日成は平壌のソ連軍衛戍司令部副司令という職名で帰国した。そのような彼ら「朝鮮工作団」の存在は、延安の中国共産党はもちろん、モスクワのソ連共産党にも公的に認められた存在であった[52]。ちなみに、朝鮮戦争時に米軍が鹵獲した当時の文献には、9 月 22 日に平壌へ到着した金日成は、「金永煥（キム・ヨンファン：筆者注）という変名を使って」、「帰ってきたその日からまた猛活動を開始した」と記されている[53]。

しかし、前述の通り、北部朝鮮の各地域には、すでに各地方の自治組織である人民委員会が行政と治安を担当し、且つまた共産党組織も存在していた。従って、金日成らは各地方の共産党組織に準じて活動しなければならなかった。但し、中国やソ連の共産党に公認され、ソ連軍の後ろ盾によって活動する金日成らは急速に土着の共産党組織のイニシアティブを握りつつ、彼らが中心となって組織が再結束され、一つのまとまりとして糾合されていった。こうした状況を北朝鮮の文献は、「地方党団体を助け、隊列内の混乱状態を克服・整理し、彼らの思想意志の統一を保障するために共産主義的核心らを各地方に派遣し、党創建方針を浸透させるために、金策（キム・チェク）、安吉（アン・ギル）、金一（キム・イル）らを地方に派遣する（カッコ内は筆者注）」と記している[54]。後に、彼らの大部分は、北部朝鮮の治安組織で、朝鮮人民軍の前身となる保安隊に参加し、軍の創設を主導することになる[55]。こうした共産党の南北朝鮮における分立過程とそこでの展開は、北朝鮮史において最も重要なターニングポイントの一つであると言えるが、資料的な制約があり、未解明な部分が多い。

「五道人民委員会連合会議」が開催される直前の 10 月 5 日、北部朝鮮では独自の共産党組織を創設するための予備会合が催された。この予備会合で金日成は、ソウルの朝鮮共産

---

[52] 和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992 年 3 月、343 頁。
[53] 韓載徳「金日成将軍凱旋記―輝かしい『革命家の家』を訪ねて―」『文化戦線』創刊号、84 頁。
[54] カン・イミョク『金日成同志による朝鮮共産党の創建』朝鮮労働党出版社、1961 年、34 頁。
[55] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』64 頁。

党中央委員会とは別の北部朝鮮における党の中央機関として「北朝鮮中央局」の設置を提議したが反対に遭遇した。このため金日成は、ソウル中央の朴憲永との妥協を企て、ソウル中央に属する形での共産党組織の分局を作ることについて協議することとなった。そうして、10 月 10 日には、北部朝鮮各道の人民委員会と人民政治委員会の代表者のうち、70 名の共産主義者だけが一堂に会し、「西北五道党責任者及び熱誠者大会」を開催した。そこでは先の予備会合と同じく、「北朝鮮中央局」を設ける提案を行ったが反対された。共産党北朝鮮中央局の設置を支持するグループ（パルチザン派、ソ連系の朝鮮人、平安南道を中心とした国内系共産主義者）と、ソウル中央（咸鏡南道を中心とした国内系共産主義者）を支持するグループが対立したのである。そこで金日成は、朴憲永に提案した通りの分局の設置という妥協案を示し、合議を図った。これに対して、金日成の思惑に異を唱える国内派の共産主義者たちは分局設置にも反対したが、朴憲永との協議を尊重し方針を変えた[56]。

こうして 10 月 13 日には、参加代表者をさらに拡大し、およそ 100 名の参加者を集め、「西北五道党責任者及び熱誠者大会」を正式に開催した。この大会で、「朝鮮共産党北部分局」（以下、分局）が公的に結成された。そこで金日成は、「北部朝鮮の特殊性によるすべての行政、他の党政策を実現するために、さらに党中央との密接な指導と連絡が要求されると同時に、五道の行政上の統制を必要とすることにより、北部朝鮮に党の分局が設置される必要がある」と説明を行った[57]。このようにして、分局の設置は、ソウル中央及び各道党との妥協により成立した。そのほかにこの大会では、「外来の力による民族解放は獲得されたが、統一の主権は未だ樹立されておらず、統治の面では唯一人民の意志を代表する朝鮮人民共和国を樹立することこそ、課業を完全に解決する道である」ことが謳われ、そのための当面の課業は、「連合軍との親善を企て、全人民戦線への統一を図る」ことであると主張された[58]。

ところが、この大会において金日成は、分局の責任秘書には選ばれていない。金日成は共産党内での立場には拘泥せず、幅広い統一戦線の結成に着手しようとしたからだと考えられる。それはともあれ、この大会を分岐点に、北部朝鮮の五道行政局は、その地域での中央集権的な政府樹立の母体となった。併せて、この時期に北部朝鮮地域では、南部朝鮮の民族主義左派の影響力が及ばない部門に、南部朝鮮の中央組織に従属的ではない青年団体と女性団体の結成を急いでいた[59]。

こうした状況下で、1945 年 12 月頃にソ連から党の組織化や行政部門を専門とする朝鮮人グループが到着した。彼らの参入により、北部朝鮮における共産党内の「ソ連派」の形成が本格化した。12 月 13 日には、延安朝鮮独立同盟の主要メンバーらも帰国を果たし、「延

---

[56] 韓国・国史編纂委員会「北朝鮮の政党と社会団体」『1947 年北朝鮮政治関連報告書』（収集番号：010312）に収録。

[57] 「朝鮮無産階級の偉大な指導者 朴憲永同務万歳―労働者農民と一切勤労大衆は朝鮮共産党の旗の下で―」『正しい路線のために』ソウル・ウリ文化社、1945 年 11 月 7 日、61 頁。

[58] 同上、60 頁。

[59] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945-1961』135 頁。

安派」が形成されることとなった[60]。こうして、旧満州地域で抗日闘争を展開した満州派（＝パルチザン派）、ソ連派、延安派が既存の国内派に対抗し、金日成の強力な後援勢力として登場した。

他方でこの時期、北部朝鮮の共産党が農民大衆の支持を確保するために注力したのが「3・7 制闘争」であった。とりわけ、共産党と民主党の統一戦線には多くの摩擦が生じ、小作料 3・7 制の実施に関わり両勢力の間では不信が深まって、共産党に対する住民の不満が爆発した。こうして引き起こされた霊岩浦事件は、新義州の学生デモにまで拡大した。この事態に対して、金日成は自ら収拾に乗りだし、新義州市の保安部長を処刑するなどした。こうした混乱は、当時において分局が平壌市と各道党組織の連合体として結成をされていたものの、未だ中央が各道党を統制できず、北部朝鮮地域の党組織を統括する機能が充分に発揮できなかったことにより生じたと見なすことができる。そうした事情の中で、金日成は指導力を発揮し、事態を収拾させた[61]。

このような過程を経て、1945 年 12 月 17 日から 18 日にかけて、「朝鮮共産党北部分局第三次拡大執行委員会」が開催されたのを契機に、各道党の連合体という分散的な構造を持っていた分局を中央集権化する作業が本格化した。この作業を主導した金日成は、併せて北部朝鮮地域を単位とした統一戦線の組織化を推し進めた。この大会で金日成は、分局の責任秘書に選ばれ、党権を手中に収めた[62]。これ以降、彼が死去するまで北朝鮮の党権力は金日成の下にあり続けた。金日成は、北部朝鮮の情勢変化に巧みに対応しつつ、海外から帰国した共産主義勢力の支持を基盤に人的優位を図りながら、着々と権力の構築を行ったのである。

第 2 節　統一戦線、共産党組織の糾合と朝鮮労働党の成立過程

1945 年 12 月 28 日、連合国による信託統治構想の具体的内容を協議する「モスクワ三国外相会議」が開催された。そこでは、朝鮮半島において 5 年を期限とする信託統治と、臨時朝鮮政府の樹立のために米ソ両軍を代表とする合同委員会を組織し、委員会は朝鮮の民

---

[60] ここまでにおいて名称付けされている、「パルチザン派」、「ソ連派」、「延安派」などは、「政治的、思想的見解の差とか階級的立場の差によって区分されたものではない」し、「過去の活動地域を区分けし便宜上付けた名称にすぎ」ない。但し、パルチザン派は、「三〇年代に中国共産党党員として。その指導下でパルチザン闘争に参加したし、四〇年代にはソ連に逃げ込んでソ連軍隊の偵察部隊の成員として活動して解放後に帰国した。……何人かを除くと中等教育も受けていないので常識が足りず、粗暴で知能程度の低いのが特徴的」、ソ連派は、「実務能力の優れた専門家で……絶対多数がソ連共産党の党員だったし、ほとんどが高等教育を受けた人物」、延安派は、「全員が中国共産党の党員であったし、党と軍事活動の経験が豊富で政治思想的理論水準は高かった」という傾向を有している。林隠『北朝鮮王朝成立秘史―金日成正伝―』自由社、1982 年、126-129 頁。なお、林隠は北部朝鮮生まれで朝鮮革命に従事し、ソ連に留学後そこに在住し続けた許真（許雄培）という人物であることが知られている。

[61] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』67 頁。なお、1945 年 12 月 8-10 日に開催された全国農民組合総連盟結成大会における平安北道代表金昌俊（キム・チャンジュン）の報告からも 3・7 制実施に対する反発があったことが分かる。

[62] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』84 頁。

主的諸政党や社会諸団体と協議しなければならないことが決定された[63]。これら決定が朝鮮の人びとに伝えられることによって、解放後の朝鮮半島の政治情勢は新たな局面を迎えることとなった。なぜなら、ヤルタ会談によって規定事実化していた連合国による信託統治が朝鮮半島の人びとの知るところとなったのは、この時が初めてだったからである。

この会議の決定を解放後即時統一独立の障壁と見なした南部朝鮮地域のほぼ全ての朝鮮人政治勢力は信託統治案に反対（反託）したが、南部朝鮮の共産主義勢力と北部朝鮮のそれはソ連の意向を考慮し支持した。南部朝鮮地域で全国的に展開された反託運動は、米軍政の介入もあって、反ソ・反共運動に変質しつつ、米軍政は李承晩（イ・スンマン）との協力下で、12 月 15 日には反託運動の中心組織体を南部朝鮮における政権樹立の母体として民主議院へ統合するのに成功した[64]。

1945 年 12 月末の時点で、ソ連軍政は北部朝鮮における独自の政権機関の創設及び土地改革を具体化させる構想を有していた。解放直後からのスターリンの指示や北部朝鮮に駐屯するソ連軍の方針は、北部朝鮮地域に自らの利益を保障する政権機関を設立することであったが、他方でアメリカとの協調が挫かれることには慎重な態度であった。従って、1946 年 1 月 2 日には、朝鮮共産党北部分局責任秘書金日成、全平安北道朝鮮総局委員長玄（ヒョン）チャンヒョン、平安南道農民委員長李（リ）カンヨブ、女性同盟委員長朴正愛（パク・ジョンエ）、民主青年同盟委員長方（パン）シュヨン、朝鮮独立同盟代表金枓奉（キム・ドゥボン）の連名で、「朝鮮に関するモスクワ三国外相会議の決定についての北朝鮮各政党・社会団体の共同声明書」が発表され、会議の決定を歓迎するとした上で、「我々は諸民主主義政党と団体また全朝鮮の真なる愛国主義者らと民主主義者らを含んだ民主主義的民族統一戦線を結成することを主張する。この統一戦線に基づき、朝鮮の民主主義的臨時政府が樹立するべきである」と呼びかけた[65]。

しかし、朝鮮民主党の曺晩植はこれを拒否して平安南道人民委員長を辞任した後、ソ連軍により軟禁された。これにより分局と民主党との統一戦線は実質的に挫折し、曺晩植以外の民主党指導部らは南部朝鮮に逃れることとなった。こうして、金日成を中心とする北部朝鮮の政治勢力は、南部朝鮮地域のそれとの連携が途絶え、独自の動きを見せることになった。そうして 1 月 31 日には、未だ準備委員会の途上であった朝鮮農民組合北朝鮮連盟の結成大会を皮切りに、労働者、農民、青年、女性などの社会団体が北部朝鮮地域での統一戦線体を形成するための組織的な基盤として結成されていった。つまり、北部朝鮮地域では、統一戦線体の形成の手順を踏みつつ、その上部に北朝鮮臨時人民委員会と称する政権機関としての行政組織を建てることをせず、一挙に統一戦線体の性格を帯びた政権機関を創設する道に進み出たのである。このようにして北部朝鮮地域では、米ソ共同委員会に対応しようとするソ連の戦略、ソウル中央に対抗しようとする分局の立場、北部朝鮮内部

---

[63] 前掲、『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』250 頁。
[64] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』139 頁。
[65] 「米ソ共同委員会に関する諸資料集（増補版）」『正路』1946 年 1 月 3 日、平壌・北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会書記局、1947 年、13-15 頁。

の社会政治状況が三重に作用して、事実上の朝鮮における民主主義的臨時政府に対応する北朝鮮臨時人民委員会を結成するための準備作業が進められた。北朝鮮臨時人民委員会は、2 月 7 日から 9 日にかけて開催された会議によって成立した[66]。

金日成は北朝鮮臨時人民委員会を通じて、咸鏡南道党責任者らを宗派主義者として粛清するのみならず、ソウル中央に従う幹部らを宗派主義と断じて論難するほどに党内や政権機関でヘゲモニーを固めた。その実、先に言及した分局の第三次拡大執行委員会までは、分局の決定内容をソウルの党中央委員会に報告することが義務づけられていたが、次の第四次執行委員会からは、分局の指導が党の中央路線であるとされ、ソウル中央に対する報告義務を消滅させた。すなわち、分局は、ソウル中央に対する名称としては維持されたが、実質的にはソウル中央から完全に独立した存在となった。このように、北部朝鮮と朝鮮半島における共産主義勢力内部のヘゲモニーが決定的に金日成へと傾いたのは、前節で述べた「3・7 制闘争」などの土地改革に関わる彼の事態への対応能力とソ連軍政の方針に対して巧みに即応したことであった[67]。以上のような展開によって、共産党組織の「一国一組織」原則によるくびきをかわし、ソウル中央の縛りからは自由を獲得したものの、一旦分散した南北の共産党組織をこの後如何に統合するかという課題が新たに生じたことも事実であった。この後に詳述することになるが、南北の共産党組織の結合は、国家の分断以降に持ち越されることになる。

さて、北部朝鮮地域における広範な統一戦線体の結成、すなわち北朝鮮民主主義民族統一戦線の創設は、北部朝鮮の共産党と朝鮮新民党との合党の直前に行われた。北朝鮮民主主義民族統一戦線の結成後には、朝鮮民主党、朝鮮天道教青友党、朝鮮新民党も独自の政治的見解を表明することは許されず、北部朝鮮地域の全ての社会団体は戦線組織の枠内に糾合されることとなった。さらに、統一戦線の結成時に採択された決定書では、「朝鮮人民の偉大な領導者金日成委員長」であることが明記され、金日成を北部朝鮮のみならず、全朝鮮の指導者とすることに北部朝鮮の諸政治・社会勢力が合意したことを表明している。新民党の金枓奉がこの直後に、北部朝鮮の共産党指導者である金日成へ書簡を送り、合党を提起したのはそれゆえ既定のことであった。共産党と新民党の合党は、戦線組織の結成を通じて諸政治・社会勢力の結集を図り、左翼政治勢力を統合して、それを中心に戦線組織の求心力を高めるための措置であった。しかもこの背景には、ソ連の政策的意図も作用していた。両党の合党が提案される直前、金日成と朴憲永は秘密裏にソ連を訪問し、直接にスターリンと面談を行う場で、スターリンの合党提案に同意していたからである[68]。

このような背景を有する共産党と新民党の合党は、実質的には共産党のイニシアティブで進められたが、形式的には新民党の提案に共産党が応じる形で行われた。これは新民党内での反発を抑制する配慮だと思われる。こうして合党は、「北朝鮮労働党」の創立という

---

[66] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』69 頁。
[67] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』159 頁。
[68] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』74 頁。

形で展開した。8 月 28 日から 30 日にかけて行われた創立大会では、金日成がその目的を「民主主義朝鮮の独立国家を建設するにあたり、その主力となり、民主主義民族統一戦線における主動力になる」として明らかにした。これに伴い、南部朝鮮地域では、朝鮮人民党と共産党が糾合して、南朝鮮労働党（南労党）が創設された[69]。

北朝鮮民主主義民族統一戦線と北朝鮮労働党が樹立されてから、即時に着手されたのは地方人民委員会の選挙事業であった。形式的な政権機関であった臨時人民委員会を名実ともにする政権機関に格上げして創設するためである。9 月 5 日に北朝鮮臨時人民委員会第二次拡大委員会を開催し、「面・郡・市・道人民委員会選挙に関する規定」及び「道・市・郡・面・里人民委員会に関する規定」を採択・制定した。併せて、11 月 3 日に選挙を実施することが取り決められた。この選挙結果に基づき、翌年の 1947 年 2 月 17 日から 20 日にかけて、「北朝鮮道・市・郡人民委員会大会」が開催された。そこで創設された「北朝鮮人民委員会」は、これ以後対内外的に実質的な北部朝鮮における政府としての機能を果たすことになった。例えば、北朝鮮人民委員会が南部朝鮮に対する独自性を誇示したのは、3 月 19 日に金日成の名義で、米軍政に対して南部朝鮮の送電問題に関する書簡を送り、送電に関わる電気料金の支払い交渉を要求したことである。米軍政はこの提案に対して、人民委員会の存在を認めさせるための政治的攻略であると認識し、交渉を拒否した経緯がある[70]。

その後、第一回米ソ共同委員会（1946 年 3 月）での臨時朝鮮政府樹立のために米ソ両軍と協議を行う主体、すなわち「朝鮮の民主的諸政党や社会団体」をめぐる対立を解消すべく 1947 年 5 月に行われた第二回米ソ共同委員会も再決裂に終わった。これにより、米ソ協調行動による南北朝鮮の信託統治を経た統一独立国家の形成は完全に破綻した。そして、米軍政がこの朝鮮半島問題を国連に上程したことで、南北朝鮮は分断政府樹立の方向へ傾く可能性が濃厚となった。従って、北部朝鮮では、南部朝鮮での動きに対応する形で国家政府の樹立に向け進んで行くことになった。

こうした状況の中で、北部朝鮮内部では、より一層独自の党組織と政権機関の形成が図られることとなった。北朝鮮労働党創立大会以後、党員数は飛躍的に拡大し、党第二次大会直後である 1947 年 1 月には 75 万人に達した[71]。その 2 年後の 1949 年 2 月の党中央委員会第五次会議当時には 80 万人に達したという[72]。こうした党員の増加に伴い、党機構が拡充されるとともに、党が巨大化した。これに乗じて、社会主義体制の形成へと繋げていく諸民主改革が実施されることにより、中央から地方に至るまでの各級人民委員会や各種経済機関、社会団体など、管理機構も飛躍的に拡張した。しかし、政権機構の管理は、多く

---

[69] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』184 頁。
[70] 同上、193 頁。
[71] 1946 年末現在の北朝鮮の人口は、925 万 7 千人である。つまり、全人口の約 8%が北朝鮮労働党の党員であるということになる。なお、当時の社会階層別構成は、労働者・事務員が全体の 20%弱、個人農（富農も含む）が 75%弱、企業家、商人及びその他の個人手工業者が 7%強である。『1946～1960 朝鮮民主主義人民共和国国民経済発展統計集』外国文出版社、1961 年、20-21 頁。
[72] 許可誼「北朝鮮労働党下級党団体の 9 ヵ月間の事業総決に関する総括と党指導事業の強化について」『勤労者』1949 年 3 月、4 頁。

の幹部らにとって初めて経験することであり、容易な作業ではなかった。これらの問題に対して指導部内では、二つのアプローチが模索された。一つは、許可誼（ホ・ガイ）らなどソ連派が主導する党組織を通じたアプローチと、もう一つは、金斗奉など延安派が主導する包括的なアプローチであった。許可誼らを中心とするソ連派のアプローチとは、まず党組織を確立してシステム化し、これを通じて全社会を刷新するというものである。全社会を刷新するというのは、ソ連における「党＝国家」モデルで社会全体を一新するという方式である。この方式に従うことを前提として、許可誼は党組織を確立するために、「唯一党証授与事業」を進めた。許可誼はすでに、分局第三次拡大委員会後において、党内の不純分子や分派分子を粛清するために、党証授与事業を効果的に活用した経験を有していた。こうして反対派を封じ込め、党組織を刷新して確立した上で、党組織系統を通じたアプローチにより、内部の体制整備に着手した[73]。

他方、金日成は、1946 年 11 月 3 日に開催された臨時人民委員会第三次拡大委員会で、「全人民的かつ大衆的な建国精神総動員で思想意識を変えるための闘争」（建国思想総動員運動）を展開することを提唱した。この運動は延安派が主導した。すなわち、ソ連派は上からの党籍検閲の強化、党内批判と自己批判の強化、党内不純分子の洗い出しと粛清という手段により党組織と政権機関の管理を遂行したが、延安系は思想運動を伴う大衆運動の手段で大衆党としての組織化と政権機関が行政上において抱える課題を解決しようとしたのである[74]。

建国思想総動員運動を通じて自信を強めた延安派は、共産党が進める事業においても独自性を主張し始めた。これは毛沢東の大衆路線を北部朝鮮に援用したもので、延安派の金昌満（キム・チャンマン）が主導した。金日成が北朝鮮労働党創立一周年を記念する論文を 1947 年 8 月に北朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に掲載したが、この執筆には金昌満が関与したと考えられている。そこでは、金日成が従来の「党事業作風」に問題を提起し、毛沢東の「領導方法」をほとんど真似た内容を主張したのである[75]。しかし、未だソ連軍が駐屯している状況下において、党の組織部門はソ連派の許可誼が主導権を握っていた。従って、1948 年 8 月に韓国の建国が宣言され、これに伴い 9 月に北朝鮮政府が樹立されることになるが、その直後に開催された党中央委員会第三次会議で許可誼は党副委員長に任命された[76]。

このように、1948 年 8 月と 9 月には、韓国及び北朝鮮の二つの分断国家が樹立したが、北朝鮮における政治権力の確立という文脈では、それよりもはるかに重大で喫緊に解消しなければならない問題が立ちはだかっていた。それは、あくまで党が国家の上部にあり、指導を施す絶対的な存在であるということと関連し、その党の足許がソ連派、延安派などの政治集団の影響力争いにより脆弱化する可能性が潜んでいること、さらに党が南北に分

[73] 許可誼「労働党に唯一党証を授与するについて」『勤労者』1946 年 11 月、59-66 頁。
[74] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』78 頁。
[75] 金日成「創立一週年を迎える北朝鮮労働党」『勤労者』第 8 号、1947 年 8 月、27-44 頁。
[76] C.K.アームストロング『北朝鮮誕生』ソウル・西海文集、2006 年、114 頁。

立しており、国家のそれと並んで二重の分離に対処しなければならないことであった。要するに、北朝鮮は指導党の確立途上で国家を形成せざるを得なかったのである。

従って、北朝鮮政府の内閣首相と北朝鮮労働党の委員長はともに金日成であったが、政府樹立後の内閣と党の関係は明らかでなかった。1948 年 8 月に「南北朝鮮連合中央指導機関」が組織されていたが、内閣まで統制する北朝鮮全体の最高意思決定機構の役割が与えられていたかと言えば、それは判然としていなかった。また、北朝鮮政府は南北の労働党によって全朝鮮を代表するものと明らかにされていたが、当の労働党は依然として南北両地域に分離していた。言い換えれば、北朝鮮労働党の党務はソ連派が握り、対南事業は朴憲永を中心とする南労党指導部（旧ソウル中央）が担当していた。このねじれを急ぎ解消すべく、1949 年 6 月 30 日には南北朝鮮労働党の中央委員会が朝鮮労働党中央委員会として統合し、「連合中央指導機関」は朝鮮労働党中央委員会政治委員会に改編された。こうして両党は朝鮮労働党として一つになったが、その統合は完全に上部を中心としたものであった。それゆえ、南労党の合流により、朝鮮労働党の内部権力構造は従来に増して党派連合的性格を強化することになった[77]。

第 3 節　朝鮮戦争と金日成の党権掌握過程

韓国・北朝鮮の二つの分断国家成立後、両国はともに軍事手段を用いた自国主導の統一を模索した。言い換えれば、信託統治を協調行動によって行い、これを通じて統一独立国家形成の構想に挫折した米ソは、それぞれの軍が駐屯する地域内で国家の樹立を助け、それに朝鮮問題の解決を託したのである。従って、韓国・北朝鮮は統一独立国家の形成という朝鮮問題の解決、すなわち未回収地の回収のために樹立された国家であるといっても過言ではない。それゆえ李承晩は、アメリカのロイヤル陸軍長官に対して、「軍を増強し、彼らに武器を与え、短時間内に北進したい」と述べ（1949 年 2 月 8 日）、「長期の分裂容認せず」との談話を発表した（1949 年 11 月 2 日）[78]。同様に金日成は、「南侵問題を再び取り上げ、朝鮮問題の解決には他の方法はない」と主張し（1949 年 8 月 14 日）、「南側の朝鮮人民は、私を信頼し、われわれの軍事的支援を希望している。……私が近頃、たいへん気をもみ眠らずに考えているのは、全国土の統一をどのように解決するかということである。もし、南側の人民の解放と国家統一が長引く場合、私は朝鮮人民からの信頼を失いかねない」との心情を吐露していた（1950 年 1 月 17 日）[79]。

こうして、侵攻の許可を韓国に先んじて中ソより得た北朝鮮は、1950 年 6 月 25 日未明に南侵を開始した。その 3 日後には朝鮮人民軍がソウルを完全に掌握した。これより先、27 日にはアメリカが参戦を決定し、国連の決議に基づき、7 月 7 日に国連軍司令部の設置が決定され、これにより戦争は国際内戦に拡大した。8 月 1 日には韓国南部の洛東江橋頭までア

---

[77] 『朝鮮労働党歴史』平壌・朝鮮労働党出版社、1991 年、258 頁。
[78] 前掲、『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』288 頁。
[79] A・V・トルクノフ、下斗米伸夫・金成浩訳『朝鮮戦争の謎と真実』草思社、2001 年、60,88 頁。

メリカ軍と韓国軍を追い込んだ人民軍であったが、洛東江の防衛線を突破することはできなかった。9 月 15 日のマッカーサー司令官による仁川上陸作戦によって人民軍の補給線は遮断され、壊滅の状況に陥った。こうして戦況は逆転し、国連軍および韓国軍は北進して、10 月 26 日には鴨緑江まで達した。その後、周知のように、10 月 25 日には中国人民志願軍が参戦し、戦況が再び逆転して、12 月 6 日に中朝連合軍は平壌を奪還した[80]。

この後、12 月 21 日から 23 日にかけて、慈江道江界市で党中央委員会第三次全員会議が招集された。党中央委員会が北朝鮮体制の全的な進路を協議する場として設定されたのは、この会議が初めてであった。なお、戦時状態下で最高人民会議（日本の国会に当たる最高立法機関）の常任委員会や祖国統一民主主義戦線中央委員会は 1 度も招集されなかった。これ以降、戦争が停戦協定の調印によって止まるまで、党中央委員会だけが北朝鮮体制の帰趨を決する公式の会議として機能した。金日成はこの会議で、これまでの戦争遂行過程を総括する報告を行うことになった。これより先、10 月 21 日の党中央委員会政治委員会で朴憲永が朝鮮人民軍総政治局長に任命されていたから、戦争の責任を問おうとすれば、最高司令官の金日成と朴憲永の連帯責任になるはずであった。事実、戦時の敵の後方で大衆蜂起的にパルチザン闘争が起こらなかったのは朴憲永を代表とする南労派の責任であり、国連軍に仁川上陸を許して人民軍の壊滅的な崩壊と後退をもたらし、北朝鮮のほとんどの地域が一時的であれ占領されたのは最高司令官である金日成の責任であった。しかし、金日成は自らの過誤を認めなかっただけではなく、朴憲永にも直接的な責任追及の矛先を向けなかった。むしろ金日成は、戦局という焦点を避けながら、3 段階の戦争過程全体を整理して、責任を追及するという方法を用いた。人民軍の後方補給に関する問題に対してはソ連派の金（キム）ヨルを、飛行機が無ければ戦えないと主張し敗北主義的傾向を持ったとして南労派の金日（キム・イル）を、そして命令を遂行せず戦闘過程で大きな損失を生じさせたとして延安派の武亭（ム・ジョン）をやり玉に挙げ、彼らを罷免した。つまり、金日成は戦争における体制の問題には言及せずに、幹部や指揮官の統率の問題に論点を集中させて責任を回避した。さらに、金日成はこの戦争を通じて徹底した党員の粛清を図ったが、その端緒は許可誼の要請に応じた形であったと思われる。12 月 23 日に開催された党中央委員会組織委員会第 48 次会議では、「戦時環境下における党組織事業に関して」と題する決定が採択され、これに伴って党員再登録事業の実施が決定された。当時の党組織委員長は許可誼であったからである[81]。

その後、朝鮮戦争は 1951 年 6 月中旬には、戦線が 38 度線付近で膠着状態に入り、7 月 10 日には停戦会談が始められることになった。戦局の変転によって、平壌をはじめとする北朝鮮領域は被占領と奪還を幾度か経験し、奪還後の秩序回復の過程で党組織における多くの問題が生じ、統治全般を総整理する必要に迫られた。そこでは、許可誼が主導した党員再登録事業過程で多くの無理が生じたと認識され、それが批判のやり玉に挙げられた。

---

[80] 朝鮮戦争の展開や全体像については、和田春樹『朝鮮戦争全史』岩波書店、2002 年を参照。
[81] 『朝鮮労働党歴史教材』平壌・朝鮮労働党出版社、1964 年、285 頁。

1951 年 10 月 9 日に党中央委員会が招集され、そこで党員の粛清を通じた従来の再編措置が改められ、党の大衆的性格を考慮し、勤労農民、戦士、軍官、インテリを党員として受け入れることが決定した。これは明らかに許可誼の組織路線を修正する措置であった。金日成は許可誼を中心とするソ連派が掌握する組織委員会での批判を避け、政治委員会を通じて許可誼に対する責任追及を開始したのである[82]。

次いで、1951 年 11 月 11 日から 12 日にかけて、党中央委員会第四次全員会議が開催された。この会議で金日成は、許可誼を門閥主義者、懲罰主義者と直接的に論難した。そこでの金日成の目論見は、門閥主義を批判することで、党員の拡大を図ることにあった。北朝鮮労働党の創立時から「党博士」と呼ばれた許可誼は党の組織部門を任され、党建設において絶対的な影響力を保持した。彼の党組織に関する思考は、労働者階級の成分比率を重視するソ連的なエリート中心の前衛政党であった。これに対して、金日成は階級成分よりも幅広い大衆的基盤を重視し、大衆的な政党を作ろうとした。結果的にこの会議で、許可誼の党組織に関する思考は完全に否定され、党副委員長と中央委員会の第一秘書及び組織部長から解任されて副首相に左遷された。党中央委員会における彼の政治委員職は維持されたものの、党内の実権者としての地位は剥奪された。こうしたソ連派の中心人物である許可誼に対する批判と地位の剥奪は、スターリンの了承なしにはあり得ない。つまり、ソ連は朝鮮戦争の現状の戦局下において、金日成を中心に統治の難局を打開することしか選択肢がなかったものと思われる[83]。

許可誼の失脚と併せて展開した南労派に対する粛清は、朝鮮労働党の主要な政治集団の一角を除去するに止まらず、結果的には停戦へと至る主要な障壁を除去させることに帰結した。1952 年末からは停戦が現実味を帯びるようになり、それゆえ南労派が担当していた非正規戦としての遊撃戦は次第にその意味を喪失させていた。だが、南労派は自らが影響力を保持する党連絡部の所属機構を拡大させ、金剛政治学院を中心に数千人の南部朝鮮出身者を集めて軍事訓練を行っていた。南労派は愛郷心と朴憲永に対する忠誠で固く団結し、さらに独自の軍事的基盤を備えていたので、金日成にとっては懸念の材料であった。それのみならず南労派は、停戦の最も大きな争点となっていた捕虜送還問題について、強制送還の頑なな態度を固守した。こうした南労派の態度は、停戦を早期に成立させたいソ連や中国の立場からは好ましくなかった。こうした事情により、結果的に南労派の粛清はスムーズに進行した[84]。

以上のように、朝鮮戦争は、未回収地の回収＝南朝鮮の解放という目的からすると、完全に失敗に終わった。しかし、金日成は人民軍最高司令官としての自己の責任を巧みに回

---

[82] 「党の成長について―党中央政治委員会第 100 次会議決定書 1951.10.9」『決定集 1947.8-1953.7 党中央組織委員会』24-27 頁。

[83] 和田春樹「朝鮮戦争について考える（中）」『思想』1993 年 5 月、27 頁。

[84] 南労派の粛清裁判に関する北朝鮮の公式記録は、朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所『米帝国主義の雇用スパイ朴憲永、李承燁徒党の朝鮮民主主義人民共和国政権転覆陰謀とスパイ事件公判文献』平壌・国立出版社、1956 年に所収。

避し、逆に権力基盤を固めることに成功した。言い換えれば、国家の統一よりも指導党の確立に焦点を据えることで、地位を温存させたのである。朝鮮戦争を通じて北朝鮮の軍人と人民は、金日成を世界最強の帝国主義勢力に対峙する象徴と見做して戦争を総括した。戦争が難局に差し掛かれば差し掛かるほど、金日成を中心とした体制に結束しなければならないように党の組織を改編した。こうして、戦争の責任が問われるとすれば、それは誰より金日成自身でなければならなかったが、彼はその責任を内部の政治集団の有力者に転化することができた。存外にも、戦争期間中には党勢が回復され、人民軍兵力は量的に3倍増え、軍内の党員数はそれより高い割合で成長し、これらが金日成の確固たる権力基盤となっていくのである[85]。

第4節　北朝鮮の社会主義体制と金日成による政治権力の確立過程

朝鮮戦争の停戦後、1953年8月5日から9日にかけて、党中央委員会第六次全員会議が開催され、そこで南労派に対する粛清作業が遂行された。これにより朝鮮労働党内の勢力関係は大きく変転し、金日成に対抗する有力者は存在しなくなった。ソ連派と延安派は維持されたが、党内で影響力を行使するほどの政治集団として結集力を持つ有力者は皆無となった。北朝鮮の内閣は、朝鮮労働党以外の群小政党と各種社会団体に対する配慮で構成され、統一戦線的な側面は維持されたが、党に比べて大きな変動はなかった[86]。

党中央委員会全員会議での南労派粛清による人的空白を埋めたのは、甲山派であった。甲山派は咸鏡南道甲山郡を拠点に、金日成など旧満州地域で活躍した東北抗日聯軍と連携して抗日闘争を行ったことからその名称が生じた政治集団である。南労党の大規模な粛清に先立つ1952年12月の全員会議で、金日成の直系であった朴金喆（パク・クムチョル）が朝鮮人民軍総政治局副局長に抜擢された。彼の登用とともに、創党以来ソ連派と延安派が担当してきた党組織部門にも、甲山派をはじめとする国外・国内のパルチザン派、すなわち金日成の直系が登用されていくことになった。朝鮮戦争後には、彼らが党の組織部門と紀律部門の中核を掌握し、延安派とソ連派の影響力を減退させる決定的な役割を果たした。彼らは南労派の粛清にも関与し、その過程で勢力基盤を構築したのである[87]。

1953年8月の党中央委員会第六次全員会議は、朝鮮戦争後の経済復旧路線を確立するための場でもあった。この会議で金日成は、重工業を優先的に発展させる復興と農業集団化の着手の方針を主張して了承を得たが、党内の一部反対によりその執行は容易でなかった。このような経済建設路線及び農業集団化をめぐる党内対立は、朝鮮戦争後の党内勢力関係を規定する重要なイシューとなった。朴憲永の粛清では金日成に協力的であったソ連派の朴昌玉（パク・チャンオク）と延安派の崔昌益（チェ・チャンイク）らは、新しい争点を掲げて金日成の主張に反旗を翻した。とりわけ、国家計画委員長に就任した朴昌玉は、経

---

[85] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』433頁。
[86] 党中央委員会第六次全員会議で改編された内容については、『朝鮮中央年鑑（1953年版）』朝鮮通信社、1954年、385頁を参照。また、前掲、『朝鮮労働党研究』258頁にも掲載されている。
[87] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945-1961』505頁。

済復興にソ連の経済援助が欠かせないことと、ソ連のマレンコフによる新経済政策を取り上げ、消費財重視の路線を主張した。しかし、金日成は11月に行った中国訪問で実見したそこでの農業集団化に鼓舞され、1954年1月には農業協同化の推進を既成化させ、1954年に始まる三ヵ年計画にこれを漸進的に推進する方針を含ませることに成功した。金日成は党と内閣の人事においても重工業優先論者の割合を維持し、腹心である朴金喆を党中央委員会政治委員に抜擢した。三ヵ年計画が確定した後も、金日成は産業部門に対する党の権限を拡大し、地方党組織を動かして農業協同化の実績を上げることにより、当初の自らの路線を貫徹して行った[88]。ちなみに、農業の協同化は1954年段階で31.8%だったものが、1956年段階には80.9%に達した[89]。

このように、全社会の社会主義的改造の一端が現実的な日程に上った1954年11月の党中央委員会全員会議を前後に、革命段階の規定をめぐって党内では様々な見解が噴出した。社会主義革命に関する論争は、直接的には農業集団化の大衆的展開をめぐって引き起こされた。延安派は祖国が統一されていない状況で、北部朝鮮のみにおいて社会主義改造を実施することに反対する論理を主張し、ソ連派は東欧諸国を例に挙げ、工業もない廃墟で社会主義的改造を実施することに反対した。要するに、延安派やソ連派は、ソ連で主張される人民民主主義革命論における反帝・反ファッショ・反独占・反封建等の民主主義的課題の実現段階に北朝鮮が位置すると主張し、金日成はもはやその段階を超え、社会主義社会建設を主任務とする段階に朝鮮革命は突入していると主張したのである[90]。

こうした革命段階の規定をめぐる党内対立を抱えたまま、1955年4月1日から4日にかけて、党中央委員会全員会議が開催されることになった。金日成は北部朝鮮の社会全体が社会主義的改造に全面的に突入すると宣言し、社会主義へ移行する過渡期にあると革命段階を再規定した。他方で、金日成はマルクス・レーニン主義を朝鮮の具体的な現実と合わせて研究することを党の宣伝活動の基本方向として提示した。また、彼は党内宗派主義的要素について言及し、党内宗派問題を提起した。これは重工業重視路線と農業集団化、そして社会主義的改造政策をめぐって党内に現れた金日成に反する主張を封じ込める意図に基づくものであった。とりわけ、ソ連派の朴昌玉に対する批判的な意味合いが強かった。しかし、この時点では、金日成の問題提起が奏功しなかった。党内のソ連派と延安派はそれを阻止する力を有していた。この時点では、未だソ連の路線が北朝鮮に影響を与え続け

---

[88] 金日成は、1953年11月12日から26日にかけてほぼ2週間中国を訪問した。ソ連が北朝鮮の農業集団化を望ましく思っていなかった状況下で、毛沢東のこれに対する支持は北朝鮮にとって重要な国際的担保であった。なお、朴昌玉「1954-1956年朝鮮民主主義人民共和国人民経済復旧発展3ヵ年計画に関する報告」『勤労者』1954年5月25日によれば、「共和国にはすでに、1万2千戸の農家を統合させた約800ヵ所の農業協同組合がある」という。

[89] 前掲、『1946～1960朝鮮民主主義人民共和国国民経済発展統計集』59頁。

[90] 金日成「農村経理の今後の発展のためのわが党の政策について―1954年11月3日朝鮮労働党中央委員会全員会議での結論」『戦後人民経済復旧発展のために』平壌・朝鮮労働党出版社、1956年、329-363頁。

ていたからである[91]。

とはいえ、金日成が過去の共産主義運動と関連させて宗派問題を提起したのは、自信感の表れでもあった。この会議において民主党内に止まっていたパルチザン派の副首相である崔庸健（チェ・ヨンゴン）が労働党に入党し、党の政治委員となった。さらに、甲山派とパルチザン派の党内での影響力が決定的となり、それらの勢力の意向を踏まえた朝鮮共産主義運動史に関する修正作業が開始されていたからである[92]。

1955 年 10 月 21 日には、党及び政府指導幹部会議が催され、金日成は国家計画委員会をやり玉に挙げて工業部門での過誤を批判した。そのことに基づいて国家計画委員会の権限を縮小する一方、この委員会を統制・牽制するために党中央委員会の経済関連部署を拡大し、党の重工業、軽工業及び流通部、建設運輸部に改編することを主張した。さらに、1955 年 12 月 2 日から 3 日には、党中央委員会全員会議が秘密裏に開催された。そこでの決定書によれば、逓信相を解任された延安派の朴一禹（パク・イルウ）は、反動的な宗派行動を敢行し、反党的分子として党から除名、粛清された。また、ソ連派の金烈（キム・ヨル）も重工業相を解任され、反党的・反国家的・反人民的犯罪行為を敢行した廉で除名・粛清され、人民裁判に回付された[93]。すなわち、朴一禹は宗派問題の提起と関連した粛清対象であり、金烈は反腐敗・反浪費闘争の象徴的な批判対象であった。

ここで注目すべきことは、パルチザン派の金一が提起した農業集団化の量的拡大方針が実現されないまま、個人農を農業協同組合の第一形態である能力協調班に積極的に加入させる方針が採択されたという事実である。集団化の量的拡大が進まないという農政の失敗をめぐって引き起こされる党内対立は、国家計画委員会と農業相、つまり朴昌玉と金一が共同して責任を負うべき事柄であった。事実上、金一に対する問責であるといっても過言ではなかった。しかし、金日成は集団化方針に支障が出てもなお、金一を温存し、ソ連派の朴昌玉を叱責した。これが大々的なソ連派批判に繋がる要因となった。また、12 月 14 日には、最高人民会議常任委員会が先送りにしていた朴憲永の裁判を実施し、彼に死刑及び全財産の没収を言い渡した。こうした展開を中国共産党もソ連共産党も受け入れたのである[94]。

こうして金日成は、ソ連派の批判に積極的に乗り出すこととなった。とはいえ、経済部門で朴昌玉を批判するには限界があり、そこを迂回して事態の本質にアプローチする方法

---

[91] 金日成の結論に依拠したと推測される 4 月全員会議の決定書の一つである「党員らの階級的教養事業を一層強化することについて」では、「過去、抗日民族解放闘争時期に朝鮮共産党を滅ぼすことになった宗派主義の悪習が未だ一部の党員の中に残っている」と指摘したが、外部には発表されなかった。

[92] 「共和国内閣首相金日成元帥の演説及び論説祝賀文―10 月革命と朝鮮人民の民族解放闘争」『金日成選集 第 4 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1954 年、1-26 頁。

[93]「金烈の反党的宗派行為について―12 月全員会議の決定書 1955 年 12 月 2-3 日」『決定集　1955 年度全員会議、政治-常務委員会』57-59 頁。

[94] 1955 年 12 月 19 日付『人民日報』は、「朝鮮最高裁判所特別法廷アメリカスパイ裏切り者朴憲永に死刑判決」という見出しで朝鮮中央通信の報道を転載した。同日、『プラウダ』もまた、「朝鮮の裏切り者に対する裁判」との見出しで同内容を掲載した。

を取った。12 月 27 日に党宣伝扇動部門の責任幹部の会議を招集し、文化芸術総同盟委員長兼作家同盟委員長である韓雪野（ハン・ソルヤ）が主導する文学部門での思想的欠陥を批判した。翌 28 日の同会議では、思想事業全般に対して批判を加えた。金日成は党の思想事業において教条主義と形式主義に陥っており、主体がないと断言した。何より、党宣伝部の幹部らがすべての事業を機械的にソ連の模倣をしようとした事実が問題であると指摘した。この時期、党の宣伝部門はほぼソ連派が握っていた。従って、宣伝部門はソ連式の弊害を最も指摘しやすい場であった。さらに、金日成は中国共産党のように整風運動を展開すべきだと主張した[95]。

1956 年 1 月の時点で、党内の権力関係は、金日成に忠実なパルチザン派や甲山派を中心に安定した状況であった。ところが、整風運動を展開しようとした金日成は重大に障壁に直面することとなった。それは、ソ連におけるスターリン批判が北朝鮮における金日成の個人崇拝批判へ影響を及ぼし始めたことである。ソ連共産党第二十次大会（1956 年 2 月）前後に始まる個人崇拝批判の影響は、すでに 1955 年から 56 年に渉ってもたらされていた。それが第三次党大会（1956 年 4 月）を契機に表面化した。その後、個人崇拝批判を強めるソ連派や延安派の反対勢力は、金日成に対する奪権を計画し、金日成がソ連を訪問する狭間の 8 月に開催される党中央委員会全員会議で遂行することを予定した。他方、5 月 30 日に金日成は、初めてスターリンを名指しして彼に対する個人崇拝を批判した。ソ連訪問を前にソ連側の要求に対応せざるを得なかったからである。事実、金日成がスターリン批判を行った翌日、ソ連政府は金日成を含む北朝鮮政府代表団を招請すると伝えてきた。金日成の訪ソは、帰国後も党内で秘匿されたが、ソ連派はソ連内における金日成批判の動きを逐一北朝鮮内に拡散させた[96]。

こうした状況下で 8 月 30 日から 31 日にかけて、党中央委員会全員会議が開催されることになった。この会議で延安派の尹公欽（ユン・ゴンフム）は会議次第を無視して、個人崇拝に関わる第三次党大会での金日成の所行や過誤について批判した。ところが、多くの党中央委員は金日成を擁護し、逆に反対派を非難した。こうして反対派は、奪権が挫かれ、北朝鮮を脱出し中国に逃れざるを得なかった。一方、9 月 15 日から 27 日にかけて、中国共産党第八次全国大会が開かれ、ソ連からミコヤンが代表として参加した。毛沢東とフルシチョフは、北朝鮮で引き起こった事態に対して、金日成を追放することで決着を図ろうと考えていた。こうして、彭徳懐とミコヤンを北朝鮮へと向かわせた。しかし、この中ソ代表団が平壌に到着した際には、彼らが想定していた事態とは逆の展開が生じていた。それは、党における金日成の政治権力がほぼ確立し、党中央委員会が彼によって完全に掌握されている姿であった。それゆえ、代表団は金日成を追放する計画を断念し、8 月の全員会議で処罰された人びとの復権のみを提起することで引き下がらざるを得なかった。こうして

[95] 金日成「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて―党宣伝煽動幹部たちの前で行った演説（1955 年 12 月 28 日）」前掲、『金日成選集 第 4 巻』326-336 頁。
[96] 李鍾奭『北韓―中国関係 1945-2000』ソウル・中心、2000 年、210-211 頁。

展開された8月の全員会議における政変は、反対勢力の中国亡命を生み出したことで、対外的には中国とソ連に対する金日成の立場を一時的に弱めさせたが、国内政治的には金日成の反対勢力の名分を奪う結果となり、金日成の存在感を高めさせた。金日成は後日、当時を回顧し、以上の事態を外部勢力の介入と断定し、自らを正当化した[97]。

以上のようなプロセスを契機とする反党宗派分子と反革命分子に対する粛清は、この年の末から実施された党員証交換事業と翌年の2月より行われた集中指導によって全国的な範囲にわたり徹底的に実施された。これによって解放以前の政治活動により区分されるソ連派や延安派などの有力な政治集団は全て粛清されることになった。これを踏まえて金日成は、十月革命四十周年慶祝行事及び「各国共産党及び労働党代表会議」に参加するために、1957年11月4日から21日にかけてソ連を訪問した。この訪ソは金日成にとって、屈辱的であった前回（1956年6-7月）のソ連、東欧訪問を払拭する絶好の機会であった。実際、金日成は訪ソし会議に参加する中で、この間の国際共産主義運動で生じた変化が自らの方針の正当性を裏付ける結果となったと確信した。会議で採択された「モスクワ宣言」は、「国際共産主義運動において主たる弊害である修正主義と教条主義に反対し、マルクス・レーニン主義の純潔性を守る」ことを明らかにし、「内部の敵に対する闘争」と「プロレタリア独裁」の擁護が強調されたからである。この宣言は、反金日成運動が国際的な修正主義の影響を受けたと断定できる根拠を金日成に提供することになった[98]。

さらに、ソ連訪問の成果として金日成は、ソ連側から事実上ソ連派を追放する権限を獲得することに成功した。すなわち、12月16日に北朝鮮政府は、ソ連政府代表と「二重国籍者の公民権調達に関する協約」を締結した。これにより、党員証交換事業や集中指導によってあぶり出され権力から放逐された相当数のソ連派は、ソ連に帰国する道を選んだ。この協約は金日成の政策的配慮でもあり、この時帰国した人びとは政治亡命ではなく、ソ連国民としての帰国となった。

他方で、この時期とくに金日成にとって重要な意味を持ったのは、訪ソ後に行った毛沢東との交渉であった。そこで両者は、8月の全員会議における決定への中国側の介入をめぐって妥結を図った。併せて、朝鮮戦争の停戦以降も引き続き北朝鮮に駐屯していた中国人民志願軍の撤退に対しても合意がなされた。この協議を通じて、北朝鮮は中国との間で対等な関係の土台を構築したと言えよう。なぜなら、中国人民志願軍の撤収は、朝鮮戦争時に形成された中朝連合軍体制に終止符を打つものであり、毛沢東との妥協は、党と軍における延安派への処遇をめぐり中国の反応を意識しなくても良い条件を整えたからである[99]。

1958年に入ると、金日成は朝鮮人民軍の総政治局に対する中央党集中指導に着手した。

---

[97] 金日成「我が人民軍隊は労働階級の軍隊、革命の軍隊である。階級的政治教養事業をさらに強化すべきである」『金日成著作集 第17巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1982年、99頁。

[98] 金日成「ソ連を先頭とした社会主義陣営の偉大な統一と国際共産主義運動の新しい段階―モスクワ会議に参加した党及び政府代表団の事業に関する朝鮮労働党中央委員会拡大全員会議での報告」『金日成選集 第5巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1960年、216-249頁。

[99] 前掲、『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』769頁。

中国人民志願軍の撤収に備えて、人民軍内の党制度の再建に乗り出したのである。これは単なる制度的改変のみならず、人民軍内で延安派とソ連派を放逐してパルチザン派が中核となる軍隊組織を創建する作業であった[100]。

革命段階の規定をめぐる対立を克服し、全社会の社会主義的改造が完了され[101]、党内の粛清も完遂されたことにより、当面の課題は指導党を上部とする統治機構の全面的改編を行うことであった。先にも述べたように、金日成はこの作業を軍隊より着手した。次いで、1959 年 3 月 7 日には第一次党代表者会議を開き、各地方の道・市・郡党委員長らと人民委員長らを別途に招集して、金日成が党事業全般に関する演説を行った。これは、社会主義の経済的基盤を固めるとした第一次五か年計画（1957-1961 年）を進める上で、経済運営への大衆路線（群衆路線）の導入を図るために、地方の経済指導体系の改編を目論むものであった。これに続いて 8 月 28 日には、党中央委員会常務委員会を開催し、そこで「党の政治事業をすべての事業に優先させることについての決定」を採択し、政治道徳的規準が実務的規準に優先されることから、幹部の政治意識を高めることが重要視され、毎日 3～4 時間の政治学習が義務化された。さらに、1960 年 1 月からは、すべての機関で党幹部は毎日 4 時間の学習が義務化され、毎週土曜日の午後は完全に学習時間に回すように決定された[102]。こうした変化や取り組みは、従来行政（人民委員会）が請け負っていた地方の経済機関の指導及び管理を党委員会に移行するための措置であり、この党優位の指導・管理システムを正当化するために、大衆に率先して党幹部が共産主義的新人間に変革する事業であった[103]。こうして、北朝鮮社会における党優位の制度化は、まず軍隊内で導入されたのち、地方経済指導体系の改編とともに、農村では青山里精神・方式（1960 年 2 月～）として、工業では大安の事業体系（1961 年 12 月～）として数年の時間をかけて実現されていった。

以上のようなプロセスを経て、1961 年 9 月 11 日から 18 日にかけて、党第四次大会が開催された。この大会で金日成は、第一次五か年計画の短縮及び超過達成による経済成長を誇らしく総括するとともに、党内権力の安定した状況を誇示した。実際、この大会で選出された党中央委員 85 名のうち、前回の大会から引き続き再選されたのは 71 名中 28 名のみであり、再選されなかった大部分の委員は延安派とソ連派の粛清の関連者であった[104]。また、1962 年 10 月 8 日には、383 名を選出する第三期最高人民会議代議員選挙が実施され、そこでは全有権者の 100%が参与し、100%が信任投票を投じたと主張された。この結果を報じ

---

[100] 金日成「朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である―朝鮮人民軍第 324 軍部隊将官らの前で行った演説」前掲、『金日成選集 第 5 巻』340-342 頁。

[101] 北朝鮮では、臨時人民委員会が重要産業の国有化を行うことを通じて、全産業の 90%を国有化し、経済計画による管理・運営・指導を可能としていた。また、建国直後に実施された二か年経済計画によって、社会主義セクターのシェアを上昇させることに成功していた。これに加えて 1958 年 8 月、農業協同化が 100%に達して完了した。

[102] 「社説 すべてを 12 月拡大全員会議決定の貫徹へ」『労働新聞』1959 年 12 月 7 日付。

[103] 金日成「社会主義経済建設における当面のいくつかの課業―朝鮮労働党中央委員会全員会議での結論（1959 年 12 月 4 日）」『金日成選集 第 6 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1960 年、527-529 頁。

[104] 前掲、『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』35 頁。

た『労働新聞』は、「偉大な歴史的勝利」だとした[105]。こうして、朝鮮労働党と党を後衛する朝鮮人民軍、北朝鮮内閣、最高人民会議常任委員会の一体化、すなわち北朝鮮の国家社会主義が金日成の政治権力の下で完成されたのである。

[105] 『労働新聞』1962 年 10 月 11 日付。

第 2 章 「主体」の萌芽

第 1 節　問題の所在

1955 年 12 月 28 日、金日成は朝鮮労働党の宣伝煽動幹部らの前で、「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて」と題する演説を行った[106]。これがのちに「偉大な首領金日成同志」の思想で、「革命を遂行するすべての人びと」が「徹底的に武装し」、「具現するために闘うこと」が「もっとも栄誉であり且つ義務である」とされる主体思想の「主体」という言辞に初めて金日成が言及した瞬間であった[107]。

その内容は、党の思想事業において、ソ連で行われていることをそのまま持ち込んだり、模倣したりすることがあちこちで見られるような欠陥が生じている。だが、それは、我々が紛うことなく朝鮮の革命を遂行しているのだということにおいて「主体」的ではない。従って、自国の歴史、地理、風俗を理解した上で、人民を朝鮮の気質に適合した形で教育し、自らの郷土と祖国を愛することができるような「主体」が確立された宣伝事業を行っていくべきだという主張を骨子としている。そこでは具体的に、朝鮮の文学運動や作家たちの闘争が正当に評価されていなかったり、日本帝国主義に反対した光州学生事件や六・一〇万歳運動、三・一運動などの歴史が学ばれていなかったりする一方で、人民軍休養所の壁にはシベリア草原の風景画が飾られていたり、地方の民主宣伝室にはソ連の五か年計画の図表はあるが自国の三か年計画の図表はなかったりするなど、主体的でない事例が挙げられて教条主義と形式主義が批判され、これからは我々の実情に見合うやり方を創造して革命を進めるべきだということが述べられる。それゆえ、この点で大事なのが「活動における革命的真理、マルクス・レーニン主義の真理を体得すること」、「その真理を自国の実情に合うよう適用すること」であるということが主張される。とはいえ、「労働者階級の一つの最高目的は、共産主義社会を建設すること」であるから、その意味で労働者階級の国際主義と自国を愛する愛国主義は矛盾しない。「根気強くソ連に学ぶべきであるが」、「その経験の神髄を学ぶのに重点を置くべきだ」ということが説かれている。他方で、この演説は前章（第 4 節）でも述べたように、全社会の社会主義的改造の路線をめぐる金日成とソ連派の相違が存在し、金日成がソ連派の批判を行うのに際して、経済部門での直接的な対決を避け、ソ連式の弊害をもっとも指摘しやすく、ソ連派の影響力が強い場（党の宣伝部）において行われたという背景を有する。

このような内容や背景に基づき、「主体」という言辞に初めて金日成が言及したことについて、スターリン死後のソ連の緊張緩和政策や脱スターリン後の動きを批判したもの、あるいは北朝鮮における脱ソ連化の萌芽とする見解が有力である[108]。しかし、最近の研究では、当時の朝鮮労働党が思想、文化、教育、科学技術などあらゆる分野でソ連を学ぶ対象であ

---

[106] 前掲「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて」326-336 頁。

[107] 主体思想研究所編『偉大な首領金日成同志の主体思想』平壌・社会科学出版社、1975 年、238 頁。

[108] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』112-115 頁。

るとしていること、朝鮮戦争後の膨大な復興援助をソ連及び友好国から受けていること、朝鮮労働党が対米徹底抗戦政策を続けることがソ連を緊張緩和政策に寄与することになるという論理を展開していたこと、そして当時の金日成総合大学哲学講座長の黄長燁の手による論文もまた、ソ連の対外政策に逆らう意図はみられないことを挙げ、そうした見解を退けている[109]。この演説を注意深く読めば、ここで主張されている「主体」とは、自国をよく知り、学び、そして自国の気質に合わせて教育を施し、自らの郷土と祖国を愛するという極めて素朴なナショナリズムの主張であり、併せてあくまで「根気強くソ連に学ぶべき」だが、「経験の神髄を学ぶのに重点を置くべきだ」、言い換えれば革命段階の規定や全社会の社会主義的改造においてソ連派が主張するような政策の持ち込みや模倣ではなく、自国の実情や実績を顧みるべきだという主張であったことは上述した通りである。

しかし、それではなぜ、のちに北朝鮮の指導思想の中核を構成し、金日成の思想を形容する冠詞となり、当時において素朴なナショナリズムと自国を顧みるべき言辞として「主体」が選択されたのか。または「主体」でなければならなかったのか。このことを考察した研究は管見の限り存在しない。従って、本章では、主体に代替する言辞としては自主、独立、独自または自主独立などの言葉があり、解放後の朝鮮半島においてしばしば多用されてきたが、北朝鮮において「自主」とは、「政治活動」を伴う概念であり[110]、また当時において「自主独立」も、「政治を行い、経済を組織運営する」ことを表す言辞であり[111]、民族的な自己主張を包括的に表す言葉ではなかった。こうした事実を前提に、「主体」は、朝鮮民族の「情」と「恨」に代表される情緒に合致し、金日成の抗日闘争経験と解放後の活動状況にそくして導き出された言辞であると仮説立てて、「主体」が選択された意義を追求することにする。

第 2 節　朝鮮民族の情緒としての「情／恨」と主体

北朝鮮の政治体制の構築やそれを支える論理に、朝鮮の伝統が動員されてきたことを体系的な形で指摘したのは、鐸木昌之の研究である[112]。そこでは、朝鮮の伝統思想の一つである儒教や風水思想、図讖（としん）、天人相関思想などが取り上げられている。そうした思想に加え、北朝鮮の公式文献などでしばしば見られるのが、「ウリナラ（我が国）／ウリミンジョク（我が民族）」などで表現される「ウリ（我・我々）」に胚胎する「サラン（愛）」や「ジョン（情）」の賛美に対して、「ミジェ（米帝）／イルジェ（日帝）／クゥエレ（傀儡）」などで表現される「ウォンス（敵・仇敵）」に胚胎する「ハン（恨）」の排撃という二分法的な情緒である。こうした感情表現は、北朝鮮住民への教化の手段として頻繁に用いられてきた。しかしながら、「情／恨」という感情や二分法的に味方と敵を選り分けて認識

---

[109] 前掲、「金正恩体制の政治思想」38-39 頁。
[110] 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院哲学研究所『哲学事典』平壌・社会科学出版社、1970 年、479-481 頁。
[111] 『大衆政治用語事典』平壌・朝鮮労働党出版社、1957 年、249 頁。
[112] 前掲、『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』（とくに第 4 章及び第 5 章）。

する思惟は、北朝鮮の存在や解放後の朝鮮半島における対峙状況の産物ではなく、もとより朝鮮民族が孕んだ固有の情緒が下地となっている。一般的に、恨は、あるべき姿が実現していないことに対する鬱積した感情である[113]。それゆえ、「情／恨」に代表される情緒は、敵味方関係なく表現されることがあるのはもちろんである。

2012 年 12 月に「アリラン（阿里朗）」がユネスコ世界人類無形遺産に登録された。アリランは、朝鮮民族の代表的民謡であり、恋人あるいは故郷と解される「ニム（様）」への深い情と、これに別れざるを得ない哀切を嘆く恨の感情を表現した詩曲である[114]。ここに敵味方は存在しない。また、「情／恨」は自らが仕える存在への忠義とその没落に対する悲哀としても表現される。その代表としてよく知られているのが鄭夢周（チョン・モンジュ）の「丹心歌」である。鄭夢周は「丹心歌」を通じて、高麗王朝に対する変わらない「情」と王朝の没落に対する「恨」を詠った[115]。また、同じく高麗時代を生きた吉在（キルジェ）の詩調「五百年都邑地を」でも、「丹心歌」とほぼ類似した心情を窺うことができる[116]。

このような朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」は、李朝末期から朝鮮半島が植民地支配に堕する中で、現況を表現する感情としてより表面化することとなった。国、民族、故郷、家族・親族が情の対象となり、反面で封建的な王朝の腐敗、日帝の侵略、他郷での生活が恨の対象となった。とりわけ、典型的な形で情が吹き込まれる対象としての「故郷」は、「山の谷には薬水、村の前には緑の河、河で船を浮かべ、釣りをした懐かしいところ、我が故郷はこんなにも美しかった」[117]、「年老いた父が枕を敷いて寝そべっているところ」[118]、「土で育てた私の心、青い空が懐かしく、勝手に飛ばした矢を探しに、草の露でズボンを濡らしたところ」[119]、「黒い髪の毛をなびかせる幼い妹と、普段で綺麗でもなく年中　素足である妻と穀物を拾ったところ」[120]などのように、そこは、幼年の思いが込められ、家族を想起し、豊かではないが家族と素朴に暮らした情が溢れる懐かしい場である。印象論に過

---

[113] 恨がどのような情緒の状態を指すのかについての解説は枚挙に遑がないが、例えば「発散できず、内にこもって、しこりをなす情緒の状態」を指すと包括的に説明するものもある。「恨」（金学鉉執筆）伊藤亜人ほか監修『［新版］韓国朝鮮を知る事典』平凡社、2014 年、460 頁。

[114] アリランは、「阿里朗・阿里朗・阿里りよ／阿里朗峠を越えて行く／わたしを捨てて／去りゆく様は／十里も行けずに／足痛む」の 6 節が基本節である。ユネスコと遺産（韓国）ホームページ、http://heritage.unesco.or.kr（2018 年 8 月 22 日アクセス）『朝鮮観光』平壌・観光宣伝社、2014 年、190 頁。

[115] 丹心歌の内容は以下の通りである。「この身が死んで／死んで／一百回／なお死んでも／　白骨が真土になって／魂があってもなくても／様に向け／一片丹心／去るはずか」。鄭炳昱『韓国古典詩歌作品論』第 2 巻、ソウル・ジンムンダン、1992 年、454 頁。

[116] 「五百年都邑地を」の内容は以下の通りである、「五百年／都邑地を／匹馬で帰るや／山河は相変わらず／人傑は行き／なくなったね／ああ、高麗の太平盛況が／虚無な夢だと感じるね」。『韓国代表古典詩歌』ソウル・ビッセム、2002 年、3 頁。

[117] 朴世永「懐かしい私の故郷」『朴世永誌全集』ソウル・ソミョン出版、2012 年、117-118 頁。

[118] 鄭芝溶「郷愁」『朝鮮之光』第 65 号、1927 年 3 月に発表された。『鄭芝溶詩集』1935 年に所収。

[119] 同上。

[120] 同上。

ぎないが、上の引用を朝鮮の人びとが目にすれば、誰でも過去や故郷を心に浮かべ、胸を熱くするであろう。

他方で、朝鮮半島における二度の戦争（日清・日露戦争）やその結果としての日本の朝鮮半島に対する保護国化、そして植民地化は、こうした故郷からの離別を余儀なくした。朴世永（パク・セヨン）は、「異国で売られた奴隷のように、悲しい身となった」と嘆じた[121]。さらに、こうした状況は、国が奪われ、民族が蔑まれ、家族・親族との別れの引き金となった、朝鮮民族にとってもっとも悲しむべき恨として刷り込まれ、共有されていった[122]。このようにして、歴史的な事実はどうであれ、国や民族、家族や愛する人びとを想起させる故郷に対して深い情を持つ自己の肯定・愛着と裏腹に、情を損ない、民族を窮地に追い込んだ対象である「日帝」への恨という極めて二分法的な民族情緒が形成された。

金素月（キム・ソウォル）は、植民地下でもっとも多くの読者を有していたと評価される詩人で、彼の作品はそのような「情／恨」を幾つも表現した[123]。彼の代表作の一つである「チョプドンセ（ほととぎす）」は、ほととぎすの鳴き声を通じて、植民地期において故郷が山下に下敷きとなった「民族の恨み」に対する悲哀の感情を描き出している[124]。また、1925年の『つつじの花』に収録された「招魂」では、ニムを呼ぶ哀切な慟哭で「日帝」に対する抵抗の声を代弁し、「立ったままの石」と成ってもどうしても捨てられぬ民族愛と熱情の意志を表現した[125]。さらに、「他の国の土」では、あらゆる不安と脅迫的な観念、そして危機意識に振り回されながら生きていかざるを得ない「日帝」下での民族的生の悲しさを[126]、「服と飯と自由」では、人間としての主体性と尊厳性を[127]、「畑の上では」では、この険難な時代でも、それを克服しようとする精神的な底力が強靭で屈強な労働思想に根を下ろし

---

[121] 前掲、「懐かしい私の故郷」117-118 頁。

[122] 「地主の隷属下で、非人間的生活を続けた我が農民ら」『祖国統一民主主義戦線結成大会文献集』48 頁。「国を無くし、植民地奴隷の生活をする人は、喪家の犬よりも劣る」『朝鮮中央通信』2014 年 4 月 29 日付など。

[123] 金素月『金素月詩集』ソウル・ハソ、2006 年。

[124] 「チョプドンセ（ほととぎす）」の内容は以下の通りである。「チョプドン／チョプドン／九つチョプドン／津頭江　カラム町で暮らしていた姉は／津頭江　村の前に／来て　泣いています／……九人もいた弟たちを／死んでも忘れられなくて　どうしても忘れられなくて／夜三更　みんな　寝ている　夜遅くなると／この山　その山　渡りながら　悲しく　泣いています」 同上、18 頁。

[125] 「招魂」の内容は以下の通りである。「散り散りに砕けた名前よ／虚空の中で別れた名前よ／呼んでも主人がない名前よ／呼んでいる内に私が死ぬ名前よ／心中に残された一言は／結局言えなかった／愛していたその人よ／愛していたその人よ／夕日は西山の尾根にたたずむ／鹿の群れも悲しげに鳴いている／隔てられた山の上で／私はあなたの名前を呼んでいる／悲しみに重ねて呼んでいるよ／悲しみに重ねて呼んでいるよ／呼び声は擦れ違っているが／空と地の間が如何にも広いね／立ったままにこの場で石になっても／呼びながら私が死ぬ名前よ／愛していたその人よ！／愛していたその人よ！」同上、16 頁。

[126] 「振り向いて眺められる／銑鉄の橋／うかうかしていて／跳ね渡り／息を吐いて／足を踏み入れた／他の国の土」金재홍「我が詩の香り―素月、詩の本道または民族語完成の道」『新しい国語生活』第 17 巻第 1 号、2007 年春、131 頁。

[127] 同上、132 頁。

た民衆的生命力にあるということを[128]、そして「腕枕の歌」では、植民地的な桎梏に対する恨みを朝鮮国土の憤怒に形容することで、様々な「情／恨」の在処を詠んだ[129]。

また、金素月の年度不詳の「ナムリボルノレ（南勿原の詩）」[130]は、故郷を追われた朝鮮の人びとの心情をもっとも胸打つ表現で詠んだ詩歌としてつとに有名である。そこでは、故郷を土地が肥沃で、人心が良い所として有名であると言い、そこの暮らしは生活の心配とは無縁であるとする。しかし、今はそこを追い出されて西間島でさ迷う流民となった。「日帝」が土地測量事業と東拓の設立を通じて故郷の土地を奪い、朝鮮民族が大量に農土を失う結果を招き、そうして西間島と北間島に追い出されたが、「満州奉天は住むことができない所」であると嘆じている[131]。とくに、南勿原の詩は、間島で抗日闘争を行ったパルチザンたちの心情に共鳴するものがあり、北朝鮮の人びとによく知られている。こうした詩歌によって代弁される「情／恨」が植民地期を通じて朝鮮の人びとに共感され、集団記憶となって内面化されていった。

このように、当時の時代状況を前提とし、そこでの喪失感から逆に生じる深くて厚い情を維持し続ける自己への肯定感情に基礎を置く情緒は、それを奪っていったものに対する恨の感情を併せ持つようになり、さらに失われたものを取り戻そうとする意志やそれが達成された希望を夢想する情緒へと発展していった。実は、そうした情緒が「主体」で語られる内容の端緒となっていくのだが、それについては後述する。意志や希望という情緒の発展は、例えば、1926 年に『開闢』誌上で発表された李相和（リ・サンファ）の「奪われた野にも春は来るか」では、国は奪われ凍土になっても、民族の魂が染み込んだ国土は、朝鮮民族を覚醒するとして、被圧迫民族の悲哀と「日帝」に対する強烈な抵抗意識として表現されることによってみられる[132]。また、『文章』1939 年 8 月号に掲載され、のちに『陸史詩集』に収録された李陸史（リ・リュクサ）の「青葡萄」は、国を失い遠い異国で故国を眺める自我の辛苦と郷愁を語るとともに、その中で平和で豊かな生活を渇望し、いつか暗鬱な民族の現実が克服され、明るい来日が来ることの期待と念願を詠っている[133]。さらに、朴八陽（パク・パリャン）の「つつじの花：春の先駆者を歌い」は、朝鮮の山河であれば

---

[128] 同上、133 頁。

[129] 以下は、「腕枕の歌」の一部である。「……出入りの隣部屋の／畳の音よ／我々は一夜／借りた腕枕／朝鮮の江山よ/お前がそんなに狭かったの／三千里　西島を／最後まで来たよ／……金剛断髪嶺　峠もない身/私はどうしよう」ユ・チャンクン『金素月の詩世界』ソウル・トンジ出版社、1993 年、85 頁。

[130] 南勿原（ナムリボル）は、黄海道の穀倉地帯、載寧平野の俗称である。

[131] 「新載寧でも南勿原／水も多く／土が良い所／満州奉天は住むことができない」『東亜日報』1924 年 11 月 24 日付、『白雉』第 2 号、1928 年 7 月、54-55 頁。

[132] 以下は、「奪われた野にも春は来るか」の一部である。「足を引きずりながら一日を歩く／おそらく興に乗っただろう／しかし今は野を奪われ春さえ奪われるだろう」李相和「奪われた野にも春は来るか」『韓国代表詩人 100 人選集 3』未来社、2003 年、121 頁。

[133] 以下は「青葡萄」の一部である。「私が願うお客様は疲れた身で／青袍を着て尋ねてくるとし／私は彼を迎えてこの葡萄を摘み取りに／両手はびっしょり濡れても良い」李陸史「青葡萄」『韓国代表詩人 100 人選集 18』未来社、1999 年、73 頁。

どこにでも見られるつつじを春の象徴に見立て、つつじはやがて訪れる祖国の解放＝春をあらかじめ知る花であるとする[134]。こうして植民地期における「情／恨」は、単に故郷への美化とそれを蔑ろにする「日帝」への恨という二分法的な構造のみならず、深くて強い情の継続が「ハンプリ（恨を解く）」を実現するとの「情／恨」構造へと発展していった。

以上のような朝鮮民族の情緒としての「情／恨」の発展は、とくに詩歌に顕著であるが、小説においても見出すことができる。小説においては、とりわけ「日帝」下での貧窮な生活と彼らが間島[135]に移住せざるを得ない中で遭遇した悲劇的な運命を描いた内容がよくみられる。例えば、崔曙海（チェ・ソヘ）の「朴石の死」、「脱出記」、「紅焔」、金昌傑（キム・チャンゴル）の「暗夜」、趙明熙（チョ・ミョンヒ）の「洛東江」、瀋連洙（シム・リョンス）の「満州」、安壽吉（アン・スギル）の『北間島』などである。そこで描かれる情景や人びとの暮らし、歴史的背景、「情／恨」の情緒などは、主体思想の形成期である 1960 年代前半に相次いで刊行された、抗日武装闘争を展開した遊撃隊員の回想録である『人民の自由と解放のために』、同じく党中央委員会歴史研究所が編んだ『抗日パルチザン参加者たちの回想記』、『革命伝統研究資料 革命の道で（抗日遊撃隊員の回想記）』や金日成自身の回顧録である『世紀とともに』と非常に酷似している。それは間島を舞台に朝鮮民衆を描いた小説が、同じ舞台で抗日闘争を展開した金日成ら遊撃隊の境遇、生活状態、思いも包括しているからに他ならない。さらに言えば、かかる小説もまた、当時の朝鮮の人びとの「情／恨」を代弁するものである。そのように、こうした小説で描かれ、共鳴を受ける金日成ら遊撃隊員、すなわち北朝鮮における国内外パルチザン派が「主体」を主導したのは言うまでもない。

ここでは、その傍証として、趙明熙の「洛東江」、安壽吉の『北間島』を取り上げ、幾つかの北朝鮮文献及び金日成の回顧録の内容との共通性を初歩的に比較しておこう。趙明熙も安壽吉もともに植民地期に活躍した文学者であり、解放後には、趙明熙は北で、安壽吉は南で生活をすることを選択したが、いずれの手による小説も民衆目線で記述されている。

趙明熙の短編小説「洛東江」（1927 年）は、「日帝」時代に独立運動家として生きた人物パク・ソンウンを主人公に、その生涯を描いたノンフィクション小説である。そこでは、1920 年代の朝鮮人民族運動家の典型的な活動ぶりが伝えられている[136]。また、この小説は結末で、主人公の壮絶な死後、愛人のロサが主人公の意志を継ぎ、独立運動の爆弾になると誓う印象的な場面を描き出すことで、揺るぎのない独立した意志を表現するとともに、主人公の惨憺たる死の中でも明るい未来を想像させる希望を描写する。趙明熙がこの小説の題目を「洛東江」にしたのも、時代を正しい方向へと導こうとした「運動」が、絶え間

---

[134] 「祖国解放を夢見て、つつじの詩を詠う詩人」『京畿日報』2009 年 12 月 4 日付。

[135] 「間島」は、朝鮮の人びとにとって、植民地下にありながらさらに自らの国でなく、他郷での支配勢力である地元の地主から迫害を受ける、二重三重の辛さを味わう悲しみ象徴となっている。

[136] 趙明熙「洛東江」『趙明熙選集』ソウル・プルビッ、1988 年、148-160 頁。（原文は『趙明熙選集』ソ連科学院東方出版社、1959 年刊行）。

なく流れる川の水のように持続されるべきだということを強調しようとしたからだと考えられている[137]。

＜表1＞趙明熙「洛東江」の主人公（パク・ソンウン）と『世紀とともに』で回顧される金日成の父親金亨稷（キム・ヒョンジク）の比較[138]

	パク・ソンウン	金亨稷
革命の契機と活動	三・一運動が独立運動を志す契機となり、満州へ赴き独立運動を展開する。ソウルでの派閥統合運動や故郷での農民運動に尽力する。	日本による韓国併合が独立運動を志す契機となる。一族とともに三・一運動に参加。崇実学校で反日思想教養や大衆啓蒙運動に尽力する。朝鮮国内と間島で独立運動を展開した。
死の原因の描写	「日帝」の残酷な拷問により重病を患う（原文：結局、彼は拷問の挙げ句に病気となり、命が危ういところに至り、警察から釈放され、家にたどり着いた）。	「日帝」の残酷な拷問により重病を患う（原文：棒でむち打たれるあまり満身創痍になったお父さまは這々の体で足を運びつつ監獄の扉から出てきた）。
葬式場面の描写	川端に人びとが集まってきた。様々な弔辞が空を覆っていた。「行ったね君は、夜の明ける前に君は行ったね」。	小南門町が混み合うほど弔客が集まってきた。小南門町からヤンジ村に至る10里の道が慟哭の場となった。撫松地方の朝鮮女性たちは葬儀から半月の間、頭の白いリボンを取らなかった。
結末の描写	愛人ロサの弔辞「あなたは私に爆弾になりなさいとおっしゃった。そうです。私は爆弾になります」。	父からの遺産は「志遠」の思想、3つの覚悟、同志獲得の思想、二丁の拳銃。（私は志を果たせないままに逝く。しかし、お前たちを信じる。お前たちはいつも国と民族の身であることを忘れるな。骨が砕け、身が割かれるような恨があっても、必ず国を取り戻すべきだ）。

出所：筆者作成。

[137] 以下は、「洛東江」の一節である。「この川とこの野とそこに生きる人間―川は長く・長く流れ、人間も長く・長く暮らしてきた」同上、148頁。

[138] 趙明熙「洛東江」は、次の文献より引用を行った。同上、150,152-153,159,160頁。また、金日成『世紀とともに』は、次の文献より引用を行った。金日成『回顧録―世紀とともに（１－１）』平壌・朝鮮労働党出版社、1992年、33-35,128-130頁。

また、安壽吉の『北間島』[139]は、李という平凡な農民の生活を具体的に描いた歴史小説である。そこで安壽吉は、植民地期に間島への移住を余儀なくされた人びとが懸命に生きていく姿を描写しようとした。それは朝鮮民族にとって特別なものではなく、普遍的に見られた悲劇的状況だったからである[140]。

＜表2＞安壽吉の『北間島』と北朝鮮文献の内容比較[141]

	安壽吉『北間島』	北朝鮮文献
歴史的事件の描写	「大院君の衛正斥邪政策により、米国のシャーマン号が平壌市民によって撃沈される」。	「当時、大院君は侵略勢力であるキリスト教の侵入を防止することにより、外国侵略から祖国の独立を期したが、他方では封建制度を頑なに維持しようとした。無論、大院君の侵略防衛は正しかったが、崩れゆく封建制度を維持し、祖国の発展を妨害したのは大きな誤りである」。「シャーマン号が大同江を遡り停泊した際、曾祖父は村の人びと石を投げつけ、海賊船の道を遮った」。
民族性を固守しようとする意志	「故郷に帰還する訳にはいかなかった。かといって帰化し清国人になる訳にもいかなかった。どうして白衣を清服に着替え、髪を結って背中にぶらさげることができようか。民族の魂がそれを許されなかった」。	「一時、日本人は私に対して帰順工作を行おうと、厳冬期に祖母を満州の山野に連れ出し苦渋を味わわせた。だが、祖母はこれに屈しなかった」。「日本帝国主義者らは創氏改名を強要したが、私の祖父母らはそれに応じなかった。亨禄叔父は応じなかった廉で何回も殴られた」。
事大に対	「自らの力を育てることをせず、強者	「他国の人が軍艦と列車に乗り世界を

139　安壽吉「北間島」『韓国代表文学選集』第7巻、ソウル・三中堂、1967年。

140　ミン・ヒョンキ　The Korean Language and Literature 56、韓国語文学会、1995年2月、270頁。

141　安壽吉『北間島』は、次の文献より引用を行った。前掲、「北間島」［上巻］13,110,118,138,341頁、［下巻］45,53,121,220,374頁。また、北朝鮮文献は次の文献より引用を行った。前掲、『朝鮮観光』6頁、崔庸健『米帝国主義の朝鮮侵略政策』北朝鮮民主党中央本部宣伝部、1948年5月18日、18頁、『民主主義と朝鮮建設』朝鮮共産党中央委員会宣伝部、1946年3月10日、22頁、『北韓関係資料集13』国史編纂委員会、1992年、56頁、黄ビョンチョル「『一つ』、昨日と今日」『統一文学』統一文学出版社、2008年、315頁、「北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録」北朝鮮労働党中央委員会、1948年3月28日、7頁。なお、金日成『世紀とともに』からの引用は、前掲、『回顧録（１－１）』1,3,8,11頁である。

する自虐的批判	に依存するのを楽しんできた朝鮮政府は、今度はロシアを信じたのだ」。	縦断していた時に、我が国の封建統治者は笠を被り、驢馬に乗り、吟風咏月して数百年を無駄に過ごした。そんな矢先、列強侵略勢力が艦隊を率いて迫ってくると、頑固に閉じていた鎖国の扉を開けた。封建王朝は、外勢が弄する利権争奪の取引場となった。従来事大主義を旨としてきた腐敗無能な封建統治者は、国の運命が危急であっても、大国の操縦下で、党争を繰り返した。こうして、親日派が優勢だと日本軍隊が王宮を守り、親露派が優勢だとロシア軍隊が王宮を守り、親清派が優勢だと清国軍隊が大殿の見張りに立つようになった。王宮の守護でさえ他国軍隊に任せる有様だったから、この国は誰が守り、面倒を見てくれようか」。
朝鮮民族の始祖に関する認識	「10 月 3 日。檀君様が天符印を持って、太白山神壇樹の下で我が国を初めて開国したのがこの日である」。	「朝鮮民族は檀君を始祖とする単一民族で、民族自主の精神が強く、正義と真理を重んじ、人類史の黎明期から優秀な民族文化を築いてきた」。
微弱な軍事力に対する恨	「しかし、愛国心だけでは勝てなかった。武器と軍粮で固く装備された日本軍警に、申隊長と部下 300 余名は、涙と恨みを抱いたまま敗戦を余儀なくされた」。	「第二次大戦の軍事技術の驚異的な発展とその装備に戦き、朝鮮の軍事的将来を悲観したり、伝統の事大思想と対外依存政策に固執したり、軍事建設の意義を過少に評価したりするのは絶対に正しくない。我々は民族の自主独立を擁護する軍事的勢力を我々の手で建設すべきである」
解放への渇望	「祖国を喪失した魂は、天堂も地獄となす、この言葉を忘れずに奮起し、韓半島江山を回復しよう」。	「咲こう咲こうとしても、自らの魂を咲かせることができない。死のうとしても埋葬地すらない。そうした我が民族にとって解放は、まるで日の光により生命が育む春だった」。
独立への熱望	「第一次大戦が連合国の勝利で終わると、米国大統領ウィルソンは講和条約	「国際ファシズム陣営を自らの血で粉砕し勝利したソ連人民。この赤軍を先

	により独立に関する 14 か条を提示した。その中に民族自決主義が含まれていた。『各民族の運命は自らが決定する』。全世界の被圧迫民族にとって、これは大きな衝撃に違いなかった。我が民族も独立を望む気持ちが火のように燃え上がった」。	頭とする全世界の被圧迫民族、弱小民族の『完全独立と民主平和自由』すなわち全世界人民大衆の利益と幸福と繁栄のために闘争する民主主義戦線」。
統一戦線への呼びかけ	「我が同胞が団結一致して、すべての人びとが銃と刀を手に取って突進し、韓半島 3 千里錦繡江山から外敵を種もなく追い出すしかない」。「同胞よ、独立万歳、独立万万歳を叫ぼう。独立万歳、独立万万歳、檀君子孫、億万代の自由のために、二千万が声を合わせて、独立万万歳」。	「二千万の朝鮮同胞を総動員し、反日革命の統一戦線を堅く組み、倭奴どもの野蛮統治を討ち滅ぼし、人民政府を建設するが第一条なり」。
国力が弱い国民としての悲惨な生活と足掻きの百姓の様子	「越江罪は、当時、目前には肥沃の土地がありながら、飢餓に耐えなければならなった我が民族にとって無情な法であったが、力のない民族には仕方のない事大以小のこととして正当化された」。	「国が滅びる以前にも、この国の百姓は食べ物が無く、満州とシベリアの荒野へ群れをなして向かわなければならなかった。生存権を失った百姓らは、酷刑を受けようとも、必死にこの地を脱出しようとした」。

出所：筆者作成。

このように、趙明熙、安壽吉の小説は、金日成ら抗日パルチザンが活動を展開した間島を舞台に描いたからではなく、小説で描かれた状況が当時の朝鮮の人びと、あるいは少なくとも金日成ら抗日パルチザンを経てきた人びとに共有されていたことから、相似性が見られると言える。誰もが民族独立の運動家・活動家だったわけではないが、「日帝」の侵略と支配を恨の契機とし、それを引き起こした歴史、それに抗いきれなかった自国の憫然さ、それによって陥った自らや家族、愛する人、民族、国家の悲劇的境遇、自分に代わって抵抗した人びとの惨憺たる処遇などで構成される恨、しかしそれゆえに生じる故郷や民族への愛着、解放や独立に対する夢想、解放や独立のための団結を通じて表出される情、そして現況の根源が事大と依存にあると省察し、それを打ち砕くことが恨を解くことだとする情緒は詩歌、小説などを通じて普遍的に共有されていたと考えられる。つまり、植民地期を経てきた朝鮮の人びとには、事大を克服し、解放・独立を達成することが恨を解くことになるという感情が広く胚胎していたものと思われる。そして、それは事大の対概念であ

る主体を受容し共鳴する土壌を生み出していたと考えられる。

第3節　金日成の革命経験と主体

金日成は、植民地朝鮮下の平壌市郊外の大同郡で、1912年4月15日に出生した[142]。姓名は金成柱（キム・ソンジュ）と名付けられた。父親の金亨稷による「幼い時から愛国の魂を深く感じ、それを志向して欲しいという念願から」であった[143]。

金亨稷は、南里という村の小作農民の子であったが、隣村の教会の牧師をしていた長老の娘と結婚したのを契機に、平壌市内のミッション・スクールである崇実中学に入って勉強した[144]。中学卒業後は、書堂（私塾）で教師を行った。そんな金亨稷は、民族意識の大変強い人物であり、1910年の日本による韓国併合に強い憤りを有した[145]。1917年3月には、抗日運動の秘密政治結社である朝鮮国民会の結成に加わっている。この組織は、将来的に日本が欧米と覇を争い、衝突する危機に乗じて、朝鮮の独立自治を目指すため、「同志ノ結束ヲ図リ其ノ準備ヲ為サ」んとするところに目的を置いた[146]。また、同年6月には、徹底した秘密主義の中での結びつきを強めるために、裴敏洙（ペ・ミンス）とともに指を切り、「大韓独立」との血書を記した[147]。

金亨稷と同じ国民会のメンバーで、共に逮捕された崇実学校の教師朴仁寛（パク・イングァン）の家宅捜索の際[148]、生徒たちに「朝鮮ト我々ノ関係」という題目で書かせた作文が押収され、このうちの 3 編が官憲の報告書の中に引用されている[149]。朴の採点により 100 点が与えられた作文は、次のように文章が結ばれている。「吾ガ愛スル半島ヨ、爾ハ何ニシテ目下ノ悲境二陥リシヤ、今ハ覚醒スベキ時期ナリ。明朗光明ナル太陽ハ既二東天二昇レル二アラズヤ、爾ハナゼ二眠レルゾ」。同じく、90 点が与えられた作文は次の通りである。「半島亡ブレバ、我々モ亡ビ、半島自由ナレバ、我々モ自由ヲ得、半島ガ患難二逢エバ、我々モ患難二逢フベシ。……我々ガ居住セル此ノ半島ハ、先祖ヨリ賜ハリシモノナリ。然

---

142 この出生年月日は、北朝鮮が公式に認定しているものである。北朝鮮は金日成の死後、1997年に主体暦を紀年し、金日成が出生した1912年を主体元年とする。また、金日成が出生した4月15日は、北朝鮮において太陽節という祝日である。但し、金日成総合大学副総長を務めた朴一によれば、「朴が金日成の自伝を書くために、直接本人に対して出生年月日を尋ねたところ、『1912年の4、5月頃に平壌付近で生まれた。当時の朝鮮人たちは、日帝の圧迫により誕生日を覚えている場合ではなかった』と答えた」と言う。朴一「金日成は私からマルクス・レーニン主義を学んだ」『新東亜』1991年10月号、355頁。

143 前掲、『回顧録（1-1)』9頁。

144 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』24頁。

145 同上、26頁。

146 同上、27頁。

147 前掲、『金日成と満州抗日戦争』27頁。

148 金亨稷が逮捕された当時、金成柱は7歳であった。彼は監獄へ父との面会に行った際、父の体中についた傷を見て、悪魔のような日本帝国主義の存在を全身で感じ取ったという。前掲、『回顧録（1-1)』32頁。この記憶が金日成の幼少期からの「日帝」に対する恨を生み、抗日闘争へと向かわせた萌芽となったであろう。

149 『現代史資料』29、みすず書房、1972年、11,17,81,103頁。

ル二我々ノ国家ハ、今日何レ二アリヤ。自由ナキ一属国ニアラズヤ。五十年後二ハ、我ガ民族ヲ絶滅セムトスル彼ノ寃讐ヲ、我々ハ剛鉄ノ如キ心ヲ以テ殺滅セザルベカラズ」。こうした認識は教師である朴の「朝鮮と我々の関係」を示唆するものであり、おそらくこのような精神は、金亨稷にも通じるものであったと思われる。そして、父親は我が子金成柱をこのような民族精神で育てたものと推測される。

そうした両親の願いから金成柱は、母の実家に預けられ、そこで教育を受けることになった[150]。彼が学んだのは彰徳学校というところであるが、これは外祖父の康敦煜（カン・トンウク）がその学校の校監を務めていたからである[151]。康敦煜は非常に民族意識の逞しい人であった。彼の長男で、金成柱の叔父にあたる人物も民族主義者で、三・一運動直後には国を離れることを余儀なくされた抗日活動家であった[152]。両親の許を離れ、外祖父が仕切る学校でキリスト教的な、民族主義的な教育を受け、外祖父とともに教会で礼拝を行っていたことは、この少年の博愛的で民族主義的な思想形成に大きな影響を与えたものと思われる[153]。しかし、金日成の回顧録では、「外祖父康敦煜は、私立学校を建てて青少年らを勉強させ、その生涯を後代教育と独立運動に捧げた」とだけ述べており[154]、彰徳学校がミッション・スクールであったことには触れていない。これは、北朝鮮が実質的には「唯一思想体系」を掲げる無宗教社会であるからだろう。

金成柱が 14 歳となった 1926 年に父親の金亨稷が死去した。同年頃、金成柱は、朝鮮独立軍の幹部の育成を目的として 1925 年初めに設立された、正義府の軍事政治幹部養成学校である華成義塾に通っていた[155]。この華成義塾は極めて民族主義的色彩の濃い学校であったのは言うまでもない。従って、金日成とその同輩たちが正義府の幹部らによって、華成義塾の学生に選ばれたということは、どれほど金日成らが民族・抗日的な意識を有し、見識において一般の青年たちよりもはるかに優れた思考を持っていたかを物語っている[156]。但し、金日成が華成義塾に入学したときには、未だ共産主義運動を始めていたわけではなかった[157]。この時点で、金日成が共産主義的な知識として獲得していたものと言えば、撫松で読んだ「社会主義大義」、そして「レーニンの一生期」という小冊子からの知識に過ぎなかった[158]。

だが、父親の逝去を前後に金成柱は華成義塾を退学することになる。和田春樹によれば、金日成が華成義塾を辞めた理由として、「北朝鮮では、父親が死去したあと、華成義塾に入

---

150 前掲、『金日成と満州抗日戦争』29 頁。
151 同上。
152 現在の北朝鮮では、1924 年に逮捕され、13 年間余り獄中生活を送ったとされている。『百科全書』第一巻、平壌・科学百科事典出版社、1982 年、147-148 頁。彼が 1920 年に満州にいたことは、金正明編『朝鮮独立運動』二、原書房、1967 年、995 頁を参照。
153 注 150 に同じ。
154 注 142 に同じ。
155 前掲、『回顧録（1-2)』136 頁。
156 辛珠柏「青年金日成の行動と世界観の変化―1920 年代の後半から 31 年まで」『思想』第 912 号、2000 年 6 月、113 頁。
157 前掲『回顧録（1-2)』138 頁。
158 同上。

学し、『トゥ・ドゥ』を組織し、すぐに学校を辞めたと説明する。しかし、やはり父親が死去したので、葬儀のために母親の許に戻り、その後華成義塾には戻らなかったと考えるほうが自然である」と推測している[159]。とはいえ、金日成の回顧録では、華成義塾での学校生活を「共産主義書籍も自由に読ませてくれ」ず[160]、「そこでの民族主義教育が時代に遅れていることを痛切に感じながら」[161]、それでも「民族主義者らとも共産主義者らの分派とは全く異なる新たな革命思想を作り出そうとした」[162]。こうして、1926 年 10 月 17 日に「トゥ・ドゥ」（打倒帝国主義同盟）を組織した。そして、その当面の課業は、「日本帝国主義を打倒し、朝鮮の解放と独立を成すこととし、最終目的は、朝鮮に社会主義、共産主義を建設すること。それゆえ、すべての帝国主義を打倒し、全世界に共産主義を建設しようとした」[163]。従って、樺甸という狭い空間からより広い舞台へと飛び出し、「トゥ・ドゥ」の結成により始まった共産主義運動を一層高い段階で本格的に幕を開きたくて、華成義塾を辞めたのだという[164]。加えて、華成義塾を辞めたのちに、1927 年には吉林の毓文中学に入学することから考えても、金日成が華成義塾を退学したのは、単に父の死を境に母の許へ戻ったからだとは考えにくい。葬儀による帰郷は学校を離れるための単なる口実に過ぎず、学校への失望と新たな活動への出発が、金日成が華成義塾を辞めた理由だと考えられる。

実際に、金日成自身が述べるように、華成義塾は「民族主義思想に深く染まった先生たちが反日と民族独立について話しているが、彼らが主張する闘争方法は立ち遅れ、実弾射撃に使う弾丸さえなく、いつも木の銃で訓練する」ような有様であった[165]。さらに、金日成を失望させたのは、華成義塾の思想的落後性であった[166]。「華成義塾には、王朝政治に未練を持ったり、米国式植民地主義に幻想を持ったりする青年らもいた」[167]。「政治学の授業では、朝鮮の独立とそこでの民衆という現実に直結する考察がまったくなされていない」など、金日成の主観では、民族主義的教育が時代遅れに映り、現実離れに感じていたからである[168]。ただ、金日成は、華成義塾の問題点として「ブルジョア民族主義運動を集大成し、批判的に分析総和した理論がなく」[169]、「朝鮮が独立した後に、民族主義社会を打ち立てるべきであるとか、勤労人民が主人になった社会を打ち立てるべきだとかを主張する学生がいない」[170]ことまで指摘している。当時 14 歳であった金成柱少年がそこまで透徹した見識を持っていたかは甚だ疑問であり、回顧録の内容をそのまま鵜呑みにすることもできない。

---

[159] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』27 頁。
[160] 前掲、『回顧録（1-2）』158 頁。
[161] 同上、153 頁。
[162] 同上、165 頁。
[163] 同上、166 頁。
[164] 同上、177 頁。
[165] 同上、150-151 頁。
[166] 同上、151 頁。
[167] 同上、152 頁。
[168] 同上、158 頁。
[169] 同上、150-151 頁。
[170] 同上、158 頁。

だが、金日成の回顧録や彼の略伝などでしばしば言及されるように、「華成義塾に送ってくれた人びとの信頼に背き、お父さんの意志に反する[171]」のではないかと苦悶しながら、それでも「社会意識に目覚めつつあった」金成柱は、華成義塾の落後性を認識し、「トゥ・ドゥ」の下に新たな活動を展開しようとしたのだと考えられる[172]。言い換えれば、朝鮮の「国境一帯に隣接した間島をはじめ満州各地には、多くの朝鮮人が住んで」おり、そこでは「はやくからいろいろな形態の反日闘争が力づよく展開されて」いたので、そこに「日帝」打倒の新天地を見出したのであろう[173]。

さて、「トゥ・ドゥ」という組織には、若い少年指導者に対して年配の青年たちが心服し、助力を施すという神話的な要素が胚胎しており、組織的に大いに鼓吹されたと言われる[174]。また、金日成の回顧録や朝鮮労働党の公式見解に従うと、「トゥ・ドゥ」の結成は金日成が14歳の時であり、この組織に加わった塾生たちは皆20歳以上の青年たちであった。従って、金成柱少年が年上の青年たちにマルクス主義の文献を読ませ、革命組織を形成するなどして、革命活動をスタートしたことになる[175]。俄には信じ難いが、金日成が抗日闘争や革命活動の意識に目覚め、行動を起こし始めたのはこの頃からだろうと思われる。金日成は吉林で民族主義や共産主義を志向する年上の青年たちと付き合いを持ち、李鍾洛（リ・ジョンラク）が組織した朝鮮革命軍吉江省指揮部隊（「トゥ・ドゥ」の別称組織でもある）と関わりながら次第に抗日闘争へと関与していったのだと考えられる[176]。

こうして金日成が独立運動に身を投じ始めた頃、現地の民族主義運動の系列としては、正義府、参議府、新民府があり、社会主義運動の系列としてはMLグループ、新火曜会グループ、ソウル・コムグループ、上海コムグループなどが存在していた[177]。これら各系列は、1928年5月に磐石県と樺甸県で「全民族唯一党促成会議」を開き、民族唯一党を結成するための方案について討議を行った。ところが、討議は紛糾し、個人の立場での加入を主張する「全民族唯一党促成会」（促成会派）と、団体の立場での加入を主張する「全民族唯一党協議会」（協議会派）とに分裂した。詰まるところ、両者の対立は、促成会派を代表するML グループと協議会派を代表する正義府多数派の対立に結実した[178]。それゆえ、民族主義者の国民府[179]と朝鮮共産党のMLグループが衝突して内ゲバ的状況が続き、多くの人が殺さ

---

[171] 同上176頁。
[172] キム・イルソン略伝編集委員会『キム・イルソン略伝』発行所不明、1972年、22-26頁。
[173] 同上、27頁。
[174] 前掲、『北朝鮮遊撃隊国家の現在』26頁。
[175] 同上、26-27頁。前掲、『偉大な首領金日成同志の革命活動略歴』11-12頁。
[176] 前掲「金日成は私からマルクス・レーニン主義を学んだ」355頁。
[177] 前掲、辛珠柏、113頁。
[178] 同上。
[179] 国民府は、民族唯一党結党のヘゲモニーをめぐって、ML派と正義府が激しく対立しているさなか、正義府が第二次三派合同を提案し、1929年3月に吉林で新民府民生派、参議府瀋龍俊派とともに会合し、合同機関として組織された。前掲、『金日成と満州抗日戦争』40-42頁。正義府は自らが運営した30余の学校の中で、華成義塾をもっとも大事にした。そして、1926年11月の正義府の第三回中央会議で、教育問題を論じた際にも、華成義塾だけは別に上程し、1927

れるなどの被害に及んでいた[180]。金日成はこの頃の状況を回想し、「従来から事大主義を常としてきた腐敗無能な人びとは……党争ばかりを繰り返した」[181]、「当時、間島と沿海州の地方には、多くの独立軍部隊と独立運動団体があった。夜が明けると、韓族会やら大韓独立団やら、太極檀やら、軍備団などが南満地方だけでもおよそ 20 余個もあった。しかし、分派主義者らは最初から他の団体を排撃し、嫉妬心から権力闘争ばかりしていた」[182]と述べている。こうした状況は、新たな活動を展開しようとして革命に身を投じ、新天地へ赴いた金日成にとって、分裂や対立を繰り返すばかりで、怒りの矛先を「日帝」に向かわせないもどかしさと、事大に安住して現況を顧みない主体性の無さを痛感させるに余りあるものであった。

そうした他方で、金日成は、1927 年に吉林の毓文中学に入学していた。留吉学友会機関紙である『学海』の創刊号には、鉄拳生の名で「階級闘争史」の序論が翻訳されている。これによると、1920 年代半ば頃の吉林の朝鮮人学生の間では、マルクス・レーニン主義が知的好奇心を向ける対象であったことが分かる[183]。金日成は 1929 年頃から、ML グループの朴素心（パク・ソシム）や中国共産党員で毓文中学の教師であった尚鉞らを通じて、社会主義に関する書籍を購入して読んでいたという[184]。正義府の組織人であった金亨稷らの影響に受けて、基より金日成が他の青年たちに劣らない抗日意識を抱いていたことは先述の通りである。「幼い時期に抱いた彼らの民族的な憎悪感が、成人になるにつれて正しくない報復の方法へ深化することを是認すべき問題である」[185]。これは、朝鮮半島の解放後において、北朝鮮で広く感化された日本人の子どもに対する理解であるが、これを逆手に取れば、植民地期に幼年時代を過ごしてきた朝鮮の人びとの心情を投影した考え方であっただろう。つまり、「朝鮮の子供たちは、生まれながらにして日帝の抑圧政策の下で、人間の生とはそんなものだと考えた物心が分からない訳ではない」[186]。加えて、民族主義的な意識の強い家庭に生まれた金日成は、より一層父親の活動やそれに対する「日帝」の圧迫を見聞きして、革命への影響を受けたものと思われる。そうして社会意識に目覚めた頃、憎悪への報復を通じた民族の解放と独立を成し遂げるための革命の先進思想を渇望し、マルクス・レーニン主義と出会うこととなった。金日成がマルクス・レーニン主義に本格的に接したのはこの頃からである[187]。

年から華成義塾をより拡充し、闘士の養成に尽力することを決定した（「朝保秘第一五一九号大正一五年一一月二九日朝匪団正義府中央議会開催二関スル件」『日本外務省外交資料館、分類番号四・三・二　二‐一‐三、不逞団関係雑件朝鮮人の部在満州四四巻』）前掲、「青年金日成の行動と世界観の変化」128 頁。

[180] 前掲、『北朝鮮遊撃隊国家の現在』29 頁。

[181] 前掲、『回顧録（1-1）』3 頁。

[182] 前掲、『回顧録（1-1）』49 頁。

[183] 前掲、「青年金日成の行動と世界観の変化」117 頁。

[184] 前掲、『回顧録（1－3）』、211 頁、222 頁。

[185] 安含光「愛憎の倫理」『北韓関係資料集 13』国史編纂委員会、1992 年、131 頁。

[186] 同上。

[187] 前掲、「青年金日成の行動と世界観の変化」116 頁。

そんな折り、1929 年に毓文中学へ尚鉞という中国人の教師が赴任してきた。尚鉞は、魯迅の弟子であり、マルクス主義に感化された青年文学者だった。彼はレーニンの『帝国主義論』を教材に用いて、金日成ら生徒たちに読ませた。尚鉞が毓文中学に赴任していたのは短い間だったが、金日成はこの先生から強い影響を受けた[188]。尚鉞もまた、解放後に中国で歴史学者として高い地位を占めることになる人物であるが、晩年には金日成と再会した。そうして次のように金日成を評する回想を残している。

「彼は聡明であった。……肝もすわっているし、見識もあった。……金成柱の話から私が深く感じたのは、深い民族的な恨が彼の心の底にすでに埋め込まれており、敵を追い出し復仇報国しようという信念が彼の心の中に日ましに成熟していることであった」[189]。

現在、北朝鮮の平安道と慈江道の境に位置する妙香山の「国際親善展覧館」には、1992 年 4 月 10 日に尚鉞の家族が金日成に対して、『尚氏中国古代通史』を贈呈したとしてこれが展示されている[190]。金日成の満州における革命経歴から見れば、正規教育を受けたのは短い時間に過ぎず、それゆえ「共産主義理論に対して門外漢だった」だろう[191]。そのようなある一定期間に金日成がマルクス・レーニン主義に触れる中で、尚鉞からの影響は極めて多大であったことが想像される。

こうした時期、正義府の青年たちの主張は、ラジカルな方向性を帯びつつあった。その集会では、朝鮮革命について「日本帝国主義ヲ撲滅シ、朝鮮ノ絶対独立ヲ完成シテ、労働者・農民ノ民主政治ヲ建設スルト同時ニ、社会主義革命段階ヘト引進セシメナケレハナラヌ」として決議した[192]。ここには金日成の思考も投影されており、金日成やその同僚らはこの 1929 年 11 月の集会を契機に、国民府内に頭角を現していたのである。金日成やその同僚たちは、この頃には「資本主義でもボルシェビキ的社会主義でもない」、自らなりの朝鮮革命を模索するようになっていた[193]。

その後、1930 年にはコミンテルンの「一国一党」方針が出され、満州に散っていた朝鮮共産党の各派は、相次いで中国共産党に吸収されることとなった。朝鮮の民族主義者やそれに近い立場を有する国民府と衝突していた ML 派は、真っ先に自らの組織を解消し、中国共産党に入党した。次いで火曜派がこれに続いた。金日成らが連なるソウル・上海派は最後まで態度を決めかねた[194]。1931 年に李鍾洛の部隊が関東軍によって完全に潰され、李鍾洛が逮捕されると、軍警の追跡を免れた金日成は、母親のいる東満地方へと戻っていった。

---

[188] 前掲、『回顧録（1－3)』、222 - 235 頁。
[189] 『新華文摘』1984 年第 8 期、197-199 頁。なお、前掲、『北朝鮮遊撃隊国家の現在』28 頁からの再引用である。
[190] 2014 年 8 月に行った筆者の現地での実見調査により確認。
[191] 前掲、「金日成は私からマルクス・レーニン主義を学んだ」354 頁。
[192] 前掲、「青年金日成の行動と世界観の変化」118 頁。
[193] 同上。
[194] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』30 頁。

金日成はそこで中国共産党に入党したと考えられている[195]。

1931 年 9 月に満州事変が引き起こされると、金日成は 1932 年春頃に、安図で「救国軍」于司令部隊の別働隊として「朝鮮人武装隊」を組織した[196]。これが金日成の率いる最初の部隊であった。1933 年 2 月に金日成は、汪清県の遊撃根拠地馬村へ赴き、部隊とともに「汪清遊撃隊」に合流した。彼はそこで成立を見ることになる「汪清遊撃大隊」の政治委員に抜擢される。金日成が登用された理由は、共産党組織は文書組織であるため、政治委員が上部に報告書を提出しなければならない。そこで政治委員は、中国語で文章が書けなければならないからである。金日成は中国の中学で学び、中国語の読み書きに堪能であった[197]。しかし、抜擢はそこ止まりであり、如何に中国語に堪能で、抗日意識が強く優秀であっても、中国共産党下で朝鮮人として高い地位に就くことは困難であった[198]。

1930 年以降の満州地域において、そこに在住する朝鮮人共産主義者が中国共産党下あるいはそれが指導する抗日武装部隊に加わり、抗日闘争を展開したことは、すでによく知られる事実である。そうした中で、中国共産党満州省委員会傘下の東満特別委員会[199]では、1933 年以降、朝鮮人党員や遊撃隊員を須く日本のスパイか手先と見なし粛清するという事態が巻き起こった。これが「民生団事件」あるいは「反民生団闘争」と呼ばれる事態である。民生団はそもそも、1932 年に親日的な朝鮮人が組織した団体で、日本の了解を得つつ、「間島の特別行政区域化」、「朝鮮人の自治」を掲げた。しかし、「満州国」成立時にこれらが認められなかったこと、また中国共産党が反対活動を展開したことから、同年中に解散していた[200]。ところが、中国共産党は、党および遊撃隊内に民生団員が入りこんでいると考え、朝鮮人に対する大規模な粛清を敢行した[201]。1936 年まで続く反民生団闘争の結果、共産党や遊撃隊に加わった多くの朝鮮人幹部、大衆らが犠牲となった[202]。これ以外にも、当時は朝鮮人と中国人との間の衝突が頻繁に繰り返されていた。抗日武装部隊での朝鮮人兵士に対する中国人幹部の差別的扱いには目に余るものがあったという[203]。その後金日成は、1939 年までには関東軍の討伐を逃れてソ連へと向かうことになるが、7 年余りの東満での遊撃隊活動を通じて、同じ目的を有し、同じ敵に対峙する同志であっても、差別され迫害を受ける屈辱と、自らが組織を形成し部隊を率いることができない無力さを痛感することとなった。「国を無くし、植民地奴隷の生活をする人びとは、喪家の犬よりも劣る」ことを実感し

---

[195] 同上。
[196] 同上。
[197] 同上、31 頁
[198] 前掲、『金日成』59 頁。
[199] 東満は、ほぼ現在の延辺朝鮮族自治州となっている地域である。朝鮮人や日本人は、「関島」と呼んだ。
[200] 水野直樹「満州抗日闘争の転換と金日成」『思想』912 号、2000 年 6 月 5 日、134 頁。
[201] 同上。
[202] 同上。
[203] 前掲、『金日成』70 頁。

たのである[204]。

以上のように、金日成は、その生い立ちから「日帝」を恨み、民族意識を強くし、解放・独立と革命を渇望した。父親の言動や活動は、「成長に影響を及ぼさざるを得なかった」[205]。こうして社会意識に目覚めた頃、抗日活動を目指して吉林へ赴き、そこでマルクス・レーニン主義に触れ、活動を開始するが、党派的な状況に直面し、「資本主義でもボルシェビキ的社会主義でもない」、自らなりの朝鮮革命を模索するようになる。しかし、中国共産党に入党せざるを得ない状況や抗日武装部隊での朝鮮人差別、反民生団闘争に直面する中で、「日帝」への憎悪とそれを打倒し克服するための解放・独立の思いを強めると共に、他者の手の中で生き、事大を常とすることから脱却しなければならないという自覚を強めた。金日成もまた、自らの革命経験を通じて、他力や事大を克服し、解放・独立を達成することが恨を解くことになるという思いを胚胎させていったのである。

第 4 節　解放後の金日成の政治活動と主体

（1）解放直後の北部朝鮮の状況と金日成の位置

1945 年 8 月 15 日の朝鮮半島の解放直後、ソ連は北部朝鮮地域に進駐し、朝鮮人の自発的な自治機関の結成に便乗して占領政策を開始した。だが、ソ連は実は、占領に対する準備をほとんどしていなかった[206]。唯一、ハバロフスク近郊の野営で訓練を行っていた「第八十八特別旅団」の中に朝鮮人の集団がいて、そのリーダーに金日成なる人物がいることを把握し、これを活用することを想定していた。実際、この金日成をモスクワへ呼び寄せ首実検を行ったという[207]。だが、金日成でさえ、朝鮮領内で活動を行ったことはなく、今後の朝鮮における明確な見通しと方針を有してはいなかった[208]。当時、北部朝鮮には、著名な民族主義者として土着の人びとの尊崇を受けていた曺晩植と、ソウルには共産主義者の朴憲永がいた。ソ連は金日成を活用しようと考えると共に、曺晩植に接近した。

1945 年 8 月 20 日には、「現情勢の我々の課業」と題する、朴憲永が率いる組織（朝鮮共産党ソウル中央）の政治路線が明らかにされた。そこでは、次のようなことが謳われている。すなわち、「現情勢下における朝鮮は、ブルジョア民主革命段階にある。もっとも重要な任務は次の通りである。日本帝国主義から国の完全独立を達成し、土地問題を解決することができる政権を樹立すべきである。土地問題を解決せずには封建残滓を一掃できないからである。民族反逆者から土地を没収し、土地のない農民らに分配すべきである。そして、革命団体らの合法的権利、共産党が国政運営に参与できる権利を得るのが重要だ。8 時間労働制を実施し、人民大衆の生活を急速に好転させるために闘争すべきである。日本帝国主義者らから土地と山林、工場、企業所、運輸手段、郵便局、銀行などを没収し、国有

---

[204] 『朝鮮中央通信』平壌・朝鮮中央通信社、2014 年 4 月 29 日付。
[205] 前掲、『回顧録（1-1)』2 頁。
[206] 森善宣『六月の雷撃―朝鮮戦争と金日成体制の形成』社会評論社、2007 年、31 頁。
[207] 同上、61 頁。
[208] 同上。

化すべきである。国費で義務教育を実施すべきである。政治・経済分野における女性の指導的役割を高めるべきである。所得税制度を実施すべきである。朝鮮の自主独立を守護するために、軍隊を創設すべきである。朝鮮共産党中央委員会は、朝鮮共産党が可及的速やかに労働者階級と農民の真なる指導者として人民らの前面に立つべきであると考える。従って、共産主義者らは統一された朝鮮共産党を創建するために、すべての力を結集すべきである。以上が現情勢下においてもっとも優先的で、重要な課題である。我々は宗派活動を慎み、組織的・非組織的群衆と接触し、我が方に受け入れるべきである」[209]。つまり、後年の北朝鮮において、金日成の成果として知られている「土地改革」、「重要産業の国有化」、「8 時間労働制」、「男女平等」などは、すでに朴憲永の政治路線の中に包摂されていた。

従って、1945 年 10 月 10 日から 13 日にかけて、「西北五道党責任者・熱誠者大会」が開かれ、朝鮮共産党北部分局の設置が容認されようとしている中でも、「ソウル中央」に対する支持は根強かった。金鏞範（キム・ヨンボム）、呉淇燮（オ・ギソプ）、金日成などが署名してソウルに送った書簡にも、「朝鮮人民の偉大な首領、勤労人民の首領朴憲永同志万歳」と記されていた[210]。

これより先、1945 年 8 月 29 日にソ連第 25 軍軍事会議軍事委員レベジェフ少将は、平壌駐屯ソ連軍第 25 軍司令部で曺晩植をはじめとする平安南道人民委員会委員らと初めて対座した。曺晩植は、即時自主独立国家の建設を頑なに主張し、信託統治の過程で主導権を握り、朝鮮に親ソ的な国家を樹立しようとしていたソ連軍との考え方の乖離の大きさが露呈した[211]。曺晩植は、「基本的な政治路線は民主主義にすべきであり、資本主義に立脚した経済制度を採択すべきである。教育を通じて人民を覚醒し、被圧迫民族の恨みを自主独立国家の建設で解くべきである。そして、この過程において宗教、言論、集会、結社の自由などが保障されるである」と主張した[212]。これに対してレベジェフは、「曺晩植の耳触りの良い話を聞き、このような政治的所信と見識であるがゆえに、人民らから慕われていると思いました」と回顧している[213]。約 35 年に渉る植民地支配を終えた朝鮮半島では、共産主義者であれ、民族主義者であれ、南北を問わず、誰でも即時自主独立国家の建設を政治理念とし念願していたことは想像に難くない[214]。こうした状況下で、金日成はソ連軍とともに北部朝鮮へ舞い戻ることになったのである。

金日成は朝鮮へ帰還したのち、ほぼ 1 か月間、曺晩植をはじめとする民族主義者や国内で活動した共産主義者ら指導者のもとを訪れるのに費やした。たが、金日成と対面した誰もがさしたる印象を受けた様子ではなかった。解放後に、雨後の筍の如く生じた多くの政

---

[209] 金グクフ『平壌のソ連軍政』ソウル・ハンウル、2008 年、113 頁。
[210] 『正しい路線のために』ソウル・わが文化社、1945 年 11 月 7 日、37 頁。
[211] 前掲、『平壌のソ連軍政』42 頁。
[212] 同上、48 頁。
[213] 同上。
[214] 「民族自主独立を基礎とする真なる民主国家を建て、国民の利益を擁護すべきである」（1948 年 5 月 4 日の金九の記者会見）。同上、275 頁。

治組織のどれも、金日成をその中心に担ごうとするものはなかった。国内の共産主義者の中では、金日成はものの数に入っていなかった。金日成は国内の共産主義運動に参加した経歴がなかったからであった[215]。

他方、ソ連軍のメコレル中将は、同僚の高麗人 2 世である姜ミハエル少佐と 9 月上旬に平壌入りし、金日成が北部朝鮮地域で行うべき政治訓練プログラムを準備した。そして、金日成が朝鮮に帰還すると、土着の指導者回りをさせると共に、彼を秘密裏に連れ出して地方を巡回しつつ、「ソ連軍歓迎大会」での演説、生家への訪問、曺晩植との対面など、「抗日闘士・民族の英雄である金日成将軍」作りに奔走した[216]。

しかし、平壌では、解放直後にはすでに、地元の活動家たちによって「朝鮮建国準備委員会」の平安南道支部が結成されていた。また、1945 年 8 月 26 日にソ連軍が入城してくると、その支部の 3 名の代表がソ連軍を歓迎するために平壌駅へ出向いてきていた。そして、その日のうちに、建準支部は、15 名からなる平安南道人民政府委員会の委員リストを駐屯ソ連軍の責任者であるロマネンコおよびイグナチェフに提出した[217]。これに対して両名は、リストに 15 名の共産主義者を加え、委員の数を 2 倍にするよう命じた。結局、共産主義者と民族主義者の双方からさらに 1 名ずつ女性が加わり、委員は合計で 32 名となった。こうして、これに類似した組織が人民委員会という名称で、北部朝鮮地域の五道全域に組織されることとなった[218]。

その後、10 月 8 日にロマネンコとイグナチェフは、北部朝鮮における西北五道の行政を統合し管掌する機関を創出するために、五道人民委員会の連合会議の開催を呼びかけた。そこで、民族主義者の曺晩植を長とする、10 局からなる「五道行政局」が創設された。ちなみに、金日成は、この会議には出席しておらず、またどの局の長にも選出されることはなかった[219]。

こうした、ある種金日成と曺晩植を両天秤にかけたソ連軍政が、金日成の庇護へと風向きを変える契機となったのが信託統治をめぐる米ソの対立であった。イグナチェフは曺晩植をはじめとする行政局の委員たちに対し、米ソ共同委員会が提起した信託統治に賛成するよう求めたが、頑強な抵抗に遭った。米国との交渉にあたったシティコフは、曺晩植をはじめとする行政局の民族主義者らをあからさまに非難した[220]。その後、曺晩植がソ連軍に幽閉され、反託の民族主義者らが追放されたのは前章で述べた通りである。このようにして、遅くとも 1946 年 1 月までには、民族主義者と共産主義者の協調は潰えることになった。ソ連軍は土着の勢力を活用することをあきらめ、金日成を中心に、のちのソ連派と呼ばれる勢力を送り込み、党権と行政の確立を目指した。

---

[215] 前掲、『金日成』107 頁。
[216] 前掲、『平壌のソ連軍政』72 頁。
[217] 前掲、『金日成』115 頁。
[218] 同上。
[219] 同上。
[220] 同上、116 頁。

（2）金日成の政治活動と主体

朝鮮半島の北部地域に共産党の分局が設置されてから、ソ連軍政はこの地域における社会主義的な政策を本格化させた。ソ連において作成した土地改革や労働、男女平等に関する法令、重要産業の国有化法令、各道・市・郡・面・里人民委員会選挙に関する法令などを平壌駐屯ソ連軍のイグナチェフ大佐が率いるソ連系の高麗人に翻訳させた[221]。そして、これら法令を北朝鮮臨時人民委員会委員長金日成名義で発出した。これらの法令は、各人民委員会選挙を通じて創設された北朝鮮人民会議で批准を受ける形を取った。ソ連軍は金日成のパルチザン闘争を世に知らしめ、人民たちが彼を「抗日闘士・民族の英雄」として認知するよう政治キャンペーンを張りつつ、その金日成が法令を発出して政策を展開し、これをソ連共産党もソ連軍も支持しているという形を取りたかったからである[222]。

1945 年 12 月に作成された「北朝鮮の政治情勢について」と題する調査報告書によると、「ソ連軍司令部は、北朝鮮の一切の政治、経済生活についての指導を、地方自治機関を通じて実施している。すなわち、村では村長、面と郡では人民委員会、都市では都市自治機関がそれである」と述べている[223]。このようにソ連軍は、あくまで朝鮮人による自治が北部朝鮮において展開されていることを演出した。だが、ソ連本国を通じて社会主義的な政策が進められると、同じ共産主義理念を共有するがゆえに、そのいずれもが先に引用した朴憲永及びソウル中央の示す政策に先取りされているという憾みがあった。これは金日成に分局を率いさせ、ソウル中央との差別化を図りたいソ連、そして金日成本人にとっても頭の痛い状況であった。従って、金日成も、ソ連軍もまた、北部朝鮮の実情に合わせた政策の展開を意識することとなった。

これとは別に、金日成が腐心していたのは、曺晩植の態度と末路に鑑み、ソ連・ソ連軍に対して服せざるを得ないという状況であった。金日成としては不本意であったが、外勢の力に服しつつ、自らの権力が固まるまで、外勢を利用し続けた[224]。当時の北部朝鮮地域においては曺晩植を別にすれば、名だたる民族主義者、共産主義者がほぼ 38 度線の南にいて、北部朝鮮内には、統一された組織がなく、地域それぞれの有力者たちが乱立しているような状況だったからである。しかも、金日成自身は、「普天堡戦闘」を通じて、北部朝鮮全土に知れ渡っていた満州での革命経験を有していた。従って、ソ連による金日成擁立の工作はさほど困難ではなかったという[225]。こうして五道行政局が解体すると、ソ連軍当局は 1946 年 2 月 8 日に北朝鮮臨時人民委員会を組織し、金日成を委員長に据えた。

しかし、この時点では未だ金日成が唯一の指導者というわけではもちろんなかった。「金

---

[221] 同上、118 頁。
[222] 同上、103 頁。
[223] 前掲、『6 月の雷撃』31 頁。
[224] 同上、36 頁。
[225] 前掲、『金日成』113 頁。

日成、朴憲永、武亭同務万歳」とのスローガンを掲げる地域もあった[226]。さらに、「党報の存在も知らないし、金日成将軍が何をする人か知らない」と公然と指摘をするものまで存在した[227]。それゆえ、こうした状況に配慮して、臨時人民委員会で挙げた成果は、組織の代表者である金日成のみならず、ソ連軍の幇助と人民委員会に連なる人びとのお陰であるとした。

「赤い軍隊の熱い友誼と熱誠的な幇助はもちろん、わが人民の指導者金日成委員長以下の諸同志らが皆で我が祖国の再建のための民主主義建設事業で熱情的に参与した結果であった」[228]。

但し、ソ連軍の入城時の布告[229]やスターリンの北部朝鮮での占領方針[230]によって、軍政下においても、金日成に一定の政治的主張をなさせる空間が設けられていたことも事実である。そのことは、人民委員会の記録で、ソ連軍は朝鮮にとって解放者であり恩人ではあるものの、北部朝鮮における建設の指導者というわけではないこと、北部朝鮮の建設はあくまで朝鮮の指導者である金日成の領導によることを主張しているところから窺える[231]。また、ソ連軍の援助により解放されたことを指摘しながらも、これが兄弟的幇助に過ぎないことを強調するとともに、ソ連との関係においては従属的関係ではなく、平等な関係で親善関係の構築を図っていることが以下のように主張されている。

「ソ連の英雄的な赤い軍隊は、我が人民らに自由と独立をもたらした。彼らは我が祖国を領導し、日本帝国主義を永遠に駆逐した。こうして我が民族は永遠に幸福を享受するようになった。我々は、赤い軍隊とその指導者スターリン同志が我々に与えた兄弟的幇助をいつまでも忘れない」[232]。

---

[226] 金昌満「北朝鮮共産党中央委員会第二次各道宣伝部長会議総決報告要旨」太成洙編『党の政治路線及び党事業総括と決定』党文献集（一）平壌・正路社出版部、1946 年、67－68 頁。
[227] 同上、160 頁。
[228] 出所。
[229] 1945 年 8 月 26 日のソ連軍入城時の布告は以下の通りの要旨である。「朝鮮人民よ。……朝鮮は自由の国となった。……朝鮮人よ、記憶せよ。幸福はあなたたちの手中にある。あなたたちは、自由と独立を求めたが、今はすべてのものがあなたたちのものになった。……朝鮮人人民自身が、必ず自ら幸福を創造するものにならねばならない。……ソ連軍司令部は……あらゆる援助をするであろう」前掲、『金日成』113 頁。
[230] スターリンの占領方針は次の通りである。「１．北朝鮮の領域においてソビエトやその他のソビエト権力機関をつくらず、ソビエト的秩序を導入しないこと。2. 北朝鮮において、すべての反日的民主政党と団体の広範なブロックを基礎にして、ブルジョア民主主義的権力を樹立することを援助すること。3. このことと関連して、赤軍の占領した朝鮮の諸地域で反日的民主的な団体と政党を結成するのを妨げず、それらの活動を援助すること」。『毎日新聞』1993 年 2 月 26 日付。前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』63 頁。
[231] 『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①』1947 年 2 月 17 日、22 頁。
[232] 金日成「北部朝鮮工作の錯誤と欠点について―朝共北朝鮮分局中央第三次拡大執行委員会で

「会場の外壁には、『我が民族の偉大な領導者金日成将軍万歳』という巨大な標語が掲げられ、朝蘇両国の国旗は、今日の両国家人民の親善を語るように、春風にひらひら舞っている」[233]。

また、建国以前のこの時期において、全世界の社会主義革命の実現のために、ソ連を中心とした国際主義の意義を認めながらも、その実現に連なるものとして、自らの革命の完成を要求していたことは大変興味深い。後年、初めて「主体」が言及された際の国際主義と愛国主義の両立という主張は、すでに解放直後において行われていたからである。

「国際主義と愛国主義は決して矛盾しない。愛国主義は、国際主義の一環として、まず自らのことをうまく行った上で世界に貢献することを目指すものである。この際、先ずは愛国主義をもって自国を発展させるために、自らの領導者に充実となるべきである」[234]。

このように、解放から建国までの時期にあたる北部朝鮮の課業は、「ソビエト国家建設ではなく、人民共和国建設が基礎任務」[235]であった。そして、そこでは「自主独立と民主主義国家建設の物質的基礎を築き上げ、朝鮮民族が自主的に民主主義朝鮮を建設することができる力量を全世界に見せました」と述べるように、「自主独立」の達成と「民主主義」が前提であった[236]。とはいえ、自主独立や民主主義国家の建設は、金日成が指導する共産党の専売特許ではなく、曺晩植、朴憲永、金九（キム・グ）などの有力な指導者たちがいずれも口にする普遍的な理念であった。そこで、金日成は、自らが占領した地域で親ソ的政府を作り上げればよく[237]、そのためには、「日本は朝鮮から永遠に排除されるべきである」と考えるソ連の徹底した親日派の処断と排除の方針に立脚することにした[238]。金日成によれば、北部朝鮮では、「わずか一～二年という短い期間に……地主、隷属資本家、親日派、民族反逆者どもが一掃され」たという[239]。こうして、米軍政下の南部朝鮮において「親日派」勢力が未だ活動し活用されているのに比して、北部朝鮮における「反日」政策の展開とその成果が誇られることになったのである。

金日成はこのように、ソ連の権威と占領方針を巧みに利用して、北部朝鮮における自ら

の報告」前掲、『党の政治路線及び党事業総括と決定党文献集（一）』4 頁。

[233] 前掲「北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①」1 頁。

[234] 北朝鮮労働党、姜ヨンタイ『祖国統一民主主義戦線結成大会文献集』1949 年、102 頁。

[235] 『金日成将軍述、民族大同団結について』、朝鮮共産党清津市出版会、1946 年、10 頁。

[236] 姜鎭乾『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日、3 頁。

[237] 前掲、『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』63 頁。

[238] 前掲、『北朝鮮誕生』74 頁。

[239] 『金日成同志の革命活動』翻訳委員会訳『金日成同志の革命活動』雄山閣、1972 年、106-107 頁。しかし、「親日派」や「民族反逆者」の一掃は、実際には「一～二年という短い期間」で達成された訳ではなく、建国直後の政府政綱で示されるように、建国以後も課題とされた。福原裕二「金日成権力の『歴史』構築と対日認識の形成」『北東アジア研究』第 12 号、2007 年 2 月、20-24 頁。

の地位を高め、指導者としての独自性の表出と自己主張を行った。すなわち、金日成はソ連に対して完全に従順であったり、盲目的に崇拝したりしたわけではなかった。それは、金日成が革命経験で培った他力や事大に対する嫌悪感のみならず、北部朝鮮におけるソ連軍の蛮行に対する不満からでもあったと思われる。ソ連軍は、「宣伝に見られるような熱烈な歓迎振りとは乖離している。……赤い軍隊の先発隊は、地域住民らにしばしば暴力を振るった。工場を奪取し、産業設備を戦利品のように自国へ送っただけでなく、女性に対する強姦と市民らに対する物理的暴力、食糧強奪などが頻繁に発生した。当時の目撃談によれば、ソ連人の略奪と暴力、無礼な行動は、ソ連軍に対する朝鮮民衆らの愛情を冷めさせることになった」[240]。このような状況は、当時アメリカ陸軍情報局でさえも次のように察知していた。

「ソ連が北部朝鮮に駐屯する意志を有するのかどうか疑わしい。彼らは朝鮮人民の尊敬を受けるようなことをほとんどせず、民心を離反させるようなことばかりをしている。彼らの占領地域での態度で無礼である。略奪、強姦、そして食糧供給と運送のために、住民らの財産を奪い、挑発する。こうした行動は、赤い軍隊に対する嫌悪感だけを増幅させると判断される」[241]。

こうした直接的な表現ではないものの、当時の文献も、党員らに対して、「赤い軍隊に対する尊重を行わないような傾向には反対すべきで、彼らの政治的助力と工作上の援助を切実に受け入れ、彼らを真に擁護すべきである」と諫め[242]、北部朝鮮においてソ連軍が必ずしも歓迎されていた訳ではないことを示唆している。

このような状況でありながら、金日成は、ソ連軍政下にある現況や自らの権力が未確立であることを踏まえ、自己を庇護するソ連の立場を守りつつ、自己主張は内部へ向けて発信するのに止めた。それが宗派主義に対する非難と自らの指導下への結集という画策であった。

金日成は、朝鮮の歴史上に見られる事大主義や植民地期における朝鮮共産党内部の派閥闘争に苦言を呈しつつ、解放してもなお北部朝鮮に顕在化する分派主義に警戒感を露わにした[243]。具体的には、分派主義について、「分派主義者らは党事業を妨害し、党組織を瓦解させようと党規律を破壊している」[244]とし、「尹相南（ユン・サンナム：筆者注）の宗派意識による咸南党責任者らの宗派活動」に言及して名指しで宗派主義を論難した[245]。それに併

---

[240] チェ・ボムソ「北朝鮮の政治状況」韓洪九『韓国共産主義運動史１』ソウル・トルペゲ최범서、1986 年、315 頁。
[241] 前掲、『北朝鮮誕生』78 頁。
[242] 前掲、『党の政治路線及び党事業総括と決定』24 頁。
[243] 「党内で厳重なのは、分派主義が存在することだ」同上、20 頁。
[244] 同上、21 頁。
[245] 同上。

せて、金日成は、「統一は、まず領導が統一されるべきで、明らかな指導者を中心に団結することから着手すべきである」と述べ[246]、暗に自らの指導下に結束が図られるべきことを主張した。そこでは、領導者たるものの備えるべき資質として、「正確な理論と路線が実際の闘争を通じて、群衆を把握した上で、人民大衆が自ら彼を慕うとき、彼は首領になるのだ」と言い[247]、自らを領導者に準えるよう宣伝活動を始めた。

その宣伝活動は、まずは党において、「この間の路線を正しく直し、各種政策を正確に立て、党を本当に勤労大衆の中で確立することにおいて、日成（ママ：筆者注）同志の決定的な領導を我々ははっきり認識すべきである」と周知徹底した[248]。その後、政権機関である北朝鮮人民会議においても、「偉大な指導者は、すべての問題を正当な時期に、現実的に、必ず実行される問題として提起します。金日成委員長は、過去、もっとも正当で現実的に実現される問題を適時に提起し、我々のすべての課業を成功させました」[249]と喧伝した。つまり、これまでに北部朝鮮地域において実施されてきた土地改革、重要産業の国有化、民主的な労働法令の発布、男女平等権の確立などの改革諸措置が金日成の成果として収斂されたのである。

さらに、こうした宣伝は、地方の人民委員会を通じて大衆化されていった。朝鮮民主党の副党首である李東英（リ・ドンヨン）は、次のように述べて金日成に感謝すべきであることを披瀝した。

「北部朝鮮は農民だけが幸福になったのではなく、日本帝国主義強占下で民族的、政治的、植民地的圧迫と経済的搾取を直接的に受け、虐待された労働者事務員らもいました。彼らは、牛馬のごとく残酷な環境と条件の下で、14～16 時間の労働をしながら、悲惨な生活を送りました。北朝鮮臨時人民委員会が発布した労働法令は一つの光明となり、日本帝国主義の植民地的搾取の残余を一掃し、労働者、事務員の物質的生活向上の基礎を打ち立てました。……朝鮮民族の数千年の歴史発展の中で、もっとも大きな障壁であり、恥であった男尊女卑の封建思想と、その制度による政治、経済、社会的なすべての方面で不平等、不幸な生活をしてきた朝鮮女性を解放するために、男女平等権に関する法令を発布しました。これにより、朝鮮女性は過酷で、不合理で、不平等な生活から解放されました」[250]。

こうした宣伝が奏功したのは、着実に政治力を強めつつある金日成の趨勢（パラム＝風）になびこうとする意識と[251]、民衆は直面する生活に追われ、政治に関心を持たなかったとい

---

[246] 同上。
[247] 同上。
[248] 同上 68 頁。
[249] 呉其燮『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日、26 頁。
[250] 朝鮮民主党副党首李東英『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①』1947 年 2 月 17 日、12 頁。
[251] 「我が大学は、祖国の歴史と運命に肉迫する指導的人材を養成する、文字通り我が民族の解放のために神々しく生命を捧げていらっしゃった民族の英雄金日成将軍の名前を掲げた人民の大学だからである」。総合大学の名称として金日成の名を冠したのは、当時の金日成の政治的な

う背景がある[252]。例えば、会議ではほとんど異議が出ることなく、多くは領導者に対する賛美を競うことで時間を費やした。たまに異議が出されれば、すぐに批判の対象となった。次の通りである。

「主席団の選挙方法は、口頭による他薦とし、55 人を選挙しようという提議がありまして。異議はないでしょうか。賛成する方は挙手してください（満場一致挙手で可決）」[253]。

「大概は、領導者に対する礼賛の始終で時間を過ごす傾向があるが、報告内容について賛成するかしないか、報告内容が事実と符合するかしないかを中心に討論することをお願いします」[254]。

以上のような、金日成において自らに指導力を結集させようとする思惑は、もちろん革命経験で得た他力における挫折感の教訓と権力に対する野心であると思われるが、指導力を結集させるための方法論は、第 4 章で議論することになる毛沢東主義に影響を受けたものであった。実際、金日成は 1946 年の時点で、今後進められることになる国家建設において「ソビエト国家建設ではなく、人民共和国建設が基礎任務である」と朝鮮の実情を踏まえた上で[255]、「人民共和国を建設するにあたっては、無産階級のみならず、資本家や地主もすべて民族である。知識層も、宗教家も、資本家なども組織的ではないが働いている。我々の力量が、組織が強化され、緻密になればなるほど、彼らは分散した状態から組織に統一されるだろう。……朝鮮では、朝鮮的な進歩的新民主主義的政府が作られるべきである。……中国共産党はもっとも民主主義的だったから民衆が付いてきたのだ」と独自の政府の樹立とその基盤となる大衆主義とともに、中国を見習うことを口にしていた[256]。このような、そこでの大衆主義は、明らかに毛沢東の群衆路線に影響を受けたものであるが、ソ連軍政下においても担保しようとした国内建設の指導権、国際主義と愛国主義の両立論、人民共和国建設といったものや分派主義に対する批判などは、金日成ら朝鮮共産主義者たちの経験と世界観が表出したものであった。アームストロングが 1945 年から 50 年にかけての北部朝鮮・北朝鮮の体制構築過程を検討して評したように、そこは、「形式的にはスターリン主義であったが、内容的には明白な民族主義であった」[257]。

こうした民族主義的な自己主張は、分局が設置されてソウル中央に対する独自性が形成され、政権機関としての北朝鮮臨時人民委員会が創設された直後には、次のような形で展

位置付けを示す一つの象徴であるだろう。教育局長張鍾植「北朝鮮教育の当面課題」『人民』創刊号（第一巻第一号）、1946 年 11 月 28 日。前掲、『北韓関係資料集 13』20 頁。

[252] 「大衆は、未だ政治に無関心であり、自己自身の位置を知らず、自己の力を計画的に、組織的に使うことを知りません」。同上、24 頁。

[253] 前掲、『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①』4 頁。

[254] 金科奉『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日、19 頁。

[255] 前掲、『金日成将軍述、民族大同団結について』10 頁。

[256] 同上、10, 19 頁。

[257] 前掲、『北朝鮮誕生』386 頁。

開されていた。すなわち、「朝鮮の民主主義は、ロシア十月革命後の世界における反植民地・反帝国主義・反封建的民族解放運動とその運動を支援する世界無産階級の解放運動との関係から得た世界的経験と、三・一運動の挫折原因である朝鮮資本階級の変節、無産者を領導するものとして農民及び他の進歩的力量を組織できなかった国内経験を総合することにより、マルクス・レーニンの社会観から得た政治意識であり、朝鮮解放第一段階建設の指導的思想である。……朝鮮のための民主主義建設の目的は、１．完全独立の国家、わが民族の運命を我々の手で解決し、我々の自由選挙による国家機構を完成させるだろうし、如何なる国家民族の干渉も容認できない。……第二次世界大戦の軍事技術の驚異的な発展に怯み、朝鮮の軍事的将来を悲観し、伝統である事大思想と外力依存政策に固執して、軍事建設の意義を過少に評価するのは絶対に正しくない。我々は民族の自主独立を擁護する軍事的勢力を我々の手で建設するべきである」[258]。

要するに、ソ連を仰ぎつつ、歴史を自省し、それによって自らの進路を自らが切り開くものであると規定し、そのために事大と他力から脱却すべきと主張しているのである。もちろん、その後の展開は、ソ連軍の政治的介入や信託統治挫折後の対応、派閥対立的な権力闘争と粛清、党権確立以前の分断国家の建設によって、外勢であるソ連の影響を多大に受けざるを得なくなるが、事大の伝統や被植民地という歴史を顧み、民族の運命は自らの手で切り開くという事大の克服＝主体は、北部朝鮮における民族主義の出発点であり、それが建国までの北部朝鮮の政治過程に通底した。その実、建国直後にも金日成は、朝鮮戦争前夜、ソ連からの貿易や援助を切実に欲していたにもかかわらず、自国の従属的な地位を批判し、ソ連からの機械輸入の依存を正すよう要求した[259]。それは無論、ようやく自主独立国家を形成し、ソ連軍の撤収が終了して、一定の自己主張が内部へ向けてのみならず、外部へ向けても行えるようになったからである。このように、ナショナリズムと自国を顧みるべき言辞としての「主体」は、金日成が初めてその言葉を言及する以前に形となっていたのである。

第５節　小結

以上のように、「主体」の萌芽は、解放後の北部朝鮮における民族主義として、そして建国後の外勢への依存に対する反発として見出すことができるものである。その「主体」を構成する根源的な内容は、植民地期に朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」感情から生じ発展したものである。それは敷衍すれば、「日帝」の侵略と支配を恨の契機とし、それを引き起こした歴史、それに抗いきれなかった自国の憫然さ、それによって陥った自らや家族、愛する人、民族、国家の悲劇的境遇、自分に代わって抵抗した人びとの惨憺たる処遇などで形成される恨、これに対して醸成される故郷や民族への愛着、解放や独立に対する

[258] 前掲、「民主主義と朝鮮建設」6, 10, 22 頁。
[259] 『解放後四年間の民主建設のための北半部人民らの闘争』平壌・文化宣伝部、1949 年。前掲、『北朝鮮誕生』260 頁。

夢想、解放や独立のための団結を通じて表出される情、そして現況の原因が事大と依存にあると省察し、それを打ち砕くことが恨を解くことだとする思惟である。このような事大を克服し、解放・独立を達成することが恨を解くことになるという痛切な思いは、金日成ら国内外で抗日パルチザン闘争を展開した人びともまた、自己の革命経験を通じて体感したことであった。だが、解放後に訪れた軍政下の政治過程の中では、他力であることや事大を克服し、独立を達成することが極めて困難であった。とはいえ、そうした中でも事大の伝統や被植民地という歴史を顧み、民族の運命は自らの手で切り開くという民族主義は継承され、金日成もまた、その多くは自らの権力掌握の野心からだと思われるが、外勢を排して朝鮮人自身の国家の建設を主張した。このような主体を受容し共鳴する土壌、北部朝鮮・北朝鮮の指導者となった金日成の革命経験と解放後の政治的歩み、そして自国をよく知り、学び、そして自国の気質に合わせて教育を施し、自らの郷土と祖国を愛するという極めて素朴なナショナリズムと、国家建設において自国の実情や実績を顧みるべきだという主張が可能となった対内外的政治状況が合わさり、主体が主張されるに至った。そこでの主体は、事大を克服するための愛郷・愛国であるがゆえに、事大と対をなす「主体」でなければならなかったのである。

第 3 章　主体思想の形成と展開

第 1 節　問題の所在

北朝鮮はソ連軍政下で建国され、建国直後に中ソの了解と庇護を仰ぎつつ戦争を闘い、そしてようやく一定の自己主張が可能となった対内外的政治状況の中で、「主体」を口にした。その後、金日成は 1963 年 10 月に、ソ連のフルシチョフを「現代修正主義」であると初めて公式に批判を行い、自国はマルクス・レーニン主義の純潔性を守るとともに、それに依拠しつつウリ（我々）式の革命を進めるとした[260]。まるで「小中華」ならぬ「小マルクス・レーニン主義」を標榜したかの如くである。このように、ある特定の主義主張に立脚することを掲げながら、ソ連共産党の指導を受けることなく、何が我々式なのかということが提起される中で、1965 年 4 月に金日成は、「マルクス・レーニン主義の一般的真理と国際革命運動の経験を自国の歴史的条件と民族的な特性に合うよう適用」すること、また「革命と建設を独自に、自国の実情に合うように、自分の力で解決」すること、そして「他人への依存心を捨て、自力更生の精神を発揮し、自らの問題に対し責任を持って解決する自主的な立場」が主体思想であると、初めて主体と思想を結びつけ語り、それが我々式なのだと表明した[261]。さらに、1967 年 12 月に金日成は、主体思想は「我が党」の思想であるとし、「革命と建設を遂行するためのもっとも正しいマルクス・レーニン主義的指導思想」であり、「政府のすべての政策と活動の指針」であるとして[262]、一般的真理や革命経験を自国に合うよう「適用」するその最終的な判断・決定者が首領金日成であることを闡明にし、すなわち主体思想は金日成の思想であることを確立させた。

これ以降、現在に至るまで、北朝鮮では唯一イデオロギーである主体思想が、社会の全般を支配する原理として、構成員個々人の生活と思考方式を規定する価値判断の基準とされ続けている[263]。のみならず、金日成死去後、北朝鮮では「赤旗思想」、「先軍政治」、「先軍思想」、「強盛大国」など、思想や主義主張を冠する様々なスローガンが打ち出されてきたものの、それらはあくまで主体思想を継承・発展させたものであるに過ぎない[264]。加えて、金正恩政権に至り、「『党建設と党活動の指導的指針』すなわち党の指導思想」とされ

---

260 『労働新聞』1963 年 10 月 28 日付。

261 金日成「朝鮮民主主義人民共和国における社会主義建設と南朝鮮革命について」（1965 年 4 月 14 日、インドネシア「アリ・アルハム社会科学院」での演説）『勤労者』第 8 号、通巻 270 号、1965 年 4 月（下）、2-31 頁。

262 『労働新聞』1967 年 12 月 17 日付。

263 韓基壽『北韓主体思想の淵源と性格』韓国外国語大学校大学院政治外交学科博士論文、1992 年、1 頁。

264 2014 年 8 月 23 日に筆者が丹東市内において北朝鮮人男性に行ったインタビュー、2016 年 8 月 23 日に筆者が朝鮮社会科学院研究者に行ったインタビューに基づく。また「打倒帝国主義同盟結成 80 周年を迎えて」『歴史科学』平壌・科学百科辞典出版社、2006 年、4 頁の「我が党の先軍政治は、偉大な首領様の銃隊重視、軍事重視思想と路線を継承し、可変的な情勢の要求に合わせて深化・発展した我が時代の偉大な政治方式です」による。

た「金日成・金正日主義」も、そ「の名で引き継いだものは、強力な党軍関係、自給自足的な経済、強力な思想統制を維持しながら、軍事力の強化を公然と進めなければならないという信念である」という[265]。つまり、主体思想の継承であった。

本章は、こうした金日成の思想であり、党の指導思想で国家の政策と活動の指針でもある主体思想の形成と展開過程を辿り、その内容を明らかにする。従って、まずは主体思想の創始をめぐる問題について検討した上で、主体思想形成の背景となる主体概念について再検討を施す。これを踏まえて、主体思想の形成過程を時系列に追い、その構成内容を跡づける。そうした作業を通じて、なぜ主体思想が北朝鮮において必要とされたのかを明らかにしたい。

第 2 節　主体思想の起源

主体思想の起源、言わばその創始については、朝鮮労働党の公式的な説明と日本や韓国の研究者らが主張する「通説」とは食い違っている。通説については、序章第２節の（３）の（ｉ）で触れたが、北朝鮮の主張する 1930 年説は、あくまで北朝鮮政権の正統性と統治理念の独創性を確言する政治的な必要性により後日に創作されたものと見做し、主体が闡明化された 1955 年だとする[266]。但し、その他にも、主体思想という言辞が内外に初めて公にされた 1965 年であるとする説も有力であるし、その思想が金日成の思想であり、党の指導思想、国家の指導指針であることが明らかにされた 1967 年だとみる説もある[267]。さらに、主体思想が哲学原理を備えるようになった 1970 年とする説、思想としての発展に注視して、1972 年の「政治生命体」論の提示を起点と見なすべきであるという主張など様々である[268]。本節では、まず改めて主体思想の起源をめぐる朝鮮労働党の公式説明の妥当性を検討した上で、主体思想の起源について初歩的な考察を行うことにしたい。

朝鮮労働党は、金正日の『主体思想について』の一文を引用し、「首領さまは固陋な民族主義者と日和見的なマルクス主義者、事大主義者と教条主義者に抗して革命の新たな道を開拓なされ、闘いの過程で主体思想の真理を発見なされて、ついに 1930 年 6 月の卞倫会議で進行した共青及び反帝青年同盟指導幹部会議で主体思想の原理を闡明にし、朝鮮革命の主体的な路線を明らかにされ」たことを主体思想の創始であるとしている[269]。金正日もまた、「これが主体思想の創始と主体の革命路線の誕生を宣布した革命的事変でありました」

---

265 中川雅彦「金正恩体制の政治思想」中川雅彦編『国際制裁と朝鮮社会主義経済』アジア経済研究所、2017 年、45-46 頁。『労働新聞』2012 年 4 月 12 日付。

266 前掲、『北韓理解のハンドブック』、『主体思想の離反：支配イデオロギーから抵抗イデオロギーへ』、「主体思想の構造と政治的機能の変化」、「北韓政権の統治イデオロギー批判研究」など。

267 前掲、『現代北韓の理解』1995 年。

268 李・シンチョル「主体思想と黄長燁の人間中心哲学」『韓国論壇』2010 年 12 月、40-57 頁。

269 『永生不滅の主体思想』平壌・朝鮮労働党出版社、1986 年、21 頁。

と述べている[270]。北朝鮮ではさらに加えて、金日成の 1920 年代における革命活動の起点となる、マルクス・レーニン主義を指導的指針とした最初の革命的青年組織である「打倒帝国主義同盟（トゥ・ドゥ）」結成（1926 年 10 月 17 日）」以来の革命経験、また朝鮮共産党内の宗派分裂を教訓とする朝鮮革命の実践的経験に基づいて、卡輪会議において「朝鮮革命の進路」と題する報告を行ったことを主体思想の創始であるとする[271]。

つまり、主体思想の形成は、金日成が抗日闘争や革命活動の意識に目覚め、具体的行動を起こした「打倒帝国主義同盟」という組織の結成に淵源があり、その時期の朝鮮国内外における朝鮮人共産主義者たちの党争とでも言うべき主導権争いに対する反面教師的な教訓によって導かれた報告、すなわち無産者革命を行うための日本帝国主義の打倒と朝鮮の解放・独立、そして朝鮮に社会主義・共産主義社会を建設して、世界革命をも遂行するという主張に始まると言うのである[272]。

確かに、前章で検討したように、金日成の革命経験は、「日帝」への憎悪とそれを打破し克服するための解放・独立の意識を強めさせると同時に、他者の手の中で生き、事大を常とすることから脱却しなければならないという自覚を促し、解放・独立において他力や事大を克服することが北部朝鮮・北朝鮮の建国過程で通底されていたことは事実であろう。しかし、それに基づいて主張されたのは「主体」であって「主体思想」ではない。のちに検証していくように、「主体」という言辞に初めて金日成が言及した際の主体の骨子とは、愛郷・愛国的なナショナリズムと自国の実情や実績を顧みるべきであるという自主的姿勢であった。そこから、主体が思想という政治・社会的見解、または体系的なまとまりを有する意識の内容へと昇華するためには、従来マルクス・レーニン主義の参照体系としてきたソ連共産党との離反、独自の社会主義を目指し、路線を形成するための現実政治との絡みという段階過程が必要であった。従って、主体思想の創始をその字義通りに「物事の始まり」であると捉えると、主体思想の創始は、その萌芽となった 55 年の「主体」の言及時か、従来の参照体系から離脱した 63 年の時点とするのが自然であろう。

とはいえ、韓国の研究者らがしばしば指摘するように、北朝鮮の主体思想の創始に関わる主張が「政権の正統性と統治理念の独創性など政治的な必要により、1970 年代に創作」されたもので、「虚構」だと見なすのもやや乱暴な見解である[273]。なぜなら、主体思想は金日成の思想であることを前提として、その創始が思想形成の始発点＝起源だと考えるなら、金日成の革命活動の始点を創始とするのも、あながち間違いではないからである。主体思想は誰の思想で、誰が創始したのかという唯一思想的な観点に立つならば、朝鮮労働党の公式見解は首肯できるものであるし、主体思想という特定の考え方がいつ創始されたのか

---

[270] 金正日『主体思想について』平壌・朝鮮労働党出版社、1985 年、16 頁。
[271] 主体思想研究所執筆、哲学法学図書編集部編『偉大な首領金日成同志の主体思想』平壌・社会科学出版社、1975 年、2-37 頁。また、前掲、『北韓主体思想の淵源と性格』10 頁。
[272] 金日成「朝鮮革命の進路―卞倫で開かれた共青及び反帝青年同盟の幹部会議で行った報告」『金日成著作集 第 1 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1979 年 4 月、 1 -11 頁。
[273] 前掲、『北韓主体思想の淵源と性格』2-3 頁。

という点に注視すれば、ここで主張するように、55 年か、63 年なのではないかと言えるだろう。それでは、主体思想という特定の考え方はどのように形成されていったのだろうか。

第３節　主体思想の形成

（１）「主体」が言及される以前の主体（1945～1954 年）

「主体」という言辞は、金日成の 1955 年 12 月の演説の意義や主体思想が内包する言意にそくして言えば、明らかに「事大」の対概念としての意味を有している。しかし、古田博司が主張するように、「『主体』という語は、朝鮮では特別な意味を持っており、『客体』の反対語というよりは『事大』の反対語として登場してきた」[274]とは必ずしも言えない。例えば、解放後から 1955 年 12 月の演説までにも、主体という言葉を金日成やその他の党幹部が用いた事例を見つけ出すことができるが、そこでの主体は、客体の反意語である場合が多かったからである（太字は筆者）。

「北朝鮮において、北朝鮮共産党と朝鮮新民党が勝利の下に労働党へと合党されたのは、個々の党員が現実に適合し、客観的条件について**主体**を適合発展させながら、最も現実的で弁証法的に国内外の客観的条件を認識することができたからであると指摘できる」[275]。

「我が党は、主権を握ったその日から、社会発展の合法則性的要求により、すでに解放された北半部で、革命と建設を最大限に促進すると同時に、強力な**主体**的革命力量を作り上げることにより、北半部を朝鮮革命の頼もしい基地に転変させるために闘争してきた」[276]。

「我々は、広範な群衆を集結させるために、我々の思想を単一化させるべきである。これが、**主体**の力量である」[277]。

「当時の環境下で、特に**主体**的な落後性から犯した過誤を私とともにした同志らも、この歴史的な全党大会で、勇敢かつ徹底した自己批判をするとともに、実践過程において過酷な闘争を通じて落後した思想的な残滓を完全に清算することにより、党に対して唯一的に、統一的に、犠牲的に労力を捧げることが最も正しいことであると提議します」[278]。

「朝鮮人民らは、長久な歳月を通じて、封建領主と悪辣な日本帝国主義から自らの主権を取り戻すために、自己の生活と祖国の運命を自らの手で解決するために、血塗られた闘

---

[274] 古田博司「『チュチェ哲学』の創始」小此木政夫編著『北朝鮮ハンドブック』講談社、1997 年、223 頁。
[275] 『北朝鮮労働党創立大会会議録、第二次全党大会会議録』56 頁。
[276] 同上、3 頁。
[277] 同上、98 頁。
[278] 同上、160 頁。

争を続けてきました。しかし、この歴史的課業は、朝鮮人民の主体的力量だけでは、解決できず、世界の民主主義の主力部隊である偉大なソ連軍隊の英雄的闘争で、初めて解決されました」[279]。

「しかし、三・一運動も、ついに日帝の野蛮的な虐殺と、我が主体力量の弱さで失敗に終わったが、この運動は、日帝に甚大な打撃を与え、我が民族に新たな民族的覚醒を促しました」[280]。

これらで語られている「主体」や「主体的」という言辞には、「大に事える」という意味の反対概念は窺えない。むしろ、自己、我々、主観、自覚、意志などの「客体」の反意語に置き換えられる言葉として「主体」が語られている。つまり、1955 年 12 月の演説において「主体」は、「事大」の対概念としての意味を付与されることになったのである。

（2）1955 年における「主体」とその意義

そうした観点から今一度、1955 年 12 月に金日成が行った演説、「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて」をやや子細に検討してみよう[281]。まず、この演説が行われた背景には、同年春に開催されていた朝鮮労働党中央委員会四月全員会議がある。この会議では、対外的には同年 2 月にソ連のマレンコフがフルシチョフとの権力闘争に敗れ、その影響が国内に波及するのを意識しつつ[282]、国内的には朝鮮戦争後の経済復旧路線に対するソ連派・延安派との党内対立に身切りをつけて、朝鮮の革命段階を再規定し、マルクス・レーニン主義を朝鮮の具体的な現実と合わせて研究することを党の宣伝活動の基本方向とすることを取り決めた（第 1 章第 4 節）[283]。これを受けて教条主義に反対する朝鮮労働党員の階級教養事業が思想闘争として展開され[284]、それを踏まえての宣伝煽動幹部らに対する 12 月の演説となったのである。

そこで金日成は、この演説の時宜に関して「主体を立てる時となった」と指摘している。「時となった」というのは、言うまでもなく望んでいたことが適切なタイミングで訪れた

---

279 『北朝鮮道市郡人民委員会大会』（第三日）1947 年 2 月 19 日、85 頁。

280 朝鮮人民義勇軍本部文化宣伝部発行『祖国の統一独立と自由のために正義の戦争に総決議しよう！』1950 年 7 月 10 日、6 頁

281 以下の同演説からの引用は、金日成「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて―党宣伝煽動幹部たちの前で行った演説（1955 年 12 月 28 日）」『金日成著作集 第 9 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1980 年、560-585 頁。

282 小此木政夫「社会主義革命の理論化」前掲、『北朝鮮ハンドブック』160-162 頁。

283 金日成「すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために―我が革命の性格と任務に関するテーゼ（1955 年 4 月）」前掲、『金日成著作集 第 9 巻』245-260 頁。

284 小此木政夫「『主体』（チュチェ）概念の登場」前掲、『北朝鮮ハンドブック』162-164 頁。

ということを意味している。対外的にはスターリン死去後、マレンコフの新経済政策を掲げてソ連派・延安派が勢いづいたものの、マレンコフが失脚し、新たにフルシチョフが登場してその影響力を極力押さえ込みたいと考えていた時期、国内的には戦後復旧計画の実績をもって朝鮮の社会主義建設を進めたいと考え、加えて先送りにしていた朴憲永の裁判を実施し、彼に死刑及び全財産の没収を言い渡してこれをソ連・中国に認めさせた時期であった。

しかし、国内の客観的な情勢としては、金日成の党権が確実に固まっていた時期ではなく、党員に対する階級教養事業が円滑に進んでいるわけではなかった。従って、金日成は、「朝鮮文学運動の歴史を否認した朴昌玉」や、「ソ連に行って来てから、ソ連では国際緊張状態を緩和する方向であるので、米帝主義に反対するスローガンを取り下げるべきだと言うようになった朴英彬（パク・ヨンビン：筆者注)」、また「党中央委員会第 4 次全員会議で、党員が 60 万人を超過しなかったのに、党の門戸を閉じるよう主張した許可誼」をやり玉に挙げて、朝鮮の現実に基づいて問題を判断しないのは、主体がないからだと批判した。ここでの主体には明らかに事大への批判が含意されている。さらに、「彼らは党の事業において主体となる朝鮮革命を良く知らず」、「機械的にソ連の真似をしようとしたことから、教条主義を犯し」、「マルクス・レーニン主義を創造的に適用」できなかったのだと断じた。その上で、群衆と党との関係は、「群衆を離脱した党は、まるで水を離れた魚と同じ」であると平易に述べて、それゆえ階級教養事業を進めるよう要求した。

そうした一方で、建国直後に戦争を行い、廃墟となった北朝鮮では、革命のための内部糾合を図るとともに、戦後復旧計画の成果に基づき、国内建設を進める必要性に迫られていた。国内建設は、単に経済活動のみならず、中国の群衆路線に準え、大衆動員を図るために、自国の歴史や文学、文化、風俗・風習などの教育を通じて、自らを取り戻す作業と過程が必要だと自覚された。だが、現実は、「多くの活動家は、我が国の歴史を知らないため、その優れた伝統を訪ねてそれを継承し、発展させようとしません」。従って、「学校でも、朝鮮歴史の講義をおろそかにする傾向があります。戦時中の中央党学校の課程案には、世界史は 1 年に 160 時間も割り当てられていましたが、朝鮮史には極めて少ない時間しか配分されていませんでした」。また、「人民学校に行ってみると、写真が掲げてありましたが、マヤコフスキー、プーシキンなど、すべて外国人のものばかりで、朝鮮人は 1 人もいませんでした」。さらに、「小冊子を印刷する際も、目次を付けるのも、他の者を真似て奥付にしようとする。これは、朝鮮の人びとの好みに合わない」。「教科書を編纂するにも、我が文学作品から材料を得るのではなく、他のものを引き写す」。「『プラウダ』紙が『わが祖国の一日』という題目を付ければ、我が『労働新聞』もまた、『わが祖国の一日』という題目を付ける」。「朝鮮の女性には、朝鮮の衣服があるのに、それを捨てて、合わない服装をしている」という有様であった。従って、このような社会一般に蔓延した風潮を、他国を憧憬し模倣する教条主義、与えられた仕事に対してなおざりとなり、うわべだけで取り繕う形式主義として論難し、自らを知り、愛郷・愛国心を育てた上で、すべての事業に対

して自ら発信で事にあたることを主体として確立せよと主張したのである。それをやや抽象的に表現したのが 12 月の演説において比較的よく知られた次のような一文である（太字は筆者）。

「革命的真理――マルクス・レーニン主義の真理を体得することが重要であり、その真理を我が国の実情に合うように適用することが肝腎なのです。……必ずソ連式が良いとか中国式が良いとか言うけれども、もう我々式を作る時となったのです」。

「全ての問題に深く入り込めず、**主体**のないことが思想事業における最も重要な欠陥です。……わが党の思想事業における**主体**とは何でしょうか。朝鮮の革命こそ、わが党の思想事業の**主体**なのです。だから、全ての思想事業は、必ず朝鮮革命の利益のために服従させなければなりません。我々がソ連共産党の歴史を研究するのも、中国革命の歴史を研究するのも、そしてマルクス・レーニン主義の一般的原理を研究するのも、全て我々の革命を正しく成し遂げるためなのです」。

それゆえ、ここで主張されている主体は、確かに事大に対する批判が含意されているものの、それだけではなく、客体の反意語に置き換えられる意味も依然として含み込まれている。なぜなら、先述したように、主体は教条主義・形式主義を一掃するとともに、民族主義的立場を含意しているからである。要するに、1955 年 12 月の党の思想事業での「主体」とは、朝鮮人民の朝鮮人民による朝鮮人民のための朝鮮革命の主張であった。そのために、「主体」は、自らが事業担当者であるという自覚、その意識、行動など、客体の反意語である意味に加え、これを阻害している事大的意識の排除、そして対内外において大国に無条件に従わないこと、すなわち自主的な立場として主張されたのである（表１）。そこに 12 月の演説における「主体」の意義がある。

＜表1＞「55 年の『主体』」（主体思想につながる「主体」の初出）

主体＝他国を憧憬し、模倣する教条主義に反対する／自らに与えられた仕事に対してなおざりとなり、うわべだけで取り繕う形式主義に反対する／朝鮮の歴史や伝統を知り、地理を知り、人民の風俗を知る／郷土と祖国を愛する／朝鮮の革命を正しく行うために、ソ連・中国の経験、マルクス・レーニン主義の原理を学び、これを自国の実情に合わせて創造的に適用する／愛国主義と国際主義は両立するものであり、愛国主義に基づく自国の革命事業は国際革命事業の一部分である

出所：筆者作成。

（３）主体の展開（1956～1963 年）

思想事業において発出された主体の内容は、翌年すぐに国内経済建設の事業でも展開さ

れることとなった。戦後復旧計画に基づく、3か年計画（1954-56年）では、基本的な経済路線をめぐって、金日成を中心とする重工業優先路線とそれに反対する軽工業路線との対立が生じていたが、反対派の主張は、ソ連をはじめとする東欧社会主義ブロック、中国などからの援助を人民生活の向上に用いず、重工業建設に使用することに対する不満であった。これに対して金日成は、重工業の発展なしには自立経済を形成することはできず、重工業の発展のためには、「より多くのコメと、機械、鋼材、電気、石炭を必要とする」のだと理解を求めた[285]。また、朝鮮の現状を直視するとき、「他の国々は、機械化、電気化、自動化の方向で進んでいるが、我が国では未だ手工業的な労働から脱し切れていない」ので、人民生活の向上に寄与できていないと吐露した[286]。従って、このような朝鮮の客観的条件下での反対派の主張は、「具体的な現実と勤労者たちの生活の要求から生み出されたものではなく、自らの主観によって、机上で作成しようとする経済知識のない形式主義的な思想」に起因すると論難した[287]。それゆえ、「ただ重工業の優先的な成長に基づいてこそ、軽工業を含むすべての人民経済を素早く発展させ、人民生活の水準を高めることができ」、これこそが「基本的な経済理論」だと主張した[288]。こうして主体は、朝鮮における基本的な経済理論を支える概念を帯びることになった。

そうした中で金日成は、「地方農民らは、ソ連、中国の経験を踏まえて、同じ山間地域であることを良く理解している」と語り[289]、朝鮮の具体的な実情に合わせて生産活動を行う人民を評価した。これ以降、生産部門では、教条主義や形式主義の誤りを指摘するよりは、提起される諸問題に対して金日成自らの指導下に、自国の実情に合わせて遂行される事柄を賞賛する傾向となった。例えば、重工業優先政策により、1958年には国産の28馬力トラック、貨物自動車が生産されたとアピールされた[290]。また、経済建設とともに進められた農業協同化が「勝利にうちに完成し」、「これは我が国の農村に起こった偉大な革命であり、我が党の農業政策の輝かしい勝利」だとした[291]。

こうした背景には、朝鮮戦争後の復旧計画が順調に進み、人びとの生活状況が目に見えて改善されていったことに加え[292]、1957年中には、ソ連派や延安派といった主要な政治勢力の粛清を終え、これをソ連・中国にも認めさせることによって、金日成が党の権力をほぼ手中に収めていたことが考えられる。金日成はここにおいて、主体を党のあらゆる事業

---

285 金日成「朝鮮労働党第三次大会中央委員会事業総括報告」『金日成著作集 第15巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1981年、293頁。
286 同上、325頁。
287 前掲、「朝鮮労働党第三次大会中央委員会事業総括報告」291頁。
288 同上、295頁。
289 金日成「平安北道党団体らの課業 - 平安北道党代表会での演説」『金日成著作集 第13巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1981年、141頁。
290 黄長燁『私は歴史の真理を見た』ソウル・ハンウル、1999年、第57回。
291 金日成「我が国における社会主義的農業協同化の勝利と農業の今後の発展について―全国農業協同組合大会で行った報告」前掲、『金日成著作集 第13巻』20-25頁。
292 前掲、『私は歴史の真理を見た』56回。

に当てはめて主張することの自信を深めたものと思われる。

他方この時期、国際関係においては、社会主義陣営間におけるとりわけ中ソのイデオロギー論争が激しくなりつつあった。金日成はその論争に対して暫く静観しつつ、「我々は主体を一層高めるべきだ」と国内建設に注力することを喚起した[293]。こうして、1959 年 3 月には、「千里馬運動」を大々的に宣伝し、経済のみならず文化建設においても自主的な路線が必要だと力説した[294]。千里馬運動は、単に増産を達成するのみならず、工業・企業所・農場などの生産単位の国有化・協同化の実績と、経済部門における行政官僚の管理から党の官僚による管理への再編を踏まえて、作業班・人民班単位で共産主義思想教養を行い、人びとを集団主義的に改造して、その上で生産性を向上させることに意図があった[295]。ちなみに、この千里馬運動の基になった考えは群衆路線である。群衆路線は、中国共産党の用語であり、「党が群衆の中に入り、群衆と苦楽を共にしながら、群衆を思想的に教養し、ひとつに団結させ、群衆の力によって革命課業を成す」というものである[296]。金日成は、党幹部らに対して、「群衆の中に入り、苦楽を共にしながら、群衆から学び、教え、党の政策を貫徹するよう教養し」、人民を組織的に動員させることを要求した[297]。金日成は、自ら青山里という農村に赴き、こうした現地指導を行ったことから、この方法を「青山里方法（方式）」と名付けた。また、この方法を工場・企業所にも応用し、同様に「大安の事業体系」と名付けた[298]。こうした大衆運動方式の導入は、主体を一層高めるための自主的な路線であるとされ、経済・文化部門のあらゆる分野へ波及・拡大した。

だが、こうした国内での展開は、ともすれば自らが否定する中国の模倣を指摘される恐れがあった。従って、金日成は、「大国を無条件に崇拝し、自らを蔑視する事大主義と、大国を機械的に模倣する教条主義に反対し、具体的な実情に合わせて、マルクス・レーニン主義を創造的に適用する」ことを慎重に繰り返した。すなわち、「ソ連や中国を無批判に崇拝するのではなく、ソ連の『帝国主義との平和共存路線』や『個人批判』で代表される修正主義でもなく、中国で行われた『大躍進』でもない、朝鮮の実情にあわせた『重工業を優先に発展させながら軽工業を同時発展させる』、経済路線とその実践としての『千里馬運動』、『大安の事業体系』こそが主体」になると論じた[299]。何が主体になるかを判断するのはもはや金日成の領分となった。

またこの時期、金日成総合大学の哲学講座長として、金日成が主張する主体の内容を理論的に支え、その後同大学の総長となり、主体思想の内容を整理するのに尽力した黄長燁によれば、「北朝鮮において事大主義に反対する論理としては、マルクス主義を創造的に適

---

293 同上。
294 前掲、『私は歴史の真理を見た』第 61 回。
295 同上。
296 前掲『私は歴史の真理を見た』第 64 回。
297 金日成『金日成著作集 第 19 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1985 年、507 頁。
298 前掲、『私は歴史の真理を見た』第 65 回。
299 同上。

用するということより、大国からの干渉と支配に反対し、主体である朝鮮人民の民族的利益を固守するものとして理解するほうが正しいと思った」という。従って、黄は、「マルクス主義を具体的かつ実情に合わせて適用する創造的立場とともに、事大主義に反対し、自主的立場を打ち立てることを主体思想の基本要求の一つに加えた」とのことである[300]。後日、金日成は、「自主的立場と創造的立場を基本政策に採用し、『思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛』を基本路線として定式化させた」。この基本的な内容は、黄から見て、金日成が当時の北朝鮮の実情に合わせて案出したものであるという[301]。加えて金日成は、黄から見て、「体系的な理論を重視した」人物で、「実践に必要な理論をそれなりに構成できる能力も持っていた」という。例えば、「党事業は人との事業である」、「教育事業をすべての事業に先立たせて行うべきである」などは、金日成の信念であったという[302]。

ところで、1960 年代に至ってより顕在化した中ソ対立は、北朝鮮がその影響から大きく離脱する契機となった。1961 年 5 月 30 日、ソ連の第一副首相コスイギンが北朝鮮を訪問した。コスイギンは、「ソ連訪朝団歓迎平壌市民大会」で、西側との平和共存路線を強調しつつ、北朝鮮の戦後復旧計画の成果的な達成を評価し、さらに韓国で発生したクーデター（4・19 革命）に関連して、「朝鮮民主主義人民共和国の社会主義的獲得物」を守るために、ソ連は「如何なる援助も提供する用意がある」ことを言明した[303]。だが、実際には、中ソ対立の深刻化に伴う外国援助の減少により、北朝鮮の国家予算の歳入に占める外国援助のシェアは、59 年が 4.9%、60 年が 2%、61 年以降は 0%であると公表された[304]。

また、北朝鮮国内では、「外部から資本主義的な影響が侵入し、黄海南道の農村で地主らは、昼は他の人々と農事を行う振りをして、夜は隠れて南朝鮮放送を聞き、農民の間に反動的な噂をまき散らしている」ことが報道された[305]。金日成もまた、平和共存路線によって革命が弛緩する状況を危惧し、国際共産主義運動の一部では、「帝国主義の侵略的本性が変質し、社会主義は帝国主義と仲良く付き合えると主張し、議会闘争の方法により資本主義から社会主義へ平和裏に移行することができると騒いでいる」と指摘し、かかる主張は、「社会革命の一般的原則であるマルクス・レーニン主義党の領導とプロレタリア独裁を否認する」ものであると批判した。その上で、「兄弟国との団結を強化するために努力はしても、革命を辞めたり、修正主義の要求を受け入れたりすることは絶対にな」く、「自力更生は、共産主義者たちの高尚な革命精神」であると、暗にソ連を突き放す主張を行った[306]。

---

300 同上。
301 同上。
302 同上。
303 前掲、『北朝鮮ハンドブック』、185 頁。
304 同上、198 頁。
305 金日成「党組織事業と思想事業を改善強化するについて―朝鮮労働党中央委員会第 4 期第 3 次全員会議拡大会議での結論（1962 年 3 月 8 日）」『金日成著作集 第 16 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1984 年、313 頁。
306 同上、329 頁。

すなわち、革命を遂行するための政治路線の主体的な固執を表明し、政治の目的は経済の発展にあっても、政治方向を根本的に変えるような経済のための政治はないことを主張したのである。

こうした態度に加えて、1962 年 12 月の朝鮮労働党中央委員会第四期第五次全員会議では、人民経済の事業総括と発展計画の討議と並行して、国防力の強化が提起され、全人民武装化、全国土要塞化、全軍現代化、全軍幹部化の四つを骨子とする「四大軍事路線」が採択された[307]。そこでは、人民経済の発展に支障が生じても、国防を強化することが自主的な路線を歩む上で必要と認識されたのである[308]。この背景には、1961 年 5 月の韓国における軍事政権の成立（5･16 革命）とこの政権に対する米国の支持、同年 9 月のいわゆる「金・大平メモ」による日韓国交正常化妥結の蓋然性の高まり、そして翌年 10 月のキューバ危機におけるソ連の威信低下による北朝鮮の危機意識の醸成であった[309]。

このような過程を経て、1963 年 10 月には、金日成がソ連のフルシチョフを「現代修正主義」であると初めて公然と批判を行い、ソ連と対峙するとともに、自らこそがマルクス・レーニン主義の純潔性を守り、ソ連とは別の独自の革命へと進み出ることを公式に宣言したのである[310]。この時点で、金日成により述べられた「主体」は、思想事業のみならず、すでに経済・文化建設の基本的な指針、また政治・軍事路線における自主的な立場を内容として含み込んでおり、さらに何が主体なのかを決定づけるのも金日成の領分となっていた。言い換えれば、従来自国の社会主義建設におけるマルクス・レーニン主義思想の参照体系としてきたソ連共産党と袂を分かち、「主体」が一定の充実した内容を含み込んだこの時期、これを包括し、特定の思考方式として提示する必要性が生じていたのである。

（4）「主体思想」の登場（1963～1972 年）

これ以後、北朝鮮では、国内の各分野において成し遂げられた実績をもって、主体的な思想の成果であるとする概念が登場した。この際、主体的な思想とは、「すべての人びとが朝鮮革命のために服務する思想」という抽象的なものであった[311]。それは、農業問題に始まり、南朝鮮革命における革命勢力の問題、同盟組織の問題、そして人民経済問題の順に言及されていった[312]。

---

307 前掲、『北朝鮮ハンドブック』206 頁。
308 『労働新聞』1962 年 12 月 16 日付。
309 前掲、『北朝鮮ハンドブック』208 頁。
310 注 260 に同じ。
311 同上。
312 金日成「我が国における社会主義農村問題に関するテーゼ―朝鮮労働党中央委員会第四期第八次総会での採択（1964 年 2 月 25 日）」『金日成著作集 第 18 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1982 年、195-242 頁。同「祖国統一の偉業を実現するために革命勢力を極力強化しよう―朝鮮労働党中央委員会第四期第八次総会での結語（1964 年 2 月 27 日）」同上、246-266 頁。同「社会主義労働青年同盟の任務について―朝鮮民主青年同盟第五回大会で行った演説（1964 年 5 月 15 日）」同上、307-334 頁。同「勤労者団体の活動を改善、強化す

そうして、1965 年 4 月 14 日、金日成はインドネシアの「アリ・アルハム」社会科学院で講義を行い、「主体思想」を初めて口にした。とはいえ、ここにおいて主体思想という言葉で言及されたのは 1 度のみであり、それも「自国の具体的な環境と条件の下で革命闘争を行い、それを通じて国際革命運動の経験を豊かにして、この運動の一層の発展に寄与する。**主体思想**は、このような共産主義運動の原則に合致するものであり、そこから直接生まれ出るものである（太字は筆者）」という文脈での言及であった[313]。

この講義は、構成・内容的に 5 部に分かれており、第 1 部の「共和国北半部における社会主義建設の発展過程について」では、5 か年経済計画（1957-61 年）の成果が誇られ、これによって社会主義工業・農業国に発展し、それに続いて現在進行中の 7 か年経済計画（1961-67 年）が順調に達成されれば、社会主義的工業国となり、自立的民族経済の体系が整うであろうことを主張している。第 2 部の「社会主義制度の樹立について」では、農業協同化と資本主義的（私営）商工業者の社会主義的改造が完了し、社会主義的生産関係が築かれ、基礎的な社会主義制度が打ち立てられたことを披瀝している。第 3 部の「社会主義経済建設について」では、マルクス・レーニン主義党が政権を握り、人民生活の物質的・文化的福祉に責任を持つことになったことから、重工業を優先的に発展させ、併せて軽工業の発展、農村問題、民族幹部の要請に力を注ぎ、国家の経済生活を自力で運営する経済的・文化的基礎を築いたことを主張している。第 4 部の「主体を確立し、大衆路線を貫く問題について」では、マルクス・レーニン主義の一般的真理と国際革命運動の経験を自国の歴史的条件と民族的な特性に合うよう適用し、他人への依存心を捨て、自力更生の精神を発揮し、自らの問題に対し責任を持って解決する自主的な立場を貫き、革命と建設を独自に、自国の実情に合うように、自分の力で解決したがゆえに、社会主義革命と建設において勝利、成果を得ることができたことを誇っている。そして、第 5 部の「南朝鮮革命について」では、南朝鮮が米帝国主義の植民地に陥っているという現状とそれによって引き起こされている南朝鮮での人民の闘争を披瀝した上で、南朝鮮革命に勝利するためには 3 つの革命力量が強化されなければならないことが主張されている。

このように概観してみると、この講義の意義は、主体思想が初出したということよりも、55 年 12 月以降において一定の充実した内容を含み込んできた「主体」の集大成的な内容整理が施されていることであろう（表２）。このことについて、金日成は端的に、「思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛」という言い方で概括している。つまり、4 つの主要事業の中で、「主体」的に取り組んできた方法論、その背後にある思惟、そこで挙げてきた成果、そして今後の方針を「主体を打ち立てる」という言葉で括り、それが「わが党が一貫して堅持している立場である」ことをとりわけ対外的に示したのがこの

るために―朝鮮労働党中央委員会第四期第九次総会での結語（1964 年 6 月 26 日）」同上、375-380 頁。同「指導的幹部の党性、階級性、人民性を高め、人民経済の管理運営を改善することについて―朝鮮労働党中央委員会第四期第十次総会での結語（1964 年 12 月 19 日）」同上、493-520 頁。

[313] 注 261 に同じ。以下の引用も同様。

講義であったと言えよう。

＜表2＞「65 年の『主体思想』」(「主体思想」の初出)

主体思想＝自国の具体的な環境・条件下で革命闘争を行う中で生まれ出るもの＋国際革命運動の豊かな経験を積み、その運動の発展に貢献することで生まれ出るもの
主体思想における「主体」：革命と建設を独自に、自国の実情に合うように、自分の力で解決／マルクス・レーニン主義の一般的真理と国際革命運動の経験を自国の歴史的条件と民族的な特性に合うよう適用／他人への依存心を捨て、自力更生の精神を発揮し、自らの問題に対し責任を持って解決する自主的な立場
主体思想の構成要素：思想（主体）＋政治（自主）＋経済（自立）＋国防（自衛） **思想での主体**…マルクス・レーニン主義の純潔性を守る（修正主義に反対する）／自国の現実を研究し、分析し、独自に自己の政策を規定する（事大主義・民族虚無主義に反対する）／他国の経験には批判的な態度で臨み、自国の実情に合うように改造し、変形して取り入れる（教条主義に反対する）／教条主義を通して修正主義が侵入してくることに警戒する／党の路線と政策でしっかり武装し、党の意図通りに、党の政策を研究し、活動し、政策を貫くようにする／自国の革命伝統と文化の伝統を主とする（民族的自負心と自主意識の高まり） **政治での自主**…（革命的）大衆路線／人民大衆を信頼し、それと相談し、その力と英知を動員する／大衆路線貫徹のための活動家の活動方法と作風を改めるために、官僚主義をなくし、大衆の中に入り、話し合い、力と知恵を求め、動員する方法を身に付ける（青山里方法・大安の事業体系）／広範な人民大衆を目覚めさせ奮い立たせるために、政治活動が重要／政治活動は、党の政策を徹底的に解説し、浸透させ、実践方法を討議させ、自覚と熱意を持って政策を貫かせる＋共産主義教育を党政策教育・革命伝統教育と結びつけて行う／各階層の大衆を教育し、改造して、党に団結させる（千里馬運動として具現） **経済での自立**…自力更生の原則（自らの労働と国内資源）／自立的民族経済建設路線／外部の支援は副次的なもの／他国の経済自立、総合発展を阻み、その国の経済を自国に縛り付ける大国主義に反対する／自己の技術、資源、幹部、人民の力によって経済を発展させる／対外貿易は有無相通 **国防での自衛**…言及なし

出所：筆者作成。

さらに加えて、この講義では、「主体を打ち立てることとともに、もっとも重要な問題の一つであったのが、大衆路線を貫徹することであった」と述べている。国内建設においては、対外的な援助を受けたのも事実であるが、あくまで「戦後復旧建設において決定的な役割を果たしたのは自分自身の力であった」ことを強調している。ここには、金日成の大衆路線であり、「すべての社会の主人は人間であり、人間がすべてを決定する」というのち

の主体思想における哲学的概念の萌芽が見られる。彼はさらにこの演説の中で、「人民大衆の創造力を余さず動員し、彼らの熱情と創発性と才能を全面的に発展させることが重要であることを認め、すべての活動で革命的大衆路線を堅持する」と述べたのである。

こうした大衆路線は、実践的には千里馬運動で展開されていた。金日成は、引き続き大衆路線を標榜しつつ、そこで展開された共産主義思想教養による人びとの集団主義的な改造が円滑に進み、併せて増産が達成されていることに自信をつけ、自らの大衆路線に「人民大衆が革命と建設の主体である」という意味を付与した。前出の黄長燁もまた、千里馬運動で代表されるこの時期の大衆路線に関して肯定的に評価している。彼は、この時期の主体思想（厳密に言えば、この時期は未だ主体思想ではなく、「主体を打ち立てる」という言葉で括られた指導指針：筆者注）は、政治路線と政策を決定するにあたり、事大主義と教条主義の間違いを克服し、人民大衆の積極性を導くことで一定の成果を果たしたと述べ、5～6 年ほど続いたこの時期を、北朝鮮あるいは主体思想の「黄金時代」と評している[314]。

他方この時期、北朝鮮を取り囲む社会主義陣営間の状況は、中ソ対立の影響を受け、様々な形で対立が鮮明化していた。1966 年に中国は、文化大革命を支持しない金日成を「修正主義者」であると非難した[315]。これに対して金日成は、「共産党及び労働党の相互関係は、完全な平等、自主、相互尊重、内政不干渉、同志的共助などの原則に基づいている。共産党及び労働者党間に如何なる特権的党もあり得ない。大きな党や小さな党はあっても、目上の党や目下の党、指導をする党や指導を受ける党はあり得ない」と述べるとともに、ソ連の「右傾修正主義」と中国の「左傾冒険主義」のすべてに反対し、自主的な革命路線を堅持するという自らの主体を強調した[316]。また、同年 10 月には、ベトナム戦争下にあった状況を念頭に、「ベトナム問題の主人は、ベトナム労働党である」との比喩を用いて、独自の革命路線を進めることの正当性を示すとともに、自らの「自主独立外交」路線を定式化させた[317]。さらに、同年 12 月の第二次朝鮮労働党代表者会では、定式化された「自主独立外交」路線について、とりわけ内政不干渉、相互尊重、互恵平等の原則は、ソ連・中国などの大国からの路線の押し付けを拒否するものであると確言された[318]。そうして、金日成は、中国の文化大革命に対して反対であると明確に表明した[319]。

このようにして、「主体を打ち立てること」の内容に、「自主独立外交」という対外関係における自主性も包含されることとなった。そして、国内においては、1967 年 5 月 4 日に秘密裏に開催された党中央委員会第四期十五次全員会議で国内パルチザン系の甲山派を粛

---

314 前掲、『私は歴史の真実を見た』44 頁。
315 徐大粛『金日成―思想と政治体制』御茶の水書房、1992 年、217 頁。
316 「自主性を擁護しよう」『労働新聞』1966 年 8 月 12 日付、51-55 頁。
317 「現情勢と我が党の課業」『労働新聞』1966 年 10 月 6 日。福原裕二『戦後北朝鮮の対日「自主独立外交」に関する研究』広島大学大学院国際協力研究科博士論文、2004 年 3 月、100 頁。
318 前掲、『北朝鮮ハンドブック』213 頁。
319 前掲、『私は歴史の真実を見た』74 回。

清すると同時に、党の「唯一思想体系」の確立が決議された。唯一思想とは、党内にはただ一つの思想以外に他の思想は存在し得ず、その思想とは、党を創建し、指導する首領の思想とされた。党内に首領の思想と反する他の思想が存在するとすれば、そのとき党は一つの党とは言えないと説明された[320]。その首領の思想とは、言うまでもなく金日成の思想である主体思想であった。

このように措定した以上、「主体を打ち立てること」として包含してきた金日成の路線や立場、党における指導指針を「主体思想」という言葉の下に昇華させる必要があった。こうして、1967 年 12 月 16 日に最高人民会議第四期第一次会議を開催し、そこで金日成は「朝鮮民主主義人民共和国政府政綱（十大政綱）」を発表して、その第一項で「主体思想が革命と建設を遂行するためのマルクス・レーニン主義的指導思想であり、北朝鮮政府のすべての政策と活動の方針である」と規定した[321]。政綱の中では、「思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛」と、外交での自主独立が主体思想の下に概括され（第 1 項）、南朝鮮革命（第 2 項）、党の指導による人民の革命化と労働者階級化（第 3 項）、大衆路線（第 4 項）、自立的民族経済［社会主義的工業化政策、社会主義農村問題に関するテーゼ、人民生活の向上、労働行政］（第 5 項）、科学技術の発展と社会主義的文化建設（第 6 項）、国防の強化と自衛（第 7 項）、自力更生と有無相通を原則とする対外経済関係（第 8 項）、海外同胞の利益と権利の保護（第 9 項）、自主独立外交の展開（第 10 項）に関して具体的に言及が行われ、主体思想の内容として統括された（表３）。

＜表3＞「67 年の『主体思想』」（金日成及び党の思想としての「主体思想」）

主体思想＝我が党の主体思想＋革命と建設を遂行するためのもっとも正しいマルクス・レーニン主義的指導思想＋政府のすべての政策と活動の指針
主体思想における「主体」：事大主義と教条主義に反対し、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と他国の経験を自国の歴史的条件と民族的特性に合うよう創造的に適用／他への依存心を捨て、自力更生の精神を発揮して、自己の問題に対して自ら責任を持って自主的に解決
主体思想の構成要素：思想（主体）＋政治（自主）＋経済（自立）＋国防（自衛）＋自主独立外交 **思想での主体**…働き手たちが民族的自負心と自主意識を固め、他人に盲従せず、機械的に模倣したり、鵜呑みにしたりしないで、批判的にすべてのことを自国の実情に合うよう、自らの知恵と力で解決しようとする革命的気風を備える／朝鮮の現実を研究し、分析して、革命と建設で提起される問題を自主的に解決／集団と全社会の利益、祖国と人民のために身を捧げて闘う労働者階級の革命思想がマルクス・レーニン主義的世界観／社会のすべての人びとを革命化、労働階級化する／文化・技術水準の所有者／共産主義思想で武装させ、

[320] 「第四期第一六次全員会議に関する報道」『労働新聞』1967 年 7 月 4 日付。
[321] 注 262 に同じ。

党・労働者階級・祖国・人民に忠実な革命家に育てる／党の唯一思想体系を打ち立てる／搾取階級が残した個人主義・利己主義と闘い、集団主義の精神と政治的生命を大切にするような革命的に生活し働く共産主義的生活気風を身に付ける／社会主義的愛国主義教育／革命伝統教育／文化革命（学習を通じて一般知識水準を高め、一つ以上の技術を身に付ける）／抗日武装闘争とそれを受け継ぐ人民の闘い、現実を描いた革命的な作品を創作して、全社会の労働階級化・革命化に貢献する

政治での自主…自国のすべての路線と政策を自主的に定める／対外関係において完全な平等権と自主権を行使する（自主独立外交）／国の統一は外部勢力が解決できない朝鮮人民の内政問題（南朝鮮革命）／社会主義・共産主義建設のための階級的差異・民族的不平等の解消／官僚主義をなくし、革命的大衆観点を確立する（大衆路線…青山里方式、大安の事業体系）／幹部の党性・労働者階級性・人民性を身に付ける（常に先頭に立ち、手本で、謙遜で、素朴で礼儀正しい人民的品性）

経済での自立…勤勉で才能ある人民の汲み尽くせない想像力と豊かな国内資源を動員する／自力更生の原則（自国の建設を人民の労働と国内資源によって進める）／自立的民族経済建設路線（社会主義の物質的・技術的土台、民族的差異があり、国家が存在する限り、民族国家単位でなければならない）／経済と国防建設を並進させ、祖国統一の革命的大事変を迎える経済的土台を築く／政治的独立の物質的基礎／貿易は有無相通

国防での自衛…自力で防衛力を強め、自国の安全と社会主義の獲得物を防衛／戦争に対処できるような政治的・思想的準備を整える／強固な民族経済に依拠した国防／全国的・全人民的防衛体制／帝国主義者は絶えず侵略と掠奪を行い、戦争の危険はなくならない／米帝国主義は南朝鮮を前哨基地とし、日本軍国主義を突撃隊にして、戦争を企てている／国防は、社会主義の獲得物と革命基地を防衛する事業であり、全人民の神聖な義務であるとともに栄誉ある任務／人民軍は全軍幹部化と全軍現代化を、人民は全人民武装化と全国土要塞化を実行（四大軍事路線）

出所：筆者作成。

また、この思想は、朝鮮労働党を領導する金日成の思想であることが明らかにされ、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と他国の経験を自国へ創造的に適用する判断・決定者は金日成であることが改めて示唆された。これによって、現在までに継承されている北朝鮮の「党、国家及びその他の組織と人民らのすべての活動の事業における指導的指針」としての主体思想が成立した。言い換えれば、北朝鮮の現実的な政治社会の中で、指導者を含む構成員個々人の生活や活動、思考方式を規定する価値判断の基準としての狭義の主体思想が確立した。とはいえ、この時点では、北朝鮮が国際関係をどのように樹立し、国内で革命と建設を如何に進めて、そのために指導者－党－国家－国民が何をすべきなのかという現実の政治・社会的な立場・思考・方針・態度が形成されたに過ぎず、普遍的に思想と呼ばれる体系を有したものとはほど遠かった。従って、これ以降は、主体思想をどのよ

うに展開していくか、それを金日成が独創的に創造したという形で如何に思想の体系へと近づけていくかに勢力が注がれていくこととなった。

第 4 節　主体思想の展開

主体思想の具体的な展開は、まず党の唯一思想体系の中で党員を教化していく方法論として現れた。1970 年 11 月の第五次党大会では、党規約を主体思想が党の指導思想であること、また唯一思想体系が党内に確立されるべき方向に沿って改正することを決議した上で、唯一思想体系の確立手法として党内を抗日革命伝統で理論武装するよう決定した[322]。革命伝統とは、金日成らが 1930 年代以降に展開した抗日パルチザン闘争のみが、朝鮮の革命運動において唯一正統な闘争であることを規定するものであった[323]。この時点では、解放後金日成が権力を掌握していく過程において、北部朝鮮・北朝鮮内で常に警戒の対象でかつ分派の種子であった、教条主義、形式主義、地方主義、民族虚無主義（事大主義）、官僚主義を「克服」したと認識されており、それゆえ党内・国内は「唯一思想」でまとめられるべきであり、これを前提に朝鮮の革命が展開されるとの主張から、金日成らパルチザン派の経験してきた抗日革命伝統が教養・教育事業の中心に構成されることになったのである。この革命伝統を中心とする教養・教育事業は、その後国家機関や大衆路線の経路を通じて、各種教育機関、工場・企業所、農場などに波及し大衆化した。

これに併せて遂行されたのが、主体思想の理論化であった。まずは「政治・経済・思想・軍事をはじめとするあらゆる分野で『朝鮮式』に行うことが要求され、それは金日成の指導を唯一指導とすることだ」という形で展開されたという。同時に、黄長燁はこの時期（1969 年から 1971 年にかけて）、休養所で主体思想の理論体系を作成する作業に従事したと回顧している[324]。

その成果が活用されたのが、1972 年 9 月に日本の『毎日新聞』社が金日成に対して行った「主体思想に基づく朝鮮労働党の対内外政策」と題するインタビューであった[325]。この中で金日成は、主体思想の定義とその根幹である人間中心の社会歴史原理に基づく朝鮮労働党の対内外政策を明らかにした。黄長燁は、この時点で「主体を打ち立てること」として様々な意味合いを包含してきた「主体」が「主体思想」へと発展したと考えている[326]。ともあれ、この際に主体思想とは、「一言で言えば、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にあるという思想です。言い換えれば、自己の運命の主人は自己自身であり、自己の運命を開拓する力も自己自身にあるという思想です」と述

---

322 『労働新聞』1970 年 11 月 3 日付。
323 前掲、『北朝鮮ハンドブック』221 頁。
324 前掲『私は歴史の真実を見た』78 回。
325 このインタビューはのちに、「我が党の主体思想と共和国政府の対内外政策の幾つかの問題について」との題目で活字化された（1972 年 9 月 17 日）。『金日成著作集 第 27 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1986 年、268 - 295 頁。
326 前掲、『私は歴史の真実を見た』78 回。

べられた。主体思想に主体の説明が加わり、初歩的な哲学的要素が付与されたのである。ちなみに、この原理は現在の北朝鮮でも普遍的に根付いている。「人民大衆が主人で、人民大衆が推進する力を持っているという思想を表現するので、主体思想と表現します」と、北朝鮮のシンクタンクの一つである社会科学院の研究者は述べた[327]。

また、黄長燁によれば、彼が主体思想の理論形成の中で編み出した、「個人の有限な生命と人類の無限の生命を結合させ、より意義深い未来社会を建設する」という考え方を金正日がいたく気に入り、のちに金正日自身が進めた「金日成主義」や「社会政治的生命体」論に援用したという[328]。だが、その援用は、黄本人の思惑とは異なり、後継者争いを展開する中で、伯父である金英柱（キム・ヨンジュ）をマルクス主義理論に教条的であり、思想が古いと攻撃し、金日成に自分こそが忠実であることを見せつけるための利用であったという[329]。

その後、1973 年 9 月には、金正日が朝鮮労働党の組織部と宣伝煽動部の担当秘書（書記）に任じられ、彼が主体思想の展開と理論化に大きく関わることとなった。金正日は、1974 年 2 月 19 日に、「全社会を金日成主義化するための党思想教育事業の当面する幾つかの課業について」と題する談話を発表し、金日成の思想を奉じる「朝鮮労働党は金日成主義」であり、全社会が金日成主義化されるべきであることを宣布した。その上で、主体思想は金日成主義の核を成す思想、理論、方法の全体的体系であると主張した[330]。それゆえ、金日成主義は、現実の政治・社会的な立場・思考・方針・態度などを規定する狭義の主体思想に対して、広義の主体思想であると呼ばれる。さらに、同年には、金日成に対する「神格化水準を高める作業」を行い、「党の唯一思想体系確立十大原則」を制定した[331]。これは

---

[327] 2016 年 8 月 23 日に筆者が朝鮮社会科学院研究者に行ったインタビューに基づく。

[328] 前掲、『私は歴史の真実を見た』92 回。

[329] 同上、第 79 回。

[330] 金正日「全社会を金日成主義化するための党思想教育事業の当面する幾つかの課業について―全社会を主体思想化するための党思想事業の当面の課題を明示した談話」『金正日選集 第 4 巻』、平壌・朝鮮労働党出版社、1987 年、1-12 頁。また、前掲、『私は歴史の真実を見た』第 84 回。

[331] 党の唯一思想体系確立十大原則は、党規約や憲法をも凌駕する朝鮮労働党の最高綱領であるとされている。その内容は、以下のようであると考えられる。「第 1 条：偉大な首領金日成同志の革命思想によって全社会を一色化するために身を捧げて闘うべきである。第 2 条：偉大な首領金日成同志を忠誠をもって仰ぎ奉じるべきである。第 3 条：偉大な首領金日成同志の権威を絶対化するべきである。第 4 条：偉大な首領金日成同志の革命思想を信念とし、首領の教示を信条化するべきである。第 5 条：偉大な首領金日成同志の教示を執行するにおいて、無条件性の原則を徹底して守るべきである。第 6 条：偉大な首領金日成同志を中心とする全党の思想意志的統一と革命的団結を強化するべきである。第 7 条：偉大な首領金日成同志に学び、共産主義的風貌と革命的活動方法、人民的活動作風を持つべきである。第 8 条：偉大な首領金日成同志から授かった政治的生命を大切に守り、首領の大きな政治的信任と配慮に対して高い政治的自覚と技術による忠誠をもって報いるべきである。第 9 条：偉大な首領金日成同志の唯一的領導のもとに、全党、全国家、全軍が一つとなって動く、強い組織規律を打ち立てるべきである。第 10 条：偉大な首領金日成同志が

朝鮮労働党中央委員会第五期第九次総会において採択されたと考えられるが、この総会自体秘密裏に催され、現在においても一切の報道がなく、詳しい状況は不明である。ただ、この十大原則は、金正日以前に党の組織指導部を統括していた金英柱の下でも作成されていた経緯を有するが、金正日は金日成のより偶像化を図るために改作を行ったという[332]。

次いで、金正日は 1982 年 3 月 31 日に、「主体思想について」と題する論文を発表し、そこで「マルクスは『物質』と『意識』の関係を明かにしたが、これに対して主体思想は、『物質』のうちでもっとも重要な存在である人間の役割を明らかにし」、そこに「マルクス主義とは異なる」金日成と主体思想の「独創性がある」ことを主張した[333]。また、その論文では、個人の有限な生命に対して、革命を追求する人類の無限の生命を想定して、「肉体的生命よりも、社会政治的生命がより貴重」なのであるとして、個人の利益よりも集団の利益を優先すべきであることを要求した。さらに、「人民大衆は歴史の創造者であるが、正しい指導によってこそ社会と歴史の発展過程において主体としての地位を占め、役割を尽くすことができる」とし、あくまでも個人の能力の発揮は、「領導者の指導」に依拠するものであるとした。

このような理論化に引き続き、1986 年 7 月 15 日に金正日は、「主体思想教養において提起される幾つかの問題について」と題する談話を発表し、先の肉体的生命－社会政治的生命の問題を儒教の生命観と結びつけるとともに、その中での主体を三位一体化して、有機体的な国家論として発展させた[334]。その骨子は、次の通りである。まず、人間が生きているというのは、肉体である「魄」と生命の源である「魂」が結びついている状態であるとする。その上で、我々個々人が生きているのは、魂魄を父母から与えられるからであり、それが面々と受け継がれるがゆえに、我々は父母に孝行を行い、先祖に誠を捧げるのであると、儒教の生命観が語られる。しかし、個々人の一生は有限であり、魄から離れた魂はあの世に行ってしまう。また、単なる肉体的生命の授受は人間のみならず、動物やあらゆる生命を持つものの間で行われている。従って、我々が無限の生命を与えられるとすれば、永生に展開される世界に身を置くしかなく、永生に展開される世界とは主体思想の下での革命に他ならない。その世界における生命が社会政治的生命であり、革命家は肉体的生命とは区別されるこの社会政治的生命を持たなければならないし、持つことにより一層生命

開拓された革命偉業を、代を継いで最後まで継承し完成するべきである」コリア国際研究所朴斗鎮「北朝鮮労働党の『唯一領導体系確立の 10 大原則について』(2013.9.17)」コリア国際問題研究所ホームページ、
http://www.koreaii.com/siryositu/mrpark/2013/p20130917.html（2018 年 8 月 24 日アクセス)。

[332] 前掲、『私は歴史の真実を見た』第 82 回。

[333] 前掲、『主体思想について』9-96 頁。

[334] 同上、135-165 頁。鐸木昌之「北朝鮮における主体思想の新転回―『社会政治生命体』論を中心に」『法学研究』第 63 巻第 2 号、1990 年 2 月、239-263 頁。古田博司「忠誠と孝誠―北朝鮮イデオロギー教化史上の二大画期点、一九六七、一九八七」『下関市立大学論集』第 36 巻第 1,2 号、1992 年 9 月、25-68 頁。

が輝かしいものとなる。この社会政治的生命を賦与することができるのは、オボイ（父なる）首領のみであり、それゆえ肉体的生命を与えて下さる父母以上に、首領に対して尊崇し、忠誠を誓わなければならない。その首領は、国家においては最高脳髄であり、首領に従いその意志を実現する党は中枢神経で、党の下に一心団結し主体的に革命を遂行する人民は器官・細胞である、というものである。ここにおいて主体思想の理論化は頂点を迎え、これ以後の「北朝鮮の主要イデオロギー教化は、『社会政治的生命体』論を核として行われることとな」る[335]。これより先、1985 年 5 月から 8 月にかけて、金正日の「主体思想について」の成果も踏まえつつ、社会科学院によって『偉大な主体思想叢書』（全 10 巻）が成立し、刊行されたのはすでに述べた通りである[336]。

この後、金正日は 1992 年 1 月 3 日に、「社会主義建設の歴史的教訓と我が党の総路線」と題する談話を発表し、この中で「社会主義が成立したのちには、革命継続と社会建設に正しい回答を与えることはできなかった」と述べ、これに対して正しい回答を与えたのは「金日成の主体思想だ」として[337]、主体思想はもはやマルクス主義の延長上にないことを明らかにしたが[338]、これはもはや主体思想の理論化の範疇を超えたものであると考えるべきであろう。それ以降、金日成死去（1994 年 7 月）後、北朝鮮では「赤旗思想」、「先軍政治」、「先軍思想」、「強盛大国」、「金日成・金正日主義」など、思想や主義主張を冠する様々なスローガンが打ち出されてきたものの、それらは主体思想の展開ではなく、主体思想を継承・発展させたものであるに過ぎないことは本章の第 1 節で述べた通りである。

---

335 古田博司「『社会政治的生命体』論」前掲、『北朝鮮ハンドブック』327 頁。
336 序章第 2 節（1）及び序章の注 14 を参照。
337 金正日「社会主義建設の歴史的教訓と我が党の総路線」『金正日選集 第 12 巻』、平壌・朝鮮労働党出版社、1992 年、262-280 頁。
338 前掲、「『社会政治的生命体』論」327 頁。

＜表4＞主体思想の包括的体系

金日成主義…広義の主体思想						
主体思想…狭義の主体思想		哲学的原理	社会歴史的原理	指導的原則	革命的理論	領導方法
思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛＋自主独立外交	基本内容	我が人民は自らの運命を自らの手にしっかりと握り、全ての面で社会の真なる主人となる。人間は全ての主人であり、全てを決定する	人民大衆は社会歴史の主体である	党及び国家活動、革命と建設の全ての分野で主体を打ち立てるための指針	反帝反封建民主主義革命論／社会主義革命理論／社会主義・共産主義建設理論／人間改造理論／社会主義経済建設理論／社会主義文化建設理論	領導体系：党・軍隊・人民に対する党と首領の領導を実現する組織指導体系 領導原則：革命・建設を領導する際、守るべき原則 領導芸術：党・軍隊・人民を組織動員する卓越した首領の組織的手腕と方法＝人間の創発性と積極性を啓発、発揚させる妙術
	自主性	共産党及び労働党間での自主性	人類の歴史は人民大衆の自主性のための闘争の歴史	思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛／自主独立外交／主人らしい権利と責任		
	創造性	自主的な生活のための人民大衆の活動は創造的性格を帯びている。人間の創造的活動の対象は自然と社会	社会歴史的運動は人民大衆の創造的運動	創造的方法：人民に寄る方法／実情に合わせる方法		
	意識性	思想意識は人間のすべての行動を規定し、調節・統制	革命闘争で決定的役割をするのは人民大衆の自主的な思想意識	思想を基本:思想改造先行／政治事業先行		

出所：李鍾奭『朝鮮労働党研究―指導思想と構造変化を中心に』ソウル・歴史批評社、1995年、36 頁を基にして、金正日『金日成主義の独創性を正しく認識することについて』在日本朝鮮人総聯合会、1984 年の記述やその他北朝鮮文献を参考に筆者作成。

第５節　小結

主体思想は、これまでに述べてきた通り、幾つかの段階を通じて、形成と発展を遂げてきた。第一段階は、国内において教条主義に反対する思想闘争が展開され、対外的には金日成を中心とする独裁的な権力が中ソから容認されようとしている中で、朝鮮人民の朝鮮人民による朝鮮人民のための朝鮮革命の主張たる「主体」が初めて発出されたことである。第二段階は、国内において金日成の党権力が固まり、中ソ論争には暫く沈黙を守り、社会主義建設に勢力が注がれる中で、思想事業のみならず、経済・文化建設の基本的な指針、また政治・軍事路線における自主的な立場を包含しつつ、主体が党の路線として展開されたことである。この第二段階においては、従来自国の社会主義建設におけるマルクス・レーニン主義思想の参照体系としてきたソ連共産党と袂を分かち、「わが党が一貫して堅持している立場である」ところの「主体を打ち立てる」という言葉で、「思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛」が主張された。またこの際「主体思想」という言辞が初めて登場したという点で画期的だったが、主体思想に意味づけがなされるには至らなかった。第三段階は、国内においては唯一思想体系と呼ばれる金日成の絶対的な権力確立と大衆路線に基づく経済建設が円滑に進行し、対外的には中ソとの関係を再編し、自主独立外交を定式化する中で、「主体を打ち立てること」として包含してきた金日成の路線や立場、党における指導指針を「主体思想」という名で統括したことである。この段階で、北朝鮮の現実的な政治社会の中で、指導者を含む構成員個々人の生活や活動、思考方式を規定する価値判断の基準としての狭義の主体思想が確立した。第四段階は、主として金日成の後継者に内定した金正日の下で、主体思想が金日成主義の基軸となり、「党の唯一思想体系確立十大原則」とともに聖典化されるなどの展開を遂げ、併せて主体思想が哲学的・歴史社会的・指導原理的に理論・体系化されていったことである。この段階で、主体思想は金日成主義（広義の主体思想）に包摂され、永生的な世界観が加わり、宗教性を帯びることとなった。

以上のように、主体思想の形成と展開を跡づけると、金日成自身の経験的ナショナリズムと権力闘争の中で活用可能性が見出された国内の民族主義的土壌、金日成を取り巻く派閥的な権力闘争、廃墟からの社会主義建設、対外的な影響力への対処と中ソ関係という政治社会的な諸条件の中で、金日成の絶対的な権力が確立し、彼が導く路線が主体という言辞で語られ、従来依拠し続けてきた対象からの離反により、「主体」思想が必要とされ、成立したと言える。それでは、このようにして北朝鮮で形成された主体思想は、どのような朝鮮的特質を有しているのか、またどのように国民（人民）に対して内面化されていくのか、さらになぜ主体思想は形成から 50 年以上も継続して北朝鮮の指導思想として生き長ら

えているのか、引き続いて検討していくこととしよう。

第 4 章　主体思想の朝鮮的特質

第 1 節　問題の所在

北朝鮮は、抗日戦争、国共内戦、朝鮮戦争を中国と共に戦い、これを通じて形成された中朝の「血盟的関係」の下で、国家建設を行い、主体思想を形成した。そうした史的背景から、北朝鮮の国家建設のあらゆる側面では、中国の影響が見られることは言うまでもない。実際、金日成をはじめとする北部朝鮮・北朝鮮の指導幹部たちが中国の国家建設や毛沢東思想の影響を深く受けてきたことは、北部朝鮮・北朝鮮の歴史過程を見るとき、その痕跡を容易に見付けられることから分かる。

例えば、金日成は、解放直後の演説で、「金を有するものは金で、知識を有するものは知識で、努力をするものは努力で……」と述べ、民族を挙げた大同団結を通じて、自主独立国家の建設に邁進することを呼びかけた[339]。これは明らかに、「金のあるものは金を出し、銃があるものは銃を出し、食糧があるものは食糧を出し、力があるものは力を出し、専門技術があるものは専門技術を出す」という、中国共産党の「八・一宣言」で提起された著名な発言を模倣したものであろう[340]。指導幹部たちもまた、例えば主体思想の体系化過程で登場した領導芸術という大衆動員手法は、金日成大学の学者が多数参加して、金日成主義の重要な構成要素としたものであるが、この原型を 1940 年代の毛沢東の文献に見出すことができる[341]。さらに、北朝鮮が朝鮮戦争の戦後復旧とその後の社会主義建設において展開した「農業協同化」、「千里馬運動」、「青山里精神」、「三大革命小組」などの大衆路線も、中国の経験（群衆路線）を参考に、北朝鮮の「実状に合わせて」加工したものであるといっても過言でないだろう。このように、北朝鮮にとってとりわけ中国は、実体化しようと努力した「主体」の背後で、依拠・依存せざるを得ない存在であった。しかし、かといって北朝鮮の主体思想は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の焼き直しというわけではもちろんない。

主体思想は、これまでに述べてきたように、金日成自らの経験的ナショナリズムや現実的な政治社会的諸条件の中で成立してきた。とくに、他力による植民地からの解放と脱植民地過程が国家建設と同時進行した北朝鮮では、再び他の従属国となることがもっとも警戒された。金日成は、「我が人民の歴史は、古代と中世においては、北方からの隋と唐の侵略、また契丹と元の侵略を退け、南方からの倭寇の侵攻を牽制してきた反侵略、祖国防衛の歴史を有し、近代においては、日本帝国主義者と米帝国主義者らの侵略に反対した反帝

---

[339] 金日成「新しい朝鮮建設と民族統一戦線について―各道党責任幹部ら前での演説（1945. 10. 13）」『金日成著作集 第 1 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1979 年、337 頁。

[340] 李新『中華民国史』第 8 巻下冊、北京・中華書局、2011 年、422 頁。（1935 年 10 月 1 日、中国共産党のパリでの「抗日民族統一戦線政策の源について」『救国報』第十期に最初に掲載）

[341] 中共中央政治局、「指導方法に関する決定（1943 年 6 月 1 日）」『中国共産党資料集』第 11 巻、日本国際問題研究所編、414-420 頁。

闘争の歴史、民族解放闘争の歴史を有しています」と述べ[342]、歴史的な劣等感の裏返しに基づく闘争の歴史を鼓舞した。また、金日成は自らの革命時期と建国時期を通じて、「大国に対し盲目的に崇拝する外勢依存思想と、自らの力を信じることなく他人の力のみに頼ろうとする虚無主義思想が残っていると認識していた」という[343]。こうした独自の経験を経て成立してきた主体思想は、外在的な影響が認められる反面、朝鮮的な特質を備えているものと考えられる。

そこで本章では、とくに主体思想の形成に対して影響を及ぼしたとされるマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を取り上げる。まずは、マルクス・レーニン主義が毛沢東・金日成にどのような影響を与え、受容されたかを考察する。次いで、毛沢東が自らの革命や国家建設、思想形成の中で、マルクス・レーニン主義を如何に受容して取り込んだのかを検討する。続いて、金日成もまた自らの革命や国家建設、思想形成の中で、マルクス・レーニン主義を如何に受容して取り込んだのかを分析する。そうした作業を経ながら、主体思想の朝鮮的特質を析出していくことにする。

第2節　毛沢東と金日成におけるマルクス・レーニン主義

（1）毛沢東におけるマルクス・レーニン主義

毛沢東は、1893年12月26日に中国・湖南省の農民家庭で出生した。農民家庭とはいえ、父親の毛順生は農事に従事しつつ、米の販売がうまくいったお陰で、毛沢東の学業には影響しないほどの経済的な蓄えを有していた[344]。だが、農事をしつつ、勤勉で節約した家庭を築いていくことを望んだ父親に対して、毛沢東は休まず働き続けなければならない農事と単純であるという理由で算術を嫌っていた。それよりも、詩や文学、歴史、政治などの幅広い分野の読書を好んだ[345]。

毛沢東が14歳の時（1907年）、家庭の事情（労働力不足）で学業の中途退学を余儀なくされた。しかし、17歳の時には、従兄弟の手引きで故郷韶山を離れ、「東山学堂」で勉学することになった。その翌年の1911年、中国では辛亥革命が起こり、毛沢東は半年間程度、新軍に入隊した。1914年から1918年の間にかけて、第一次世界大戦が勃発し、資本主義世界の経済危機と政治危機が加速化し、革命の機運が醸成された時代に、毛沢東は「湖南第一師範学校」で勉学に従事した。師範学校を卒業する直前の1918年4月14日、毛沢東は蔡和森、蕭子升、何叔衡らとともに、長沙岳麓山劉家台子で「新民会」を設立し、その会員及び湖南学生会の主要メンバー、教員らとともに「マルクス主義研究会」を組織した。そこでは、『共産党宣言』、『空想から科学への社会主義の発展』、『国家と革命』などが愛読書とされた。この時期、毛沢東はマルクス主義の影響を大いに受けたようである[346]。これよ

---

[342] 『朝鮮社会科学学術449革命歴史版：不滅の業績』336頁「金日成選集 第1巻」551頁
[343] 2016年8月22日、筆者が朝鮮社会科学院の講義受けた内容に基づく。
[344] 2017年8月25日、筆者が毛沢東の生家―湖南省韶山村で行った現地調査に基づく。
[345] 同上。
[346] 1918年に毛沢東が勉強していた「湖南第一師範学校」の「毛沢東資料館」の展示説明に基づ

り先、1917 年 4 月の『新青年』に掲載された毛沢東の文章を見ると、彼がマルクス主義の影響を受ける以前から、最大の関心事は中国が「亡国」となり、それによって中国人民が「亡国奴」に成り下がる状況への危惧であった[347]。

＜図5＞毛沢東の故居

出所：筆者撮影（2017 年 8 月 24 日）。

1917 年に勃発したロシアでの十月革命は、世界で初めての無産階級による社会主義国家の建設であるとして世界に衝撃を与えた。中国では、すでに資産階級が導いたとされる辛亥革命により、2 千年以上にも及ぶ封建統治が転覆されていたが、北洋軍閥政府が実施した地主、官僚ブルジョアの専政の下で、階級矛盾と民族矛盾が激しくなり、結局 1919 年に「五・四運動」が勃発した。中国とロシアは隣接しており、帝政ロシア時代の固陋した経済・文化的国情は、当時の中国に相似していた。このため、ロシアの十月革命は、中国に対しても大きな影響を及ぼすこととなった[348]。

この頃毛沢東は、『新青年』（第 5 巻第 5 号）に掲載された李大釗の「庶民の勝利」と「ボルシェビキ主義」を読み、マルクス主義に感化された。「彼の助けの下で私はマルクス主義者となった。彼は私の真なる先生である」とのちに毛沢東は回顧している[349]。こうして、1919 年 5 月に毛沢東は、湖南の学生が北京の反帝愛国運動に応じるように指導した。1920 年 8 月には、何叔衡などとともに、「湖南ロシア研究会」を発足させ、ロシア十月革命の経験を研究した。1921 年 1 月 2 日には、「新民学会」の長沙会員新年会議で、中国を改造するためには共産主義を採用し、労農専制の道を選ぶべきだと強調した。同年 11 月、毛沢東は湖南で共産主義組織を作り、故郷へ戻って親戚たちも革命の道へ誘った。このうち、妻の楊開慧、弟の毛沢民、毛沢覃、従妹の毛沢建、甥の毛楚雄は、後日革命のために命を落とした。その後、1925 年 2 月から 8 月にかけて、毛沢東は韶山で農民運動を展開し、農民夜校を創設して、秘密裏に農民教会を組織し、中国で最初の農村基層党組織の一つである「中共韶

く。

[347] Stuart R.Schram『毛沢東の思想』中国人民大学出版社、2005 年、4 頁。

[348] 史芸軍『毛沢東思想概論』吉林・吉林人民出版社、2001 年、25 頁。

[349] 1918 年に毛沢東が勉強していた「湖南第一師範学校」の「毛沢東資料館」の展示説明に基づく。

山特別支部」を樹立した[350]。

中国共産党は、阿片戦争から「五・四運動」までの約 80 年間に引き起こった「太平天国農民革命運動」あるいはブルジョアが指導した辛亥革命の失敗の原因は、先進階級の科学革命理論の指導がなかったからであると結論付けた。それゆえ、20 世紀前半の半植民地・半封建的な中国の社会現実の下で、広範な人民大衆を動員させ、徹底した民族民主革命の最後の勝利を得るためには、必ず先進的な労働階級及びその政党から生まれ出た新たな革命思想と革命綱領が必要であるとした。こうして、毛沢東率いる中国は、世界で初めての社会主義国家を建てたソ連の後進の途を選択した[351]。

（2）金日成におけるマルクス・レーニン主義

金日成は、1912 年 4 月 15 日に平壌郊外の万景台の貧困な家庭で生まれた。金日成の父親である金亨稷は、民族主義的意識の強い人物であり、彼は秘密政治結社である「朝鮮国民会」の結成に加わった[352]。金日成は、このような金亨稷から孫文の「三民主義」と「五・四運動」の影響下で新しく生まれた聯ソ、聯共、農工扶助の「三大政策」を学んだ[353]。同様に、ウィルソンの民族自決主義に影響を受けて反日独立運動を引き起こすものの、総督府の弾圧により逮捕され挫折した父親の活動経験にも大きく影響を受けた[354]。毛沢東と同じように、金日成もまた、父親のほか伯父などを革命で亡くした。

＜図6＞金日成の故居（左：貧しさの象徴である壺、右：金日成と両親・祖父母）

出所：筆者撮影（2014 年 8 月 19 日）。

毛沢東は封建的な父親に反抗し、学業を修め、自ら周りの親族たちを革命へ誘う、ある種革命の先駆者であったが、金日成は祖父の代から続く民族主義を受け継ぎ、家族の勧めるままに進学した。それゆえ、金日成は自らが語るように、家族・民族・国に対する気負

---

350 同上。
351 同上。
352 前掲、『金日成と満州抗日戦争』27 頁。
353 『回顧録（1-1）』、23 頁。
354 同上、50 頁

いとともに「情」に固執し、必ず国を取り戻すという覚悟の「恨」を胚胎させた。それと同時に、「お金があっても、人徳がなければ生きられない」という家庭教育、そして「亡国奴」として他郷で疎外された生活を経験したことが金日成のナショナリズム形成に大きな影響を残した[355]。

第 2 章でも述べたが、金日成は 14 歳の時、「華成義塾」に入学したが、固陋な教育内容と『共産党宣言』など共産主義文献を読ませてもらえないことに不満を抱き、半年後には吉林の「毓文中学」へと旅立った。金日成は「毓文中学」に入学する前まで、『社会主義大義』、『レーニンの一生記』という小冊子を読んだ経験しかなく、吉林では社会主義理念が実現されようとしている新生ソ連の発展ぶりを風聞で聞き、社会主義・共産主義に限りなく憧れたという[356]。その後、金日成は、祖国独立の方法を模索するために、マルクス・レーニンが書いた著作に関心を持ち、『共産党宣言』、『資本論』、『国家と革命』、『賃金労働と資本』など、古典を読み耽った[357]。また、1928 年に毓文中学へ赴任した教師の尚鉞から、ゴーリキーの『母』や『敵』をはじめ、中国の古典小説である『紅楼夢』、魯迅の『祝福』、『阿Q正伝』、『陳独秀選集』などを学び、マルクス・レーニン主義とともに、中国の文学作品に接した[358]。その過程で金日成は、マルクス・レーニン主義から教条ではなく実践の武器を、真理の基準を抽象的な理論ではなく朝鮮革命という具体的な実践から見出そうとした[359]。

＜図7＞金日成の恩師尚鉞（左）と毓文中学での就学を伝える文献（右）

出所：筆者撮影（2017 年 8 月 28 日）。

こうして、毓文中学の幾人かの同輩とともに、「秘密読書組」を組織した。この秘密読書

[355] 同上、7 頁。
[356] 『回顧録（1-2）』139 頁
[357] 前掲、『回顧録（1-1）』209 頁。
[358] 同上、222 頁。
[359] 同上、209 頁。

組は、進歩的な青年学生らをマルクス・レーニン主義思想と理論で武装させることを使命とした[360]。このように見てくると、毛沢東も金日成も、自らマルクス主義の著作・研究に触れる集会を組織し、先達・恩師の教えから、本格的に共産主義者となった点で相似している。

和田春樹によれば、金日成がいつから共産主義運動に身を投じたのかということに関連して、官憲資料に「金成柱」の名が最初に登場するのは、1929 年 5 月 15 日付の在吉林川越総領事の「報告」であるという。それには次のように記されている。「五月上旬、吉林省城大東門外某鮮人方ニ於テ南満共産青年会員許笑、韓錫憲、朝鮮共産党満州総局員李琴川、同人妻淑子、南満韓人青年総同盟金東華、法政学校生徒申永根、毓文学校生徒金聖桂、南満学院卒業生車軾外数名集合シ、朝鮮共産青年会ヲ組織シ……」。つまり、金日成はこの頃（17 歳頃）にはすでに、朝鮮共産青年会という共産主義運動に関与していた[361]。なお、和田は資料に登場する「金聖桂」は、「柱」を「桂」と書き損じたのであろうとしている。

同時期、金日成は、マルクス・レーニン主義について、「マルクスの古典では労働階級の階級的解放が優先視され、民族的解放は劣後的だとしているが、朝鮮ではまず日帝の支配から逃れることが優先であり、その後に労働者、農民が階級的に解放されるという方法はないものだろか」とか[362]、「マルクス・レーニン主義では、一般的に宗主国での革命と植民地国での革命が有機的に繋がっているとしながら、宗主国での革命勝利の意義のみを強調しているが、朝鮮の場合には、日本の労働階級が革命で勝利しなければ、国の独立は達成できないということであろうか、我々は彼らが勝利するときまでじっと待ち続けるしかないのだろうか」など、自問自答を繰り返していたという[363]。その真偽は定かでないが、金日成は少なくとも 10 代後半には、マルクス・レーニン主義を摂取し、共産主義運動に関わる革命活動に参画していた。のちに金日成自身によって回顧された上の金日成青年の自問自答は、植民地朝鮮における社会運動をめぐって闘わされた、民族主義運動か、社会主義運動かの論争機運の反映だったのかもしれない[364]。

第 3 節　マルクス・レーニン主義の具現

（1）毛沢東・中国におけるマルクス・レーニン主義の具現

マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』において、「無産階級は暴力によって有産階級を打倒し、自らの統治を樹立する」ことを主張した[365]。この主張に対してレーニンは、「マルクスの国家問題においてもっとも卓越し、もっとも重要な思想、つまり『無産階級専制』

---

[360] 同上、213 頁。
[361] 前掲、『金日成と満州抗日戦争』44 頁。なお、「報告」は同書からの再引用である。
[362] 前掲『回顧録（1－1）』217 頁。
[363] 同上、218 頁。
[364] 金森襄『1920 年代朝鮮の社会主義運動史』未来社、1985 年、30 頁。
[365] 『マルクス・エンゲルス選集』第 1 巻、北京・人民出版社、1995 年、283 頁。

という思想をもっとも的確に表現した」と評している[366]。この評価に基づきレーニンは、「無産階級は、もしも先に政権を奪わず、政治統治を樹立せず、国家を無産階級が統治階級になる組織へと変えなければ、有産階級を打倒することはできない。しかし、この無産階級の国家は、勝利を得たと同時に衰弱し始める。それは、階級矛盾のない社会で国家は不必要で、存在するわけがないからである」と断じた[367]。このレーニンの理論は、ロシア十月革命とソビエト政権を樹立する過程で圧倒的な影響を及ぼした。ロシア十月革命とソビエト政権の建設は、1919 年の中国における「五・四運動」の勃発と、マルクス・レーニン主義の中国での浸潤を促した。

マルクス・レーニン主義が浸透していく中国において、毛沢東は「マルクスのブルジョア社会の物質的な生活関係」に対して、「人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する」という独自の理解を示した。これは毛沢東が早い段階から、社会的カテゴリーによって把握したものであると、カール・コルシュは評している。彼は毛沢東がマルクスの理論を中国革命の実践の中で応用したことを「マルクシズムの重要な一進展」だと早くから評価した人物の一人である[368]。

その毛沢東は、「認識の主体は、物質世界発展の最高産物である人類」であり、「人間の社会実践こそ、人間が外部世界を認識する真理性の標準」であると主張している[369]。また、「マルクス主義の哲学認識で非常に重要なのは、客観世界の規律性を習得したのみならず、客観規律性の認識を基に、能動的に世界を改造することである」と述べる[370]。従って、毛沢東は、「実践から得る二論的認識よりさらに実践」という科学的な社会実践を特徴とするマルクス・レーニン主義の応用を主張していた[371]。この主張がまさにこの後実践されることになる。

さて、中国国内においては、1911 年に有産階級が指導する辛亥革命により、封建王朝を打倒するのに成功したが、中国は軍閥割拠の局面となり、孫中山は「三次革命」を引き起こした。他方、1920 年の初旬には、李大釗、陳独秀などが中国で共産党を建設することを模索していた。同年 4 月、ロシア共産党シベリア極東支局のグリゴリー・ヴォイチンスキー一行が中国の上海で「コミンテルン東アジア事務局」を設立することの了解を取り付けるために中国を訪れた。ヴォイチンスキーらは北京で李大釗、上海で陳独秀と面会し、中国共産党の創立を討議した。そうして 1921 年、ロシア共産党シベリア極東支局と第三インターナショナル（以下、第三インター）の支持の下で、中国の各地で共産主義小組の代表会議を開き、6 月に中国共産党が設立された[372]。

---

366 『レーニン全集』第 2 版、第 3 巻、22,149,150 頁。
367 『レーニン全集』第 2 版　第 31 巻、26-27 頁。
368 『マルクス―その思想の歴史的・批判的再構成』198 頁、345 頁。
369 『毛沢東選集 第 1 巻』、北京・人民出版社、1961 年、273 頁。
370 同上、281 頁。
371 同上、284 頁。
372 「中国共産党の成立」『中国共産党ニュース』http://cpc.people.com.cn（2018 年 8 月 31 日最終アクセス）。

その直後の 1921 年 7 月 23 日から 31 日にかけて、上海で中国共産党第一次全国代表大会が開かれ、党の綱領が採択された。党の綱領は、「党の名称は、『中国共産党』、党の性質は、無産階級政党、党の奮闘目標は、有産階級を打倒し、資本所有制を廃止し、無産階級専制を確立し、社会主義と共産主義を実現する」とした[373]。1922 年 7 月に中国共産党は、第三インターの支部の一つとなり、その指示を受けることになった。中央局の書記に選ばれた陳独秀は、中国はロシアより遅れているので、必ずロシア革命方式による革命が行わなければならないと主張した。すなわち、中国は先に有産階級を助けて「二月革命」を成功させたのちに、再び労働者と農民を糾合して「十月革命」を成し遂げるという方式であった。さらに、1923 年に陳独秀は「二次革命論」、すなわち中国民主革命は、有産階級のみによって導かれ、有産階級による共和国を樹立したのちに、無産階級はただ資本主義が発展することを待って革命を行い、そして無産階級政権を建てるという認識を明らかにした[374]。こうした思惑とは裏腹に、孫中山は 1924 年 1 月に、「聯露、聯共、農工扶助」の方式で、国民党と共産党の合作の下で国内革命戦争を展開するとした。すでに、1923 年 6 月には、中国共産党第三次全国代表大会で、全ての共産党員は個人名義で国民党に加入し、国民党との革命統一戦線をなすことが確定していた[375]。

しかし、1927 年 3 月に帝国主義列強は、外国領事と居留外国人の生命及び財産が損害を受けたとして、南京市内の北閥軍と市民に向け砲撃を加え、中国の軍民 2,000 人余りを死傷させた。この事態に対し、蒋介石の国民党と中国有産階級は、反革命活動を企図したという。それは、次のような動きを指す。同年 6 月 10 日、汪清衛と馮玉祥は、鄭州において共産党に反対することで合意し、19 日には馮玉祥と蒋介石が徐州で、「反共、反露、寧漢合作」などを協議した。また、共産党内のイニシアティブを握る陳独秀らは、革命の領導権を放棄し、農工運動を制圧し、国民党右派の反革命活動に妥協するような政策を取った。さらに、陳独秀らは、党内での意見に耳を傾けず、国民党への警戒心を解いて、武漢工人ピケットと汪清衛に武器の譲渡を命じた。ところが、7 月 15 日に汪清衛は、共産党との決裂を公式に宣布し、共産党員と革命群衆に対する虐殺を行うに至った、というものである。このような事態を受け、共産党内では、陳独秀が領導権を放棄した結果、蒋介石が革命を裏切ることとなり、悲惨な事態を招いたとの結論を下した[376]。

このようにして、国共合作が頓挫したのちの 7 月下旬、毛沢東が実権を握った共産党は、南昌で武装蜂起を起こすことを決定し、8 月 1 日に周恩来を書記とする共産党の領導下で、2 万人余りの軍人が南昌で蜂起し、南昌城を占領した。南昌蜂起は共産党が国民党に対して初めて行った武装反抗であった。中国共産党中央は、8 月 7 日に湖北漢口で緊急会議を開き、

---

[373] 「中国共産党綱領（1921 年中国共産党第一次全国代表大会通過）」『中国共産党歴代全国代表大会データ庫』http://cpc.people.com.cn（2018 年 8 月 31 日最終アクセス）。

[374] 「陳独秀の『二次革命論』再評価（2012 年 5 月 4 日『人民ネット』」『中国共産党ニュース』http://cpc.people.com.cn（2018 年 8 月 31 日最終アクセス）。

[375] 『中共中央文献選集（1921－1925）』北京・中共中央党校出版社、1981 年、128 頁。

[376] 柳建輝『中国共産党執政歴程（1921 - 1949）』北京・人民出版社、2011 年 6 月、21 頁。

土地革命と武装蜂起によって国民党に対抗する総方針を確定し、「政権は銃のなかで奪い取る」とした。この「八・七会議」後、共産党は国民党政権に対抗するため、「秋収蜂起」、「広州蜂起」を発動し、紅軍を創建する過程で、群衆による路線を加え、土地革命を実施した。土地改革の一環として、1928 年 12 月には井岡山で「土地法」を制定した[377]。

1930 年 1 月 5 日、毛沢東は「農村が都市を包囲し、武装により政権を奪取する」との基本方針を形成し、国民党からの独立を得るためには、民衆の力を大事にするが、「先に群衆の力を得てから政権を樹立すること」は、中国革命の実情と合わないと主張した。しかし、共産党の中央政治局は、毛沢東のかかる思想を誤った観念であると指摘して、李立三が党の主導権を握ることになった[378]。

この後毛沢東は、何よりも中国社会の現実を正しく把握するための調査を重要視した。それゆえ、中国工農紅軍内でのマルクスの「本本」、つまり理論にのみ従い、中国の現実を考慮しない現状に対して、1930 年 5 月に「反対本本主義」（反セクト主義）を主張した。すなわち、当時の中国における社会経済を調査する際、現地調査の必要性、調査対象による異なる調査方法について説明し、必ず群衆の中で現実を把握すべきことを強調した。マルクス主義の「本本」は学ぶべきであるが、ただし必ず中国の実在状況と結びつけることを力説した。毛沢東のこの考えは、のちに毛沢東思想の「事実求是」（「実事」は客観的に存在するすべての事物、「是」は客観的事物の内部連繋すなわち規律性で、「求」は我々が研究すること。我々は国内外、省内外、県内外、区内外の実在状況から出発し、その中から固有の規律生を探し、周りの物事の変化の内部連繋を探すことにより、我々の行動の嚮導とすること）、「群衆路線」、「独立自主」の原型となった[379]。

一方、第三インターは、ソ連の経験を借り、中国でも「都市が農村を包囲する」革命路線が適しているとして、1930 年 9 月中旬、長沙を攻撃したが失敗した。これに対して毛沢東は、「江西を撤回し、吉安を攻撃する」ことを決めた。これにより共産党は、初めて「都市を攻撃することを放棄し、先に農村革命の根拠地を作る」方針を確立した[380]。また、1935 年に長征中の共産党は、遵義で会議を開き、第三インターの代表が軍事上において犯した実在状況と合わない指揮を批判することで、毛沢東を中心とする中国共産党中央の領導下で、中国革命が如何に進むべきかという問題（農村が都市を包囲し、武装によって政権を奪取する）に決着を付けた[381]。

その後、1937 年から全面的に抗日戦争が勃発するや否や、八路軍は「独立自主の遊撃戦と運動戦（ここでの独立自主は、抗日作戦に対する独立自主を指す：筆者注）」を独立自主

---

[377] 中共中央文献研究室『マルクス主義中国化 90 年―毛沢東思想形成と発展大事件』北京・中央文献出版社、2011 年、31 頁。
[378] 同上、43, 45 頁。
[379] 同上、46 頁。
[380] 筆者が 2017 年 8 月 25 日に湖南省韶山市の「毛沢東革命史資料館」で収集した資料に基づく。
[381] 同上。

の戦法として堅持しながら、「戦争の偉力の源は民衆にある」と、民衆路線を展開した[382]。この民衆路線は、その後一貫して中国共産党の方針となった。民衆路線の展開は、国共内戦が示すように、「戦争の勝敗を決めるのは人民で、一つ二つの新式武器ではない。全ての反動派は張り子の虎である。我々が頼るのは粟とライフルに過ぎないが、この粟とライフルは、蒋介石の飛行機や戦車よりも強いことを歴史は最後に証明するだろう」との信念に基づいている[383]。毛沢東は、民衆の支援を大事にしつつ、民衆の利益と直接に関わる経済問題を解決することにより、民衆の心を掴もうとしていた。無論、「民衆が共産党を擁護するのは、我々が民族と人民の要求を代表したからである。しかし、もし我々が経済問題を解決できなければ、もし新式の工業を建てられなければ、もしわれわれが生産力を発展させなければ、民衆は我々を擁護するかどうか分からない」とし[384]、民衆からの擁護を受けるには、民衆の実利を離れては考えられないことも認識していた。

こうして毛沢東は、民衆の支持を得るために、土地問題を解決する一方で、根拠地では「民衆のサツマイモ一つ奪ってはいけない」と述べ[385]、民衆に迷惑を掛けてはならないことを指示した。また、工農革命軍は民衆に対して「三大紀律」（行動は指揮に従うこと、工人・農民から物を少しでももらわないこと、土豪から奪ったものは公に納付すること）と「六項紀律」（ドアの鍵を掛ける、藁を束ねる、話は丁寧にする、取引は公平にする、借りたものは返す、壊したものは弁償する）の厳守を要求した[386]。さらに、紅軍内では、「紅軍の官兵は平等で、官長は兵士を愛護し、兵士らの民主権利を保障し、兵士は官長を尊重し、自覚的に管理を受けること」を制定した[387]。

このようにして、中国共産党は、1937 年に毛沢東が著した『実践論』、『矛盾論』をマルクス主義中国化の基礎理論であるとし、1938 年 10 月 12-14 日には、「論新階段」を発表することにより、「マルクス主義中国化」を定式化させた[388]。そして、1945 年 4 月 23 日から 6 月 11 日にかけて開催された中国共産党第七次全国代表大会では、「中国共産党党旗」を採択し、「中国共産党は、マルクス・レーニン主義の理論と中国革命の実践を統一させる思想、つまり毛沢東思想をすべての工作の指針とする」と、毛沢東思想を指導思想として公式化した。さらに、1945 年 8 月 13 日の延安幹部会議における「抗日戦争勝利後の情勢と我々の方針」演説では、「自力更生」の原則が提出された。毛沢東は、「我々の方針を如何に基本に置くべきか、自らの力量を基本としたものを『自力更生』と言う。我々は孤立していない。全世界の帝国主義に反対するすべての国家と人民らは、我々の友人である。しかし、我々は自力更生を強調し、我々は自分の組織の力量により、すべての内外の反動派を倒す

---

[382] 『毛沢東選集 第 2 巻』、北京・人民出版社、1961 年、429-506 頁。
[383] 「毛沢東とアメリカ記者との談話」『毛沢東選集 第 4 巻』、北京・人民出版社、1960 年、1193 頁。
[384] 毛沢東の「陝甘寧辺区工場職工代表会議」の招待会での談話（1944 年 5 月 22 日）。
[385] 前掲、『マルクス主義中国化 90 年』201 頁。
[386] 同上、23 頁。
[387] 同上、41 頁。
[388] 同上、199 頁。

ことができる」と述べ、共産党では「自分を信じ、自分の力によってすべての困難を乗り越える」ことがスローガンとなった[389]。

以上のように、1927 年から 1937 年までの国民党との国共合作の失敗と離反、1937 年から 1945 年までの抗日戦争、1945 年から 1949 年までの国共内戦の期間を通じて、「独立自主」、「事実求是」、「群衆路線」が毛沢東思想の 3 つの支柱として形成され、それが中国共産党の行動指針ともなった。

1949 年の中華人民共和国建国の直前、毛沢東は「中国は必ず独立すべきで、必ず解放されるべきで、中国の事業は必ず中国人民が自ら主張し、自ら処理すべきで、如何なる帝国主義の少しの干渉も許さない」と宣言した。これに続き、周恩来は、「建国後の対外関係においては、『中華民族の独立の立場を堅持し、独立自主、自力更生の立場を堅持する』」こと強調し、中国政府の一つの基本国策とした[390]。だが、実際において中国は、社会主義を建設する過程において、ソ連の社会主義建設モデルをそのまま模倣することが見られた[391]。だが、第一次五ヵ年計画の実施後、このモデルの弊害が発見され、調査を経たのちの 1956 年 4 月、毛沢東は「論十大関係」を発表し、中国は自国なりの建設の途を進める方針を明確に打ち出した。「論十大関係」では、「我々は普遍性を持つ真理を学ぶべきである。これは必ず中国の実在と合わせてみるべきである。我々の理論はマルクス・レーニン主義の普遍真理と中国革命の具体的な実践とを合わせたものである」と述べられ、マルクス主義の普遍性と中国の実情を合わせることが主張された[392]。

毛沢東はまた、中国共産党内の教条主義思想は、「デボーリン学派の唯心論と無関係だとは言えない」ことを指摘し[393]、「唯物弁証法における事物の発展は、事物内部の矛盾性にある。社会の発展も外部要因ではなく、主として内因によって決まる。社会の変化は、主に社会内部矛盾の発展において、すなわち生産力と生産関係の矛盾、階級間の矛盾、新旧間の矛盾の発展による」として[394]、中国国内での諸問題の主な原因は自らに起因し、従って自らより探すことを主張した。従って、「異質の矛盾は、異質の方法でしか解決できない。無産階級と資産階級の矛盾は、社会主義革命の方法で、人民大衆と封建制度の矛盾は、民主革命の方法で、植民地と帝国主義の矛盾は、民族革命戦争の方法で、社会主義労働階級と農民階級の矛盾は、農業集団化と農業機械化の方法で、共産党内の矛盾は、批評と自我批評の方法で、社会と自然の矛盾は、生産力を発展させる方法で解決すべきである」と党内外問題の解決の方法論を示した[395]。

さらに、1956 年 9 月 15 日から 27 日にかけて開催された中国共産党第八次全国代表大会

---

[389] 前掲、『毛沢東選集 第 4 巻』1123-1136 頁。
[390] 前掲、『マルクス中国化 90 周年』502 頁。
[391] 同上、633 頁。
[392] 毛沢東「論十大関係（1956 年 4 月）」『マルクス主義中国化 90 周年』633－635 頁。
[393] 前掲、『毛沢東選集 第 1 巻』287 頁。
[394] 同上、290 頁。
[395] 同上、299 頁。

で毛沢東は、「国内の主要矛盾は、人民の経済・文化での迅速な発展に対する需要と、目前の経済・文化が人民の需要を満足させない状況との矛盾である。全国人民の主要任務は、力量を集中させて社会生産力を発展させ、国家の工業化を実現させることである」と述べた。つまり、従来の大戦争に備えた軍事建設優先の立場から、暫く大戦争は起こらないという立場に修正を行い、経済建設を先に進めながら、軍事建設も重視する政策へと舵を切った[396]。従って、毛沢東は1958年6月17日、第二次五ヵ年計画について、「自力更生を主とし、外援を補助とし、迷信を打ち破り、独立自主で工業と農業を行い、技術革命と文化革命を行い、奴隷主義を打ち倒し、教条主義を埋葬し、外国の良い経験を真剣に学び、外国の悪い経験も必ず研究し戒めることが、我々の路線である」と指示した[397]。

こうして、毛沢東は建国後においても、「独立自主、事実求是、群衆路線」の三つの原則を柱として社会主義建設を進めた。このように、毛沢東・中国におけるマルクス・レーニン主義の具現と自主的な展開を眺めてみると、農村が都市を包囲する革命論は別として、自らを研究し、顧みて、実在状況と結びつけること、民衆（大衆）路線においてその支持を得るために、実利（生活の向上）を重視すること、革命の尖兵は民衆の手本となること、自力更生により自らの力で問題を克服することなど、北朝鮮で「主体」として述べられた要素の多くが中国からの影響を受けたものであることが分かる。それでは、北朝鮮においては、マルクス・レーニン主義の具現と自主的な展開がどのようになされたのであろうか。

（２）金日成・北朝鮮（北部朝鮮）におけるマルクス・レーニン主義の具現

（ｉ）解放直後から建国までの北部朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の受容

抗日戦争期の中国では、帝国主義、封建主義、官僚資本主義を社会の主要な敵と見なした[398]。他方、日本の植民地下にあった朝鮮では、何よりも「日帝」から解放されることが優先的な課題であり、「日帝」及びこれに連なる「親日派」を社会の主要な敵と見なした。だが、朝鮮人共産主義者の間では、「マルクス主義の古典では、労働階級の階級的解放が第一義で、民族的解放は二義的だとしている。とはいえ、朝鮮はまず日帝の基盤から脱してこそ、労働者、農民が階級的にも解放されることができるのではないか」という苦悩を有した[399]。こうして、朝鮮と中国の共産主義者たちは、帝国主義に反対するという意味では志をともにしたが、それぞれの自国内での課題は異なった。従って、マルクス・レーニン主義の受容やこれを如何に自国で具現するかという過程も異ならざるを得なかったと思われる。

こうしたことに加え、金日成は、東満における抗日武装闘争での経験によって中国に対して、解放後の過程では北部朝鮮内において傍若無人に振る舞う光景を目の当たりにし、ソ連に対して警戒心を有していた。だが、他力による解放、「日帝」35年の影響、自国が小国である上に南北に分かれて軍政が敷かれている現実、中国にやや遅れて後発的な社会主

[396] 前掲、『マルクス主義中国化90年』652頁。
[397] 同上、694頁。
[398] 前掲、『毛沢東選集 第1巻』3-11頁。
[399] 前掲、『回顧録（1－3)』217頁。

義建設を進めていることなどに鑑みたとき、まずは自らの力を養った上で自己主張を行うべきだと考え、解放者であるソ連共産党のマルクス・レーニン主義に従い、同じ後発的社会主義の中国の経験に学ぼうと考えざるを得なかった。こうして金日成は、中国で主張された「我々の理論は、マルクス・レーニン主義の普遍真理と中国革命の具体的な実践を合わせたものである」[400]という考えに共感を抱き、「マルクス・レーニン主義は教条ではなく実践の武器として、真理の基準を抽象的な理論ではなく朝鮮革命という具体的な実践から探そう」とすることにした[401]。

また、最終的には自国での共産主義社会実現を目指す毛沢東と金日成は、ともにマルクス主義の唯物論を継承した上で、毛沢東が「マルクス主義の最も本質的なものは、マルクス主義は生きた霊魂で、具体的な状況を具体的に分析する」と述べれば[402]、金日成は「我々は、朝鮮の世界史的普遍性とその特殊性を正確に認識することにより、朝鮮問題を正当に解決することができ」るとした[403]。さらに、金日成は、「マルクス・レーニン主義も我が国の現実と結びついてこそ、我が革命の威力ある武器となる。……独自性と自主性を失えば、修正主義と教条主義、あらゆる左右の機会主義を犯すことになり、結局は革命と建設事業を失敗に陥れることになる」と主張した[404]。要するに、毛沢東はマルクス主義の一般原理を中国に創造的に適応しようと考え、金日成はマルクス・レーニン主義の真理を北部朝鮮の実情に合うように適用しようとした。こうした相似や相違は、解放者であるソ連共産党のマルクス・レーニン主義に準じ、やや先に歩みを進める中国の経験に学ぶ上ではある種必然的であったとともに、朝鮮独自の特殊な状況によるものでもあった。

それゆえ、「マルクス・レーニン主義の革命的な理論の力は、客観的情勢において方向を定め、客観的変動の内部的な関係を理解するのに有益で、変動の行程を予測し、また現在の変動が如何に発展していくかのみならず、今後も如何に発展していくのかを認識させる可能性を党に与える」と[405]、ソ連共産党が教えるマルクス・レーニン主義に準拠しつつ、さらに、「ボルシェビキ党隊列の唯一鋼鉄のような規律は、常に全ての成果の根本的な前提条件になったということを先進共産党の経験が訓示している」と述べながら[406]、これを北部朝鮮に援用しつつ、「各党委員会は、全ての党員らの思想的及び組織的な統一のために闘争することを共産党北部朝鮮分局第三次拡大執行委員会は要求する」とした[407]。

また、先進共産党の指導者であるレーニンは、「革命的理論なしには、革命的運動もあり得ない。先進的闘士の役割は、ただ先進的理論を指導に仰ぐ党こそが実行できる」と語り[408]、

---

[400] 前掲『マルクス主義中国化 90 周年』498 頁。
[401] 前掲、「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて」569 頁。
[402] 前掲、『毛沢東選集 第 1 巻』300 頁。
[403] 前掲、『北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録』33 頁。
[404] 前掲、「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて」561 頁。
[405] 前掲、『党の政治路線及び党事業総結と決定　党文献集（一）』17 頁。
[406] 同上、14 頁。
[407] 同上。
[408] 前掲、『党の政治路線及び党事業総結と決定　党文献集（一）』16 頁。

社会主義を目指す諸国家では、何よりもまず社会主義理論を指導に仰ぐ共産党の領導が必要であると述べているのだから、北部朝鮮においても、「人類の私有的発展の最高産物であるマルクス科学で武装された無産階級の前衛党」[409]である共産党の建設を進めるべきであるが、北部朝鮮では、南北に分かれて軍政が敷かれたために共産党の分局を設置し、さらに新民党と合党することで労働党が誕生したのだった。こうした特殊性を有するがゆえに金日成は、「共産主義者が労働党に加入すると言っても、マルクス・レーニン主義を捨てるということではない。また、捨てることなどできない。逆に、共産主義者が朝鮮革命の現段階において要求する労働党員となることにより、一層徹底したマルクス・レーニン主義者になるということだ。とはいえ、マルクス・レーニン主義を理解できない人も、民主主義のために積極的に闘うならば、労働党に加入することができる。彼らが意識的にマルクス・レーニン主義を理解できなくても、愛国主義的に、民主主義のために戦うことによって、彼らは現実において進歩的な役割を果たしている。従って、現在の民主朝鮮において民主主義的な先鋒者は、誰でも労働党に入ることができる」と主張した[410]。

すなわち、一般的にはマルクス・レーニン主義で理論武装された一群によって思想的・組織的統一が図られた、無産階級の前衛党たる共産党が樹立されるべきである。しかし、「日帝」による植民地下で封建的な資本主義を経験し、その残滓が完全には払拭されず、さらに他力による解放によって幾つかの政治勢力が乱立する北部朝鮮の状況下では、そうした理念的な共産党の樹立は見込めない。また、同様の状況から前衛党たる共産党を先に樹立し社会主義建設を行うべきであるが、それも現状では望めず、従って民主主義国家建設を目指すという北部朝鮮の国内状況を優先視したのである。無論、上の主張は、そうしたマルクス・レーニン主義の真理を北部朝鮮の実情に合うよう適用しようとした論理であるとともに、金日成が自らの下に権力を集中させようとする思惑も孕ませていた。このことは、合党一年後の朱寧河（ジュ・ニョンハ）の報告でも確認できる。

「我が党の創立以後一年間は、唯一の思想的統一のための闘争の一年であったと言って良く、党の組織的原則と鋼鉄のような規律確立のための闘争の一年でした。……我が党の前身である朝鮮共産党北部分局の第三次中央拡大執行委員会は、党の思想統一と組織的原則の樹立のためのもっとも重大な意義を有する会議でありました。その 1945 年 12 月、それは我が党を金日成同志が直接指導なされたからです」[411]。

また、北部朝鮮の特殊事情を踏まえたマルクス・レーニン主義の具現は、広範な大衆を糾合することにも現れた。この際には、中国共産党の経験が模倣された。金日成は、「民主主義共和国の樹立を当面の任務とすると同時に、共産主義社会を建設することを最後の目

[409] 前掲、『北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録』38 頁。
[410] 同上、64 頁。
[411] 朱寧河『北朝鮮労働党創立二周年と朝鮮の民主化のための闘争でのその役割』平壌・北朝鮮労働党中央本部宣伝扇動部、1947 年 9 月 20 日、8-9 頁。

的」とし[412]、その際に、「『工場は労働者に』とか、『土地は農民に』などのような共産党の基本綱領は不変である」ものの、「ソビエト政権を云々するのは早すぎる」と断じて[413]、それよりも「独自性と独立性を忘れず、もっとも民主主義的であったがゆえに、民衆が従ってきた中国共産党」を見習い[414]、その上で民族的な唯一戦線あるいは民族統一戦線を形成するべきであるとした。

従って、「経済改革は、勤労大衆の現実的な生活で必然的に要求される経済的条件を満たすだけでなく、民主主義建設の基本になる」とし[415]、「北朝鮮労働党綱領は、特に経済的項目が多かった」。とりわけ、「個人所有権を保護し」、「産業及び商業において個人の創発性を発揮させる法令は、朝鮮民族の資本発展のために必要」であると認め、「人民の生活必需品を生産するためには民間産業の発展」が必須であるとし、その施策を講じた[416]。こうした方向性は、より多くの大衆の支持を得ようとしたものであったが、それは「日帝」35 年の植民地下で封建的な資本主義を経験し、その残滓が完全には払拭されていない北部朝鮮の特殊事情を反映するものでもあった。このように、解放後の北部朝鮮の状況に鑑み、金日成は何より内部の糾合を図り、民主主義国家建設を当面の課業に掲げ、ソ連共産党が教えるマルクス・レーニン主義に準じつつ、中国の経験を活用した。

このような、解放後の北部朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の具現は、別の視点から言えば、次のような過程から振り返ることもできる。中国でのマルクス主義や社会主義運動の発展に比べ、植民地朝鮮では、共産主義運動も朝鮮半島以外の中国の各地域、ロシア極東・シベリア地域に分散した。こうして解放後も、大きくは南北に分離され、北部朝鮮だけでも国内派、ソ連派、延安派、パルチザン派に分かれた。ところで、毛沢東の「異質の矛盾は異質の方法でしか解決できない。……植民地と帝国主義の矛盾は民族革命戦争の方法でしか解決できない」という観点からすれば、ソ連が帝国主義との闘いに勝利し、それによって朝鮮は植民地から脱したという他力の解放は特に問題ではない。それよりも問題なのは、朝鮮王朝が日本をはじめとする帝国主義列強により滅んだ原因も、朝鮮共産党組織が没落した原因も、外部勢力の介入と内部における派閥的対立にあると認識している金日成にとっては、自らを中心に如何に統合を図るかということであった。

従って、金日成は、ソ連軍政の意向に従いつつ、思想の凝縮に勢力を注いだ。ソ連軍政と分局の意図を踏まえて朝鮮共産党は、「文化思想は、政治経済の人間の精神生活に反映された意識形態であり、政治条件の変動によって移行されるもの」とし、「1917 年から 1919 年以後の民族文化思想の勃興と、1921 年以後の共産主義思想が進歩的文化人の精神を領導した」と主張して[417]、共産主義思想の優越性を誇示した。すなわち、マルクス・レーニン主

---

412 前掲、「金日成将軍述　民族大同団結について」13 頁。
413 同上。
414 同上、19 頁。
415 前掲、『北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録』69 頁。
416 前掲、『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①』92 頁。
417 朝鮮共産党宣伝部発行『民主主義と朝鮮建設』朝鮮共産党中央委員会宣伝部、1946 年 3 月 10

義に依拠する共産主義思想を基盤に、それを朝鮮的なものに合わせたのが朝鮮での民主主義文化であるとした。その際、「民主主義文化は、朝鮮民族の伝統的な文化蓄積から有機的に成長し、世界人類の精神文化の富を合理的に吸収した上で、長期の闘争を通じて形成されたものである」と主張された[418]。このように、朝鮮的要素を含ませた共産主義思想での凝縮を試みる一方で、金日成はスターリンの名を借りた党の結束と大衆の取り込みを図った。

「スターリン同務は、一般党員らの意志統一と彼らの活動を支える絶対的中心がなければ、党の鋼鉄のような規律はあり得ない」と述べたと言い[419]、党の結束を促した。また、「スターリン同務は、ボルシェビキらが広範な人民大衆と連絡を密にするときには無敵であると言い、反対にボルシェビキらが人民大衆から離れ、彼らとの連絡を無くし、官僚主義的色彩を帯びると、全ての力量を失い、有名無実なものになる」と語ったように[420]、党は大衆と結びつかなければならないことを力説した。その上で、「人民群衆は愚物ではなく聡明だというレーニン同志の指示は、土地改革事業の中ですでに実際の教訓を与えた。このように党は人民を指導し、人民から学べというスターリン同務の高貴な金言は、我が党と党員らに対する新たな指針になっている」と述べ[421]、スターリンの威光と論理を借り受けながら、金日成は自らの下に党と大衆が結集するよう発言を繰り返した。そうしてまた、「我が党は、群衆のうちで、群衆と結びついた連繋の中で、成長する党になるべきです。我々はいつも勤労大衆の利益を擁護し、代表するだけではなく、全人民大衆の着実な指導者になるべきです。群衆を民主主義路線に導き、動員し、彼らを我が党の周りにしっかりと団結させるべきです」と主張した[422]。

以上のように、解放直後から建国までの北部朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の具現と自主的な展開は、それまで朝鮮が置かれてきた実態や現実の状況を踏まえつつ、党建設とそこでの思想的・組織的統一、社会に集散する各層の糾合の側面で、ソ連共産党のマルクス・レーニン主義に準じ、中国の経験を取り入れる形で進んだ。また、それは金日成が党権力を形成していく論理として活用されていった。

（ⅱ）建国から主体思想成立までの北朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の受容

金日成は建国直前に、彼の思考様式を端的に窺わせる発言を行っている。すなわち、「各モメントにおいて、全ての過程の連鎖の中で、特殊な一つを握ることにより、全ての連鎖を引っ張ることができるような、つまり全ての戦略的成果を得るための条件や準備が可能な特殊な鎖を得ることが重要であるとスターリンは述べた。重大なことは、党の目前にある様々な任務の中で、解決の中心となり、それを実施することが他の当面する問題を成果

日、20 頁。

[418] 同上。

[419] 前掲、『党の政治路線及び党事業総結と決定　党文献集（一）」11 頁。

[420] 前掲、『党の政治路線及び党事業総結と決定　党文献集（一）』11 頁。

[421] 同上。

[422] 前掲『北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録』27 頁。

的に解決するのを保障するような当面任務を選択することである」というものである[423]。この発言は、毛沢東が『矛盾論』で述べた矛盾の特殊性と普遍性の中で、主要矛盾を重点的に解決することを強調した部分と似ている。しかし、金日成がここで主張しているのは、多くの矛盾の中でどれを主要の矛盾と見なすかという選択の重要性であった。言わば、問題の解決やその方法よりも、何を問題として選択的に取り上げるかということが金日成にとっては重要なことであった。

それは、毛沢東が「唯物弁証法は、事物の発展が事物内部の矛盾性にあるとし、社会の発展も外部要因ではなく主に内因によって決まる」と認識し[424]、共産党内部での矛盾を克服することにより外部世界と対峙しようとしたのに対して、金日成は常に外部の脅威に立ち向かう方法として内部における変化を要求していたことと関係する。このことは、朝鮮半島が常に「北からの強大な漢族の来寇を防御し、南からの倭賊という敵の侵略」をはねつけてきた歴史[425]、逆に言えば、常に外部からの侵略の脅威に苛まれてきたという歴史観と、しかし「内在的条件よりも外来の情勢により生じた朝鮮問題は、独立完遂と国家の将来のために、国際親善と協調を忘れてはいけない。『自主独立』と『民主建国』という建国理念を固守し、国際民主主義潮流に合流」しなければならないという[426]、常に大国の影響を受けざるを得ない現実、そして国の滅亡や植民地に陥った要因を党争や内部分裂とする教訓から形作られた。つまり、大国間の世界的大問題に関与したり解決したりできない立場の朝鮮は、その下に提起される諸問題に対して自らの独立を得るためには何に対処しなければならないかを見極めないといけない。そこで選択の問題が重要となる。また、何に対処しなければならないかということを離れて、どう対処するかということを重視してしまうと、党争や内部分裂を醸してしまう。それゆえやはり、何に対処しなければならないかという選択が重要な問題となるのである。

こうして、金日成は、自らの下へ権力を集中させることとともに、国内におけるあらゆる物事の選択権を得ることに固執した。主体を確立することにおいて何が「主体」なのかを判断・決定する権限を重視したのも、主体思想形成においてマルクス・レーニン主義の普遍的真理と他国の経験を自国へ創造的に適用する判断・決定者が金日成であることを明確にしてきたのもそのためであった。従って、毛沢東と金日成は同じく思想領導を重要視したにもかかわらず、毛沢東は「百花斉放、百家争鳴」の文化政策を採用したのに対し、金日成は「唯一思想」への収斂を要求した。それは、金日成の処世術でもあった。

このため、一旦「主体」が確立されてしまうと、実態的な外部の影響は捨象され、主体的な様相のみが強調されることとなった。1955 年 12 月の「主体」に言及した演説の中で、「ソ連式が良いとか中国式が良いとか言いますが、これからは我々式を作る時になったの

---

[423] 同上、36 頁。
[424] 前掲、『毛沢東選集 第 1 巻』290 頁。
[425] 『人民軍各部隊扇動員会議で陳述した金科奉同志の演説』朝鮮人民軍総政治局、1951 年、91 頁。
[426] 前掲、『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録』18 頁。

ではないでしょうか」と言ったとき、その重点となっていたのは、これと併せて述べられた「引き続き根気強くソ連に学ぶべきで……その経験の神髄を学ぶのに重点を置くべき」ということでもなければ、「やれソ連式が良いとか、やれ中国式が良いとか言って争いました。これはまったくつまらないことです」ということでもなく、「我々式を作る」ということであった[427]。

こうして、朝鮮戦争の時期には、「干渉者らとの武装闘争において、高貴な我々の同志である中国人民志願軍部隊は、我々を堅実に助けています。我々の勝利の担保は、朝鮮人とソ連人民との偉大な親善です。また干渉者らとの闘争において我々に兄弟的援助を与える中国人民と朝鮮人民との親善は、我々の勝利の担保です」と語られていたが[428]、中国人民志願軍の撤兵後は、「抗日遊撃隊革命伝統継承を強調しつつ、朝鮮問題を朝鮮人自身の手で、中国人民志願軍がなくても侵攻を防げる」と[429]、中国人民志願軍の存在のほか、ソ連・中国人民との親善は捨象され、主体的な自らの存在が強調されることとなった。

さらに、「マルクス主義弁証法は、全ては変化すると教えています。我々の事業も不断に変わり、人々の意識も変わります」と語りながらも、「1957 年の共産党及び労働党代表が会議で採択したモスクワ宣言は、現代修正主義が国際共産主義運動の主な危険だと指摘し」ているとして[430]、間接的にソ連の変節を批判し、自らは「米帝国主義者と直接に戦っている」革命観は絶対に捨てないと主張した[431]。こうして、ついにはソ連を「現代修正主義」であると名指しして、自らを「マルクス・レーニン主義の純潔性を守る」存在とし、国内外のあらゆることの選択権を得ることを前提とし、主体思想を成立させたのは、すでに前章までに述べた通りである。

以上のように、建国から主体思想成立までの北朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の具現と自主的な展開は、「主体」が主張されるまでは、朝鮮戦争における中国人民志願軍、ソ連人民・中国人民との親善への言及に鑑みて、基本的にソ連共産党のマルクス・レーニン主義に準じ、中国の経験を取り入れる形で進行したと考えられる。だが、一旦「主体」が確立されたあとは、実態的な外部の影響は捨象され、主体的な様相のみが強調されることとなった。すなわち、外部の影響は意識的に捨象されただけであって、実態的には存在していた。従って、ここにおける朝鮮的な特質ということで押さえておかなければならないのは、北朝鮮にとっては選択の問題が重要であるように、自国がマルクス・レーニン主義的国家であるということは不変であり、依然としてそうであるということよりも、自らが「マルクス・レーニン主義の純潔性を守」っているという選択の問題のほうが重要であ

---

[427] 前掲、「思想活動について教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために」565 頁。
[428] 前掲、『人民軍各部隊扇動員会議で陳述した金枓奉同志の演説』15-16 頁。
[429] 金日成「朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である」『金日成著作集 第 12 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1981 年、94 頁。
[430] 金日成「党組織事業と思想事業を改善・強化することについて」前掲、『金日成著作集 第 16 巻』321 頁。
[431] 同上。

ると考えていることである。また、如何にこの時期、社会主義建設を進めるために、「農業協同化」、「千里馬運動」、「青山里精神」などの大衆路線において中国を模倣しようとも、そうした社会主義建設においてどう対処したかということよりも、自らが自らの革命のために社会主義建設を行ったということ自体が重要であると考えられていることである。

（ⅲ）主体思想成立後の北朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の受容

主体思想において、毛沢東思想の「認識の主体は、物質世界における発展の最高産物である人類」のような哲学的内容が構成されるのは、本研究で主張する「（狭義の）主体思想成立」後のことである。より具体的に言えば、1970 年代に入り、黄長燁ら哲学者の尽力により、「主体思想は、人間を中心に据えて、哲学の根本問題を提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を明らかにし」、「人間中心の世界観的原理」を備えるようになった[432]。

その後、主体思想が現実の政治・社会的な思考や方針の判断基準という在り方から新転回を遂げるのは、金正日が朝鮮労働党の思想部門を掌握するようになってからである。そこでは、金日成の思想である主体思想が（広義の主体思想である）「金日成主義」に包摂されることになった。さらに、主体思想を基軸とする金日成主義は、「党の唯一思想体系」の確立と連携し、「全社会を金日成主義化する」ための体系を備えなければならない思想となった。言い換えれば、主体思想は北朝鮮の論理において、金日成の思想として独創的であり、普遍的な意味で「最高の思想」でなければならなくなった。

ちなみに、金正日の下で主体思想が新転回を遂げなければならなくなったのは、彼が金日成の後継者に内定したからである。北朝鮮では、金正日が金日成（首領）の後継者であるのは長子（長男）だからではない。第一に、金正日は首領に対する忠実性がもっとも高く、首領に対する絶え間ない忠誠心を有した領導者だから首領の思想をそのまま受け入れ、それを不断なく深化・発展させていく能力を有しているがゆえに後継者なのである。その背景には、国際共産主義運動の歴史に鑑み、革命の裏切り者は一様に指導者の思想を抹殺したという教訓がある。第二に、金正日は首領の思想を完全に把握でき、首領の思想をどう発展させていくかの方向を理解し、また思想理論的な活動を不断に展開することができる優れた思想理論的な叡智を有するから後継者なのである[433]。これは言い換えれば、金正日が金日成の後継者である限り、金日成の思想を不断なく深化・発展させ、思想理論的な活動を継続して行わなければならないことを含意しているのである。こうして主体思想は、マルクス主義との比較、独創性、普遍性の観点から、「朝鮮で創始された思想であるものの、その普遍的な真理性を持った世界運命の唯一の指導思想」として説明づけられることにな

[432] 金正日「主体哲学の理解で提起されるいくつかの問題について（1974 年 4 月 2 日）」前掲、金正日『主体思想について』1 頁。
[433] 2016 年 8 月 22 日、筆者が朝鮮社会科学院で受講した講義内容に基づく。

った[434]。

マルクス主義との比較では、次のような側面で主体思想の優越性が主張された。第一に、マルクス主義の限界は、時代性にある。「こんにちの時代の一般的な特徴は、人民大衆が世界の主人、自己運命の主人に登場した新しい時代であるということである」。その新しい時代全てにマルクス主義は対応できないが、「世界の広範な人民が如何なる国の人民たちも、自主性を蹂躙するのを許さず、運命の主人として登場し、自らの運命は自主的に創造、開拓する時代の要求を要求しており、これを反映したのが主体思想である」という[435]。

第二に、マルクス主義には、内容的な限界がある。マルクス主義の哲学的世界観は、「世界は物質となって、変化・発展する世界である」という。これは、「人間が生きている現実の本質的な特徴を明らかにしていない。なぜなら、人間も自然存在的なものも、全て物質だからである。しかし、世界の発展において発展レベルが異なる中で人間は、互いに異なる役割をし、また人間が世界の主人の位置を占め、世界発展で人間が決定的な役割を行うことが重要な特徴である」ことを指摘できていない。また、マルクス主義は、社会を土台と上部構造からなり、変化と発展は自然の法則のように、客観的な法則によって行われるとし、「社会的存在が一次的で、社会存在の変化つまり物質的条件の変化によって社会が発展する」という社会的見解を出したが、これは社会運動も自然の運動も、まったく同じ原理で説明し、社会運動だけが持っている固有な特性を表していない。これに対して主体思想は、「社会は如何なる自然的な存在とも異なり、人間というもっとも発展された存在が生き、人間の活動は自然の活動とは根本的に異なる特性を持っている」と判断し、「人間が生きている社会と、人間の運動である社会的運動の固有の特徴による社会的運動の合法則性を明からかにし、社会を改造し、変革していく活動をもっとも正確に行う原理を明らかにした」という[436]。

第三に、マルクス主義によれば、「世界は物質となり、変化・発展する互いに関連づけられた観点」、つまり唯物弁証法的な観点を与えることで終わり、人間が具体的に今日の世界でどう自分の運命を開拓していくべきか、運命を開拓するためには具体的にどうすればいいかなどの具体的な方法を有していない。そうしたマルクス主義に比べ、主体思想は、「人間を中心に置き、人間の利益から出発して、人間の活動を基本に、世界の変化と発展を展望するがゆえに、人間が決定的な役割を行い、人間の活動を強化し、人間の役割を高める方法で、世界の変化と発展、人間の運命を開拓して行く途を明らかにした。例えば、自らは自らの運命の主人であり、自らの力で自らの運命を開拓して行くべきだという教えであるから、沈黙するのではなく、自らが主人となり、運命を主動的に開拓すべきだという観点と立場を持つことができる」。それ以外にも、固有な意味での主体思想は、「一般的な世界観と社会観を明らかにしているのみならず、党と国家建設において堅持すべき原則まで

[434] 同上。
[435] 同上。
[436] 同上。

明らかにし」、革命の指導思想としての備えるべき完成された構成体系を持った思想であるという[437]。

第四に、主体思想は、マルクス主義にはない内容を有している。つまり、革命理論がより豊かで、その体系自体も、金日成の理論から金正日の理論にまで広がりを有し、このより広がりを持った体系は、「金日成・金正日主義」と呼ばれている。マルクス・レーニン主義革命理論は、主にヨーロッパの資本主義国、またロシアをはじめとして、資本主義国で社会主義革命を如何に遂行するかという社会主義革命理論だけを示し、主に社会制度を改革、変革させるための理論に過ぎず、反帝・反封建・民主主義理論のように、植民地反封建社会で革命運動をどのように行うべきか、そこで人間をどう改造すべきか、自然をどう改造すべきかについての理論はない。これに比べて主体革命理論は、すべての段階、つまり反帝・反封建・民主主義段階、社会主義革命だけではなく、社会主義建設段階、資本主義国で革命をする理論だけではなく、植民地・反植民地段階で革命を行う国の革命理論、自然を改造する理論、社会を改造する理論、人間を改造する理論を全て包括している。もちろん、そこでは「自らが主人となり、運命を主動的に開拓」する際に、北朝鮮では「一人は全体のために、全体は一人のために」とか、「個人の利益より、集団の利益を考えるべき」など、あくまでも集団の属性を優先すべきことを前提にしているという[438]。

また、主体思想の独創性の観点からは、領導方法が強調される。北朝鮮のように反帝・反封建・民主主義革命に続き、社会主義革命と共産主義革命が継続的になされる場合、革命の動力性が非常に複雑であり、反帝・反封建・民主主義革命の場合には、労働者、農民のみならず、さらに良心的な民族資本家、宗教人、知識人など、広範な階級と階層が革命に参加し、特に社会主義・共産主義建設の場合には、すべての創造的な事業に一層広範な群衆が動員される。このように広範な階級と階層を有する大衆を革命に導き、革命を正しく推進するためには、大衆を如何に導くかという大衆領導方法の問題が切迫に要求される。こうした朝鮮の現実的な要求に合わせて、主体思想は領導方法を明らかにしている。領導芸術という言葉自体は、1940 年代の毛沢東の著作に見ることができるが、朝鮮のように体系的には論じていないという[439]。

そして、主体思想の普遍性の観点からは、世界人民の要求と志向に見合う普遍的で真理性を持った思想であることが強調される。普遍的で真理性を有する証拠としては、現在世界の主人に躍り出た広範な人民たちが主体思想を信奉し、多くの国と地域で主体思想を研究する組織を創設していることを挙げている。それは、主体思想が時代の要求を反映し、世界的な真理性と普遍性を有する思想だからであると言え、それのみならず世界には、民族解放闘争を展開する国、民族の独立を達成し、新たな社会建設を行っている国、社会主義を建設しようとする国など多種多様で、また同じ新興国でも、社会地理的な条件など具

[437] 同上。
[438] 同上。
[439] 同上。

体的条件が異なる中で、唯一の処方はないと考えられているが、主体思想は「自国の実情に合わせて、自らの力で行うべきだ」という理念を与え、その理念が世界に影響を与えており、ここに主体思想の普遍的で真理性の妥当性を与えているという[440]。

このように、主体思想は、単に現実の政治・社会的判断基準という枠を超え、「金日成主義」という人間社会の生を規定する枠組へと措定されることで、マルクス主義との比較、独創性、普遍性の観点から新転回を遂げることになった。そこでは、マルクス・レーニン主義でさえ捨象される対象となり、主体思想のみが強調されていくこととなった。しかし、主体思想の創始者である金日成も述べるように、「元来、事物の発展は、継承と革新の二面性を持っています。継承と革新のある一面のみを見ることは形而上学的な観点」であろうし[441]、「すべての事物現象には、必ず肯定的な側面もあり、否定的な側面もあるもの」だろう[442]。しかし、上述のように、今や主体思想は継承と革新の一面のみを強調し、肯定的な側面しか主張されなくなってしまった。そうした無謬性は、逆に論理を糊塗して、現状の自己正当化を再生産し続けるという脆弱性を孕ましているように思われる。

以上のように、主体思想成立後の北朝鮮におけるマルクス・レーニン主義の具現と自主的な展開は、自らこそが「マルクス・レーニン主義の純潔性を守って」いると主張することでその解釈権を得て、また主体思想がマルクス・レーニン主義に並ぶ思想とならなければならないという国内要請により、マルクス主義との比較によって一層優越し、独創的で普遍性を有する思想として説明づけられていくという形で進行した。

第 4 節　小結

ここまでにおいて論及してきたように、主体思想の原型としての「主体」が形作られるまでに北朝鮮は、ソ連共産党が北部朝鮮・北朝鮮に持ち込んだマルクス・レーニン主義、より具体的には革命論、前衛党の結成とその思想的・組織的な統一論、そしてスターリンの人民大衆観などを受容し、また中国が革命経験で培った、自らを研究し、顧み、実在状況と結びつける社会主義建設の方法論、民衆の支持を得るために、実利を重視する大衆路線、革命の尖兵は民衆の手本となる共産主義的作風、自力更生により自らの力で問題を克服する自主的立場などを援用してきた。それは、金日成が毛沢東のように、自らマルクス主義を摂取し、先達に学び、これを自国の革命へ創造的に適用しようと試みる能動的な共産主義者だったことに加え、後発的な社会主義国家の指導者となるものの、共産党の指導者という点で、毛沢東が金日成の先達となっていたからである。国家建設においても、毛沢東思想の「独立自主、事実求是、群衆路線」に基づく社会主義建設は、北朝鮮が学ぶべき参照経験となり、外部思想の国内適用や「農業協同化」、「千里馬運動」、「青山里精神」、「三大革命小組」等で展開された民衆の党の下への糾合、大衆動員など大衆路線に応用さ

---

[440] 同上。
[441] 前掲、『主体的革命偉業の完成のために』9, 87 頁。
[442] 金日成「平安南道の農業部門における当面の課題について」『金日成著作集 第 30 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1987 年、100 頁。

れていった。

しかしながら、植民地経験、他力による解放、南北分断などの朝鮮の特殊事情、常に自国が大国の介入と侵略に苛まれてきたという歴史観により形成された抵抗的民族主義、そして内部が路線対立と派閥的確執を繰り返し分裂してきたという経験的な教訓により、ソ連共産党のマルクス・レーニン主義に準じ、中国の経験を取り入れる中でも、朝鮮的な特質が生み出されていった。それは、思想・思考的には、毛沢東が事物の発展において内因を重視し、共産党内部の矛盾の克服を第一義としたのに対して、金日成は外因の浸透を防ぐために内部の変化を迫るという相違として表れた。また、それゆえに金日成にとっては、外在的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることが重視され、また内部的には分裂を阻止するための判断・決定権を得ることが重視されるという政治過程として表れた。そうした行動と態度を規定する思考が、思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛と自主独立外交として一括される、主体思想の朝鮮的特質であると言える。

また、このように主体思想は、自らが何を選択するかを第一に重要視し、選択されたものを自らが判断・決定して進めることを第二に重要視する行動と態度を規定する思考であるがゆえに、その範疇外のものを捨象して、自ら重要視されるものだけを強調するという特質を有するが、これは主体思想の特質と言うよりは金日成主義の特質だろう。

第 5 章　主体思想の教化

第 1 節　問題の所在

2014 年 8 月、筆者は北朝鮮に滞在していた。そこで案内員から聞いたある小学校生徒の優秀作文の内容が強く印象に残っている。「金正恩元帥様が自分の夢の中に登場する話だ。ある時、少年が通う小学校に金正恩元帥様が訪ねて来られた。一通り学校を参観されたあと、最後に元帥様が生徒たちと記念写真を撮ることになった。しかし、少年だけは撮影に遅れてしまい、写真に収まることができなかった。少年が悔しくて泣いているところに元帥様がお越しになり、何で泣いているのかと事情を尋ねた。事情を知った元帥様は、再びお戻りになり、一緒に写真を撮ってくださった。少年はそんな出来事にとても感激していたところ、目を覚ました。夢とはいえ、少年は何とも言えない幸せを感じていた。そして少年は、将来は軍人になって、金正恩元帥様のそばで、優しい元帥様をお守りするのが夢だと考えるようになった」。

ある人物の優しさにほだされた少年がその人を尊崇し、その身を守ることを夢とする。大変微笑ましい話ではあるが、冷静に考えて、小学校の生徒がある政治指導者の優しさに触れたことで、自国の軍人となり、その政治指導者を守ることを将来の夢とするであろうか。そこには、善悪は別にして、幼稚園の年長から 12 年制の義務・無料教育制度を敷き、国家の指導思想で教養を育む生々しさが感じられる。そして、この話は政府の刊行物や学校の関係者から知ったわけではなく、旅行社のガイドから聞きかじった話であることも重要であろう。こうした逸話は誰かに話したい誇らしい伝聞として、教育現場のみならず、社会全体に浸透しているのである。

また、同じ旅行社の別のガイドの一人は、筆者が「あなたの一番好きな本は何か、北朝鮮の本でお勧めは何か？」と尋ねたところ、間髪入れずに「『世紀とともに』だ」と答えてくれた。「『世紀とともに』は、首領様（金日成：筆者注）の自伝である。ほかの理論的な著作は、大学を卒業しても正直理解しにくいが、この回顧録は小説のようにすらすらと読め、本当に面白い。読み進めると、首領様の記憶力が如何に優れているか感服せざるを得ない。そういう意味でも感激する。80 歳のご高齢で、幼い時の革命活動の場所や出会った人物の名前までも細かく覚えているのは本当に頭が良いと思う。現在も、この『世紀とともに』は、毎日ラジオ放送で 30 分ずつ朗読されている。「ヨンナム山の丘」という放送では、総合大学の授業の内容を大学生の必要知識として放送しているが、毎週金曜日の 8 時 30 分から 9 時までは、この回顧録を読み上げる」。また、筆者が北朝鮮へ向かう飛行機で隣り合わせた北朝鮮男性も「仕事で困ったときには、深夜に首領様の労作を読む。首領様の教えの通りに人間関係を進めると、不思議に仕事が順調に進んだ」と興奮して話してくれた。

北朝鮮国内ではあらゆる場面、場所、時間、媒体を通じて、人びとは指導者に触れ、スローガンを目にして、指導思想を受容することになる。そしてその範囲内で人びとは、興

味・関心や物事への理解・解釈、好悪を形成していくこととなるのではないかと考えられる。

本章では、前章までのところで明らかにしてきた主体思想が、国民へと如何に教化され、どのような手法で国民に内面化されていくのかということについて検討を行う。その中心的な素材として「領導芸術」を取り上げる。領導芸術とは、主体思想を具現化するための技術の一つとされ、人民大衆を動かす方法であり、北朝鮮では「党と軍隊と人民を組織動員させる卓越した首領の組織的手腕と方法、人間の創発性と積極性を啓発・発揚させる妙術」であるとの説明が施されているものである[443]。いわば北朝鮮独自の人民大衆の心を掴む仕組みが領導芸術であり、前章で述べたように、広義の主体思想の独創性を代表する構成要素の一つである。また、こうした領導芸術は、北朝鮮が主張する政治路線を実現するための闘争のなかで、人民大衆を組織・動員する卓越した首領の方法と手腕であるもとまとめられるものである[444]。

こうした領導芸術の一端を明らかにするために、まずは北朝鮮における組織生活と教養体系について概観する。次に、教養体系の中で基礎的な段階に位置づけられる学校教育での五つの教養事業について説明を行う。その上で、金日成の回顧録『世紀とともに』[445]（以下、回顧録）を素材として取り上げ、やや詳細にその内容を分析して、大衆教養の内在的論理を明らかにする。そうした作業を通じて、北朝鮮の指導思想たる主体思想がどのように教化され、また如何なる手法で国民に内面化されていくのかを追求したい。なお、回顧録を検討の材料として用いるのは、それがこんにちの北朝鮮国内において、「革命偉業の将来を照らしてくれる闘争と生の教科書」として喧伝され[446]、様々な場や方法でそれが人びとに活用・普及され、人口に膾炙しているからである。

第２節　北朝鮮における組織生活と教養体系

これまでにも若干触れてきたことであるが、金日成の党権力の確立過程や金正日の下で行われた「党の唯一思想体系」が確立してくる中で、党員証交換事業や工場・企業所・農

---

[443] 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院『政治用語事典』平壌・社会科学出版社、1970 年、189-190 頁。

[444] 「朝鮮語大辞典」『ウリミンジョクキリ』http://www.uriminzokkiri.com、2018 年 8 月 29 日最終アクセス。

[445] 『回顧録―世紀とともに』は、建国以前の時期から自らが死去するまで一貫して北部朝鮮・北朝鮮の指導者であり続けた金日成の回顧録である。この回顧録は、金日成の出生から成長に至るまでの家庭環境や背景、また金日成が主導したとされる抗日武装闘争から北朝鮮建国までの過程について詳しく叙述している。全 8 巻から成るこの回顧録は、1992 年 4 月 15 日の金日成の 80 歳の誕生日を期して、刊行されることとなった。金日成の生前は、第 6 巻までが発刊され、残りの 2 巻は、金日成の死後、朝鮮労働党中央委員会が「委任」という形で要綱や遺稿、党の文庫に保管されている各種資料を基に「継承本」として発刊した。なお、この後の回顧録からの引用の注記は、例えば第 1 巻の第 1 分冊の場合には、『回顧録』1-1 のように略記して記載する。

[446] 「革命の教科書」『わが民族講堂』http://ournation-school.com　2018 年 8 月 30 日最終アクセス。

場などの管理再編を踏まえた作業班・人民班単位の組織化とそのための成分調査事業、党の唯一指導体制[447]などが推し進められ、北朝鮮ではあらゆる人びとが革命と建設から離れて存在することが困難な社会として形成されてきた。言い換えれば、北朝鮮で生活するあらゆる個人は、「革命の『動力』である『核心階層』を確認すると同時に、革命の対象である『敵対階層』をあぶり出して打倒し、その中間にある『動揺階層』を明らかにする工作」の「階級路線」と、「『動揺階層』に分類される農民、商工人などのいわゆる小ブルジョワジーを対象として、これを核心階層に導くための工作」の「群衆路線」の中に包摂されることとなった[448]。

そのようなある程度固定化された身分形成の中で、北朝鮮の人びとは行政的な住民所属組織である「人民班」や、工場・企業所の作業内容ごとに区分された「作業班」、協同農場の作業班を構成する農作業単位の「分組」などのいわゆる「単位」に属し、家族生活や職場生活を送っている[449]。また、北朝鮮の人びとは、朝鮮労働党を頂点とする「社会主義国家建設のための生産あるいは管理組織に所属することと規定され、どの組織にも帰属しない者は食料などの公的な供給をはじめ国家による生活保障の対象とならないばかりでなく、国家の社会体制を受け入れない反党・反革命的な不純分子として厳しい監視対象とされる」ような、「組織生活」を送っている[450]。

こうした組織生活は、義務教育に組み込まれている幼稚園の年長から始まることになる。義務教育は、幼稚園年長から高級中学 3 年までの 12 年間であるが、学校教育体系以外に小学校の高学年になると、「少年団」に所属しなければならない。少年団では、「農村への遠征や屑鉄収集といった課外活動を通じて集団生活の基礎を身に付ける」こととなる[451]。小学校を卒業すると、義務的に「金日成・金正日社会主義青年同盟（社労青)」への入会を余儀なくされる。そこでの組織生活の優劣は、進学や職場配定に大きく影響されるという[452]。社労青は、30 歳になるまでの青年組織であり、「職場に配定されてからは職場の社労青の一員

---

[447] 党の唯一指導体制の樹立は、金正日が党の組織指導部と宣伝煽動部を掌握する過程とともに進行した。金正日によれば、「首領の思想と領導を全党と全社会に徹底的に具現するための指導体制であり、首領の意図通りにわが革命を前進させ、勝利に導いていくための指導体制であり、首領の開拓なさった革命偉業を代を継いで最後まで完成するための指導体制」が党の唯一指導体制であるという。金正日「党事業を根本的に改善教化し、全社会の金日成主義化を力強く押し進めよう―全国組織活動家講習会でした結論（1974 年 8 月 2 日）」『主体革命偉業の完成のために』第 3 巻、平壌・朝鮮労働党出版社, 1987 年、173 頁。前掲、『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』85 頁。

[448] 伊藤亜人『北朝鮮人民の生活―脱北者の手記から読み解く実相』弘文堂、2017 年、43-44 頁。なお、「核心階層」、「動揺階層」、「敵対階層」の三つの階層とその下での部類について詳しくは、同書 44-46 頁を参照。

[449] 筆者が数度にわたり北朝鮮で行った現地調査に基づく。

[450] 前掲、『北朝鮮人民の生活』87 頁。

[451] 礒﨑敦仁「北朝鮮住民の意識動態―忠誠心の行方」小此木政夫編『韓国における市民意識の動態』慶應義塾大学出版会、2005 年、125 頁。

[452] 2014 年 8 月 23 日に筆者が丹東市内において北朝鮮人男性に行ったインタビューに基づく。

として忠誠と献身的な労働に全力を捧げる」[453]。「党員になるためには……組織生活の評価と推薦を受けてから入党願書を提出し、一年間の候補党員として組織生活を送り、その間に成分も含めて厳しい審査を経て正式に入党が許される」からである[454]。党員に推薦されるか否かにかかわらず、30 歳になると社労青を脱退して、職能団体（職業総同盟、農業勤労者同盟、民主女性同盟など）に加入する。このように、北朝鮮の人びとは生涯において組織生活に身を委ねることになるといっても過言ではない（図８）。

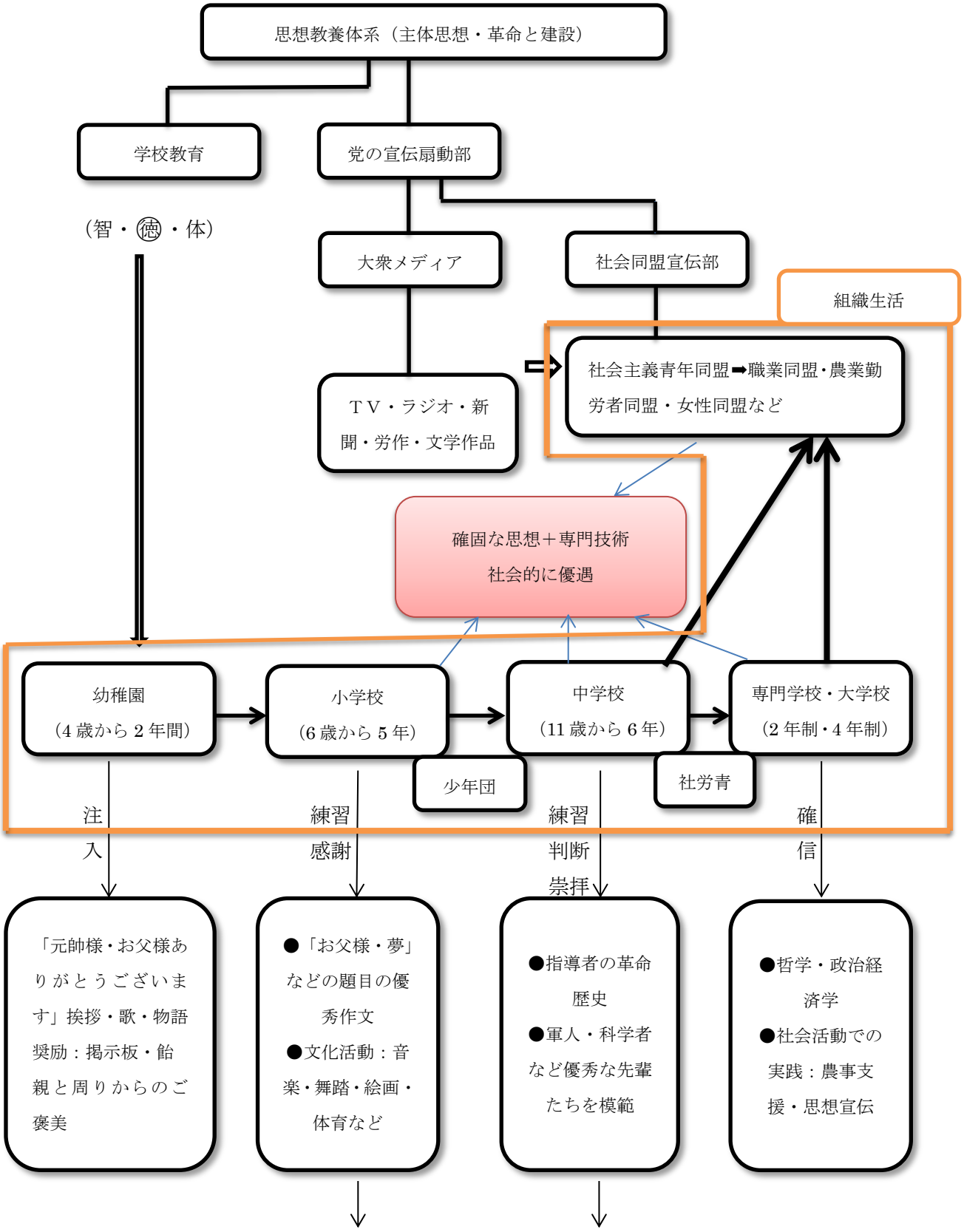
北朝鮮の人びとはこのような単位・組織を通じて思想宣伝事業としての教養・教化を受けることになる。一般党員が「党生活指導」で施される「集体的教養」と「一般的教養」としては、次のようなものがある。「キム・イルソン革命歴史研究室学習、党組織別講演会、群衆講演会、現地教示映画文献学習、指定映画（革命映画）学習、録音講演会、図録解説、各種方式生活学習、講師学習、抗日遊撃隊式・問答式学習競演、集中学習（一週間以上）、肖像画検閲、出版物検閲、録音機カセットおよびラジオ検閲、外国旅行者掌握、学習総和（六カ月に一回）、直管宣伝、職場芸術サークル（宣伝隊）動員組織の各種会議報告書、生活資料、党費受納、各種会議文件・記録の整理、社会安全部住民登録と併せた従業員の住民成分規定事業、幹部推薦登録文件や入党対象者名簿など」であり、報告書以下の作業は、より上部の党秘書とともに行う[455]。

また、「職場組織で行われる学習教養体系としては、毎朝勤務前に行われる読報（『労働新聞』の重要部分を仲間たちとともに精読する学習：筆者注）、月曜学習浸透、水曜講演会、週総和学習がある。月曜学習浸透は通常月曜の夕方におこなわれ、等級別学習によって『主体思想の要求』、マルクス主義に関する学習が行われる。水曜講習会は水曜の夕方に行われ、国家政策、国際問題を取り上げて自由主義的形態の取り締まりの機会となる。週総和学習は土曜の午後に、讃揚歌、労作学習、自我批判などが礼拝のような形式で行われる」という[456]。「労働者たちは普通朝八時に出勤して午後六時に基本日課を終え、その後で一日二時間ずつ思想学習を行う」ということであり、「思想学習は職場別、作業班別、団体組織別にそれぞれ実施され、少年団から始まって六〇歳まで一人残らず行われ、毎週、毎月、毎分期、毎年度の生活総和が課せられる」のである[457]。また、こうした学習教養は、「共同農場においても大差がな」く、「これら以外にもさらに党傘下の勤労者団体別の学習と課題があり、また家庭に戻ると地域に組織された人民班による人民班学習と課題、総和がある」とのことである[458]。

---

[453] 前掲、『北朝鮮人民の生活』87 頁。
[454] 同上。
[455] 同上、90-91 頁。
[456] 同上、94-95 頁。
[457] 同上、95 頁。
[458] 同上。

＜図8＞北朝鮮の教化体系図



❀五つの教養
❀成績・模範的人物・活動の成果
❀より良い学校に進学する機会

出所：筆者作成。

他方、次節で紹介する学校教育における学習教養体系は、1-5-3-3 の全般的 12 年制義務教育の授業科目に組み込まれているものもあれば、主として課外活動や校外活動に組み込まれているものもある。以下参考までに、小学校における 1 週間の授業科目とその配当時間、1 週間の時間割を掲げておこう。

＜表3＞小学校における 1 週間の授業科目[459]

番号	区分 科目名	学年別の週当たりの授業時間			
		1 学年	2 学年	3 学年	4 学年
1	偉大な首領金日成大元帥様の幼児期	1	1	1	1
2	敬愛する領導者金正日将軍様の幼児期	1	1	1	1
3	抗日の女性英雄金正淑お母様の幼児期	1	1	1	1
4	社会主義道徳品性	1	1	1	1
5	国語	8	8	7	7
6	自然	2	2	2	2
7	数学	4	4	5	5
8	音楽	2	2	2	2
9	体育	2	2	2	2
10	図画・工作	2	2	2	2
11	衛生	1	1	1	1

出所：宮塚利雄・宮塚寿美子『北朝鮮驚愕の教科書』文春新書、2007 年、207 頁。原出所は、韓国統一部情報分析局『北韓概要 2000』1999 年 12 月。

[459] 本表及び次表は、後で述べるように、2016 年 4 月に実施から実施され始めた、全般的 12 年制義務教育（小学校は 5 年制）以前の 11 年制（小学校は 4 年制）時に作成されたものである。従って、参考程度に考えた方がよい。

＜表4＞小学校における１週間の時間割

		月	火	水	木	金	土
07:30	学校到着						
07:40	学級別朝会						
08:00～08:45	１時間目	国語	国語	国語	偉大な首領金日成大元帥様の幼児期	国語	国語
08:55～09:40	２時間目	数学	数学	自然	敬愛する領導者金正日将軍様の幼児期	数学	体育
09:50～10:35	３時間目	自然	図画工作	数学	抗日の女性英雄金正淑お母様の幼児期	社会主義道徳品性	数学
10:35～10:55	業間体操						
11:00～11:45	４時間目	音楽	体育	国語	国語	衛生	生活総和
11:45～12:00	終礼						
12:00～13:00	下校・昼食時間						
13:00～16:00	午後課外活動						

出所：同上、209 頁。原注：北朝鮮教育省の課程案（1996 年 3 月）を基礎に以後、時代変化を反映して作成。1 学期 16 週、2 学期 18 週制（夏・冬休み以外に 3 月末に 1 週間春休み）。ハン・マンギル他「北朝鮮教育現況及び運営実態分析研究」（韓国教育開発院、1998）と『北韓理解 2006』を合わせて参照し、筆者が作成。

第３節　学校教育における五つの教養

北朝鮮では、「教育とは、人びとを智・徳・体を兼備した社会的人間に育てる事業」として位置づけており、「人々を深い科学知識と高尚な道徳品性、健全な体力を持った自主的で創造的な革命人材、主体革命偉業の頼もしい継承者に育てる」ことを目的に教育を行っている[460]。こうした教育の中で、とくに「高尚な道徳品性と主体革命偉業の頼もしい継承者を育てる」ために、五つの教養（偉大性教養、愛国主義教養、信念教養、反帝階級教養、道徳教養）を施している。これらを通じて、「すべての新しい世代らが革命的世界観をしっかりと育て、現代的科学技術と健勝な体力を持った全面的に発展された革命人材に育」つと

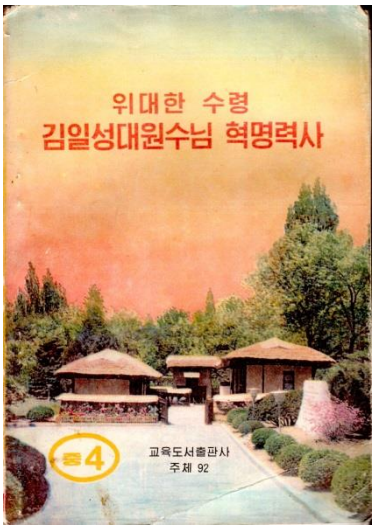
[460] 金日成「社会主義教育に関するテーゼ」（朝鮮労働党中央委員会第五期第一四次全員会議での報告、1977 年 9 月 5 日）『金日成選集 第 32 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1988 年、357 頁。

いう[461]。このために北朝鮮では、「就学年齢になるすべての青少年らに責任を持ち、正規学校で義務的に勉強させる教育制度」、つまり義務教育制度を成立させた[462]。1956 年には全般的初等義務教育が実施され、1958 年からは全般的中等義務教育制、1967 年からは全般的 9 年制技術義務教育、1972 年からは全般的 11 年制義務教育、そして 2016 年 4 月からは全般的 12 年制義務教育（幼稚園年長 1 年、小学校 5 年、初級中学 3 年、高級中学 3 年）を実施し、現在に至っている。

（1）偉大性教養

北朝鮮において金日成は、「幼い時から革命の道へと歩み、あらゆる試練の峠を乗り越えながら、ただ一心に人民の自由と幸福のためにすべてを捧げた共産主義革命家としての輝く生を全うし、そしてもっとも美しくその生涯を終えた偉人の中の偉人である」とされている[463]。その金日成の革命経験、抗日武装闘争、解放と朝鮮戦争、建国後の社会主義基礎建設の歴史とそこでの業績や組織領導を学ぶのが「偉大性教養」である。例えば、中学校第 4 学年で学ぶ『偉大な首領金日成大元帥様革命歴史』の教科書の目次は次の通りである（図９）。

＜図9＞中学校第 4 学年用教科書『偉大な首領金日成大元帥様革命歴史』



出所：筆者の指導教員が入手した教科書の表紙を筆者が撮影。

「第 1 章:偉大な首領金日成大元帥様が朝鮮革命に進み出た開拓の道(1912.4～1931.12)、第 2 章：偉大な首領金日成大元帥様が抗日武装闘争を組織領導（1931.12～1945.8)、第 3 章：偉大な首領金日成大元帥様が新たな祖国建設を組織領導（1945.8～1950.6)、第 4 章：

[461] 同上、402 頁。
[462] 同上、384 頁。
[463] 金正日「偉大な首領金日成同志は永遠にわが人民とともにいらっしゃる」『金正日選集　第 14 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、2000 年 8 月 20 日、145 頁。

偉大な首領金日成大元帥様が祖国解放戦争を勝利の下に組織領導（1950.6～1953.7）、第 5 章：偉大な首領金日成大元帥様が戦後復旧建設と社会主義基礎建設を組織領導（1953.7～1960.12）」[464]。

また、偉大性教養は、「金日成首領様が祖国に築き上げた偉大な業績の恵みで幸福に暮らしている人民たちが金日成首領様を慕い」建立したという銅像や永生塔などの記念碑的建造物、白頭山密営や普天などの革命史蹟地、その他記念館や事績館、博物館、展示館などの校外でも実施される。金日成の生家である「万景台」革命史蹟地はその中の一つである。万景台は、金日成が幼少時代を過ごした場所であるとされ、万景台革命史蹟地には、生家が今でもそのままの形で保存されているという。以下は、筆者が万景台を訪れた際に、偶然一緒となった小学校高学年程度と思われる生徒たちに対して、現地の案内員が説明した内容の録音を書き起こしたものである。筆者が参観した時には、別の案内員が説明を行ったが、内容はほぼ同じであった。

「ここは偉大な首領金日成同志の生家です。偉大な首領金日成同志は、ただ一心に人民の自由と幸福のためにすべてをお捧げになりました。偉大な首領金日成同志は、同志愛について、『友人はもう一つの自分である』とおっしゃった。偉大な首領金日成同志がお亡くなりになったあと、首領様が愛用していた金庫を開けてみたら、そこには金策（キム・チェク）同志と撮影した写真が一枚だけ入っていました。そんな偉大な首領金日成同志は、1912 年 4 月 15 日にご誕生なさいました。万景台は、首領様が幼い時を過ごした故郷の家です。当時、『日帝』から国を取り戻すために、13 歳で革命闘争の道へ進み出られました。それから 20 年後、偉大な首領金日成同志様は祖国を解放してくださいました。偉大な首領金日成同志は、社会主義朝鮮の始祖であり、永遠なる主席です。我々は、偉大な首領金日成同志を離れて、祖国を考えることはできません。万景台は、朝鮮人民の『心の一家』なのです。偉大な首領金日成同志の祖父母は、解放前後を通じて農事を行っておられました。1945 年 8 月 15 日に解放を迎え、それから 2 か月後の 10 月 14 日に、偉大な首領金日成同志は 20 年間お忘れになることがなかった万景台を訪ねられました。首領様のご一家は、貧しくて壺を一つ買うお金さえありませんでした。この水瓶は、140 年前に偉大な首領金日成同志の祖母が、「血の涙」を流しながら購入されたものです。首領様の一家は、12 人の暮らしでありました。ここに飾られてあるのは、偉大な首領金日成同志が 20 年ぶりに祖母との対面を果たした際の写真です。偉大な首領金日成同志の父親は、日本警察に逮捕され、酷い拷問を受け、そのせいで重病となり亡くなられました。母親もまた 40 歳でお亡くなりになりました。偉大な首領金日成同志のご両親は皆犠牲となられ、偉大な首領金日成同志のみが生き残られることになったのです。祖母は、20 年ぶりに故郷をお訪ねになった首領様を

[464] 副教授、学士カン・ホンスほか執筆『偉大な首領金日成大元帥様革命歴史』（中学校第 4 学年用）平壌・教育図書出版社、2003 年、2-4 頁。

裸足で走り出て、お迎えになりました。偉大な首領金日成同志の叔父様が亡くなられた際には、遺体を取り戻すお金さえもありませんでした。現在、この万景台では、偉大な首領金日成同志の 40 年にも及ぶ朝鮮人民を解放して下さった革命の歴史と首領様のご家族の愛国精神を学んでいます」[465]。

偉大性教養についてこれ以上の具体的なところは判然としないが、前出の教科書の前書きには、「首領様の革命歴史は、首領様の非凡な叡智と卓越した領導力、高邁な徳性と闘争業績を総合的に見させてくれるという百科全書的な革命の教科書である」との金正日の言葉と、「我が党の革命の歴史的な根であり、万年礎石としての偉大な首領様の革命歴史は、その内容の豊富さと深奥さ、非常に大きな感化力と生活力を備えた革命の真実なる教科書である」との執筆者の言葉が掲載されており、学校教育における偉大性教養の中心が金日成の革命経験を学ぶことであることが分かる。またこれを通じて、「全ての学生が……自らを主体型の革命家として確固たる準備をなし……革命偉業を……最後まで継承完成するためにあらゆる事柄を打破」する人材となるよう求めていることが明らかとなる[466]。

＜図 10＞金日成の生家「万景台」に飾られている金日成とその両親の写真（左）、万景台へ学習に訪れた小学生とみられる一団（右）

出所：筆者撮影（2011 年 9 月 17 日）。

（2）反帝階級教養

反帝階級教養は、「米帝を頭目とする帝国主義に反対する精神で武装させるための教養」と位置づけられているもので、その教養は、「新たな世代を革命の頼もしい継承者として、社会主義強国建設の主人公として強固に育てるための重要な事業である」とされている[467]。そのために、「搾取と圧迫を受けたことがなく、戦争の過酷な試練も経験したことがない新

[465] 2011 年 9 月 17 日、筆者が北朝鮮で行った現地調査に基づく。
[466] 前掲、『偉大な首領金日成大元帥様革命歴史』5 頁。
[467] 「反帝階級教養を強化するのは現実発展の重要な要求」『労働新聞』2017 年 3 月 6 日付。

たな世代に対して、強盛朝鮮を担う柱となるよう育てるためには、彼らの中に反帝階級意識を深く植え込むべきである」であるとされていることから[468]、学校教育では、一般的な座学のみならず、映像資料の視聴や体験者の回想録の閲読、体験談の聞き取り、実地研修などを実施しているようである。以下では、「祖国解放戦争勝利記念館」を事例に挙げて、その内容を概観する。

＜図 11＞「祖国解放戦争勝利記念館」の入口（左上）、1968 年に朝鮮人民軍海軍によって拿捕された米国の情報収集船「プエブロ」号（右上）、「プエブロ」号を拿捕した英雄（左下）、「プエブロ」号拿捕英雄から体験談を聞く小学生たち（右下）

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 17 日）。

祖国解放戦争勝利記念館は、朝鮮戦争停戦直後の 1953 年 8 月に開館し、2013 年 7 月の「祖国解放戦争勝利 60 周年」を迎え、金正恩の指導により、大記念碑的建築物として改築され、現在に至っている。この記念館は、本館と大田解放作戦の大型パノラマ館、祖国解放戦争勝利記念館、野外武器展示場から成り、80 余の陳列室が備わっている。また、この記念館のすぐ脇を流れる普通江には、1968 年に朝鮮人民軍海軍によって拿捕された米国の情報収集船「プエブロ」号の実物が繋留されている。本館は、地下 1 階、地上 3 階の建物である。

[468] 同上。

1 階には抗日革命闘争時期の資料、2 階には朝鮮戦争の全過程を伝える展示がなされ、3 階には軍政資料が展示されている。その面積は 5 万 1 千㎡である。

記念館に入構する際には、貴重品やカメラ、筆記用具以外のものは携帯できない。筆者が入館した時には、反帝階級教養の一環として参観にきた工場労働者の一団と生徒たちが一緒であったが、入構時の厳しいチェックは同様であった。入構時には軍服を身にまとった現地案内員が一団を率いて案内する形式だった。また、建物内部は一切の撮影や録音が認められなかったが、野外の武器展示場や河川に係留されている「プエブロ」号を案内する際には自由であった。その際の録取記録によれば、「1968 年 12 月 23 日、拿捕された『プエブロ』号の乗組員たちは、初めてスパイ容疑を認め、『公式謝罪文』を記した。『プエブロ』とはスペイン語であり、『人民』という意味である。『プエブロ』号は、北朝鮮海域で民間船を装いながらスパイ活動を行っていた。この情報収集船のスピートは 13 ノットで、千 t 級である。当時、朝鮮人民軍の海軍軍人 7 名で船を拿捕し、32 名の米国人を捕まえた」。船内には、情報室、最新探査設備、食堂、寝室がそのまま保存されているほか、米軍の将校たちが着ていた軍服が展示されていた。

船内の見学の際には、グループごとに移動することとなっており、他のグループがどのように反帝階級教養を施されているか確認することはできなかったが、現地案内員によれば、「どのグループにも同様の説明を行っている」とのことであった。幸い、船内見学を終えたあと、拿捕に関与した海軍軍人の一人が生徒たちに体験談を聞かせている場に偶然出くわした。録取できた部分だけ書き起こすと次の通りである。「その時にね、私たちが船に乗り込んだら、米帝国主義者の指揮官らと兵士たちの部屋は分かれていて、それぞれおとなしくしていた。もちろん、指揮官らが利用していた部屋はとても綺麗なところだった。このような事実からも、米帝国主義者らは自分たちの国の人びとに対してでさえ、差別し、残酷であるということが分かるね……」。徹底的な反帝国主義観念が施されているようであった。

このように、例えば祖国解放戦争勝利記念館での反帝階級教養は、当時の歴史を再現した現場を見せて視覚に訴えるとともに、案内員の説明や「米帝国主義」と直接に対峙した経験者の語りを聞かせる方式で教養を展開している。この際、「肯定的模範で感化させる」というのは、思想教養における領導芸術の基本方法の一つであるとされている。肯定的模範で感化させるという方法は、「青少年らは、新しいものに敏感で、正義感が強く、他の人の模範を良く真似るものである。抗日革命戦列らの英雄的闘争は、革命の試練を受けたことがない新たな世代らに、真の闘争と生活真理を教える名鑑である」という金日成の主張に基づいている[469]。

（3）愛国主義教養

現在の愛国主義教養は、「祖国と人民を熱烈に愛し、その繁栄と幸福のために力強く戦っ

[469] 前掲、「社会主義教育に関するテーゼ」355-401 頁。

ていくこと」を目指し、金正恩が「『金正日愛国主義』を具現し、富強な祖国建設を急ごう」と題する演説で、「強盛国家は愛国心が強い人民のものである。強国を建設することにおいて、物質的な面よりも思想的な面をより重視すべきである」。従って、「すべてを愛国の観点から捉え、国のために自分自身のすべてを捧げる全人民的な愛国闘争こそ、すべての分野で飛躍的な発展を醸し出すことができる」という指導の下に行われている[470]。元来は、1955年12月に金日成が「主体」に言及した演説で、愛国主義を主張したことから、工業・企業所・農場などの管理再編を踏まえて、作業班・人民班単位で共産主義思想教養を施す中で形成されてきたものである。

例えば、各学校（工場・企業所・農場なども同様）には、その学校の創立から現在までの沿革と現在の発展した実状、また学校が如何に金日成や金正日、金正恩の配慮と支援を受けてきたのか、指導者と当該機関との関係性を伝える「沿革室」と、金日成・金正日が如何に祖国を愛し、一心不乱に祖国を建設し、成果を挙げてきたのかを学習する、小規模な図書室と視聴覚室を組み合わせたような「金日成・金正日研究室」が必ず備えられており、そこで先達の愛国主義を学び、自らのものとする思想教養が展開されている。

＜図 12＞「沿革室」の内部展示（左）と「金日成・金正日研究室」の入口（右）

出所：筆者撮影（2015年11月7日）。

また、愛国主義教養は、学校内での学習成績、模範的な生活・学修態度、音楽や舞踏、絵画、書道、囲碁・将棋などの文化活動等の成果を競わせる形でも行われている。生徒たちの校内でのそうした成果は、愛国心の強さを図るバロメーターとされているからである。成績優良者や模範的人物、各種活動で成果を収めた者は、学校の廊下にそれが顔写真入りで掲示される。さらに、学校の卒業生たちが軍隊に入隊し、如何に祖国のために尽力しているかを伝える「哨舎から送られた消息」も同様に掲示されている。このように、愛国主義教養は、学校において生徒は成績が優良であること、模範的な人物であること、各種活動で成果を収めることが本分とされ、そして卒業後は例えば軍人となり祖国の保衛に尽力することが「祖国と人民を熱烈に愛し、その繁栄と幸福のために力強く戦って」いること

[470] 『労働新聞』2012年5月21日付。『朝鮮中央通信』2012年5月21日付。

を証明するものであるとして遂行されているのである。

＜図 13＞「栄誉の最優等生たち」の掲示（左）と「哨舎から送られた消息」の掲示（右）

出所：筆者撮影（2015 年 11 月 7 日）。

（4）信念教養

信念教養は、「生活と実践を通じて体得される自らの知識と見解に対する確固たる信頼」を「信念」とし[471]、「社会主義勝利に対する信念を植え付けるための思想教養事業である」とされる[472]。学校教育における教場でどのような信念教養が行われているかは判然としないが、ある北朝鮮の案内員によれば、信念教養の肯定的模範で感化させるという方法に基づき、校外の少年野営所などでの生活を通じて、集中講義を受けるということもあるという。

その少年野営所の一つである「松濤園国際少年野営所」は、金日成が「祖国でもっとも環境の良い場所は、子供たちに与えるべきであります」という教示に立脚し、元山市郊外の海浜地区である松濤園に 1960 年 8 月に創設された。その名称は 1985 年 7 月 4 日に金正日によって改名されたものであるという。その少年野営所は、幾つか改築が施されており、1991 年に始まる改築工事と 1993 年 3 月の竣工、2013 年 11 月に始まる改築工事と 2014 年 5 月の竣工を経て現在に至る、総面積は、34 万㎡で、収容人員は、1,250 名である。

「松濤園国際少年野営所では、党が野営所を大元帥様たちの智・徳・体思想を徹底的に貫徹できるように備え……彼らの智・徳・体を身に付けた革命の後継者へと育てるために教育教養事業をよくすべきであります」という金正恩の言葉に従い[473]、とくに「生活と実践を通じて体得される」ことを重視し、集団生活を行い、様々な体験をさせることが基本的

---

471 前掲、『哲学事典』421 頁。

472 「5 大教養を主線に」『わが民族講堂』http://ournation-school.com、2018 年 8 月 30 日最終アクセス。

473 「2014 年 5 月 2 日、金正恩が松濤園竣工式で行った演説」2016 年 6 月 10 日、筆者が現地で撮影した写真に基づく。

なプログラムとなっているようである。このため、松濤園国際少年野営所は、建物が第 1 館と第 2 館とに分けられ、それぞれに教室や調理等の実習室、個人成果展示室、会議場、映画館（929 席）、医務室、美容室、売店、食堂（500 席）、ゲーム室などが設けられている。概ね 4～6 名ごとに区切られた生活スペースは、内装が女子生徒用はピンク、男子生徒用はブルーに統一され、ベッドとトイレ、シャワールームが備え付けられている。また、館外の敷地内には、野営（キャンプ）施設、農業体験のための温室、栽培体験のための植物園、漁業体験と海洋生物の知識を習得するための水族館（80 種類 1,000 余匹の魚類）、山岳学習と鳥類生物の知識を習得するための鳥類園（17 種類 80 余羽の鳥類）、遠泳やボート漕ぎなど水際訓練を行うための湖、行軍や陸上スポーツを行うための運動場が併設されている。

こうした充実した施設で、生徒たちは朝 7 時に起床し、夜 10 時に就寝して、その間 20～30 人が一団となり、各種体験学習、座学、集団訓練を行う[474]。例えば、入所後に必ず受講しなければならない調理実習は、仕込みから片付けまでを自ら一人でできるように実習させるという。また、集団活動が基本なため、生活スペースにいるとき以外は 20～30 人の集団行動を行い、移動の際には隊列を組んで、歌を歌いながら行進する（筆者が一団とすれ違った際には、金正恩将軍賛歌を歌っていた）。そして野営所は、1 月から 3 月までは 500 名ずつを 5 期に分けて、1 期ごとに 10 日間受け入れ、4 月から 10 月までは 1,000 名ずつを 10 期に分けて、1 期ごとに 10 日間受け入れる。野営所に入所可能な対象は、11 歳から 13 歳までの小学校生徒である。入所者は、数ある学校から成績優良、社会主義・共産主義的に模範的な人物の中から選抜される。そうした成績優良者、模範的な人物には、各学校単位で「赤旗革命組」称号が授与されるが、それを 2 回以上授与された「2 重、3 重赤旗革命組」称号を得た者は、2 回を限度に入所することができる。

＜図 14＞松濤園国際少年野営所の全景

[474] 各種体験学習や座学、集団訓練の具体的内容は良く分からないが、選択的な講座制になっていて、生徒たちの飽きがこないように、興味ある講座を自主的に選ぶような形になっているという。

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 10 日）。

選抜された生徒たちは、入所期間中、国内の最高設備を誇る施設で集団生活を送りながら、「社会主義勝利」がどのような暮らしと物質的な豊かさを保証するか実感することになる。また、各種実習を通じて、知識や技能を身に付けるだけでなく、こうした非日常的な体験が選抜的に行えるエリート意識と自尊心を育てていくことになる。さらに、このような現実を与えてくれた指導者、党・国家に対する感謝の気持ちとそれに応えようとする「信念」が形成されていくものと考えられる。

＜図 15＞松濤園国際少年野営所の生活スペースの内部（左）、同構内の湖（右）

出所：同上。

（5）道徳教養

道徳教養は、元来「勤労者たちの中に巣くっている古い道徳規範を取り除くため、教養事業を強化する一方で、社会的運動に新たな道徳生活の模範を一つ一つ作り上げ、一般化して次第に共産主義的道徳規範を完成させる」目的で行われ始めた[475]。ここで主張される共産主義的道徳規範とは、一般的には「資本主義制度に反対し、社会主義と共産主義を建設するために闘う品性」であると説明されるが、具体的には、党・革命・祖国・人民のための自己献身、自己犠牲、相互扶助的発展と幸福の追求を信条とする気風のことである[476]。それが、学校教育にも波及し、社会生活の中で守られるべき初歩的な規則として学習されるようになった。

例えば、初級中学校の『社会主義道徳』の教科書では、「道徳生活において守るべき 10 の項目」が掲げられている。ここではその全てを挙げることはできないが、第一には、「偉大な金日成大元帥様と金正日元帥様を主体の永遠なる太陽として高く奉じ、敬愛なる金正恩元帥様に忠誠を持って高く奉仕すべきである」ことが述べられ、次に「強盛朝鮮のため

[475] 前掲、『政治事典』272-273 頁。
[476] 同上、58-59 頁。

に熱心に学び、組織と集団と友達を惜しみながら、何時でもどこでも礼儀正しく行動し、常に高尚で美しい我が言語を用い、公衆道徳と交通秩序を自覚的に守り、身だしなみを整え、人民軍隊を積極的に擁護し、体と心をしっかり鍛錬して、愛国の心で、なすべき良いことをたくさん探して、行動すべきである」と力説している。さらに、全ての人びとが兄弟、家族となって人の情や愛情が溢れる幸福な生活を目指し、人と人との間では暖かな情を持って幸福も悲しみも共に感受しがら、「一人は全体のために、全体は一人のために」という集団主義を社会生活の中で生かすよう要求している[477]。

しかし、こうした道徳教養がどのような手法で展開されているのかは不明である。ただ、「社会主義道徳」科目は、小学校及び中学校の全学年で教えられているという。初級中学の場合には、履修授業時間が年間 102 時間あり、全配当科目 16 科目のうち割り当て順位は 11 番目、高級中学の場合には、全配当科目 22 科目のうち割り当て順位は 16 番目であり、科目としては主要な位置付けを与えられているとは言えない[478]。

だが、筆者が現地で聞き取りを行った限りでは、学校教育で学んだ道徳教養が現在でも自らに染み込んでいるという。具体的に何かを問うと、「このような教育を受けながら成人となった我が国の住民たちは、苦難な時期あるいは現在も国際的な制裁を受け経済的に困窮した状況だが、これを乗り越えている。それを可能としているのは、『一心団結』という団結の力だ」[479]と述べる。また、「どこに行っても、同じ朝鮮民族であることが分かれば、お弁当でも分けて食べようとし、人と人の愛情があるのが朝鮮民族だ」、「年に 2 度の田植えの時期と収穫時期に、大学生たちは農事に動員されて農村に向かう。私たちもそうだった。これは外から見ると、強制的に見えるかもしれないが、たまに都市の生活から離れて、農村の生活を経験するのは良いリフレッシュになる。私たちはそのように考える」、「友達とともに働いた後は、自分で作った料理を食べるのもより美味しい」と語る[480]。それがどこまで本音なのかは判断できないが、このような心情は、児童・生徒の頃から「集団のために献身すべき」ことを徹底的にたたき込まれ、集団主義の制約された条件下において自分なりの生活空間や趣味・関心、物事への理解・解釈、好悪を見出し、そうして育んできた住民にこそ持ち得るものなのではないかと考えられる。

---

[477] 1959 年に金日成が平安南道の降仙製鋼所（現在は南浦市千里馬区域の千里馬製鋼連合企業所）を現地指導した際に話した言葉として伝えられ、それ以降北朝鮮では共産主義的スローガンとしてしばしば用いられてきた。例えば、「主体思想の旗を高く掲げて社会主義建設をさらに進めよう」『金日成著作集第 33 巻』1985 年、平壌・朝鮮労働党出版社、135 頁。「朝鮮労働党第六次大会での中央委員会事業総括報告」同上、297 頁。『労働新聞』2005 年 6 月 11 日付など。また、筆者が数度にわたり北朝鮮で行った現地調査（2015 年 11 月 6 日の社会科学院、人民学習堂の門答室、現地の案内員）の聞き取りでも確認することができた。

[478] 韓国統一研究院刊「金正恩時代の北韓の教育政策、教育課程　教科書から」2015 年

[479] 筆者が数度にわたり北朝鮮で行った現地調査（2015 年 11 月 6 日の社会科学院、人民学習堂の門答室、現地の案内員）の聞き取りに基づく。

[480] 2014 年 8 月と 2016 年 8 月に筆者が現地調査で行った 2 人の女性案内員のインタビューに基づく。

第 4 節　成人に対する教養の一端

それでは、学校教育を終えた成人の人びとにはどのような教養が施されているのであろうか。本節では、問題の所在で述べたように、金日成の回顧録を手がかりに、どのような内容と論理構成で、人びとの如何なる理解を期待しているのか、その析出を試みてみたい[481]。

（1）金日成の成長過程の描写

金日成の生涯は、「朝鮮の近代史において、民族の受難がもっとも暗澹とした 1910 年代」に始まるとされる[482]。それは、「韓国併合」に基づく「朝鮮総督府による支配」によって、朝鮮人民が奴隷状態に陥り[483]、朝鮮半島は朝鮮民族の生を育むことのできない生き地獄となったとされるからである[484]。

このような「民族の受難」時代に生を受けた金日成は、同時代を共有し、同一の使命感に結束された、他の朝鮮人らの共感を得やすい基盤を有していた。また、金日成の成長や革命遂行の過程は、不断に「他郷」から「他郷」への移転を繰り返す歴史であった。これはとくに「故郷」に対しての執着心を有する朝鮮民族にとって、金日成の如く幼くして祖国を離れ、他国で間借り生活を余儀なくされた「亡国奴」の生活を一日も早く清算し、祖国の光復が訪れることは宿願でもあった。その点で、金日成が幼少時より革命の道を歩んだという「事実」は、英雄の所行であり、北朝鮮の人びとに対して感化を浸透させやすい素地となるものである。加えて、この時期、1950 年代に主張されることとなる「主体」や主として金正日が統治していた時代に唱道されていた「先軍」のような言葉は無論現れていなかったものの、金日成が「他国の軍隊に任せる有様では、この国は誰が守り、世話をするというのか」[485]との認識を示したことは、「事大」の対概念となる「主体」や「自衛」の先鋭的表現である「先軍」の萌芽を示唆する認識として捉えられるものである。

また、回顧録により描かれる金日成の家族は、同時期の多くの朝鮮人家庭のように、貧しい暮らしぶりであった[486]。その中で、金日成の祖父の訓戒である「お金はなくても生きていけるが、仁徳がなければ生きていくことができない」は、金日成の家族の哲学であった。このことは物理的な豊富さよりも道徳的な高さに重きを置くという点において、儒教を内面化させた朝鮮民族の固有な美風の一つを含み込んでいる[487]。さらに、金日成の家族は仁徳を重視しただけでなく、革命性もまた高い「先駆者」であったと説明する[488]。

---

[481] 本節は、拙稿（崔穎麗「朝鮮民主主義人民共和国の領導芸術性の一展開―金日成の回顧録『世紀と共に』を素材に―」『北東アジア研究』第 25 号、2014 年 3 月、75-95 頁）を修正・圧縮して記述した。
[482] 『回顧録』1-1、1 頁。
[483] 同上、1 頁。
[484] 同上、2 頁。
[485] 同上、2 頁。
[486] 同上、4-5 頁。
[487] 同上、6 頁。
[488] 「万景台」革命史蹟地での案内員の解説。筆者が北朝鮮で行った現地調査に基づく。

このような家庭で育った金日成は、幼い時分から「志遠」という父親金亨稷の座右の銘に影響を受けた。「志遠」とは、個人の栄達や立身出世を念頭に置く世俗の人生教訓ではなく、祖国と民族のための闘争のなかで、真の生きがいと幸福を見つける革命的人生観であり、代を継いで闘っても、必ずや「祖国」の光復を成すべき不撓不屈の革命精神であるとされる[489]。これは現今の北朝鮮の体制が、「首領の領導を代を継いで継続的に実現することを目的とする」ものとして具象化されていることと通じているのは言うまでもない[490]。

また、金日成の父金亨稷は、1910 年代における間島の実状から[491]、朝鮮半島は朝鮮人によって独立が果たされるべきであるとの信念を固めたという[492]。さらに、「3・1 運動」の教訓[493]により、金亨稷はロシアのように民衆革命を遂行すべきだとの結論に達し、朝鮮の民族解放運動を民族主義運動から共産主義運動に転換すべきであると主張した[494]。こうした金亨稷による共産主義運動の展開を促す言辞は、金日成の革命思想の礎となるものであった。なぜなら、金日成は自らが展開した共産主義運動の影響について、ロシアあるいは国際共産主義運動からのそれではなく、父親からの影響であると主張しているからである[495]。この主張は、あくまで自らの思想が革命的伝統と自主性に立脚していることを示唆するものである。

従って、「民族の受難」時代に生を受け、高い革命性を持った「先駆者」を祖父に持ち、「志遠」を説く父親の下で育った金日成が革命に没頭したのは、当然の帰結であるだけでなく、革命性の継承の証左でもあった。無論このことは、その後の金正日、金正恩に至る政権の正統性を担保するものでもある。

このように見ると、回顧録の金日成は、朝鮮民族がもっとも暗澹とした受難の時代に生を受け[496]、貧しい朝鮮家庭に育った普通の朝鮮人[497]であること、また彼は当時の多くの朝鮮

---

[489] たとえば、金日成の祖父である金輔鉉は、「男は戦場において敵との闘争の中で死ぬべきだ」と語り、家族に対して国のために生きることを教育し、子弟らを革命闘争に赴かせた。また、祖母である李寶益は、関東軍将校らに連行され、金日成に「帰順」（投降）するよう呼びかけることを強要された際、これを厳しく咎めながら抵抗した。さらに、金日成の外祖父も、故郷で私立学校を建立し、朝鮮青年らを勉強させ、一生を後代の教育と独立運動に捧げた愛国者、教育者であった。『回顧録』1-1、9 頁。

[490] 同上、16 頁。

[491] 前掲、『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』6 頁。

[492] 1916 年に金亨稷が間島と上海に赴いたその際、中国革命は軍閥の蠢動と帝国主義列強の干渉により、一進一退の深刻な曲折を経験していた。中国革命においても基本的な障害物はアメリカ、イギリス、日本などの外勢であった。しかし、このような事態にもかかわらず、海外に亡命した多くの独立運動者らは、帝国主義者に対する幻想を抱き、どの大国の力を借りるべきかという空理空論に明け暮れていた。『回顧録』1-1、25 頁。

[493] 同上、25 頁。

[494] 「3・1 運動」の指導者らは、朝鮮人民の高揚した闘争気勢にそくすことなく、当初より運動の性格を非暴力的なものとして規定し、「独立宣言書」を作成して、朝鮮民族の独立意志を内外に闡明するに止まった。さらに、一部の民族運動指導者らは、「請願」の形で朝鮮の独立を試みた。同上、40 頁。

[495] 同上、47-48 頁。

[496] 同上、50 頁。

青年と同様に、祖国を救うために革命へと踏み込んだ人物[498]であると主張していることが分かる。他方、金日成は彼の家庭環境や一族の業績[499]、彼自身の感受性[500]、革命に対する情熱と使命感[501]において特異な人物であることも同時に明らかにしている。つまり、回顧録において金日成の成長過程を記した部分では、一方で金日成が不本意な時代や生活、そして同時代の朝鮮人と運命を共に甘受したことを描くことによって、民族という共属感情を醸成しようとする意図が窺え、他方で金日成が革命性という点において独特な家庭に育ち、そこで卓越した資質を開花させたことを記すことによって、他とは区別される人物であることを素描しようとする。とくに金日成の特異性は、父親である金亨稷が著名な革命家であっただけでなく、彼を取り囲む家族や親族の多くが同じく革命家であったということ、従って金日成は父親やその他同じ血族の人びとから「志遠」、「3 大覚悟」[502]、「同志獲得」[503]、「2 挺の銃」[504]などの革命的遺産を引き継ぎ、幼くして民族の運命を救うべき重責を背負い、革命の伝統を内在させた後継者として描かれているのである。さらに、金日成は父親である金亨稷から朝鮮人による朝鮮人のための独立という主体性、共産主義運動の展開という先取性を内発的に受け継いだ、自律的な「主体」の体現者であることが強調されている。

以上のように、回顧録における金日成の成長過程の叙述は、彼が人民大衆のなかから生まれ、人民大衆と堅く結びついた関係であることが強調される一方で、彼を取り囲む家庭環境や彼自身の資質、自律性など、指導者としての特質、現今における思想的背景や立場を想起させる内容となっているのである。言い換えれば、そこには愛国主義教養で展開される内容とともに、偉大性教養の内容が埋め込まれているのである

（2）対比を通じた正当化論理の構築

このように、大衆の教養を目的とする領導芸術の文脈から回顧録を通覧した際に興味深いのは、金日成という指導者や国家の現状の正当化を図るための叙述が展開されているだけでなく、その指導者が当該国家の領導を目論む内容を際立たせるための対比的な手法が活用されていることである。ここでは、「日帝」に対する批判と自国に対する賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比を中

497　同上、4-5 頁。
498　同上、97 頁。
499　同上、9 頁。
500　同上、74 頁。
501　同上、97 頁。
502　金亨稷は金日成に対して、「革命家は常に三つの大きな覚悟、すなわち、飢えて死ぬこと、叩かれて死ぬこと、凍えて死ぬことを厭わぬ覚悟を持ち、初心に抱いた遠大な志を捨ててはならぬ」と教えた。同上、126 頁。
503　金亨稷が同志との友情について語った教訓を金日成は次のように回想している。「父は、生死や苦楽を共にできる友人は兄弟よりも親しいと語った。……父は同志のためであれば、何も惜しまずに捧げた。それゆえ、父の同志らも命を賭して父を保護してくれた」同上、126―127。
504　金亨稷は臨終直前に、自らが愛用していた「2 挺の銃」を妻に預け、息子（金日成）が成長して闘争へと旅立つ際にこれを渡して欲しいと頼んだ。同上、128 頁。

心に分析する。

回顧録では、日本による朝鮮半島の植民地化とこれを遂行した主体である「日帝」のあらゆる側面において、金日成による強烈な批判が展開されている。

「私の生涯は、朝鮮の近代史において、民族の受難がもっとも暗澹とした1910年代に始まる。……悠久な歴史と豊富な自然資源、秀麗な山川絶景を誇るその領土は、日本帝国主義の大砲によって踏みにじられた」[505]。

これまでも幾度か言及してきたことであるが、金日成によれば、独立国家としての祖国の喪失を余儀なくされた彼自身の日本に対する憎しみは、監獄で父親と面会を持つ機会を得たことが大きな契機になっているという。金日成は、「父親の身体に残る傷は、私に悪魔のような日本帝国主義の存在を全身で感じさせるのに余りあるものであった」と述べている[506]。この体験を踏まえ、その後の回顧においては、「日帝」を体現する「日本軍警・軍隊」、それが朝鮮半島において遂行した諸政策は糾弾されるべき悪であることを数字や事件・事象を挙げながら、次のように論難する。

「敵らは騎馬警察隊と軍隊までを動員し、至るところで群衆らに刀を振るい、銃弾を乱射した」[507]。「……日本帝国主義者らは、我が民族を『皇民化』するために朝鮮民族に日本語を使うことを強要した」[508]。

「李朝の最後の王である純宗が亡くなった際、群衆のなかで涙を流している朝鮮人がいると、日本騎馬警察隊が出動し、銃剣と棍棒で解散させた。国を喪失しても悲しまず、王が死去しても涙を流すことなく、口をつぐむことを強制された。これこそ、『武断統治』から『文化統治』に様変わりした朝鮮総督政治の真の姿である」[509]。

「敵は共産党員が一人でも存在する村に対しては、その村落の住民を全滅させた。共産党員一人を亡きものにするためには、100名の群衆を殺戮して構わないというのが日本軍警らのスローガンであった。朝鮮と満州大陸で日帝は『三光政策』（すべて殺し、すべて燃やし、すべて略奪する政策：引用者注）の提唱と『匪民分離』（『共匪』と言われる革命軍と人民を引き離す意味：引用者注）政策を試みた」[510]。「……延吉ただ一つの県で殺害された人数は、1万余名に達した。間島臨時派遣隊の罪をどんな言葉でもってすれば告発できると

---

505 同上、1頁。
506 同上、32頁。
507 同上、37頁。
508 同上、85頁。
509 『回顧録』1-2、133頁。
510 『回顧録』3-1、11頁。

いうのか」[511]。

「1923 年に起きた『関東大震災』を朝鮮人弾圧の好機とした日本の極右分子らは、軍隊を出動させ、至るところで日本刀により朝鮮人を次から次へと無残にも殺した」[512]。

「日本帝国主義者らは、朝鮮農民が心血を注いで生産した米を毎年 700 万～1,000 万石ずつ、日本本土に運んでいった」[513]。

以上のような日本による過酷な植民地統治は、北朝鮮国内では人びとに共有された「事実」でもある。従って、30 余年間、日本の植民地として支配された朝鮮人にとって、「日本」とはそれだけで暗いイメージを伴う言葉であるのに加え、それを内面化させた北朝鮮の人びとの恨みを自然に噴出させ、一心団結を図る合い言葉となる。

こうした「日帝」の非人道性・残虐性に対比して、これに抵抗した金日成らの闘争の歴史は、朝鮮民族を救うための英雄的闘争であり、その過程においては愛国、愛族、愛民に溢れた「愛」が滲む涙ぐましい革命の歴史である。この点で、1926 年 10 月 17 日の「打倒帝国主義同盟」（トゥ・ドゥ）の結成は、金日成の革命の起点である。この同盟は、反帝、独立、自主の理念の下に、民族と階級の解放を実現するために社会主義、共産主義を志向する新しい世代の青年らで組織されたという[514]。この組織を基盤に金日成は、その生涯を捧げ民族の尊厳と自主性を守るために闘った[515]。彼は朝鮮民族を害し、朝鮮の自主権に挑もうとする存在を決して許さなかったことを回顧録のなかで幾度も強調している[516]。そうした抗日武装闘争を展開した金日成やその同志らは、「日帝」とは異なり、共産主義道徳の持ち主で、人民らを無窮に愛する「情」に溢れた優しい人々であると描く。

「我々は、革命闘争を遂行する過程で古い社会の封建的な人間関係と道徳規範を打破し、新たな共産主義的人間関係と道徳規範を創造して、それを後世に一つの財産として残した。……我々は人民らと血縁的な連携を強化する方法により革命を深化させた」[517]。

「われわれは、敵らを攻撃して、人民らの食糧問題を何度も解決した。われわれは、節約して蓄えた米を人民に与える一方で、つましい食事をした」[518]。

---

511 同上、10 頁。
512 『回顧録』4-1、111 頁。
513 『回顧録』6-3、322 頁。
514 『回顧録』1-2、166 頁。
515 『回顧録』4-1、115 頁。
516 たとえば、同上、115 頁。
517 『回顧録』6-2、258-261 頁。
518 『回顧録』3-1、125 頁。

こうした革命家（善）と敵（悪）、革命家（無償の存在）と人民大衆（施されるもの）という二つの二分法的関係の把握を前提とする独特の共産主義的義理を実質化するために、金日成らは人民の要望と人民の利益に符合する人民の思考方式を獲得しようと努めた。具体的には、人民との直接的な接触を通じて、人民の声はもちろん、息遣い、目付き、表情、話し方、身持ちに至るまで、自らの目と耳で会得するのに尽力したという[519]。たとえば、次のような経験が語られている。

「我が遊撃隊員らは、数多くの農民らの農事の手助けを行った。ある隊員は山で木を伐採し、農家の垣根を修理した」[520]。「遊撃区を解散する過程で我々は、人民のために最大の奉仕に尽力した。我々は、住民らの要求と実情に合わせて、移動準備事業を進めた。……拠り所のない子供と患者のために、武装小組を派遣して、目的地まで責任を持って護送した。また、人民らに手当てする資金と物資を確保するために、数回の戦闘を行った」[521]。

「ある日、私は宿泊させてもらっていた中国人農家の老人夫婦を手伝うために、氷を掘ろうと斧を持って豆満江に出向いた。ところが、氷を掘り終わるや斧を川の中に落としてしまった。どんなに探しても斧は見つからなかった。私は、主人に斧の値段以上の額を弁償し、何度も謝った。……もちろん老人には斧の値段以上の対価を支払ったが、申し訳ない気持ちは消えなかった。だから、1959 年の春に抗日武装闘争戦跡地踏査団が中国東北地方へ赴く際、私に代わりその老人に改めて謝罪することを頼んだ」[522]。

ここでは、金日成らが人民との直接的な接触に努めたことが述べられるだけでなく、彼が建国後に首相という地位についても人民との交わりを忘れず、人民に対する視線に変化がないことが示されている。これらは非人道的・残虐的な「日本帝国主義者ら」に比して、金日成ら抗日武装闘争の同志らは、人間的・道徳的であることを浮き彫りにする。それのみならず、人民のために辛苦を惜しまない共産主義的義理を貫く領導者であることを強調しようとしているのである。

次に、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」＝「苦難の行軍」と現在の社会生活との対比について検討する。「苦難の行軍」とは、1938 年 12 月から翌年 3 月末にかけて、濛江県南排子－長白県北大頂子間の道のりを朝鮮人民革命軍の主力部隊が行軍したことをいう。この行軍は、抗日闘争の討伐のための日本軍、満州軍による追跡の結果敢行されたものである[523]。この過程では、極度の食糧不足が金日成部隊を苦しめることになる。回顧録において金日成は、この「苦難の行軍」の様子を端的に述べれば、「厳酷な自

---

519 『回顧録』1-3、268 頁。
520 『回顧録』3-1、39 頁。
521 『回顧録』4-1、148 頁。
522 『回顧録』3-1、40 頁。
523 「苦難の行軍」に関して詳しくは、『回顧録』7-2、147-181 頁。前掲、201-203 頁などを参照。

然との闘争、食糧難と疲労との闘争、恐怖の病魔との闘争、奸悪な敵との闘争の呪縛、これら苦難を克服するための自分自身との闘争が折り重なった、始めから終わりまですべての試練と難関が降りかかった」と語っている[524]。

このような金日成の描写で表される「苦難の行軍」であるが、他方部隊員の回想として語られる内容としては、乏しい食糧を金日成や呉仲洽（オ・ジュンハブ）[525]がいかに自らは食すことなく、部下に分け与えたか、これに対して部下らも司令官に食べてもらおうとしたかという逸話が繰り返し述べられる[526]。そしてそれは、「苦難の行軍」においてもっとも苦難であったことを示すものでもある。「飛行機に発見されるのを恐れ、火を焚くことができず、馬肉を生で数日間食べ続けた」こともあった[527]。

こうした苦難の状況を打破することができたのは、回顧録によれば、百折不屈の革命精神と自力更生、艱苦奮闘の革命精神、革命的楽観主義精神、それに革命的同志愛であったという[528]。さらに、忘れてならないのが、金日成ら司令官に対する人民らの愛と支援である[529]。ここにおいても、北朝鮮が強調する共産主義的義理の模範が示されているのである。この時期と比較すれば、現今の北朝鮮は、仁徳政治を施す党の領導の下で、万民が一つの大きな家庭のなかで和睦に暮らしている状況下にある[530]。

「現在は、良い制度の下で、人々や職業の間に階級がなく、誰でも功を立てれば栄誉を享受し、万人の喝采を博する。また、どこに行っても豊かな文化生活が楽しめる。お祭りの広場と祝典の舞台は、労働のなかで生まれた踊りと歌に囲まれ、不夜城を成す夜の街と公園は幸福に恵まれた人々で満ちている」[531]。

とはいえ、現今の北朝鮮においても困難が見られない訳ではない。回顧録では、現今の北朝鮮が直面する困難を次のように指摘し、その克服の道筋を述べている。

「我々は、困難な環境のなかで社会主義建設を行っている。我々の革命は依然として艱苦な行軍の道を続けている。過去には、数十万の日本軍が我らを包囲し、追撃しようとしたが、現在はそれと比べようもないほど強大で暴悪な帝国主義勢力が我が国を圧殺しようとしている。このような状況で我々が生ける道は、抗日革命先烈らが苦難の行軍の時期に発

---

524 『回顧録』7-2、151 頁。

525 呉仲洽は、「司令部」を擁護することに一生を捧げ、それがもとで戦死した人物である。金日成は、人民軍隊の中で呉仲洽を見習う運動を活発に展開し支持する金正日に対して、非常にいいことだと語っている。『回顧録』7-3、356 頁。注 80 も参照。

526 前掲、『金日成と満州抗日戦争』201 頁。

527 同上。

528 『回顧録』7-2、179 頁。

529 同上、180 頁。

530 同上、199 頁。

531 『回顧録』6-2、210 頁。

揮した白頭の革命精神をそのまま実生活に徹底して具現することである」[532]。

つまり、現今の北朝鮮は、人類社会でもっとも優れた社会制度であるとみなされる社会主義・共産主義社会を建設する過程のなかにある。それゆえ、現状の一時的な困難には耐え、克服しなければならないことを強調する。「苦あれば楽あり」というように、先達である金日成自らも艱難な抗日戦争を経て、漸く祖国を回復した。現状はどんなに苦しくても、過去の経験に比すれば臆することではないから、革命精神を発揮して最後まで戦うべきであるということを述べている。加えて、現状は「困難な環境」ではあるが、それは帝国主義の圧殺のせいであると、日本帝国主義への批判から連想させる形で、現今の帝国主義勢力批判への同一化を図る。こうして、国を守るために必死に闘争しなければならないことに対して、国を喪失した人民は、過去の無残な亡国奴の歴史を繰り返すことになると想起させ、「苦難の行軍」の経験が模範化されるのである。次の回顧録の叙述はその典型である。

「亡国は瞬間で、復国は千年だということが、抗日革命 20 年の路程を歩みながら私が得た重要な教訓だ。……フィリピンとインドネシアは 300 年、アルジェリアは 130 余年、スリランカは 150 余年、ベトナムはおよそ 100 年ぶりにそれぞれ独立を成就したということは、亡国の対価がいかに高いかを示している。従って、私は常日頃から、若者たちに対して祖国を失うということは生きていても死んだ命と同じだ。亡国奴になりたくないのなら、祖国を守れと言っている」[533]。

以上のように、ここでは「日帝」に対する批判と自国に対する賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比を通じてその内容を検討することにより、回顧録に示される領導芸術の方法を考察した。このように見てみると、第一に、人びとの「日帝」に対する反感を愛国感情に転化し、外勢に対する内部団結を図ろうとする試みが看取される。第二に、内部団結を維持し、現今における困難を乗り越えさせようとの企図が見られるのが「苦難の時期」と現在の社会生活との対比である。この対比を通じて、現状がどんなに困難であっても、少なくとも敵との直接的な対峙のない祖国で暮らしているから、「苦難の時期」とは比べようもないほど恵まれていることが伝えられる。また、具体的な数値目標を掲げることは控え、抽象的な社会主義・共産主義建設を掲げることにより、曖昧だが未来志向的な精神的安定剤を植え付け、大衆に対する無条件の忠誠心を図っている。加えて、常に戦争を念頭に置き、軍隊を強化しなければ、「暗澹とした」時代に戻ってしまうことを強調し、現在の生活よりも国家の軍隊を強化する妥当性を支える論理が構築されているのである。これらのことを換言するならば、ここでは愛国主義教養で展開された内容と反帝階級教養、信念教養、道徳教養の内容が組み

[532] 『回顧録』7-2、181 頁。
[533] 『回顧録』8-3、489 頁。

合わさった形で叙述が構成されていると言える。

（3）北朝鮮の望む理想的な人物像

ここまで、回顧録の内容分析を通じて、金日成の成長過程の叙述や対比の手法などを用いつつ体制の正統・正当性確認やこれを基に内的団結が意図されていることについて明らかにしてきた。次には、さらに内容分析を推し進め、回顧録に描かれる「同志」及び「大衆」の人物像を抽出し、人民大衆の「模範」を素描してみる。なぜなら、領導芸術はあくまで「大衆を教養せしめ組織動員する」能力や手腕を示すものだからである。

先にも指摘したが、この回顧録でしばしば言及されるのは、朝鮮民族の原理的特質であり、その重要な側面を構成する人間的な「情」である。金日成は、「朝鮮民族のように情に笑い、情に泣く民族がほかにあるだろうか」と、朝鮮民族の特性を挙げる[534]。また、この人間的な「情」は、人間の「愛」に通じ、人間の様々な「愛」のうちで、もっとも高い地位に位置付けられるのが「革命的同志の愛」であるという[535]。

「世の中には、様々な愛があるものの、そのなかでもっとも重要なのは、革命的同志の愛である。……過去、我が同志らは、幾日も水だけで過ごさなければならなかった血塗られた闘いの最悪の状況下でも、雪のなかで凍った山の実を見つけたら、まず同志の口に入れてあげた」[536]。「……私は、司令官のために非常食として準備された米粉を隊員に分けてあげた。こうした経験は少なくなかった」[537]。「私だけではなく、新隊員に自分の綿衣を着せ、単衣で酷寒に耐える老隊員もいた」[538]。

このように描写される「革命的同志の愛」は、「苦難の行軍」に代表される抗日戦争の過程で、革命を勝利へと導いた重要な要因であったと説明される。無論、このことはこんにちの北朝鮮でも不変の教訓である。たとえば金正日は、2004 年 4 月 7 日に行った朝鮮労働党中央委員会幹部らとの談話のなかで、「革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、我が革命の原動力である」と述べている。また、この談話のなかでは、金亨稷と金日成の関係と同様に、金日成と金正日の関係もまた、親子関係を越えた革命的同志関係で結ばれており、それは人類の「愛」の頂点だと述べられている[539]。

つまり、この回顧録によって革命家の崇高な人間関係であると描写されている「同志の愛」は、金日成と金正日との関係に援用され擬せられるという目的を持つものである。換

---

534 『回顧録』3-3、354 頁。
535 『回顧録』4-2、267 頁。
536 『回顧録』4-2、267 頁。
537 『回顧録』7-2、179 頁。
538 同上、180 頁。
539 金正日『革命的同志の愛は一心団結の基礎であり、我が革命の原動力である』外国文出版社、2010 年、2-11 頁。

言すれば、この回顧録は、金日成政権の後継として出帆した金正日政権下に人民大衆を結集するために、目的論的に叙述された側面、いわば金日成＝金正日の同一化を示唆するものである。それでは、いかなる内容の金日成の経験を金正日と同一化しようとしているのか、その内容を検討してみる。

（ｉ）金亨稷とその親友たち

「革命的同志の愛」に基づく人間関係は、回顧録においては金日成の父親世代からその関係の存在が描かれている。金日成の父親である金亨稷と生死をともにした親友の共通点は、人間的に親しく付き合いながら、「祖国」と民族の運命について同じ志を有する人びとだということである。その代表的な人物としては、洪（ホン）ジョンウ、金（キム）シウ、孫貞道（ソン・ジョンド）牧師などの具体的人物が挙げられている。金亨稷とそれら親友との関係は、その世代に止まるものではなく、金亨稷の死後はその息子を取り囲む幅の広さで続けられた[540]。

洪ジョンウは、植民地統治下で憲兵補助員をしていた人物であった。しかし、金亨稷の影響を受け、革命の支持者、幇助者に転向した。洪の助けを受け、金亨稷は幾度も危険な状況から脱することができた。また洪は、故郷に戻っても金日成の家族を助けた。朝鮮戦争の停戦から数年後、その恩に報いるために金日成は、幹部らに対して洪を探すよう命じた。洪はすでに還暦を越えた年齢であったが、金日成は彼を党の幹部学校に入学させてやり勉学を施した。その後、洪は晩年に至るまで、金亨稷の革命史跡を発掘するのに献身した。こうした洪をめぐる逸話を通じて、祖国と民族のために自らの精神で生きることを決心した人に過去の経歴は障害にならず、重要なのは革命思想と献身の精神であることを主張しようとしている[541]。

金シウは、中朝国境に程近い慈江道慈城郡で抗日活動を行っていた時から金亨稷と連携を結んだ独立運動家である。金シウは、祖国の独立のために、大衆啓蒙、後代教育にはじまり、武器購入、資金調達など、幅広い分野において活躍した。中国国内における国共内戦の際には、革命後援会委員長として日本軍及び蒋介石軍の侵害から朝鮮人の生命財産を守ることに全力を尽くしたとされる[542]。1958 年に金シウは、中国から北朝鮮に帰国したが、自らのこうした経歴を一度も口にすることがなかった。彼は臨終の間際になって、家族に対し金亨稷・金日成との関係を告げた。「私が死を前にして昔話をするのは、君らに何らかの利益を与えるためではない。我が家族にはこうした経歴があるのだから、君らも将軍様をよく奉らなければならないということだ。国事に忙しい将軍様を一歩でも疲れさせてはならない」と描写されている[543]。革命の指導者としての資質のみならず、それを支える人民の忠誠心もまた、代を継いで継承されるべきであることを示唆している。

---

540 『回顧録』1-2、136-144 頁。
541 『回顧録』1-1、66-71 頁。
542 『回顧録』1-2、183 頁。
543 同上、181-182 頁。

孫貞道牧師は、金亨稷と深い人間関係を有していた人物であるとともに、中国の吉林で展開していた金日成の革命活動を積極的に支援した。金日成は、この牧師を語る際に、生命の恩人だと述べている。その後、金日成と孫牧師の家族は、別々の道を歩んだが、彼らに対する思いを金日成が忘れることはなかった。1991 年 5 月、アメリカの病理学医師であった孫牧師の末子孫ウォンテが北朝鮮を訪問した。60 年ぶりの再会であったが、金日成は「人情は時間よりも強い力を持っている。真実で結ばれた友情と愛は、衰えも変質もすることはない。祖国愛と民族愛、人間愛に溢れた孫ウォンテの姿は、まさしく孫貞道の姿であった」と語った[544]。

このように、回顧録のなかでは、金日成の父親である金亨稷とその親友らを描くことにより、第一に、金亨稷の死後も、彼の親友たちが金日成に対する惜しまぬ支援を行い、従って「革命的同志の愛」は不滅で、それは代を継いで継承されるものであること、第二に、これに対して金日成は、義理的な温情でこれに応え、解放後にはそうした父親の親友らを重用し、老後を保障し、また闘争期に別々の道を歩んだ恩人に対しても、家族のように歓迎して恩返しを行う、共産主義的義理を体現する人物であることが示される。これらは金日成の指導者としての広い度量と義理を浮き彫りにする効果を持つものであろう。

（ⅱ）金日成とその同志たち

次に検討を施すのは、金日成自身の「革命的同志の愛」に基づく人間関係の描写である。ここにはいくつかのパターンが看取され、それは、１）革命のために犠牲となった同志、２）中国における同志、３）解放後祖国で優遇を受けた同志、４）革命第二世代による革命継続、５）開国元勲となった同志の 5 つのパターンである。

１）革命のために犠牲となった同志のパターン

反帝青年同盟委員長であり、『農友』の主筆であった崔一泉（チェ・イルチョム）は、五家子で金日成が世話になった人物である。解放後には、政治的混雑と無秩序が蔓延するソウルで、彼はすべての精神を傾け『海外朝鮮革命運動小史』を草した。その後は政界に進出し、朝鮮革命党政治部長、新進党中央委員会部長、金日成将軍歓迎委員会委員、民族自主連盟執行委員などの重職を歴任しつつ、呂運亨、洪命熹（ホン・ミョンヒ）、金奎植などと連携して、民主的勢力の集結と南北統一のための闘争を展開したが、祖国解放戦争中にソウルで殺害されたという[545]。

呉仲洽は、正義感が強く、不正には決して妥協しない不屈の精神の持ち主であるが、闘いは巧みな指揮官であった[546]。彼は組織をまとめることに長け、規律を重んじる闘士でもあった。呉仲洽は、金日成の命令と指示を寸暇も惜しまず無条件に徹底して遂行した。とく

---

544 『回顧録』2-1、11-15 頁。

545 同上、188-191 頁。

546 『回顧録』7-3、337 頁。ちなみに、呉仲洽の息子である呉克烈（オ・グンリョル）は朝鮮人民軍総参謀長や党作戦部長などの要職を務めた軍人である。現在は、党中央委員会委員である。

に呉仲洽が称揚されるのは、革命に対する無限の忠実性である。彼は、何よりも金日成の思想と路線に忠実であった。また、いつ・いかなるとき・どんな状況においても自らの司令官の思想を無条件に擁護し、その思想に反する事象に対しては、猛虎のように闘争を展開した[547]。革命に対する忠実性、さらには自らの司令官に対するその忠実性は、司令官を政治思想の側面からだけではなく、命で擁護しようとした決死擁護精神において表れているという[548]。呉仲洽は司令部を擁護することに一生を捧げ、戦死した人物であるとされる[549]。

以上に挙げた人物は、金日成の抗日武装闘争において、革命のために犠牲となった人びとであるが、彼らはいずれも高い志を有しながら、一定の業績を築き、それは金日成の領導に基づく帰結であるという点において共通する。これら革命のために犠牲となった人々は忠誠の模範であり、こんにちの北朝鮮においても金正日・金正恩に対する忠誠の模範として反芻され、称揚されている[550]。

2）中国における同志のパターン

楊靖宇（ヤン・チンウ）は、抗日武装闘争の時代に、朝中両国人民の共闘に大きな意義を与え、抗日各連軍、各部隊の連合と協同のために努力を尽くした「恩人」として賞賛される人物である[551]。楊靖宇と金日成は、抗日連軍の共同闘争過程を通じて密接な関係を築きあげた。1940 年 2 月に楊靖宇は敵の「討伐隊」との戦闘のなかで犠牲となった。彼を最後まで防衛したのは、金日成らが南排子で差し向けた伝令兵らであったという[552]。中国において「楊靖宇烈士」を祈念するために、通化市に「靖宇陵」が建てられ、その開園式の際には、金日成は花束を贈った[553]。加えて、「東北抗日聯軍の行った英雄的な抗戦の旗には、中国人民が生んだ熱烈な共産主義者である楊靖宇の血も染まっています。我が人民は、共闘抗日の道程で楊靖宇の果たした輝かしい闘争の業績を永遠に忘れられません」とのメッセージを発した[554]。

魏拯民（ウェイ・ジャンミン）は、中国の革命家でありながら、朝鮮人革命家らを支持し、朝鮮革命のための尽力を忘れなかった人物である[555]。「情には情で返す」ということわざがあるように、魏拯民は朝鮮人隊員を愛し、金日成らもまた魏拯民のために全力を尽くした[556]。

---

547 同上、347 頁。
548 同上、348 頁。
549 同上、351 頁。
550 たとえば、呉仲洽が率いた連隊の名を冠する「呉仲洽 7 連隊称号争奪運動」は、金正日を首班とする革命首脳部を、命を賭して死守する活動を称揚するものとして、その展開が図られている。『労働新聞』2005 年 1 月 1 日付（新年共同社説）。
551 『回顧録』7-1、90 頁。
552 同上、103 頁。
553 同上、104 頁。
554 同上。
555 『回顧録』8-1、85 頁。
556 同上、86 頁。

抗日武装闘争を通じ、金日成が中国の人びとと同志的関係を結んだことはよく知られているところである。それらの人びとに対する言及は、その業績を鼓舞するだけでなく、国際共産主義運動の展開とその連携の意義を強調する意味合いもある。さらに、魏拯民の逸話を通じて、中国人もまた、金日成の領導を認知していたことを示すのである。下はその典型である。

「魏拯民のそばで仕事をしたことがある我々の同志の話によると、魏拯民は常に朝鮮革命の運命は我らの連携とともにあると言い、話をするたびに金日成同志を高く奉じるように述べたということだ」[557]。

３）解放後祖国で優遇を受けた同志のパターン

三光学校の高等課程学生らは皆賢明かつ聡明だった。そのなかで、金日成が忘れられないのは柳（リュ）チュンギョンと黄（ファン）スンシンである。男性に比べ女性に対する警戒が緩まる機会を利用して、金日成らは孤楡樹から「卡倫」あるいは吉林に帰る際には、柳チュンギョンと黄スンシンの二人に武器の管理を任せた。解放後、黄スンシンは祖国へ戻り、最高人民会議の代議員としても活躍した。柳チュンギョンは、満州を転々としていたが、人生の末年を祖国で暮らしたいと願い、1979 年に帰国した。黄スンシンのように若くして帰国していたら、彼女も著名な女性活動家になり、社会と人民のための活力ある後半生を過ごしただろうことが金日成により語られている[558]。

五家子[559]の文（ムン）ジョヤンは、反帝青年同盟の組織部長として活動しつつ、金日成らの活動を支援した人物である。文ジョヤンの兄である文シジュンは、情に厚く、何か月もの間、金日成らの面倒を見ながら、朝鮮の独立を託した。文ジョヤンが 80 歳の誕生日を迎えたときには、金日成は五家子での生活を想起しつつ、彼に花束と誕生日の祝いの席を用意した[560]。

以上のような、金日成の抗日武装闘争を助け、その後彼の恩恵を受けた人びとの描写は、

557　同上、104 頁。

558　『回顧録』2-1、185-186 頁。

559　三光学校も五家子も、現在中国に所在する学校及び地名である。1930 年代、金日成らは中国の満州地域を拠点に革命活動を展開した。中国におけるこれら朝鮮人の定着過程は、次の四つの段階に分けられる。すなわち、①17 世紀に後金軍の捕虜となった朝鮮人、②19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけ、朝鮮王朝の統治下で破産し離農した農民、③日本による朝鮮半島植民地化以降に朝鮮半島から脱出した反日人士、反日団体成員及び植民地統治下で破産し離農した農民、④1937 年から 1945 年にかけ、日本の満州支配とともに実施された朝鮮人計画移民に基づく移住者。権立編『中国朝鮮族史研究』（第２輯）延辺大学出版社、1994 年。なお、1945 年 8 月の朝鮮半島解放以後、満州地域に居住していた約 70 万人の朝鮮人が帰国を果たすが、それ以外の多くの朝鮮人は中国に残留した。その後、こうした人びとは、1949 年の中華人民共和国成立とともに、中国の朝鮮族として認められることとなった。このような経緯に従えば、1930 年代に満州地域で反日活動を展開していた文ジョヤンにとっての祖国は朝鮮半島であったと言える。

560　『回顧録』2-1、188 頁。

金日成が同志の忠誠に対し、その義理、つまり革命的義理を忘れないという、領導者の資質を持った人物であることを浮き彫りにするものである。また、文ジョヤンのことを回想する件では、「地方へ視察に行くたびに、接待員らは『漬け大蒜』を用意してくれる。しかしその味は、困難だった時期、五家子で栗飯を水に漬け、『漬け大蒜』とともに食した味とは比べものにならない」[561]と語られている。「漬け大蒜」は、植民地時代の貧しい時期に、中国の朝鮮族が数少ないおかずとして食卓に載せていたものである。この回想は金日成の庶民性を示すとともに、貧しい時代を経験した読者に共感を呼び起こす一節であろう。

４）革命第二世代による革命継続のパターン

李光（リ・グァン）は、吉林で金日成らと関係を深める過程で、共産主義信奉者となった。李光は、大小の戦闘で指揮官として高い手腕と能力を発揮した。ところが、李光は、反日の旗を掲げる傍ら匪賊に転落して日本に買収された反動者に騙され殺害された[562]。李光の息子である李ボチョンは中国人民解放軍の中隊長であったが、朝鮮戦争時に人民軍に編入され、指揮官として戦い、1950 年に戦死した[563]。幸いに、李ボチョンの息子が生き残り、祖父の世代が開拓した道、父親の世代が広げた道を、代を継いで歩んでいる[564]。

このように、李光と李ボチョン、李ボチョンの息子に代表される革命活動の継続性を紹介した上で、次のような教訓が引き出されている。

「李光の烈火のような生涯と革命活動を深く把握していた金正日組織指導秘書は、1970 年代に映画創作家らに対して、李光を原型とした芸術映画『初めての武装隊伍であった物語』を作製するよう命じた。……李ボチョンの息子は今、銃隊をもって祖父の世代が開拓し、その後を継ぎ父親世代が広めた道を元気に歩んでいる。一家族が 3 世代を通じて銃を握るということは、実に聖なることであり、誇るべきことである。……李ボチョンの息子は、私と会った際に、自らはもちろんのこと、自分の子供たちにも軍服を着せ、金正日元帥のために代を継いで忠誠を尽くすと決意していた[565]。」

金（キム）クムスンは、抗日革命の風浪のなかで、鋼鉄のように鍛錬された不屈の闘士であるとされる人物である[566]。金クムスンを含め、家族のうちの 5 名が革命のために犠牲となったのである。しかし、「過酷で無慈悲な運命を与えた神様も、優れたその家族の血統を継承させるために」[567]、金クムスンの弟（金リャンナム）だけは生き残った。この金リャン

---

561 同上、188 頁。
562 同上、147-158 頁。
563 『回顧録』3－2、163 頁。
564 同上、163 頁。
565 同上、163-164 頁。
566 同上、314 頁。
567 同上、320 頁。

ナムを探しだし、登用したのは金正日組織指導秘書であった。金リャンナムは、文学芸術部門の事業を指導する党中央委員会の指導員になり、金正日の事業を精力的に補佐した。その後、金リャンナムの次男が父親の母校である「平壌音楽舞踊大学」を卒業し、晴れて万寿台芸術団で芸術創造の道を歩み始めた。先烈が血を賭して開拓した革命は、このように代を継いで継承、完成されて行っているのであると[568]、回顧録のなかで強調されている。

5）開国元勲となった同志のパターン

現今の北朝鮮政権が 1950 年代までの派閥闘争の末に、金日成らのいわゆる「パルチザン派」によって構築されてきたことはすでに述べた。従って、抗日パルチザンが展開した闘争の過程や経験は、「主体」が確立されていく中での共産主義的教養として、また金日成主義が社会に徹底されていく中での領導芸術として欠かせない要素となっていることも、すでに述べてきた通りである。このことは、本節におけるこれまでの記述からも明らかであろう。金策、崔賢（チェ・ヒョン）、崔庸健、姜健（カン・ゴン）、崔光（チェ・グァン）らの革命活動と金日成に対する忠誠は、無論革命の継続性を重視する観点から、金正日に対する忠誠に引き継がれるべきものである。この回顧録では、先に挙げた代表的な抗日パルチザンのうち、崔賢（「百戦老長―崔賢」）と金策（「革命家金策」）が一節を割いて語られている。

崔賢は、1930 年代後半だけでも数百回の戦闘を経験し、そのなかで卓越した軍事指揮官として才能と無比の勇敢さを見せた人物として描かれている。崔賢は、金日成のそばで彼を奉じ、補佐することを望んでいたが、いざ困難な戦闘が起こるや、いの一番に敵に向かう責任感が彼の忠臣たる真骨頂であり、人間味を物語る特殊な魅力を備えていた。崔賢は逝去直前でも、「首領様は元気か、金正日組織指導秘書同志様は元気か」と尋ねた。崔賢の功績は、家族として党と首領しか知らない忠臣に育ったことである。現在、崔賢の息子たちは、金正日が創建した哨舎で、人民大衆を天と見なす「ウリ式社会主義」を輝かせ、革命の第三世代、第四世代を忠臣に育てるために積極的に活躍している[569]。

金策は、饒河で遊撃隊を組織しつつ、北満の東北抗日聯軍第三路軍の主要な職責を務め、朝鮮革命と中国革命のために輝かしい活躍をした人物として語られる[570]。金策が自ら率いる隊員らに強調した思想は、「革命同志を愛せよ、愛する時には自らの心臓のように愛せよ、革命同志より貴重な存在はこの世の中にない」[571]というものである。金策はその生涯を金日成の忠実な戦友として過ごした。それゆえ、金策が死去した後には、金日成は金策の子供を親のように面倒を見た。彼らを外国留学に赴かせ、結婚式を用意し、孫が生まれたとき

---

[568] 同上、316-322 頁。ちなみに、崔賢の息子である崔竜海（チェ・リョンヘ）は、現在朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員、同党中央委員会副委員長、洞党組織指導部長、共和国国務委員会副委員長として金正恩体制を支えている。

[569] 『回顧録』4-2、313-319 頁。

[570] 『回顧録』8-2、135 頁。

[571] 同上、137 頁。

にはお祝いを催し、自宅で家族とともに会食も行った。また、金策の名前を冠した市や工場・企業所、大学なども作り、金策市には彼の銅像も建てている[572]。金日成が金策を忠臣のなかの忠臣であると評価したのは、金策が金日成を領導の中心に置いたからである。このことを金日成自身が次のように語っている。

「私を統一団結の中心に置く過程を通じて、我が国の革命においては領導中心が形成されました。この領導中心を構築するのに金策は卓越した貢献をなしました。……遠東の基地に集まった朝鮮共産主義者の間では、地方主義や領導権の奪取のようなことはなかったのです。皆が純潔な人であり、さらに金策や崔庸健のような老長らが、はじめから私を前面に押し立てたので、領導の中心が確固たるものとなりました」[573]。

以上、金日成とその同志らを叙述する際に見られる、5つのパターン別の人物像やそれを通じて示される、革命同志の指導者に対する忠誠心・模範的考え方の描かれ方を検討した。その中での特徴を改めて要約すれば、第一に、革命先烈らが血で固守してきた信念を捨て、その創造物である社会主義を捨てたことにより、少なくない国では国民の生活が塗炭の苦しみに陥ったという現実を前提に[574]、革命は生死を賭するだけの意義を持つものであり、北朝鮮の大衆に対する革命伝統教養の目的は、党員として、また勤労者・農民としての革命実践であり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現しなければならないことを模範として示している[575]。第二に、抗日聯軍の闘士としてともに闘った中国人同志との緊密な関係の強調は、そのまま北朝鮮と中国の「伝統的関係」に置き換えられ、それは「代を継いで継承される」という両国の特殊な関係を想起させるものとなっている。第三に、抗日武装闘争期の朝鮮人民は、等しく貧しい生活を過ごしていたにもかかわらず、金日成らの革命を全力で支え、これに対して金日成は国家の首班になってもその恩返しを忘れない義理堅い指導者であることが描かれる。こうして、人民から出発し人民に帰着する指導者を形成しつつ、大衆と指導者の一体化を表現している。第四に、革命第二世代による革命継続の強調は、北朝鮮の政権そのものが革命遺族を中心に構成されていることから、それは権力の妥当性の表明に他ならない。同時に、革命第一世代は回顧録に示されるように、金日成に対して無窮の忠誠を尽くしたのであるから、革命継続の論理によって金正日・金正恩への忠誠を求めることに繋がっている。第五に、開国元勲らに後世の人びとが金正日への忠誠を尽くすよう遺訓の形で語らせることによって、次代の指導者金正日・その次代の指導

572　同上、153-154頁。ちなみに、金策の長男である金国泰（キム・グッテ）は、朝鮮労働党中央委員会政治局員として金正日、金正恩体制を支えたが、2013年12月に死去した。

573　同上、145頁。なお、注445で記したように、回顧録の第7巻、第8巻は、金日成の死後、朝鮮労働党中央委員会が「委任」という形で要綱や遺稿、党の文庫に保管されている各種資料を基に「継承本」として発刊したことから、金日成自身の回想に当たる部分においても敬語で記載されている。

574　『回顧録』6－3　414頁。

575　前掲、『朝鮮労働党歴史』485頁。

者金正恩の下に人民大衆が結集するよう、その基盤構築を図っているとまとめられる。

第４節　小結

以上のように、人民大衆を教養教化することにより心を掴む仕組みである領導芸術は、偉大性教養、愛国主義教養、反帝階級教養、信念教養、道徳教養を主たる内容として学校教育段階から展開される。学校教育では、金日成の革命と建設の歩みをはじめとする「三大将軍」（金日成・金正日・金正淑）の歴史と経験の学びや社会主義道徳が授業科目として課されるのみならず、校内での競争と称号付け、課外での文化活動や少年団での初歩的な組織生活、学外での革命史蹟地見学や記念碑的建築物の参観及びそこでの有識者からの体験談の聴取、野営所などでの集団生活を通じて、偉大な先達からの感化、嫌悪感の醸成とともに行われる自らが主体的で、正義で、愛国者であることの肯定的模範による感化、エリート意識や自尊心を植え付けた上で、自らが恵まれていることの自覚とそれをなしてくれた対象への感謝の涵養という形で心を掴まれることになる。

また、学校教育を終えてもなお、職場や農場などで行われる読報、月曜学習浸透、水曜講演会、週総和学習、人民班での人民班学習などで教養教化は継続される。そこでの内容は、例えば回顧録の論理展開・内容の分析により明らかにしたように、第一に金日成は民族という共属意識に訴えることで人びとの共鳴感を呼び起こすとともに、人民のなかから生まれた指導者と人民大衆の一体化関係を形成する。その一方で、金日成は生まれながらの環境や背景、個人的資質により必然的に代を継いで継承された革命指導者であることが浮き彫りにされる。こうして、人民大衆は指導者の領導に従うべきことが形式化される。また、金日成は自律的かつ内発的に「主体」を認識・会得したことが語られ、建国以来北朝鮮が堅持してきた主体的立場の必要性が醸成される。第二に、社会主義・共産主義建設を掲げた北朝鮮にとって、人民大衆を共産主義的人間に導いていくことは必須の課題であり、その模範的思考が教養の中心となる。共産主義的人間になるためには、党と首領のために、また労働階級と人民のためにすべてを捧げる献身さと革命の敵に対する敵愾心・憎悪心の醸成が必要である。このために、「日帝」に対する執拗な批判と自国に対する徹底した賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比の手法を用いることで、外勢に対する内部団結とその継続、国家の軍隊を強化する政策の妥当性が力説される。第三に、金日成の父親である金亨稷を含めた、彼の革命に関わる周辺の人びとの人物像とその行動・思想を具体的に叙述することで、人民大衆に求める模範的な価値観、考え方、行動を示す。それは、党員として、また勤労者・農民としての革命実践の見本であり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現するための方法である。このようにして、社会へと巣立ったあとも、北朝鮮の人びとは、党や国家が求める精神を察知し、これを取り込んで内面化させていくのである。

無論、こうした教養教化の方法と手腕としての領導芸術は、党・国家が進める革命と建設から人びとが離れられないように張り巡らされた「単位」への所属と「組織生活」によ

り支えられている。さらに言えば、「国家の社会体制を受け入れない反党・反革命的な不純分子」は、「厳しい監視対象とされる」ような、物理的暴力の機構もこれを支えているのであろう。

補章　主体思想の生命力

第１節　問題の所在

2017 年 10 月 18 日に中国で、「第十九次全国代表大会」が開催された。そこで中国共産党は、「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論、三個代表、科学発展観、習近平新時代中国特色社会主義思想」を党と国家の行動指針とし、新時期における党の指導思想とすることを明らかにした[576]。他方、北朝鮮では、1967 年 12 月に「主体思想」が成立してから、1974 年 2 月の「金日成主義」の全社会化を経て、1982 年 3 月にマルクスと比肩して主体思想は人間の役割を明らかにしたとその独創性が主張され、「永生不滅の主体思想は、我が時代の革命と建設のもっとも正確な指導思想である」と位置づけを行い、現在に至っている。

つまり、マルクス・レーニン主義を仰ぐ社会主義国家をともに標榜しているにもかかわらず、北朝鮮ではマルクス・レーニン主義と一定の距離を置きつつ、金日成が創始した主体思想のみを前面に取り上げて、指導思想として掲げている。その上で北朝鮮は、「経済的自立は、政治的独立と自主性の物質的基礎」であるとして、「自立的民族経済を建設してこそ、国の独立を強固にし、自主権を行使でき、人民たちに豊かな物質的生活を保障することができる」と力説している[577]。このような、経済における我々式の自立の強調は、周辺国のように資本主義的な経済発展を成し遂げなくても、第一義的に「主体（思想）」を固守し、漸次的に一定の成果を上げてゆけば良いとの思惑が内在している。逆に言えば、主体を固守するがゆえに徐々にしか経済発展が遂げられない自己弁解であるとも言える。さらに言えば、それは主体の核心である対外的には何に対応すべきなのかという選択権と、内部的には分裂を阻止するための判断・決定権が損なわれなければ、人びとの思考や活動に対して一定の自由を許容する内実を示唆する。

北朝鮮は経済建設・経済活動について、建国直後にはすでに、「朝鮮を富強な民主主義的独立国家として建設するために、政府は日帝時代の奴隷的植民地的経済体系を一掃し、また朝鮮を再植民地化するような、我が民族経済を破綻に陥れる外来独占資本家らの経済的隷属政策に反対し、朝鮮人民の物質的福利を絶えず向上させ、我が国の経済的繁栄と政治的及び民族的独立を保障し得る自主的な民族的人民経済体系を樹立すること」を明らかにし[578]、民族の独立を保障し得る問題として経済の重要性を認識していた。経済的な自立は、「富強で文化的な独立国家を建設するために欠くことのできない条件である。自立的民族経済を建設しなければ、国の政治的自主性をしっかりと保障することも、生産力を発展させることも、人民の生活を向上させることもできない」からである[579]。従って、自立的民族経済を建設するためには、「経済建設での自力更生の原則を堅持すべき」で、「経済を多方

576 『十九大党章学習ハンドブック』人民出版社、2017 年 11 月、6 頁。
577 前掲、「主体思想の旗を高く掲げ、社会主義建設を一層急務としよう」131 頁。
578 『1950 年版朝鮮中央年鑑』平壌・朝鮮中央通信社、1950 年、16-17 頁。
579 前掲、金日成「朝鮮民主主義人民共和国での社会主義建設と南朝鮮革命について」223 頁。

面的に、総合的に発展させるべき」で、「現代的技術で装備し、民族技術人材を大々的に育てるべき」で、そして「自国の原料、燃料基地をしっかり作るべき」であることを原則とした[580]。

なぜなら、「自力更生の精神がなければ、自らの力を信じなくなり、国内の資源を動員しようと努力もしなくなり、それゆえ革命偉業を成し遂げることができない」からだと北朝鮮では固く主張され続けてきたからである[581]。もちろん、「国際的な支持と支援の重要性を充分認め、他国の援助も必要だと考えている」が、しかし「国際的に有利な機会が到来するのを待ち望み、自国の革命闘争を弱め、他国の援助ばかりあてにして、自分で努力しようとしない誤った思想観点と態度を排撃」している[582]。要するに、北朝鮮は「決して各国間の経済協力に反対したり、門戸を閉ざしたりして社会主義を建設しようとするものではない。我々が反対するのは、『経済協力』と『国際分業』を口実に、他国経済の自立的、総合的な発展を押さえつけ、延いてはその国の経済を自国に縛り付けようとする大国主義的な傾向であり[583]、「自立経済は他の国による経済的支配と隷属に反対することで、国際的な経済協調を否認することではない」という態度である[584]。こうした内容を見ても、主体の核心である対外的な自主選択権と内部的な判断・決定権が損なわれなければ、経済活動における一定の自由が許容される内実を手繰ることができる。

本章では、大変限られた検討範囲内ではあるが、2011 年から 2016 年までの 6 度に渉って筆者が行った現地調査の結果に基づきながら、主体思想の生命力、すなわちなぜ主体思想が 50 年余りに渉って生き長らえられているのかということの一端について検討を行う。従って、まず実見観察によって得た内容を紹介しつつ、主体思想との関わりで考察を施す。次に、聞き取り内容によって得た内容を紹介しつつ、同様に考察を行う。こうした作業を経て、主体思想の柔軟な側面を導出することを試みたい。

第２節　生産現場と革命の首都における主体思想の現在

（１）農場と水産工場

北朝鮮には、「金剛山見物も食後にする」という「花より団子」と同じ意味のことわざがある。国土の 8 割以上が山地を占め、耕作地が少ない北朝鮮において、食糧問題はとても重要視されてきた。春になると冬場を凌ぐために貯えた食糧も尽き、「春窮」という言葉もある北朝鮮では、如何に思想教養が大事で遂行されたとしても、食糧が不足していては、それも十分に役割は果たせないだろう。1990 年代後半の食糧危機による数十万単位のいわ

---

580 同上、224 頁。
581 同上、222 頁。
582 同上、223 頁。
583 監修 小此木政夫・徐大粛、責任編集 鐸木昌之・坂井隆・古田博司『資料北朝鮮研究Ⅰ政治・思想』慶應義塾大学出版会、1998 年、180 頁
584 金正日「主体思想について―偉大な首領金日成同志誕生 70 周年記念　全国主体思想討論会に送った論文　1982 年 3 月 31 日」前掲、『主体思想について』48-54 頁。

ゆる「脱北者」の大量発生はよく知られているところである。食糧問題は人間の生存に関わる基本問題である。それは、北朝鮮の指導者も十分に理解し、食糧問題を革命建設と繋がる問題として認識してきた。

「人民たちの食糧問題を解決するために、穀物高地と水産物高地を占領することに力を集中すべきです。米は共産主義です。米櫃から人心が生まれ出るというように、食べ物が豊かでこそ人民たちの意識状態も良くなり、すべてのことがうまくできます」[585]。

逆に言えば、食べ物が不足すれば、人民たちの意識状態は悪くなり、すべてのことがうまくできなくなる。そこで、北朝鮮において農業発展のための方策として注力してきたのは、「主体農法」である。「主体」の名が冠せられたこの主体農法は、「狭い土地で全人民が良い暮らしをするためには、土地を効果的に利用し、農業生産を高度に集約化させる」ことが必要で、そのために自国の「自然気候条件は、谷間ごとに、山の表と裏、尾根と中腹、麓が異なる」ことから、そうした条件を十分に把握した上で、農業部門の科学者たちは、「適地栽培」原則に基づいて、「品種配置方法と作物栽培方法をよく研究し、農民たちの中で普及させること」を骨子とする農業生産方式である[586]。このことを踏まえて、「農業大学では、学生たちに党の主体農法をよく教え、農業勤労者を思想、技術、文化の 3 大革命遂行への先駆者」となるよう要求している。これは、1972 年 9 月 17 日に金正日が主体思想を具現させるために提示した 3 大技術革命路線でもある[587]。

（ｉ）青山共同農場と泉三共同農場

こうした主体農法を実践する農村モデルとなっているのが青山共同農場である。青山共同農場は、平壌の南西に位置する南浦市江西区域青山里に所在し、青々とした山のふもとにある村落というところから名付けられた。共同農場の田畑の面積は、1,000 ㎡である。解放後には、木々もない岩がごろごろした集落であったが、岩を砕き、整地し、そこに肥料を入れて木々を植え、現在は緑に囲まれた素朴な田園風景が広がる農場となっている。

金日成は、1946 年 6 月 25 日に青山里を初めて訪れ、そこに農場としての可能性を見出し、1948 年 5 月 31 日に 2 度目の訪問を行った。その際に、現地調査を行い、「全国のモデルなって、より豊かに生活をしよう」と語り、農民たちとは「近くに安座してこそ、対話することができる」と語り、農民の些細なことにまで耳を傾け、農家を見回り、釜や甕などの供給に気を配ったという。

1960 年 2 月 5 日から 8 日にかけて、金日成は青山里の民主宣伝室で歴史的な「青山里総会」を指導した。そこで、「青山里精神、青山里方法」を提起した。「青山里方法の基本は、

---

[585] 前掲、「全社会を主体思想化するための人民政権の課業」。
[586] 前掲、「主体農法を徹底的に貫徹させ、農業生産で新しい昂揚を起こそう」全国農業大会での演説、1978 年 1 月 27 日。
[587] 金日成『金日成全集 第 48 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、2003 年、155-156 頁。

上部機関が下部機関を助け、目上の人が目下の人を助け、よく現地に行って実情を深く調べ、問題解決の正しい方法を立て、すべての事業で政治事業、人との事業を先に立たせ、大衆の自覚的な熱情と創発性を動員させ、革命課業を執行させることにあります」というものである[588]。すなわち、「青山里精神」は、党が農村を指導し、農民が指導を仰ぎ生産を行うための思想的側面に焦点を当てた内容の総体であり、「青山里方法（方式）」は、このような形態で生産を進めるための具体的な党と農村の関係、実践方法に焦点を合わせた内容の総体のことである。かかる精神・方法は、まず農業分野から発出され、全国の共同農場のモデルとされたが、その後すべての経済分野での基本的な指導方法とそこでの精神になった。これを工業部門（工場・企業所）に応用したのが「大安の事業体系」である。この後、「青山里農場共同組合」は、「冷床苗床作業」にも成功した[589]。

＜図 15＞青山共同農場の外観（左上）、同所の事績館（右上）、同所の事績館に掲げられている金正日の教示と先進営農法（左下）、同所の文化会館（右下）

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 5 日）。

現在、青山里には、約 2,500 人の人びとが暮らしており、そのうち農民は約 1,000 人で、これらの農民は 10 の作業班に分かれている。生産事業においては、肥料 1 トンで穀物 10 トンを生産する 1:10 の原則が教示とされ、それが実践されている。青山共同農場は、全国

588 前掲、『金日成著作集 第 35 巻』294 頁。
589 前掲、『金日成著作集 第 40 巻』78 頁。

で支援なしに自力で田植えと収穫を行っていることで知られている。農場では稲以外に、果樹園、畜産の経営や温室野菜（キャベツ、ナス、トマト、キュウリなど）を育てている。「個人田圃管理責任制」が実施されてからは、とくに温室野菜の余剰分を地域市場に納めて、農民らに現金を配っている。ある作業班の班長は、実入りを増やして作業班員たちに少しでも多くの現金収入が得られるよう、温室入口の通路を狭めてキャベツを植える涙ぐましい努力を行っている。しかし、このような「知恵」に基づく田畑の拡大と増収も、狭い国土で適地栽培する主体農法の一つである。また、こうした「やり手」は、班員たちの選挙によって選ばれる作業班長に再選されること間違いなしだそうである。このほか、青山共同農場には、「青山農業大学」が併設されており、先進農業技術や農業経営を学ぶための元山農業大学を核としたインターネット学習施設や農場員らが兼業的に勉強を行う講義形式の農民大学もある。

＜図 16＞温室通路入口を狭めて作られた畑

出所：同上。

平壌東方の江原道安辺郡北部に位置している泉三協同農場も青山共同農場と基本的には同じような仕組みで生産が行われている。泉三共同農場でもまた、「個人田圃管理責任制」の下で、数年分の収穫量を基に定められた生産目標分の収穫物を国家に納め、残りは個人所有にすることが行われている。これは農場員のモチベーションを向上させ、生産力を高めるための措置である。泉三共同農場では、とくに田畑ではない空き地を十分に確保した上で、作業班員各自の住居の庭周りの 30 町の土地は各人の裁量で、思い思いの野菜などを植え、その収穫物を農民市場で売り買いして、現金を得ることができるようにしている。筆者を案内してくれた作業班長もまた、自宅の庭やその周囲の空き地で、踏み場もないくらいの野菜や果物を植えていた。ちなみに、この作業班長は月に 30 ウォン[590]の手当をもら

[590] 公定レートでは、1 円が 0.921 ウォンである（1 ドル＝104.24 ウォン、1 ユーロ＝123.06 ウ

い、毎日の朝礼の仕切りや作業班世帯の課題を伝えたり、火曜学習・水曜講習会・金曜労働・土曜学習・日曜生活総和の世話などを行ったりしているそうである。また、泉三共同農場は、6 か年経済計画期間中に実施された「70 日闘争」で、主体農法の要求通りに増産を進めた結果、計画を 2 年近く短縮して達成し、それによって全国に名を轟かせる農場となった。

＜図 17＞泉三共同農場の外観（左上）、同所の革命事績教養室（右上）、同所の農業科学普及室（左下）、同所の文化会館（右下）

出所：同上。

以上のように、農場では、「個人田圃管理責任制」の下で、各農場や作業班長の裁量で、土地利用や増産、実入りを拡大するための工夫が行われている。これらの改変は、適地栽培や増産に見合えば、主体的な創造だと見なされるようである。

＜図 18＞作業班長の自宅（左）、庭回りに植えられている野菜（右）

ォン、1 元＝15.48 ウォン）。2017 年 8 月 13 日に筆者の指導教官が現地で確認。しかし、平壌市内の「光復商業中心」という地元の人びとも買い物に訪れるスーパーでは、1 円が 69 ウォン（1 ドル＝8,000 ウォン、1 ユーロ＝9,247 ウォン、1 元＝1,200 ウォン）であり、75 倍ほどの格差がある。2018 年 7 月 7 日に筆者の指導教官が現地で確認。このスーパーのレートを適用すると、作業班長の手当は日本円で 30 銭に満たず、名誉職だと考えられる。

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 8 日）。

（ⅱ）平壌ナマズ工場

平壌市楽浪区域に位置する平壌ナマズ工場は、2000 年 11 月に工場建設が着工され、2002 年 2 月に完工、同年 4 月に竣工式が行われた比較的新しい水産工場である。敷地面積は、10.8 ヘクタールである。この工場では毎年 2,000 トンのナマズが養殖され、生産されている。元々ナマズはアフリカから輸入されてきたもので温水を好むことから、隣接する火力発電所の排水を用いて養殖を行っている。だが、火力発電所の排水は一定温度ではないため、温度変化に備え、熱加熱、太陽光加熱、熱ポンプ、自動熱供給など 4 つの手法で温度管理を行っている。これらの作業はすべてコンピューター数値制御（CNC）装置を通じてコントロールしている。室内での産卵・稚魚の肥育は 4 つに分かれた建物の棟で行い、冬にはビニール養殖を行っている。野外には 102 の池があり、そこが主な養殖場である。1 つの池当たりで 15～20 トンの生産が可能だという。

＜図 19＞平壌ナマズ工場の加工施設（左）、同所の野外飼育場（右）

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 7 日）。

人民生活の向上を重視する金正恩は、数度ここを現地視察しており、その際に従来の 2,000 トン生産から、2,500 トンは生産可能だとする指示を与え、現在は年産 2,500 トンの生産を続けている。このうち、2,000 トンは平壌市民に提供する配給分であり、残りの 500

トンが工場の手取り分となり、その売り上げで工場経営が行われている。また、国内に数店舗のナマズレストランを展開しており、そこでの売り上げも手取り分となる。なお、最近開発した先進養魚技術を用いて、一つの池に対する飼料を 1.2 kgから 0.8〜0.9 kgに減らし、自力更生を行った模範的な工場として認められているという。こうした技術が波及し、平安南道の順川市や黄海南道の三泉郡にもナマズ工場が建設されることになった。飼料としてよく使われているのは大豆粕、アミなどだそうである。

ナマズ料理は肝炎、虚弱体質、疲労回復、糖尿などに効果を持つ、日本で言えばウナギのような滋養強壮食材として、平壌市内だけでもナマズスープのレストランが 10 ヵ所程度点在する。食糧が豊富であるとは言えない北朝鮮では、人民の食生活を急速に向上させるために、ふ化から食用となる成魚までの生育サイクルが早く、また養殖しやすく産量が多いナマズを養殖している。生産したナマズの一部は生で提供し、一部は冷凍あるいは缶詰めにして外部に提供している。この工場の職員は、職員食堂で 20 ウォン払えば、ナマズスープを食することができる。

食糧を扱うこの工場でも、以前の 2,000 トン生産を下回ると、経営が立ちゆかなくなることから、日夜コストを下げるための飼料の研究やナマズを一般的に食してもらうためのメニュー開発を行っている。メニュー開発は、職員総出のコンペで行い、採用されれば、ボーナスが支給される。

（2）肥料工場と製鉄所

（ｉ）興南肥料工場

平壌の北東に位置する咸興市郊外の興南区域に所在する興南肥料工場は、その前身が日窒コンツェルンによって 1927 年に建てられた朝鮮窒素肥料の興南工場である。現地案内員の説明によれば、解放の混乱のなかで、「日帝」により 70%以上破壊されたのをわずか 2 ヵ月間で復旧し、1945 年 10 月から生産を再開させたという。1945 年 12 月 6 日に金日成が初めて現地調査にきた折、もっとも苦悩していたのが技術問題であった。この問題を解決するために、全国で初めての工業大学を施設内に建設した。その後、金日成は毎年工場を訪れ、朝鮮戦争の勃発までに 5 回に渉って現地指導を行った。その甲斐もなく工場は、朝鮮戦争によってほぼ全壊したが、戦後復旧計画の重工業優先と農業の同時発展という政策のお陰で、資材が集中的に投下され、1955 年の初頭には肥料が出荷できるようになったという。またその後、1987 年 12 月 6 日には金正日の「配慮」で再建された。

金日成が現地視察に訪れる前には、必ず金正日が 1 時間前にはやって来て、労働者の生活状況から布団の供給状況まで子細に確認した。これは金日成を満足させるための金正日の行動であると思われるが、裏を返せば金日成がそれだけ労働者の細かい点までチェックしたことを示すエピソードだろう。2007 年 8 月 7 日に金正日は、農業発展のために一生を捧げた金日成の遺訓だとして、工場内に褐炭ガス工場を新設する方針を示し、そのための資金を提供した。

＜図 20＞興南肥料工場の工場施設の一部（左）、同所で生産された尿素肥料（右）

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 9 日）。

興南肥料工場では、農業に必要な肥料となるアンモニアを生産する。周辺の中小化学製品工場の母体として、その傘下に子工場を四つ抱えている。そこで生産を行う従業員は 6～7 千人を擁し、敷地面積は 40 万㎡を誇る。1 日当たり 1,500 トンの肥料を生産しており、これを 1:10 の原則に照らすと、15,000 トンの収穫分ということになり、1 年にすると 547 万 5 千トンの収穫が見込め、この工場だけで自給分の肥料が賄える計算となる。アンモニア塔の巨大煙突からは、濛々と煙が排出されていて、「大丈夫か」と尋ねたら、国際標準規定に適合しており、環境汚染はないと言い切る。そこで生産される肥料を豚飼料に混ぜると豚が肥えるという。工場は、1 年のうち 1 ヵ月間の補修期間以外には、24 時間 3 交替で生産を休みなくし続ける。

現地案内員として同行した元技術班長の解説によれば、窒素は水を電気で水素と酸素に分離させた後、褐炭を焼いて炭素を得て、水素を取り出す。窒素は空気中でマイナス 200 度に下げると水になる。こうした温度差から窒素、酸素、アンモニアを取り出したのちに、それらをアンモニア塔に入れ、残りの物質は廃棄物とする。1：3 の割合でガスを抜き、最後に液体化させる。温度 500 度、圧力 320 気圧で鉄を触媒剤に使う。このようにして生産される肥料は、尿素：アンモニア＋炭酸ガス、窒安：アンモニア＋窒酸、硫安：アンモニア＋硫酸の三種類である。肥料生産の際に、原油があれば簡単だが、原油を産出しない国で自力生産を行うから、それが煩わしいという。原油燃焼の代わりに石炭を用いるから、灰の処理もあり、大変だという。処理された灰は、管やタンクなどを作るときに利用される。こうした自己資源による自力生産が主体思想の体現であり、誇らしいという。とりわけ、国際制裁を受けている北朝鮮の現況に鑑みると、不安定な国際状況の中で輸入に頼って原材料が確保できなくなるより、煩わしくとも安定的であるとのことである。

このように、全国的に名が知られたこの工場では、国産の燃料と資源、技術を用いて生産を行っているほか、廃棄物（灰）も再利用し、まさに主体的な自力更生を地でいく生産活動を展開している。とはいえ、自力燃料での生産は、「正直煩わしい」という。そのよう

に元技術班長が説明したとき、同行していた工場の監視役のような人物の顔色が変わったが、元技術班長は平然と「だってそうでしょう。それが現場の言い分なのだから」と、さも供給体制が悪いかのような反論を口にした。自力更生とは言え、現場と管理者の論理のすれ違いは存在するようである。

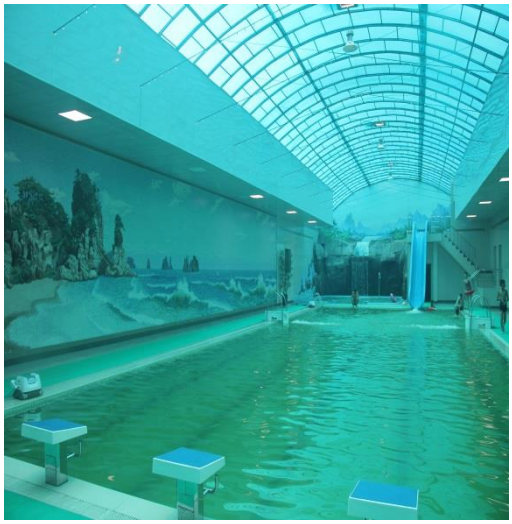
（ⅱ）千里馬製鋼連合企業所

平壌市と境を接する南浦市千里馬区域に所在する千里馬製鋼連合企業所には、金日成が47回、金正日が23回、金貞淑が3回現地指導を行った国内有数の製鋼所である。旧名は降仙製鋼所で、所在地域が降仙里だったことに由来する。それが自力更生と増産の代名詞である千里馬運動のシンボル的工場として位置づけられ、現在の名称となった。その前身は、解放前の三菱鉱業平壌製鋼所である。

現地案内員によれば、解放直後の1945年10月9日に金日成が初めて現地視察に来て、破壊し尽くされた製鋼所を見て回り、労働者に自力で復旧する課業を与え、1945年12月20日に出鋼することとなったという。北朝鮮創建後、自立的民族経済の土台を築こうとする政策下で、製鉄生産は欠かせない産業であり、降仙製鋼所にも優先的に資本投下が進められた。ところが、朝鮮戦争によって工場の大部分が破壊された。停戦直後の8月の一番熱い季節に、10里の道を現地視察に来た金日成に対して、降仙製鋼所では休憩場所を提供することすらできなかったが、金日成は幹部らと木陰で今後の対策を話し合った。その際に、金日成は「我々の力と技術で製鋼所の基本である『電気炉』を復旧し、これを励みに他の工場も復旧できるようにする」よう教示した。これに対して、米国は「朝鮮の力のみでは100年かかっても復旧などできない」と見下したが、1週間程度で復旧を行い、教示から40日後の9月20日、出鋼を再開した。戦後復旧3か年計画（1954-56年）時には、「重工業の優先的復旧発展を保障しつつ、軽工業と農業を同時に発展させる基本路線」に応じ、1956年11月15日に千里馬大高潮を呼び起こす起点となり、1万トン増産の任務が与えられた。だが、1958年には生産計画の9万トンに対して、6万トンしか生産できない状況に落ち込んでしまった。そこで、生産技術の改良を図り、三段複式加熱改造などの技術革新を行い、翌年には12万トンにまで増産させた。

こうして千里馬運動のモデルとなった降仙製鋼所は、集団的革新運動である「千里馬作業班運動」（作業班ごとの増産を目的とする）の模範ともなり、「一人は全体のために、全体は一人のために」働らく工場として、金日成の呼びかけに応じ、製鋼の稼働時間を10時間20分から8時間30分に短縮した。このことは、金日成が群衆の中に分け入って政治事業を行った結果、生産工場での飛躍的な成果が成し遂げられた見本であると説明された。

＜図21＞千里馬製鋼連合企業所の製鉄工場の一部（左上）、同所で生産された鉄の加熱（右上）、同所の文化施設内のプール（左下）、同所の従業員用食堂（右下）



出所：筆者撮影（2016 年 6 月 6 日）。

その後、1961 年には主体的な製鉄基地とされ、1974 年 3 月には降仙製鋼連合企業所に拡大した。降仙製鋼連合企業所をモデルとした城津製鋼所（現在は連合企業所。その前身は日本高周波工業城津工場）では、その後いわゆる「主体鉄」と名付けられた特殊鋼が生産された。「主体的な鉄生産方法」で生産される主体鉄とは、中国からのコークス炭の輸入に頼らず、国産の無煙炭により鉄を溶かす方法で製鋼された鉄のことである。この工程は、こうした「我々式」の自力更生により展開される生産は、「自更力」と表現される。

金日成は 1990 年 4 月 22 日に生前最後の現地指導を行い、降仙製鋼所は伝統的に全てのことを自力更生で行う千里馬精神が発揮されている企業所だと語ったという。2008 年 12 月 24 日には金正日が千里馬製鋼連合企業所の改進、現代化を教示した。その際に、「降仙の労働階級は、強盛大国建設で革命的な大高潮の先鋒に立つべきである」と述べ、1 万 4 千台のテレビを全労働者に配ったという。

このように、この連合企業所は、歴史的実績と高い生産能力を誇り、千里馬運動の名を冠した自力更生のシンボル的な生産施設である。ちなみに、この企業所の鋼鉄生産能力・鋼材生産能力はともに 60 万トン、鋼種は 180 種、品種は 150 種の生産を挙げており、総生

産額は 31 億 2 千万ウォン（１人当たり 36 万 9 千トン）である。また、総従業員数（11,200 名）に占める大卒者（2,200 名）の割合は、20%程度で比較的に高い。だが、この企業所では、城津製鋼連合企業所のように、原料・燃料の投入過程からすべて国産の資源で賄い、銑鉄から質の良い製鋼ができるまでの工程をすべて自力で行っている訳ではない。そうした内実は、現地の説明で言及されることはなかった。

＜図 22＞主体鉄の展示（三大革命展示館）

出所：筆者撮影（2016 年 11 月 4 日）。

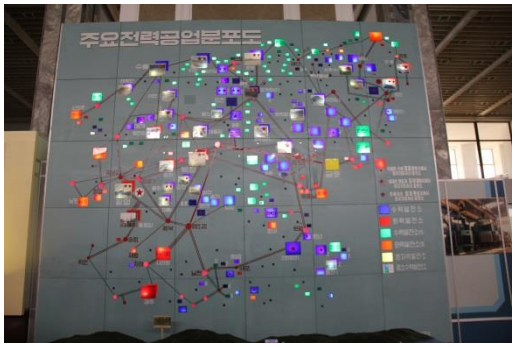
（３）三大革命展示館

平壌市西城区域蓮池洞に所在する「三大革命展示館」は、北朝鮮における「思想、技術、文化」の三大革命の成果を集大成した総合展示館である。三大革命の主唱は、1970 年 11 月の「第五次党大会」からであるが、建国前の 1946 年 8 月に開館したとされており、1993 年 4 月に改築拡張され、現在に至る。敷地面積は 100 余ヘクタールで、この敷地内に、主体思想労作展示館、重工業館、電子工業館、軽工業館、農業館、技術革新館、野外展示場などがある。野外展示場には国産の自動車やバス、トラクター、機関車、客車などが展示されている。また、技術革新館では毎年定期的に平壌国際商品展覧会が開催されている。

三大革命展示館では、三大革命の革命が従来の思想・技術・文化を超越し、新たな進歩を遂げることであることから、とりわけ自立的人民経済各分野で成し遂げた革新的成果、つまり自力更生で新たに生産を向上させてきた成果が展示されている。重工業館では、重工業各分野での先進技術とそれによる生産物が散見される。例えば、北朝鮮において生産活動の基礎となる電力工業に関しては、重要電力工業分布図を掲げ、水力（青）・火力（赤）・原子力発電所（黄）の所在位置と規模を電気パネルで表している。鴨緑江と豆満江沿いに

水力発電所を配置し、石炭資源が豊富な地区には火力発電所を建設して、自国の資源を余すところなく活用していることを誇っている。また、朝鮮労働党創建 70 周年に創建された最新の「白頭山英雄青年発電所」の模型の展示もある。金正恩は過去に 4 度もこの発電所を現地指導し、不利な自然地理的条件に勝利し、発電所を建てることができたという。2016 年 4 月までに 3 箇所の発電所が建設されている。

＜図 23＞三大革命展示館の重要電力工業分布図（左）と白頭山英雄青年発電所の模型（右）



出所：筆者撮影（2016 年 6 月 7 日）。

また、北朝鮮は山岳地域が多数を占める小国ながら、国土面積に対して有数の石炭埋蔵量を誇る国である。従って、石炭資源を活用した火力発電、生産物も多く、重要地域別の石炭分布図の展示やアジア有数の規模と埋蔵量を誇る茂山鉱山の採掘状況を解説する展示もある。三大革命展示館の現地指導にきた金正日は、茂山鉱山の模型の前で立ち止まり、茂山鉱山の磁鐵鑛の埋蔵年数と埋蔵量を確認し、「人も青春、鉱山も青春」と語ったという。

＜図 24＞三大革命展示館の重要地域別石炭分布図（左）と茂山鉱山の採掘内部の模型（右）

出所：同上。

さらに、全ての生産体系の機械・電子化や情報化を重視する北朝鮮では、コンピューター数値制御（CNC）装置を用いた工作機械によって、自動車やテレビ、携帯電話、家具、衣

服、食料品加工などの複雑な部具・部品を製造しており、そこで活躍する CNC 装置の実物や製鋼加工に必要で、世界に 6 台しか存在しないという国産の 1 万トンプレス機の展示も行っている。これらの解説では、とくに現地案内員の熱が一層高まる。

＜図 25＞三大革命展示館の CNC 装置（左）と 1 万トンプレス機の縮小模型（右）

出所：同上。

加えて、金日成の生誕 90 年に操業した国産自動車メーカーの平和自動車工場は、現在年産 1 万台を誇っている。その販売価格は、9,000～10,000 ユーロである（口笛と名付けられた小型の自動車は 7,000 ドル程度だという）。年産の目標台数は、10 万台だという。

＜図26＞三大革命展示館に展示されている国産車

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 7 日）。

紙幅の都合で、これ以上の紹介は避けるが、三大革命展示館には、自国の思想・技術・文化に関わる歴史過程、数多くの生産物とその製造工程が集約されて展示されており、このほかにも、国産のビナロンや品種改良された農作物、その時点でのすべての金日成・金正日・金正恩の労作、そして国産の人工衛星やロケットの模型まで収録されている。

但し、この展示館を参観している中で大変興味深かったのは、現地案内員が熱を帯びて説明を行っている一方で、同行していた旅行社の案内員が日本語で、「日本はもっと進んで

いるでしょう。日本にはもっと便利で先進的なものがあるでしょう」と誰憚ることなく口にしたことである。もちろん、現地案内員は日本語が聞き取れなかったが、筆者がそこで苦笑いを浮かべていると、その旅行社の案内員は現地案内員に対して朝鮮語で、「日本にはもっと進んでいるものがあるそうですよ」と話の腰を折り、現地案内員もそんなことは承知しているとばかりに、次の展示の説明に移った。

また、三大革命展示館に限らず、同様に国家の発展や道などの地域、農場・工場・企業所の成果を展示する事績館や沿革室のような場所に赴き、現地の案内員から解説を受ける際に特徴的なのは、そこに特有の歴史や沿革、発展過程、資料・統計などを説明するのではなく、如何に三大将軍（金日成・金正日・金正淑）や現在の指導者である金正恩の配慮を受けたか、それらの人物に関わり発展してきた経緯や現状があるのかを説明されることである。その各所の特徴や特質を知りたい筆者からすると、辟易してしまうほどである。実際、三大将軍や金正恩との関わりについて説明する際に饒舌であった現地案内員が、展示されている新聞資料などに基づいて、その箇所の歴史的事実について筆者が質問をすると、絶句してしまう場面が度々ある。それは、当該展示館や事績館、沿革室などが、それ自体の展示や事績、沿革を紹介する目的で創設されたものではなく、三大将軍や金正恩の判断・決定、配慮に基づいて、今があることを展示し、事績を称え、沿革を辿る目的で創設されたものであるからだろう。そして、現地案内員もそのことのみに熱心であり、それをこなしさえすれば、自分の役割を果たしたことになるからだろう。さらに、そのことを追及するなら、それ以外の領分にには、展示館や事績館、沿革室、またその案内員は、縛られないと言える。

＜図 27＞三大革命展示館野外展示場の国産バス（左）と国産機関車（右）

出所：筆者撮影（2016 年 11 月 4 日）。

（4）革命の首都「平壌」と地方都市

金正恩が父親の金正日のあとを受け継いで政権を担うようになってから、比較的早い段階で主張されたことの一つに国土管理事業があり、それは「国の富強繁栄のための万年大計の愛国事業であり、人民に素晴らしい生活の場をもたらすための崇高な事業」と説明さ

れている。その事業の一環として、「まず、平壌市を革命的首領観が確立した聖なる革命の首都、壮大華麗で風光明媚な世界的な都市に作り上げる」ということがある[591]。要するに、街の形成や道路建設、住宅、公共施設、文化厚生施設、公園、遊園地、イルミネーションに至るまで、平壌市を国内のモデル都市として整え、地方都市もそれに倣うように整備していき管理する、先平壌整備、後地方・農村のキャッチアップ整備である。

筆者が北朝鮮で現地調査を始めたのは、金正恩が執権する直前の 2011 年 8 月からであり、その頃以降という限定付きながら、訪朝するたびに平壌をはじめとする都市が様変わりしている印象を受ける。例えば、中国の丹東から列車で新義州へ至る際に鴨緑江岸の岸辺を眺めることができるが、2011 年 8 月にそこを撮影した時には、保養施設である「鴨緑江閣」くらいしか建物は点在していなかった。しかし、2014 年 8 月にそこを撮影した時には、同じ場所に野外プールが設営され、泳ぎを楽しんでいる人やその周辺でピクニックをしている姿を目にした。現在では、さらに鴨緑江大橋を挟んで、外国人（中国人）向けのお土産施設や税関、屋台やゲームセンターなどの簡単な遊興施設が建てられている。そのすぐそばの新義州青年駅も 2016 年までにリニューアルされた。

＜図 28＞2011 年 8 月に撮影した新義州の鴨緑江岸（左）、2014 年 8 月に撮影した同所（右）

出所：筆者撮影（2011 年 8 月 19 日、2014 年 8 月 18 日）。

また、とくに平壌市は様変わりが激しく、バス停や公園などの公共施設が目に見える形で変化を遂げている。筆者の印象に基づく記述となるが、2011 年頃の平壌市内の住民の服装は、主として白や黒、茶系の単色な地味目が多く、また粗末な品質に感じたが、2016 年頃になると、明るく垢抜けした服装にイメージチェンジしたかのようだった。また、街を行き交う多くの女性は、スカートを履き、ハイヒール姿で、お洒落な日傘（15～30 ドル程度）を差しているのが目立つようになった。

＜図 29＞2011 年 8 月に撮影した地下鉄凱旋駅近くのバス停（左）、2016 年 6 月に撮影した未来

[591] 金正恩「社会主義強盛国家建設の要求に即して国土管理事業に革命的転換をもたらすために―党、国家経済機関、勤労者団体の責任幹部への談話―2012 年 4 月 27 日」チュチェ思想国際研究所『金正恩著作集』白峰社、2014 年、77-81 頁。

科学者通りのバス停（右）

出所：筆者撮影（2011 年 8 月 18 日、2016 年 6 月 6 日）。

さらに、市街地は 2016 年頃になると、車が明らかに増え、平壌駅やその他の観光施設の入口の前には、タクシーが目立つほど増えていた。今や信号機も増え、交通保安員の姿は減り、人びとが移動にタクシーを使うのも一般的となった。2014 年 8 月に丹東から平壌へ向かう列車で出会った北朝鮮の女子大学生も、荷物が多いし、わざわざ迎えに来てもらうのも面倒なので、平壌駅から家まではタクシーで帰ると話していた。タクシーの料金は初乗り 2 ドルである。

加えて、金正恩の平壌市の整備を通じた人民生活向上の成果として、「倉田住宅街」、「銀河科学者通り」、「衛星科学者住宅地区」、「未来科学技術者通り」、「黎明通り」などの近代的な高層住宅群、「柳京院・柳京館」、「綾羅人民遊園地」、「紋繍遊泳場」、「馬息嶺スキー場」（元山地区）などの遊興施設、「倉田ヘマジ食堂」、「大同号食堂船」、「虹号遊覧船」などの飲食施設の整備のほか、「大同江ビール祭り」、「元山航空ショー」（元山地区葛麻空港）などのイベントが数多く開催されるようになった。また、「人材重視、科学重視」というスローガンの下で、高層住宅群にはとくに奇抜な科学者、大学教員向けの住宅が建てられており、現地の中学校教員や大学教員に話を伺ったところ、以前は芸術家、スポーツ選手、軍人になりたいという生徒・学生たちが多かったが、今では圧倒的に科学者、大学の教授になりたいと言う生徒・学生が多いという。

そして、一般的には、平壌市とその他の地方都市、都市と農村の間には格段の発展・生活差があり、平壌は「特権階層」が暮らす都市であると考えられている。それは確かにそうなのであろうし、平壌から地方へ出る際、地方から平壌に戻る際の検問の厳しさや平壌と地方のインフラの充実ぶりからもそれは実感できることである。

＜図 30＞2011 年 8 月に撮影した平壌駅頭（左）、2016 年 6 月に撮影した平壌駅頭（右）

出所：筆者撮影（2011 年 8 月 21 日、2016 年 6 月 10 日）。

＜図 31＞科学技術殿堂（左）と倉田住宅街（右）

出所：筆者撮影（2016 年 11 月 3 日）。

だが、地方都市の一つである元山市に行ったところ、「水辺にある高閣は、月見にもってこいである」ということわざが自然と頭に浮かんだ。平壌とは異なる長閑さと開放感があった。例えば、海浜近くの沖合に浮かぶ小島へ渡る道端では、簡易な潜水具を身に付けた男性が素潜りで捕まえた魚や貝を即席の露天に売っているのを目にした。即席の露天商は、道端の空いたところに小さな七輪をたくさん並べて、そうして仕入れた魚（さより）や貝（ハマグリ）を刺身にしたり、七輪で炭火焼きをさせたりして商売を行っている。その時期は、「第七次党大会」直後の「200 日闘争」が始められて間もない頃で、その日の仕事を終えた労働者たちが道端一杯に広がり、バーベキューを楽しんでいた。筆者も案内員から借りたウォン貨で食材と焼酎を買い、人びとに混じってバーベキューを満喫した。

＜図 32＞平壌市内から郊外へ出る際に設けられている簡易的な検問

出所：筆者撮影（2016 年 8 月 23 日）。

＜図 33＞元山市海浜地区の長徳島（左）、浜辺で炭火焼きを楽しむ人びと（右）

出所：筆者撮影（2016 年 6 月 9 日）。

＜図 34＞露天で販売されている食材（左）、浜辺での労働者たちの夜遊会

出所：同上。

主体思想教養の一つである共産主義道徳教養からすれば、「礼儀作法と公衆道徳を良く守り、集団の団結と和睦を成し遂げ、社会に健全で文明的な生活気風を立てるべき」である

とされるが[592]、そうした模範的な姿はなく、大声で酔っ払い、道端に座り込んで行儀悪く歓談に耽っていた。潜水具を身に付けた男性と露天商の店員との間では、売り買いの値段交渉で口喧嘩をしている光景も目にした。もちろん、このくらいの売買であれば、自由に行ってもよく、自らの手により得た商品を少しでも高く売ったり、少しでも安く買い叩こうとしたりするのは、「自己の運命の主人は自らである」として、「具体的な環境に応じて」自らの実入りに力を注ぐ個人の創造性の発揮なのであろう。

第３節　一般市民における主体思想の現在

筆者は、この章の冒頭で述べたように、2011 年 8 月から 2016 年 11 月にかけて、6 度に渉って訪朝を行い、そこで出会う税関の人びと、現地案内員や解説員、農場・工場・企業所の職員、列車や飛行機で隣り合わせた人びとになるべく話しかけ、その際主体思想について話題にした。話しかけたほぼ全ての人びとが口にするのは、主体思想について、「人間はすべての主人であり、すべてを決定するという思想です」ということか、「自分自身の運命の主人は、自分自身であるという思想です」という答えである。とはいえ、話し込むうちにそうした公式的な主張とは異なる見解や態度などが見られることもあった。本節では、現地の聞き取りを中心に、さらに主体思想の柔軟性を追究しよう。

（1）海外で暮らしている北朝鮮の人びと

ある会社員男性は主体思想について次のように解説してくれた。「主体思想は、この社会は神様ではなく、歴史も技術の発展も人間が中心・基本となって成立したものであり、人間だけが高級動物であるということを教える思想です。先軍思想と主体思想は別の思想ではなく、先軍思想は主体思想に基づく思想です。全ての国家というのは、自らこそが自らを守るべきであって、ほかに誰かが守ってくれる訳ではありません。以前朝鮮が日本の侵略を受けたのは、力が弱かったからです。自らを守る力は、自らで磨いてこそ備わるものであって、そうして自分の国が守れます。その主体は、軍隊です。現在、リビアやイラクがアメリカの空襲を受けているのも、力が無いからです。我が民族は、単一民族であり勤勉で、剛毅で羨ましいものの無い民族ですが、不幸なことは分断です。アメリカが朝鮮に対して、思うままにできず、威嚇はするが銃弾の一つも投げつけることができないのは、朝鮮の軍隊が強いからです。例えば、子供のけんかでも、力の強い子が勝つように、国家間でもそれは同じです。力が強ければ威張ることができ、力が弱ければ屈服する。国家とは人間たちの集まりです。だから、自分の力を育てるのが重要です。特に、歴史的な経験を振り返ると、古代から現在に至るまで、戦争のない時代は一度もありません。大英帝国は、『陽が落ちることのない国』と言われたほど世界中に植民地を持っていたし、現在も戦争は続いています。そうした中で、朝鮮民族が生き続けようとするなら、力を育てるべきです。努力して力を備えれば、国が小さいといっても弱いということにはならない。日本

[592] 前掲、『金正日選集 第 14 巻』149 頁。

は、朝鮮から多くのものを奪っていき、関係を改善するのが難しい相手です。また、日本政府の態度はコロコロ変わるから、慎重に見極めるべきです。私たちの政府は、そんな資料を全て揃えています。日本は、百済や李朝の文物、青磁器など多くのもの奪っていきました。日本人から見ると、朝鮮の人びとは文字（ひらがな、カタカナ）をはじめ、壁画などの多くの文化を教えた師匠だが、その師匠に対して侵略をしたというのは酷い民族だと思います。日本に行ったことはないし、行く必要もないが、今後関係が改善すれば行くかもしれないですね」。

また、中国の大学に留学しているという女子大学生は次のような話をしてくれた。「中国の若者は、自らの利益だけを考え、将来を展望することがないように思います。我が国の若者は、まず祖国の利益と未来のためのことを考えます。今は貧しくても、元帥様（金正恩：筆者注）の領導があるから、未来は輝かしいと思う。祖国の大学生は、誰でも主体思想や先軍思想について知らない人はいません。祖国では、大学生が定期的に住民らに対して宣伝する活動も行っていますし……」。

このように語ってくれた北朝鮮の男性は中国の深圳で商売を行っており、女子大学生は瀋陽の小規模な大学で勉強している。彼・彼女らは、北朝鮮では数少ない外部世界を知っている人たちである。また、対話した空間も北朝鮮では「外国」と見なされる国際列車・飛行機の中でのことである。それにもかかわらず、その応答は見事に教養通りである。中国でも比較的反映した都会に暮らしていても、その国への憧れは一切控えつつ自国を賛美する。

（2）外国人との接触を有する仕事を行っている人びと

ある貿易会社に勤める男性は、北朝鮮へ向かう飛行機で偶然隣り合わせた筆者に対して、次のような話をしてくれた。「私は、仕事の関係で、欧州や米国籍の友人が多い。政府間の関係はどうであっても、個人間の関係にはあまり影響がない。しばしば欧州の友人である資本家は、朝鮮が未開発の国だから、朝鮮こそアジアで最後に残された市場だと言う。今の時期こそが彼らはチャンスだと言う。投資というのは、短期的によりは長期的に考えるべきである。例えば、今 10 万ドルを投資すると、何年後かには 100 万、200 万ドルになる。中国もここまで経済が発展したのにはわずか 20～30 年しかかかっていないから、朝鮮は今のこの時期を乗り越えれば、さらに急速に 5～10 年くらいでガラッと変わるかもしれないと思っている。間もなく良くなると思う。ここ数年、中国の東北糧食局から 10 万トンの 2 年積（古米）のコメを買っている。だが、今は買うことがなくなりつつある。なぜなら、ベトナムのコメが安く、大量に輸入しているからだ。どこの国のものであれ、コメでも何であれ、価格が安ければ、古米かそうでないかにかかわらず売れる。東北食糧局からの輸入だと、大連まで運んで 1 トンあたり 490 ドル、船で南浦まで運ぶと 500 ドルになる。だが、ベトナム産は、南浦まで船で運んでも 430 ドルもあれば十分足りる。今国内ではチャンマダン（市場）が流行っている。そこで売り買いしているのは主に女性であるが、とて

もお金になる。そこで扱っている輸入品は、全部中国からの物で、何で揃っている。韓国製は持ち込めなくてダメだが、とりわけ日本製品は大人気である。現在、朝鮮では自力更生を提唱しているから、原材料であれば何でも輸入したい。もう、我々は制裁に慣れているから気にしない。社会主義であれ、資本主義であれ、人びとを豊かにすれば良いのだと思う。資本主義と社会主義の本質的な違いは、個人主義と集団主義の違いであると考えている。現在、朝鮮は少し辛くて苦しいけど、一つの国の発展を短い期間で判断するのは間違っていると思う。過去はどうしたこうしたと言って、今朝鮮は辛い道を歩んでいるが、それが正しいかどうかの評価は後世に任せたほうが良いと思う。今評価すべきことではない。だけど、我々朝鮮人は、今は辛いけど、将来のためを考えたら、私たちの選択が正しかったと確信している。このような価値観を持たせるために、確かに政府から常に教育されている。私もそのような教育を受けたけれども、本当に首領様（金日成：筆者注）は好きだ。私は会社を経営したこともあり、外交官もやった経験を有するが、何か困ったときには深夜に労作を読む。そして首領様の人間の扱い方を学んで、周りの人と交渉をすると、不思議に人間関係がうまくいくようになった。私がこのように言うと、欧州の友人たちは、洗脳されているのではないかと言うけれど、そうだとは思わない。私から見ると、欧州の友人たちのほうが政府の資本主義思想に洗脳されているように思える。中国からのお土産は、同僚にはタバコ、上司にはお酒を買ってきたよ」。

また、筆者は訪朝した際、同行してくれる旅行社の案内員に対して、必ず同じ質問を幾つか行う。その一つが日本・日本人に対する印象であり、以下はその答えである。ある案内員は次のように述べる。「あなたは米国人や南朝鮮人は朝鮮に旅行が出来ないかと尋ねたけど、そのいずれもから観光客は来ています。それで、印象ですが、私たちは米国人が大嫌いです。また小日本たちも嫌いです。でも、仕方がないですね。外貨を稼ぐためには。南の一般人は別に嫌いな感情は持っていないけど、政府は嫌いです。特に、李明博は悪い人だと思います」。別の案内員は次のように言う。「日本の政府は嫌いですが、一般の市民は思ったより優しいと思います。私が案内で出会った日本人の範囲ですが。今回の先生の方もすごく人柄が良いですね」。さらに、別の案内員は次のように語ってくれた。「大学（平壌外国語大学）で日本語を学んだが、日本人に対してのイメージは率直に言って良くなかった。その頃は、日本人に会ったことはもちろんなかったが、何だか帝国主義の人というような、よく分からないが嫌な感じがあった。ところが、社会に出て、旅行社の仕事をする過程で日本人と実際に会ってみたら、以前の悪感情はまったく解消された。今回の先生たちも優しいし、その前に案内した日本人のお客さんもとても優しかった。学生の頃まで有していた感情とは全然変わった。だから、日本の一般市民も悪くないと思っている」。

これらの対話で興味深いのは、第一に貿易会社に勤める男性が金日成の信奉者でありながら、比較的資本主義に対して柔軟な考えを持っていることである。資本主義制度に反対する原理的な道徳教養からすれば、「資本主義であれ、人びとを豊かにすれば良い」と言うのは御法度だろう。こうした考えは、彼の話から窺えるように、欧州や米国籍の友人が多

く、そうした資本主義者を相手に貿易取引を行っている経験から身に付けたもののように思われる。

第二に、同じ男性がコメ輸入について語っている内容を原理的に主体思想の観点から捉えると、「自力更生を提唱しているから、原材料であれば何でも輸入したい」と言うのは矛盾している。なぜなら、コメは自国で生産しているからである。それにも関わらず、この男性の論理が通用し、実際に取引を行い得ているのは、無論自給自足が主体であるとともに、海外取引を行っている者にとっては、1 ウォンでも安く国家に供給することもまた主体性の発揮であるとする主体思想の幅があるからだろう。

第三に、旅行社の三人の案内員のうちの二人の日本・日本人イメージがほぼ真逆であるということである。一人の案内員は、日本人ガイドとしての経験を経ながらも、頑なに「小日本たち」は嫌いであると言い、外貨獲得のために仕方なく関わっているとの認識を示す。これに対して、別の一人の案内員は、日本人ガイドとしての経験を通じて、日本人イメージを全面的に改めて、「悪感情はまったく解消された」と言い、未だ会ったことのない「日本の一般市民も悪くない」のではないかと類推している。こうした認識の相違は、ともに本音を語ってくれたとの前提に立てば、悪感情を維持する案内員は、北朝鮮で施される教養に忠実な主体的思考を行い、悪感情を払拭した案内員は、主体思想が教える「実状に合わせた適用」を、自らの経験に基づき自らの認識へ行うという作業を施したのだと言える。つまり、主体思想は、これを自らにどう活用するかによって、大きく認識を変えさせる柔軟性を有しているのだと考えられる。

（3）必ずしも外国人と接触を有しない仕事を行っている人びと

続いて、大学教員や研究機関の研究者など、必ずしも外国人と接触を有しない仕事を行っている人びととの対話の一部を紹介する。ある大学教員は次のように話した。「民族語を守るべきですね。南でもよく英語を使うし、朝鮮語でも『ドアを開けて』などと言い、外来語を頻繁に使い、それが十分に通じますが、わざわざ『ドアをオープンして』とか、携帯電話のことを『ハンドフォン』とか言う必要はない。英語を知らない人は、同じ民族でも全然分からないじゃないですか。朝鮮語では携帯電話のことを『手電話』と言うと、誰でも分かります」。別の大学教員は次のように言う。「1970 年代から 90 年代にかけて、金正日総書記は、主席様と並ぶお方として奉じられてきました。『あなたがいなければ、祖国もない』という歌がありますが、人民たちはこの歌を歌いながら、苦難の行軍を克服しました。逆風が吹いても、社会主義、自主の道、先軍の道を堅持したのです。2011 年からは、強盛国家建設に全力を尽くしています。我々の真心は、団結の心です。精神力の基本的な核は団結の心なのです」。同様のことは、社会科学院の研究員からも聞くことができた。「苦難の行軍を克服できた原動力は、団結の心だと思います。さらに別の研究員も、「朝鮮民族が現在のところまで歩んできた民族の特性と言えば、やはり団結の心であり、それがあったからこそこれまでの歩みが可能だったということです」。

このように、主体思想の「自分の事は自分で決める」というのは、国家の次元では「朝鮮の事は朝鮮で決める」ということであり、その朝鮮の最高指導者が外部に対しては体制維持を主張することを選択し、内部に対しては団結を求めた。こうした対外的な自主選択権と内部的な判断・決定権に関わる事項についての主体思想の柔軟性は全く見られない。

（4）主体思想からの乖離？

最後に、北朝鮮の人びととの会話の中で、主体思想から逸脱しているのではないかと感じた内容の話を紹介する。中国から列車で入国する際の窓口である新義州青年駅での安全員は次のように言う。「日本のタバコを１本もらって味はどうかと聞くけど、１本だけでどうして分かるの。1 箱吸ってみないと。（1 箱を渡して）朝鮮では、日本のセブンスターが有名で人気だけど、これはどうかな」。また別の安全員は次のように吐露する。「そのカメラはどのメーカー？ああ、ソニーだね。やっぱり日本製品はどこの国のものよりいいな」。偶然列車で出会った中国で生活を送る北朝鮮の女子大学生は次のように語る。「（筆者の携帯電話に保存してあった浜田の海の写真を見て）日本の海はとてもきれいですね。うちのお母さんは、日本製品にはまっていて、中国で使っている家電製品は、全部日本の製品で揃えていますよ。日本の刺身は美味しいでしょう。中国で 1 度だけ食べたことがありますが、とても美味しかったです。日本で食べたらもっと美味しいでしょうね。日本ではそれ以外に何が美味しいですか」。こうした日本製品贔屓は北朝鮮で普遍的なようである。筆者を担当した旅行社の男性案内員は電話がかかってきたあとの会話で次のように話してくれた。「この電話、税関からの電話だったよ。日本人のお客さんたちを案内していることを知っているから、言いがかりをつけてタバコでも貰おうとしている」。また別の女性案内員は次のように言う。「日本の化粧品は国産にまして朝鮮ですごく人気ですよ。とくに日焼け止め」。また海外で働く男性も同様に次のように言う。「朝鮮では日本の化粧品がすごく人気です」。

主体思想という指導思想の下で、教養を植え付けられる北朝鮮の人びとは、建前的には自力更生とそれによって生産された自国の産品に愛着を持っていると口を揃えるが、しかし、「資本主義」の製品を好むのも人びとの性である。こうした他国の産品への評価と執着は主体思想と乖離しているが、他方で、「主体性を守ることは、他のものを排除することではなく、資本主義社会の腐朽な文化は固く拒絶するべきであるが、良いものは学ぶべき」という見解に従えば、「資本主義」の良い製品を使ってみて自分たちも良いものを作れるように学んでいると解釈すれば、特に問題にはならない。主体思想にはこうした柔軟性も看取される。とはいえ、政府からすれば、住民が外部の物を好むことはあまり望ましいことではない。従って、旅行社の案内員によると、最近若者の外国製品志向が激しく、これに対して金正恩は北朝鮮産品の質をもっと向上させることにより、国産品にプライドを持たせようと拍車をかけているという。

第４節　小結

以上検討してきたように、現地調査（実見観察と聞き取り）で得た情報を手がかりとして透けて見えてくるのは、主体思想の柔軟な側面と硬直した側面である。「個人田圃管理責任制」の下では、土地を有効に活用したり、適地栽培を行ったりして、増収を図れば、それによって実入りを増やそうとする行動は、主体的な創造の範疇である。また、元山の海浜で見られるように、ごく小規模な売買の中での利益追求も同様である。さらに主体思想には、自給を追求することも主体であれば、1 ウォンでも安く輸入し、国家に貢献するのも主体、また主体思想のどの面を自らの思考や行動で活用するかによって、その人の思考や行動が大きく変わり得るという可変性を有している。こうした主体思想の柔軟さが、主体思想を長く息づかせている一因だと考えられる。

また、主体思想の硬直した側面もそれの生命力を高めている一因だと考えられる。逆説的だが、展示館や事績館、沿革室とその案内員の役割に見られるように、指導者の判断・決定に関わることの最重要視、また苦難の行軍と団結の心に見られるように、対外的な自主選択権と内部的な判断・決定権に関わる事柄への非妥協性は、それを踏み越えない領分であれば、主体思想の柔軟な範疇に含み込まれるからである。

終章　結論

本研究は、北朝鮮における指導思想の核心である主体思想の政治史的な解明を課題とした。具体的には、主体思想の形成と展開を金日成の抗日闘争期にまで遡って跡づけるとともに、それがなぜ北朝鮮において誕生し、必要とされたのか、具体的な内容は如何なるもので、北朝鮮の政治・外交、経済・社会・文化の内実のなかでどのように理解されるべきものであるか、さらにこの思想が国家にとってどのような意味を持ち、国民に如何に教化され、どのような手法で国民に内面化されていくのか。加えて、主体思想が「北朝鮮」の思想であるという特質はどのような点に認められるのか、ということが明らかにすべき課題である。ここでは、改めて各章の論述を要約することで本研究の議論を振り返り、これを踏まえて本研究の結論を述べることとしたい。

序章（問題の所在）では、まず北朝鮮の行動と態度の理解には、原則＝指導思想の解明が必須であると述べて、本研究の背景を明らかにした。次いで、本研究の意義を学術的に位置づけるべく先行研究の紹介と検討を行った。そこでは、本研究が北朝鮮研究の立場に立脚しつつ、主体思想の政治史的解明を目指していることから、とくにこの領域で研究蓄積が際立つ日本と韓国の北朝鮮政治研究、北朝鮮思想研究、主体思想研究を中心に研究状況を浮き彫りにした。その上で、既存研究では、北朝鮮の指導思想の追究が政治体制研究の一環として扱われる傾向にあること、主体思想の形成において外在要因ばかりが強調されすぎるが、そのことについては十分に検討の余地が残されていること、さらになぜ主体思想は「主体」でなければならず、「主体」であることを選択し、国内論理として「主体」を用い、北朝鮮で体制構築が図られてきたのかまったく解明されてこなかったことなどの問題点に鑑み、本研究はとくに北朝鮮における「主体」の提起の持つ意味とそれが指導思想に昇華する過程と論理、そして形成されていった指導思想が国民に如何にして教化され、それが貫徹される領導芸術の手法、これらを包括している朝鮮的特質の抽出を軸に、「主体思想とは何か」の解明を試みる研究としての独自性があることを明らかにした。加えて、本研究は政治学と歴史学の研究方法に依拠しつつ、文献研究に現地調査で得た情報を加味する方法を用い、従って序章と終章、本論となる 5 つの章に補章を加えた 8 章立てとなる構成について明示した。

第 1 章（主体思想の形成背景）では、主体思想の形成背景となる朝鮮半島の解放から金日成の下で国家社会主義体制が成立するまでの北部朝鮮・北朝鮮政治史の展開を概述した。そこでは、まず解放による権力の空白と南北に分離してソ連軍が進駐する状況の中で、金日成が如何に北部朝鮮において党権のイニシアティブを形成していったのかを明らかにした。次いで、米ソの信託統治が破綻し、朝鮮半島の南北でともに政権機関が創設されていく中で、この段階では金日成が海外から帰国した共産主義者らの支持を基盤に人的優位を図りつつ、北朝鮮労働党と政権機関内で権力の足場を築いていった過程を明らかにした。またここでは、指導党の確立途上で国家を形成せざるを得なかった脆弱性も指摘した。続

いて、朝鮮戦争の勃発と国際内戦へと至る展開、そして停戦が模索される状況の中で、金日成は人民軍最高司令官としての自己の責任を巧みに糊塗し、戦争が難局に差し掛かれば差し掛かるほど、金日成を中心とした体制に結束しなければならないように党の組織を改編して、逆に権力基盤を固めることに成功した過程を明らかにした。そうして、金日成は朝鮮戦争中のける主要な政治勢力の有力者の排除、国内パルチザン派の取り込み、1956 年の 8 月全員会議におけるソ連派・延安派の一掃とこれに対する中ソとの妥協、全社会の社会主義的改造と党優位の制度改変を経て、朝鮮労働党と党を後衛する朝鮮人民軍、北朝鮮内閣、最高人民会議常任委員会の一体化という北朝鮮の国家社会主義が金日成の政治権力の下で完成されていった過程を整理した。

第２章（「主体」の萌芽）では、主体思想がなぜ「主体」の思想でなければならなかったのか、また「主体」という言辞の内容とその言辞が選択された意義について解析した。「主体」を構成する根源的な内容は、植民地期に朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」感情から生じ発展したものである。それは具体的には、「日帝」の侵略と支配を恨の契機とし、それを引き起こした歴史、それに抗いきれなかった自国の憫然さ、それによって陥った自らや家族、愛する人、民族、国家の悲劇的境遇、自らに代わって抵抗した人びとの惨憺たる処遇などで形成される恨、これに対して醸成される故郷や民族への愛着、解放や独立に対する夢想、解放や独立のための団結を通じて表出される情、そして現況の原因が事大と依存にあると省察し、それを打ち砕くことが恨を解くことだとする思惟である。このような事大を克服し、解放・独立を達成することが恨を解くことになるという痛切な思いは、金日成ら国内外で抗日パルチザン闘争を展開した人びともまた、自己の革命経験を通じて体感したことであった。だが、解放後に訪れたソ連軍政下の政治過程の中では、他力であることや事大を克服し、独立を達成することが極めて困難であった。とはいえ、そうした中でも事大の伝統や被植民地という歴史を顧み、民族の運命は自らの手で切り開くという民族主義は継承された。このような主体を受容し共鳴する土壌、北部朝鮮・北朝鮮の指導者となった金日成の革命経験と解放後の政治的歩み、そして自国をよく知り、学び、そして自国の気質に合わせて教育を施し、自らの郷土と祖国を愛するという極めて素朴なナショナリズムと、国家建設において自国の実情や実績を顧みるべきだとする主張が可能となった対内外的政治状況が合わさり、主体が主張されるに至る。そこでの主体は、事大を克服するための愛郷・愛国であるがゆえに、事大と対をなす「主体」でなければならなかった。

第３章（主体思想の形成と展開）では、主体思想の形成と展開の過程、そしてその内容を考察した。そこでは、まず主体思想の創始をめぐる問題について検討を行った上で、主体思想の形成過程を時系列に追い、その構成内容を跡づける形の論述とした。そこで明らかになったのは、主体思想が大きく四つの段階を通じて、形成と発展を遂げてきたということである。主体思想自体は第三段階までに確立され、第四段階でその展開が図られることになった。すなわち、第一段階は、国内において教条主義に反対する思想闘争が展開さ

れ、対外的には金日成を中心とする独裁的な権力が中ソから容認されようとしている中で、朝鮮人民の朝鮮人民による朝鮮人民のための朝鮮革命の主張たる「主体」が初めて発出されたことである。第二段階は、国内において金日成の党権力が固まり、中ソ論争には暫く沈黙を守り、社会主義建設に勢力が注がれる中で、思想事業のみならず、経済・文化建設の基本的な指針、また政治・軍事路線における自主的な立場を包含しつつ、主体が党の路線として展開されたことである。この第二段階においては、従来自国の社会主義建設におけるマルクス・レーニン主義思想の参照体系としてきたソ連共産党と袂を分かち、「わが党が一貫して堅持している立場である」ところの「主体を打ち立てる」という言葉で、「思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛」が主張された。またこの際「主体思想」という言辞が初めて登場したという点で注目に値するが、主体思想に意味づけがなされるには至らなかった。第三段階は、国内においては唯一思想体系と呼ばれる金日成の絶対的な権力確立と大衆路線に基づく経済建設が円滑に進行し、対外的には中ソとの関係を再編し、自主独立外交を定式化する中で、「主体を打ち立てること」として包含してきた金日成の路線や立場、党における指導指針を「主体思想」という名で統括したことである。この段階で、北朝鮮の現実的な政治社会の中で、指導者を含む構成員個々人の生活や活動、思考方式を規定する価値判断の基準としての狭義の主体思想が確立した。第四段階は、主として金日成の後継者に内定した金正日の下で、主体思想が金日成主義の基軸となり、「党の唯一思想体系確立十大原則」とともに聖典化されるなどの展開を遂げ、併せて主体思想が哲学的・歴史社会的・指導原理的に理論・体系化されていったことである。この段階で、主体思想は金日成主義（広義の主体思想）に包摂され、永生的な世界観が加わり、宗教性を帯びることとなった。このように、金日成自身の経験的ナショナリズムと権力闘争の中で活用可能性が見出された国内の民族主義的土壌、金日成を取り巻く派閥的な権力闘争、廃墟からの社会主義建設、対外的な影響力への対処と中ソ関係という政治社会的な諸条件の中で、金日成の絶対的な権力が確立し、彼が導く路線が主体という言辞で語られ、従来依拠し続けてきた対象からの離反により、「主体」思想が北朝鮮において必要とされ、成立した。

第４章（主体思想の朝鮮的特質）では、しばしば主体思想の形成に対して影響を及ぼしたと主張されるマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を検討の材料として取り上げ、主体思想が「北朝鮮」の思想であるという特質、すなわち主体思想の朝鮮的特質の析出を行った。主体思想の原型としての「主体」が形作られるまでに、北朝鮮はソ連共産党が北部朝鮮・北朝鮮に持ち込んだマルクス・レーニン主義、すなわち革命論、前衛党の結成とその思想的・組織的な統一論、そしてスターリンの人民大衆観などを受容し、また中国が革命経験で培った、自らを研究し、顧み、実在状況と結びつける社会主義建設の方法論、民衆の支持を得るために、実利を重視する大衆路線、革命の尖兵は民衆の手本となるべきであるという共産主義的作風、自力更生により自らの力で問題を克服する自主的立場などを援用し、取り込んできた。その意味で、マルクス・レーニン主義や毛沢東思想は、主体思想

が包含する主体・自主・自立・自衛の内部の具体的な要素に多大な影響を与えているのは事実である。そしてそれは、金日成が毛沢東のように、自らマルクス主義を摂取し、先達に学び、これを自国の革命へ創造的に適用しようと試みる能動的な共産主義者だったことに加え、後発的な社会主義国家の指導者となるものの、共産党の指導者という点で、毛沢東が金日成の先達となっていたからである。しかしながら、植民地経験、他力による解放、南北分断などの朝鮮の特殊事情、常に自国が大国の介入と侵略に苛まれてきたという歴史観により形成された抵抗的民族主義、そして内部が路線対立と派閥的確執を繰り返し分裂してきたという経験的な教訓により、ソ連共産党のマルクス・レーニン主義に準じ、中国の経験を取り入れる中でも、朝鮮的な特質が生み出されていった。それは、思想・思考的には、毛沢東が事物の発展において内因を重視し、共産党内部の矛盾の克服を第一義としたのに対して、金日成は外因の浸透を防ぐために内部の変化を迫るという相違として表れた。また、それゆえに金日成にとっては、外在的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることが重視され、また内部的には分裂を阻止するための判断・決定権を得ることが重視されるという政治過程として表れた。そうした行動と態度を規定する思考が、思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛と自主独立外交として一括される、主体思想の朝鮮的特質であると言える。さらに言えば、主体思想は、自らが何を選択するかを第一に重要視し、選択されたものを自らが判断・決定して進めることを第二に重要視する行動と態度を規定する思考であるがゆえに、その範疇外のものを捨象して、自ら重要視されるものだけを強調するという特質を有していることを明らかにした。

第５章（主体思想の教化）では、主体思想を具現化するための技術の一つであるとされ、人民大衆を動かす方法だとされる領導芸術の一端を明らかにすることを通じて、主体思想がどのように教化され、また如何なる手法で国民に内面化されていくのかを分析した。そこではまず、いわゆる「脱北者」と呼ばれる、北朝鮮からの移住者の手になる膨大な手記を体系的に考究した先行研究（伊藤亜人『北朝鮮人民の生活』）を参照し、党・国家が進める革命と建設からその構成員が離れられないように張り巡らされた「単位」への所属と「組織生活」の概要、そしてその下での教養体系を紹介した。「単位」とは、行政的な住民所属組織である「人民班」、工場・企業所の「作業班」、協同農場の作業班を構成する「分組」などである。また、「組織生活」とは、一般の人びとが「少年団」→「社労青」→「職能団体」を通じて共産主義的集団生活を体得することである。北朝鮮の人びとは反党・反革命的な不純分子として社会から排除されない限り、誰もが「単位」に所属し、組織生活を送っている。その中での読報、月曜学習浸透、水曜講演会、週総和学習、人民班学習などを通じた手法で教化が展開されている。その教化の内容は、偉大性教養、愛国主義教養、反帝階級教養、信念教養、道徳教養が基本であり、学校教育段階からこれら教養は施される。すなわち、学校教育では、金日成の革命と建設の歩みをはじめとする「三大将軍」（金日成・金正日・金正淑）の歴史と経験の学びや社会主義道徳が授業科目として課された上で、校

内での競争と称号付け、課外での文化活動や少年団での初歩的な組織生活、学外での革命史蹟地見学や記念碑的建築物の参観及びそこでの有識者からの体験談の聴取、野営所などでの集団生活を通じた偉大な先達からの感化、嫌悪感の醸成とともに行われる自らが主体的で、正義で、愛国者であることの肯定的模範による感化、エリート意識や自尊心を植え付けた上で、自らが恵まれていることの自覚とそれを実現してくれた対象への感謝の涵養という形で教養が施され、児童・生徒・学生に内面化されていくことになる。そして、学校教育を終えれば、職場などで教養教化が続けられる。その内容は、例えば金日成の回顧録に見られる論理展開・内容を分析すると次のようである。第一に、指導者は民族という共属意識に訴えることで人びとの共鳴感を呼び起こすとともに、人民のなかから生まれた指導者たる人物と人民大衆の一体化関係を形成する。その一方で、北朝鮮の指導者は生まれながらの環境や背景、個人的資質により必然的に代を継いで継承された革命指導者であることが浮き彫りにされる。こうして、人民大衆は指導者の領導に従うべきことが形式化される。また、人民が仰ぐ指導者は自律的かつ内発的に「主体」を認識・会得したことが語られ、建国以来北朝鮮が堅持してきた主体的立場の必要性が醸成される。第二に、社会主義・共産主義建設を掲げた北朝鮮にとっては、人民大衆を共産主義的人間に導いていくことが必須の課題となり、そうした共産主義的人間になるためには、党と首領である指導者のために、また労働階級と人民のためにすべてを捧げる献身さと革命の敵に対する敵愾心・憎悪心の醸成が必要である。このために、「日帝」に対する執拗な批判と自国に対する徹底した賛美との対比、金日成らが抗日武装闘争において経験した「苦難の時期」と現在の社会生活との対比の手法を用いることで、外勢に対する内部団結とその継続、国家の軍隊を強化する政策の妥当性が力説される。第三に、金日成の父親である金亨稷を含めた、彼の革命に関わる周辺の人びとの人物像とその行動・思想を具体的に叙述することで、人民大衆に求める模範的な価値観、考え方、行動を示す。それは、党員として、また勤労者・農民としての革命実践の見本であり、日常生活のなかで革命精神を全面的に具現するための方法である。これらが逸脱を許さない組織的な集団生活の中で、日常的に繰り返し刷り込まれるとともに、日々実践を求められる。こうして、北朝鮮の人びとは、党や国家が教養を通じて求める精神を察知し、これを取り込んで内面化させていくのである。

そして最後に、筆者が行った現地調査の結果に基づいて構成された補章（北朝鮮の生命力）で、主体思想の生命力、すなわちなぜ主体思想が 50 年余りに渉って生き長らえられているのかということの一端について検討を行った。そこで明らかになったのは、主体思想のかなり幅を持つ側面と非妥協的な側面である。現在の「個人田圃管理責任制」の下では、土地を有効に活用したり、適地栽培を行ったりして、増収を図れば、それによって実入りを増やそうとする行動は、主体的な創造の範疇となる。また、ごく小規模な売買の中での利益追求も同様である。さらに主体思想には、自給を追求することも主体であれば、1 ウォンでも安く輸入し、国家に貢献するのも主体であるという、立場によって柔軟な解釈が可能な余地、また主体思想のどの面を切り取り自らの思考や行動で活用するかによって、そ

の人の思考や行動が大きく変わり得るという可変性を有している。こうした主体思想の幅の広さが、それを長く息づかせている一因だと考えられる。また、主体思想の頑なな側面もそれの生命力を高めている一因だと考えられる。逆説的だが、展示館や事績館、沿革室とその案内員の役割に見られるように、指導者を絶対視し、その判断・決定に関わることの無謬性、また苦難の行軍と団結の心などに見られるように、対外的な指導者の自主選択権の尊重と内部的な判断・決定に関わることの遵守への非妥協性を心得れば、それを踏み越えない領分であれば、主体思想の幅広い解釈の中に含み込まれるのである。

以上のように要約される本研究の論述を踏まえるとき、次のような結論を導き出すことができる。

主体思想の形成と展開を金日成の抗日闘争期にまで遡って跡づけてみると、その土壌が朝鮮民族の情緒の一つである「情／恨」感情が植民地植民地期を通じて生み出してきた二分法的な思惟と金日成らの革命経験によって作り出されてきたものであるということが分かる。解放後、朝鮮半島が南北に分断され、ソ連軍が進駐してきた政治空間で、ナショナリズムを胚胎させたまま、限られた資源を用いて社会主義建設を行い、権力闘争を勝ち抜いた過程で金日成が自覚したのは、依拠すべき方向が教条主義と形式主義に反対し、事大を克服して、先述の土壌を活用することだった。つまり、独裁的な権力構築の下で、共産主義的思想教養の浸透を前提に、自国の歴史・伝統と風土に基づいた教育・文化体系の構築、自国の発展実態や実績を顧慮した経済建設、そしてこれらを進め守るための政治的な自主権確立と四大軍事路線に準じた自衛が北朝鮮の国民統合であり、「主体」の表明であった。それはあくまでこれまでの経緯により、朝鮮人民の朝鮮人民による朝鮮人民のための朝鮮革命でなければならないことから、事大の対概念としての「主体」という言辞でなければならず、それが金日成らの抗日闘争を通じた権力正当化と共鳴したために、北朝鮮で誕生することになった。また、このような「主体を打ち立てる」という思考と行動が、従来依拠し続けてきた対象からの離反に直面したとき、「主体思想」という外皮で覆うことが必要とされたのである。

そのような主体思想の具体的な内容は、これまでにも幾度か言及したことだが、思想での主体は、愛郷・愛国と民族の自負心、他への懐疑的な態度と自国の実情への顧慮、祖国と人民を前提とした集団主義、金日成らの革命伝統のみに依拠した革命の継承と奉仕、そのための自己研鑽などである。政治での自主は、対外的には「自主独立外交」路線として定式化された国際関係の構築と、対内的には指導者・党の路線・政策の判断・決定を無謬とし、その中で自らの役割を自覚的に心得て自らが遂行すること、内政問題としての南朝鮮革命の遂行、階級的差異・民族的不平等の解消、非官僚主義的な青山里方式・大安の事業体系で示される党優位の管理と大衆路線などである。経済の自立は、自力更生、有無相通を原則とする対外経済関係の樹立と民族国家単位を基礎とする自立経済路線の是認、革命と政治的独立の物質的基礎とする経済の役割などである。そして、国防での自衛は、帝国主義が絶えず侵略と掠奪を行い、戦争の危険がなくならないことを前提とした全国的・

全人民的防衛体制の確立、国防は自らの獲得物と革命基地である祖国を防衛する神聖で栄誉ある任務とする精神、それらのための人民軍における全軍幹部化と全軍現代化、人民における全人民武装化と全国土要塞化を実行することなどである。そしてそれは、北朝鮮の政治・外交、経済・社会・文化の内実の中では、指導者を含む構成員すべてが日々の生活や活動の中での思考方式を規定する価値判断の基準として理解されるべきものである。

さらに、この思想は国家にとって、指導者・党のレベルでは、外在的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることが重視され、また内部的には分裂を阻止するための判断・決定権を得ることが重視されるという意味を持ち、人びとのレベルでは、指導者を絶対視し、その判断・決定に関わることの無謬性、また対外的な指導者の自主選択権の尊重と内部的な判断・決定に関わることの遵守を心得るという、自らを拘束する最低限の指針としての意味を持つ。このような行動と態度を規定する思考とともに、自らが何を選択するかを第一に重要視し、選択されたものを自らが判断・決定して進めることを第二に重要視する行動と態度を規定する思考であるがゆえに、その範疇外のものを捨象して、自ら重要視されるものだけを強調するという側面は、主体思想の朝鮮的特質でもある。

加えて、以上のような主体思想は、あらゆる人びとが「単位」に所属し、「組織生活」が営まれている包括的な体制下で、学校教育段階に始まり、成人段階での各家庭が束ねられた人民班単位での生活や職場生活を通じて体系的に施される教養事業の手法により、5 つの基本的な教養内容によって教化される。以上が本節の冒頭で具体的に明らかにすべき課題提示にそくした本研究の結論である。

＜参考文献＞

【朝鮮語】

［著書］

１.『偉大な主体思想叢書 1～10』平壌・社会科学出版社、1985 年。

２.『永生不滅の主体思想』平壌・朝鮮労働党出版社、1986 年。

３.『解放後四年間の民主建設のための北半部人民らの闘争』平壌・文化宣伝部、1949 年。

４.『北朝鮮道市郡人民委員会大会会議録①』発行所不明、1947 年 2 月 17 日。

５.『北朝鮮労働党創立大会会議録第二次全党大会会議録』平壌・北朝鮮労働党中央委員会、1948 年 3 月 28 日。

６.『金日成将軍述、民族大同団結について』清津・朝鮮共産党清津市出版会、1946 年。

７.『金日成著作集 1～18』平壌・朝鮮労働党出版社、1979～1982 年。

８.『金正日選集 14』平壌・朝鮮労働党出版社、2000 年。

９.『人民軍各部隊扇動員会議で陳述した金枓奉同志の演説』朝鮮人民軍総政治局、1951 年。

10.『1950 年版 朝鮮中央年鑑』平壌・朝鮮中央通信社、1950 年。

11.『1946～1960 朝鮮民主主義人民共和国国民経済発展統計集』平壌・外国文出版社、1961 年。

12.『大衆政治用語事典』平壌・朝鮮労働党出版社、1957 年。

13.『朝鮮中央年鑑（1953 年版）』平壌・朝鮮通信社、1954 年。

14.『朝鮮哲学全史 8』平壌・社会科学出版社、2010 年。

15.『朝鮮労働党略史』平壌・朝鮮労働党出版社、1979 年。

16.『朝鮮労働党歴史』平壌・朝鮮労働党出版社、1991 年。

17.『朝鮮労働党歴史教材』平壌・朝鮮労働党出版社、1964 年

18.『百科全書』第一巻、平壌・科学百科事典出版社。

19.『民主主義と朝鮮建設』平壌・朝鮮共産党中央委員会宣伝部、1946 年 3 月 10 日。

20. カン・イミョク『金日成同志による朝鮮共産党の創建』平壌・朝鮮労働党出版社、1961 年。

21. 姜ヨンタイ『祖国統一民主主義戦線結成大会文献集』1949 年。

22. 金正日『主体思想について』平壌・朝鮮労働党出版社、2004 年。

23. 崔庸健『米帝国主義の朝鮮侵略政策』平壌・北朝鮮民主党中央本部宣伝部、1948 年 5 月 18 日。

24. 朱寧河『北朝鮮労働党創立二周年と朝鮮の民主化のための闘争でのその役割』平壌・ 北朝鮮労働党中央本部宣伝扇動部、1947 年 9 月 20 日。

25. 主体思想研究所執筆、哲学法学図書編集部編『偉大な首領金日成同志の主体思想』平壌・社会科学出版社、1975 年。

26. 主体思想研究所編『偉大な首領金日成同志の主体思想』平壌・社会科学出版社、1975

年。
27. 朝鮮共産党宣伝部発行『民主主義と朝鮮建設』平壌・朝鮮共産党中央委員会宣伝部、1946 年 3 月 10 日。
28. 朝鮮人民義勇軍本部文化宣伝部発行『祖国の統一独立と自由のために正義の戦争に総決議しよう！』平壌・朝鮮人民義勇軍本部文化宣伝部、1950 年 7 月 10 日。
29. 朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所『米帝国主義の雇用スパイ朴憲永、李承燁徒党の朝鮮民主主義人民共和国政権転覆陰謀とスパイ事件公判文献』平壌・国立出版社、1956 年。
30. 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院哲学研究所『哲学事典』平壌・社会科学出版社、1970 年。
31. 朝鮮労働党中央委員会党歴史研究所『朝鮮労働党歴史』平壌・朝鮮労働党出版社、1991 年。
32. 副教授、学士カン・ホンスほか執筆『偉大な首領金日成大元帥様革命歴史』（中学校第 4 学年用）平壌・教育図書出版社、2003 年。

［論文］

１．「偉大な主体思想叢書を発刊するに際して」『偉大な主体思想叢書 1 主体思想の哲学的原理』平壌・社会科学出版社、1985 年。
２．「党の成長について―党中央政治委員会第 100 次会議決定書 1951.10.9」『決定集 1947.8-1953.7 党中央組織委員会』。
３．「金烈の反党的宗派行為について―12 月全員会議の決定書 1955 年 12 月 2-3 日」『決定集　1955 年度全員会議、政治-常務委員会』。
４．呉其燮『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日。
５．姜鎭乾『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日。
６．金日成「創立一週年を迎える北朝鮮労働党」『勤労者』第 8 号、1947 年 8 月。
７．金日成「農村経理の今後の発展のためのわが党の政策について―1954 年 11 月 3 日朝鮮労働党中央委員会全員会議での結論」『戦後人民経済復旧発展のために』平壌・朝鮮労働党出版社、1956 年。
８．金日成「北部朝鮮工作の錯誤と欠点について―朝共北朝鮮分局中央第三次拡大執行委員会での報告」『党の政治路線及び党事業総括と決定党文献集（一）』4 頁。
９．金日成「思想事業での教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて―党宣伝煽動幹部たちの前で行った演説（1955 年 12 月 28 日）」『金日成著作集』第 9 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1980 年。
10. 金日成「すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために―我が革命の性格と任務に関するテーゼ（1955 年 4 月）」『金日成著作集』第 9 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1980 年。

11. 金日成「朝鮮労働党第三次大会中央委員会事業総括報告」『金日成著作集』第 15 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1981 年。
12. 金日成「平安北道党団体らの課業 - 平安北道党代表会での演説」『金日成著作集』第 13 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1981 年。
13. 金日成「我が国における社会主義的農業協同化の勝利と農業の今後の発展について―全国農業協同組合大会で行った報告」。
14. 金日成「朝鮮民主主義人民共和国における社会主義建設と南朝鮮革命について」（1965 年 4 月 14 日、インドネシア「アリ・アルハム社会科学院」での演説）『勤労者』第 8 号、通巻 270 号、1965 年 4 月。
15. 金日成「党組織事業と思想事業を改善強化するについて―朝鮮労働党中央委員会第 4 期第 3 次全員会議拡大会議での結論（1962 年 3 月 8 日）」『金日成著作集』第 16 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1984 年。
16. 金日成「我が国における社会主義農村問題に関するテーゼ―朝鮮労働党中央委員会第四期第八次総会での採択（1964 年 2 月 25 日）」『金日成著作集 第 18 巻』平壌・朝鮮労働党出版社、1982 年
17. 金日成「新しい朝鮮建設と民族統一戦線について―各道党責任幹部ら前での演説（1945. 10. 13）」『金日成著作集』第 1 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1979 年。
18. 金日成「朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である」『金日成著作集』第 12 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1981 年。
19. 金日成「党組織事業と思想事業を改善・強化することについて」『金日成著作集』第 16 巻、321 頁。
20. 金日成「社会主義教育に関するテーゼ」（朝鮮労働党中央委員会第五期第一四次全員会議での報告、1977 年 9 月 5 日）『金日成選集』第 32 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、1988 年。
21. 金正日「主体哲学の理解で提起されるいくつかの問題について（1974 年 4 月 2 日）」
22. 金正日「党事業を根本的に改善教化し、全社会の金日成主義化を力強く押し進めよう―全国組織活動家講習会でした結論（1974 年 8 月 2 日）」『主体革命偉業の完成のために』第 3 巻、平壌・朝鮮労働党出版社, 1987 年。
23. 金正日「偉大な首領金日成同志は永遠にわが人民とともにいらっしゃる」『金正日選集』第 14 巻、平壌・朝鮮労働党出版社、2000 年 8 月 20 日。
24. 金正恩「2014 年 5 月 2 日、金正恩が松濤園竣工式で行った演説」。
25. 金正恩「社会主義強盛国家建設の要求に即して国土管理事業に革命的転換をもたらすために―党、国家経済機関、勤労者団体の責任幹部への談話―2012 年 4 月 27 日」チュチェ思想国際研究所『金正恩著作集』白峰社、2014 年。
26. 金枓奉『北朝鮮人民会議第一次会議会議録』1947 年 9 月 10 日。
27. 金昌満「北朝鮮共産党中央委員会第二次各道宣伝部長会議総決報告要旨」太成洙編『党

の政治路線及び党事業総括と決定』党文献集（一）平壌・正路社出版部、1946 年。
28. 許可誼「北朝鮮労働党下級党団体の 9 ヵ月間の事業総決に関する総括と党指導事業の強化について」『勤労者』1949 年 3 月。
29. 許可誼「労働党に唯一党証を授与するについて」『勤労者』1946 年 11 月。
30. 朴昌玉「1954-1956 年朝鮮民主主義人民共和国人民経済復旧発展 3 ヵ年計画に関する報告」『勤労者』1954 年 5 月 25 日。

［その他の新聞、雑誌、文学］
１.『労働新聞』各紙。
２.『歴史科学』各誌。
３.　「米ソ共同委員会に関する諸資料集（増補版）」『正路』1946 年 1 月 3 日、平壌・北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会書記局、1947 年。
４. 崔徳新『人生の末年に帰った祖国』平壌・朝鮮労働党出版社、1998 年。
５. 韓載徳「金日成将軍凱旋記―輝かしい『革命家の家』を訪ねて―」『文化戦線』創刊号。
６. 黄ビョンチョル「『一つ』、昨日と今日」『統一文学』統一文学出版社、2008 年。

［インターネット］
１.『ウリミンジョクキリ』ホームページ、http://www.uriminzokkiri.com。
２.『わが民族講堂』ホームページ、http://ournation-school.com。

【日本語】
［著書］
１.『現代史資料』29、みすず書房、1972 年。
２.『マルクス―その思想の歴史的・批判的再構成』。
３. 伊藤亜人『北朝鮮人民の生活―脱北者の手記から読み解く実相』弘文堂、2017 年。
４. 林隠『北朝鮮王朝成立秘史―金日成正伝―』自由社、1982 年。
５. A・V・トルクノフ、下斗米伸夫・金成浩訳『朝鮮戦争の謎と真実』草思社、2001 年。
６. 小此木政夫編著『北朝鮮ハンドブック』講談社、1997 年。
７. 小此木政夫編『韓国における市民意識の動態』慶應義塾大学出版会、2005 年。
８. 金森襄『1920 年代朝鮮の社会主義運動史』未来社、1985 年。
９. 神谷不二（編集代表）『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』日本国際問題研究所、1976 年。
10. 監修 小此木政夫・徐大粛、責任編集 鐸木昌之・坂井隆・古田博司『資料北朝鮮研究 Ⅰ政治・思想』慶應義塾大学出版会、1998 年。
11.『金日成同志の革命活動』翻訳委員会訳『金日成同志の革命活動』雄山閣、1972 年。
12. 金哲央『主体哲学概論』未来社、1992 年 4 月。
13. 鐸木昌之『北朝鮮―社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会、1992 年。
14. 鐸木昌之『北朝鮮 首領制の形成と変容―金日成、金正日から金正恩へ』明石書店、2014

年。
15. 徐大粛『金日成』講談社、2013 年。
16. 中川雅彦編『国際制裁と朝鮮社会主義経済』アジア経済研究所、2017 年。
17. 福原裕二『戦後北朝鮮の対日「自主独立外交」に関する研究』広島大学大学院国際協力研究科博士論文。
18. 森善宣『六月の雷撃―朝鮮戦争と金日成体制の形成』社会評論社、2007 年。
19. 和田春樹『北朝鮮―遊撃隊国家の現在』岩波書店、1998 年。
20. 和田春樹『金日成と満州抗日戦争』平凡社、1992 年 3 月。
21. 和田春樹『朝鮮戦争全史』岩波書店、2002 年。

［論文］
１．礒﨑敦仁「北朝鮮住民の意識動態―忠誠心の行方」2005 年。
２．小此木政夫「北朝鮮における対ソ自主性の萌芽 1953-1955―教条主義批判と「主体」概念―」『社会主義政治体制の比較研究会』1972 年。
３．小此木政夫「北朝鮮共産主義の誕生―その原型をめぐって」『ベトナムと北朝鮮―岐路に立つ二つの国』大修館書店、1995 年。
４．辛珠柏「青年金日成の行動と世界観の変化―1920 年代の後半から 31 年まで」『思想』第 912 号、2000 年 6 月。
５．鐸木昌之「北朝鮮における主体思想の新転回―「社会政治的生命体」論を中心に」『法学研究』第 63 巻第 2 号、1990 年。
６．鐸木昌之「北朝鮮における主体思想の新転回―『社会政治生命体』論を中心に」『法学研究』第 63 巻第 2 号、1990 年 2 月。
７．中共中央政治局、「指導方法に関する決定（1943 年 6 月 1 日）」『中国共産党資料集』第 11 巻、日本国際問題研究所編、414-420 頁。
８．中川雅彦「金正恩の政治思想」中川雅彦『国際制裁と朝鮮社会主義経済』アジア経済研究所、2017 年、38 頁。
９．福原裕二「金日成権力の『歴史』構築と対日認識の形成」『北東アジア研究』第 12 号、2007 年 2 月。
10. 古田博司「北朝鮮における宗教国家の形成―大衆教化の技術的側面を中心に―」『筑波法政』第 20 号、1996 年 3 月。
11. 古田博司「忠誠と孝誠―北朝鮮イデオロギー教化史上の二大画期点、一九六七、一九八七」『下関市立大学論集』第 36 巻第 1,2 号、1992 年 9 月。
12. 水野直樹「満州抗日闘争の転換と金日成」『思想』912 号、2000 年 6 月 5 日。
13. 和田春樹「朝鮮戦争について考える（中）」『思想』1993 年 5 月。

【韓国語】

［著書］

１．『韓国代表古典詩歌』ソウル・ビッセム、2002 年。
２．『北韓関係資料集 13』国史編纂委員会、1992 年。
３．『正しい路線のために』ソウル・わが文化社、1945 年 11 月 7 日。
４．「朝鮮無産階級の偉大な指導者 朴憲永同務万歳―労働者農民と一切勤労大衆は朝鮮共産党の旗の下で―」『正しい路線のために』ソウル・ウリ文化社、1945 年 11 月 7 日。
５．国史編纂委員会「北朝鮮の政党と社会団体」『1947 年北朝鮮政治関連報告書』(収集番号：010312)。
６．C.K.アームストロング『北朝鮮誕生』ソウル・西海文集、2006 年。
７．金グクフ『平壌のソ連軍政』ソウル・ハンウル、2008 年。
８．金炳魯『北韓社会の宗教性：主体思想とキリスト教の宗教様式比較』ソウル・統一研究院、2000 年。
９．金素月『金素月詩集』ソウル・ハソ、2006 年。
10．金昌順『北韓政治社会の理解〔第四版〕』ソウル・法文社、2006 年。
11．孟ヨンキル『キリスト教の未来と主体思想』ソウル・キリスト教文社、1990 年。
12．朴在圭編『北韓理解のハンドブック』ソウル・法文社、1999 年。
13．朴チョルホ『(キリスト教考体系による) 北韓主体思想考分析』ウル・ナヌム社、2012 年。
14．徐東晩『北朝鮮における社会主義体制の成立 1945 - 1961』先人 2005 年。
15．徐ザイジン『主体思想の離反：支配イデオロギーから抵抗イデオロギーへ』ソウル・博英社、2006 年
16．民族統一研究院『主体思想の内面化実態』(研究報告書 94-06)、民族統一研究院、1994 年。
17．安含光「愛憎の倫理」『北韓関係資料集 13』国史編纂委員会、1992 年。
18．安壽吉「北間島」『韓国代表文学選集』第 7 巻、ソウル・三中堂、1967 年。
19．李鍾奭『朝鮮労働党研究―指導思想と構造変化を中心に』歴史批評社、1997 年。
20．李鍾奭『新しく書いた北韓の理解』2000 年、歴史批評社。
21．李鍾奭『北韓―中国関係 1945-2000』ソウル・中心、2000 年。
22．李ギボン『金日成和戦戦略検証』ソウル・タナ、1993 年。
23．李ジンキョン『主体思想批判 2』ソウル・ビョリ、1989 年。
24．張吉星『キリスト教の主体思想』ソウル・ハンクル、1988 年。
25．張吉星『主体思想の神学原理』ソウル・エデン文化社、1993 年。
26．鄭芝溶「郷愁」『朝鮮之光』第 65 号、1927 年 3 月。
27．趙明熙「洛東江」『趙明熙選集』ソウル・プルビッ、1988 年。
28．黄長燁『私は歴史の真理を見た』ソウル・ハンウル、1999 年。
29．韓国統一研究院刊「金正恩時代の北韓の教育政策、教育課程　教科書から」2015 年。

30. 韓洪九『韓国共産主義運動史１』ソウル・トルペゲ、1986 年。
31. 統一政策研究所『主体思想と人間中心哲学』ソウル・統一政策研究所、2003 年。

［論文］

１．郭承志「北、統治イデオロギー変わったか？‘主体思想’の実践イデオロギー‘先軍思想’提起され」『自由公論』第 40 巻 6 号（通巻 459 号）、2005 年 6 月。
２．金キュントン「北韓政権の統治イデオロギー批判研究（Ⅱ）―主体思想の形成、展開過程及び機能を中心に」『釜山政治学会』第 7 巻第 2 号、1997 年。
３．金ジェホン「我が詩の香り―素月、詩の本道または民族語完成の道」『新しい国語生活』第 17 巻第 1 号、2007 年春。
４．朴一「金日成は私からマルクス・レーニン主義を学んだ」『新東亜』1991 年 10 月号。
５．ブ・スンチャン「主体思想と先軍思想との相関関係」『社会科学研究』第 19 輯 2 号、2011 年。
６．徐ザイジン「北韓のマルクス・レーニン主義と主体思想比較研究：体制に及んだ影響と改革・開放論理を中心に」『統一研究叢書』、2002 年 12 月。
７．楊ムジン「主体思想と先軍思想：支配イデオロギー変化可能性」『韓国と国際政治』第 24 巻第 3 号（通巻第 62 号）、2008 年 9 月。
８．呉ギョンソプ「主体思想の構造と政治的機能の変化」『世宗政策研究』2012-17 号、2012 年 8 月。
９．李崗石「主体思想と毛沢東思想との比較」『安保研究』第 20 号、1991 年 6 月。
10. 李・シンチョル「主体思想と黄長燁の人間中心哲学」『韓国論壇』2010 年 12 月。
11. 李シュウォン「北韓主体思想学習体系の宗教性研究―キリスト宗教活動との比較を中心に」『統一問題研究』2011 年上半期（通巻第 55 号）、2011 年 6 月。
12. 鄭タイイル『国家宗教としての北韓主体思想研究』韓国学中央研究院韓国学大学院博士論文、2011 年。
13. 韓基壽「北韓主体思想の淵源と性格」韓国外国語大学博士論文、1992 年 2 月。
14. 韓基壽『北韓主体思想の淵源と性格』韓国外国語大学校大学院政治外交学科博士論文、1992 年。

［その他の新聞］

１．「祖国解放を夢見て、つつじの詩を詠う詩人」『京畿日報』2009 年 12 月 4 日付。

【中国語】

［著書］

１．李新『中華民国史』第 8 巻下冊、北京・中華書局、2011 年。
２．史芸軍『毛沢東思想概論』吉林・吉林人民出版社、2001 年。

３．『マルクス・エンゲルス選集』第 1 巻、北京・人民出版社、1995 年
４．中共中央文献研究室『マルクス主義中国化 90 年―毛沢東思想形成と発展大事件』北京・中央文献出版社、2011 年。
５．『毛沢東選集 第 2 巻』、北京・人民出版社、1961 年。
６．『毛沢東選集 第 4 巻』、北京・人民出版社、1960 年。
７．『十九大党章学習ハンドブック』人民出版社、2017 年 11 月。

［その他の新聞］
１．『人民日報』各紙。
２．『新華文摘』各紙。

［インターネット］
１．「駐北朝鮮中華人民共和国大使館」ホームページ、http://kp.china-embassy.org
２．「中国国際ニュース」ホームページ、http://news.sina.com.cn/world/
３．「中華人民共和国外交部」ホームページ、http://www.fmprc.gov.cn
４．「自由北韓放送」ホームページ、http://www.fnkradio.com

【英語】
［著書］
１．DAE-SOOK SUH, *KIM IL SUNG: THE NORTH KOREAN LEADER*, Columbia University Press,1988.
２．CHARLES K. ARMSTRONG, *THE NORTH KOREAN REVOLUTION:1945-1950*, Cornell University Press,2003.

＜資料1＞主体思想形成年表

年度	国際環境	国内政治	経済・社会	文化・思想・スローガン
1945	● 2月：ヤルタ会談「信託統治」合意 ● 9月19日：ソ連軍の北部朝鮮進駐 ● 12月28日：モスクワ三相会議 ● ソ連の北部朝鮮地域に利益を保障する政権方針	● 8月15日：解放＝権力の空白、各地域土着勢力、共産党の南北分立、各分派存在 ● ソ連軍の政策を背景に、北部朝鮮地域に政権の基礎的動きに対する対立 ● 10月：「朝鮮共産党北部分局」結成 ● 新義州事件で指導力 ● 12月：「朝鮮共産党北部分局第三次拡大執行委員会」＝分局中央集権化	● 企業や工場の運営は朝鮮人従業員の自治組織、大規模の重工業企業はソ連軍が運営に介入、監督	● 共産党中心の民族統一戦線 ● 咸鏡南道責任者ら宗派主義として粛清 ＊10月2日：「自らの兵器工業を創設」
1946	● ソ連が北部朝鮮の利益保障と同時に、アメリカとは協調 ● 臨時人民委員会を通じて、金日成を指導者にする意志 ● 5月：米ソ共同委員会無期休会 ● ソ連の援助額740万ルーブル	● 1月2日：「モスクワ三相会議に関する共同声明」民主党の破綻、北部朝鮮では本格的に独自の動き ● 2月：臨時人民委員会結成→ソウル中央から完全に独立 ● 8月：新民党（表面提案）と共産党（実質主導）の合党で「北朝鮮労働党」誕生 ● 北朝鮮各派の金日成擁護 ＊6月26日：「国を自主的に発展」	● 「努力英雄運動」「生産経済運動」 ● 土地改革を含む「諸民主改革」が金日成の名義で完成 ● 8月10日：「重要産業の国有化は、自主独立国家建設の基礎」	● 朝鮮の民主主義と完全な独立は北部朝鮮のように ● 「建国思想総動員運動」＝毛沢東の「領導方法」を真似た内容 ＊11月3日：「江西古墳はわが人民の貴重な文化遺産である」
1947	● 5月：第二次米ソ共同委員会決裂 ● ソ連の援助148万ル	● 2月：北朝鮮人民委員会構成 ● 国内で党内の葛藤と	● 「人民経済計画」発表とともに、各単位に計画責任	● 「マルクス・レーニン主義」を戦闘的武器に

	ーブル	社会問題が深刻→**ソ連系**許可誼の党組織更新と延安系金斗奉「建国思想総動員運動」で対応	「模範」→「落後分子」 ＊9 月 29 日:「自らの力で中小型水力発電所を数多く建設」	
1948	● 1 月：南部朝鮮だけの単独選挙 ● 8 月 15 日:「大韓民国」政府樹立 ● ソ連の援助額 265 万ルーブル	● 2 月:「朝鮮臨時憲法草案」 ● 3 月 25 日:「南北朝鮮民主主義政党・社会団体指導者連席会議」提案、4 月開催 ● 3 月 27 日:第二次党大会「民主勢力（ソ連）と反動勢力（アメリカ）との対決」 ● 8 月:「南北労働党」合党、南労派が「対南事業」担当 ● 9 月：朝鮮民主主義人民共和国樹立	● 「唯一管理制」と「独立採算制」準備	● 北朝鮮主導の「民主主義統一国家樹立」主導
1949	● スターリンと毛沢東から戦争支援の約束 ● ソ連の援助額 347 万ルーブル	● 金日成と朴憲永を中心に政府運営 ＊10 月 31 日:「自らの力で武器、武装」	● 農業国家、私的経営存在 ● 「唯一管理制」全面実施 ＊ソ連をモデルとして「建国増産運動」	● 「すべての民主主的愛国的力量」を総集結、「共和国北半部の民主主義基地をさらに強め、人民経済建設を猛烈に展開」「国土完整」「完全自主独立」
1950	● 6 月 25 日：朝鮮戦争 ● ソ連からの援助額 684 万ルーブル	● 6 月 25 日:戦争勃発約 3 か月間ソウル占領 ● 9 月 28 日:国連軍ソウル奪還 ● 10 月 25 日：中国志願軍の参戦 ● 12 月 6 日:朝中連合軍（朴一禹）の平壌奪還	● 「唯一管理制」 ● 「戦時状態について」＝「戦時増産運動」8 時間労働→12 時間労働	● 金日成と朴憲永以外の各派の幹部に戦争責任を均等に負わせる方式

		● 12 月 21～23 日：党中央委員会第三次全員会議 ● 軍事指揮権の移管		
1951	● 7 月 10 日：停戦会談 ● 9 月：中国での「三反・五反」運動	● 中国軍志願軍との正規軍と遊撃戦 ● 「関門主義」批判を通じて、ソ連系の許可誼失脚 ＊1 月 28 日：「われわれの戦法で戦う」	● 戦災から人民経済を回復＝国家計画委員会を強化 ● 「適地適作」の農業 ＊住民の自律性が増大	● 1 月：「人民の中で大衆政治事業を強化することについて」＝「有給民主宣伝室長」 ● 「日帝思想」「官僚式的作風」批判、「反貪汚・反浪費・反官僚主義」
1952	● 9 月 2 日：停戦会談が無期休会	● 「軍事唯一管理制」強調 ● 延安系の朴一禹失脚 ● 12 月：元首称号制定 ● 12 月 15 日～18 日：第五次全員会議で南労派粛清	● 4 月 3 日：「金日成奨学金」制度決定 ● 無償治療制実施に関する内閣の発表	＊金日成中心の体制に結束
1953	● 3 月：スターリンの死 ● ソ連のマレンコフの新経済政策 ● 7 月：停戦（休戦） ● 8 月 12 日：ソ連からの 10 億ルーブル援助決定・受入 ● 11 月：中国での農業集団化を援用	● 新しい国内派（甲山派）登場・登用 ● 2 月：宗派分子批判	● 重工業優先（ソ連 10 億ルーブル援助による）、農業集団化（31.8%）着手方針に対する反対（ソ連派、延安派）、消費財重視路線	● 「金日成将軍」から「金日成元首」
1954	● ソ連の援助、マレンコフの新経済政策 ● 9 月 9 日：中国人民軍 7 個師団撤収	● ソ連の政策を代弁する朴昌玉が国家計画委員長に就任 ● 革命段階をめぐる党内での対立	● 戦後復旧建設三ヵ年計画 ● 農場集団化の拡大 ● 重工業優先→軽工業重視路線貫徹	● 企業内の「無秩序、無紀律、無政府状態」→「唯一管理制」強化を再び強調
1955	● 8 月：朝鮮問題は平和的に解決すべき、朝鮮からの外国軍隊の撤退を各国政府に要望	● 4 月：社会主義的改造を宣言 ● 過去の共産主義運動での宗派主義提起	● 重工業中心、軽工業・農業同時発展、農業集団化 44.7%	● マルクス・レーニン主義を朝鮮の具体的な現実と結合 ● 主体は朝鮮革命、文学戦

		● 朴憲永死刑判決		線より始まる。朝鮮歴史を疎かにすることを批判 ● 中国共産党のような「整風運動」
1956	● ソ連共産党第二十次大会で個人崇拝批判	● 第三次党大会 ● 主体は朝鮮革命―共和国北半部社会主義建設、南朝鮮革命 ● 「8月宗派事件」	● パルチザン派と甲山派を中心に安定 ● 12月：党中央委員会を「千里馬運動」の起点に	● 民族的＋社会主義 ● 「革命的群衆観点」
1957	● ソ連の「帝国主義平和的移行」論を批判	● 「反党宗派分子」を徹底的に攻撃 ● 党証交換事業と中央党集中指導事業 ● 12月5日：「社会主義陣営の統一と国際共産主義運動の新しい段階」演説	● 第一次五ヵ年計画	● 群衆事業＝領導芸術 ● 「党内思想闘争：解釈と教養、批判方法」
1958	● 2月5日：すべての外国軍撤収要求声明を発表 ● 10月3日：「朝中親善友好協会」創設（北京） ● 10月まで：中国人民志願軍、復旧建設と農業に従事 ● 11月21日：中国訪問 ● 12月29日：朝中間無償援助議定書調印（8億元）	● 抗日遊撃隊革命伝統継承。「朝鮮問題を朝鮮人自身の手で、中国志願軍が無くても侵攻を防げる」 ● 金枓奉を粛清	● 自立的な工業・農業国家 ● 10月10日：「我々の力でトラックを生産しよう」 ● 農業集団化完成	● 1930年代の農民運動を金日成の抗日武装闘争及び「新しい党創建運動」と直結
1959	中ソ関係悪化の中で中立的立場を維持	● 軍隊内の主体を立てる	● ソ連工業化：農村経理の協同化⇔朝鮮：農村経理の協同化と技術改造 ● 「千里馬運動」全面化	● 主体朝鮮革命：「われわれも主体をもっとしっかり立てるべきだ」 ● 『抗日パルチザン参加者らの回想記』刊行開始
1960	● 過渡的措置としての	● 党事業＝人間事業	● 経済発展の緩衝期	● 「赤旗中隊運動」「社会主

	南北連邦制提案			義・共産主義思想で改造」
1961	● 2 月：中ソと「友好協調及び相互援助条約」を締結 ● 中ソ紛争 ● ソ連：西側との「平和共存」強調	● 現代修正主義に反対し、自らの武力で対抗 ● 5 月 28 日：「兵器工業をもっと発展」 ● 統一問題は朝鮮人民の自由意思 ● 内部において資本主義の影響を指摘	● 「人民経済発展 7 ヵ年計画」 ● 社会主義工業的工業・農業国家。ビナロン、無煙炭ガス化、無煙炭で製鉄、化学工場、発電所、繊維工場。自立的民族経済の土台＝原料、技術、民族幹部。	● 1 月 23 日：「人々を教養、改造、団結」群衆教養方法＝肯定的な模範で感化させる方法。 ● 9 月：「栄光ある勝利者たちの大会」 ● 主体を立てるために闘争した結果、主体の偉大な勝利―「わが人民は自らの運命を自らの手にしっかりと握り、すべての面で社会の真なる主人になった。主体を立てる問題が基本的に解決
1962	● ソ連の国際分業を批判 ● キューバ危機におけるソ連の威信低下と危機意識	● 3 月 8 日：党中央委第四期第三次拡大全員会議で「現代修正主義」を強力に批判 ● 「四大軍事路線」	● 自力更生＝経済路線と軍事路線併進 ● 「大安の事業体系」職業同盟が勤労者の権益団体→思想教養団体	● 共産主義的事業体系＝すべての人々を団結させ、献身性、創発性
1963	● 1 月 30 日：「社会主義陣営の統一を守護し、国際共産主義運動の団結を強化しよう」 ● ソ連科学アカデミーを批判、ソ連を現代修正主義と批判 ● 韓国で朴正熙大統領就任	● 政治での自主性 ● 10 月 5 日：「我が人民軍隊を革命軍隊に作りかえ、国防での自衛の方針を貫徹しよう」 ● 南朝鮮は自立性がない	● 「自立的民族経済の建設は、祖国の統一と独立・繁栄の道である」	● 青山里方法展開 ● 主体的思想＝「すべての人々が朝鮮革命のために服務する思想」
1964	● 南北合作交流を呼びかけ ● 朴正熙：国連監視下の南北自由選挙以外はありえない ● 北朝鮮は国連を関与		● 韓国に毎年 30 万トンの米、10 万トンの鋼材、10 億キロワットの電気、1 万トンの化学繊維を含め、セメント、	

	させない自主的な解決を強調		木材、機械類を提供する以外に、韓国の失業者に見合う職業と安定した生活を保障できると呼びかけ	
1965	● インドネシアで「主体思想」演説 ● 在韓米軍撤退を主張			● 主体を立てることは、「自らの力で解決していく原則」。自主的な立場：自力更生の精神を発揚させ、自らの問題はあくまでも自らが責任を持って解決していく自主的な立場 ● 7月1日：高等教育、化学研究、科学研究での主体
1966	● ベトナム、キューバ、ラオス、カンボジア人民を支持。主人はその国の人々である ● 中国との関係も悪化、中国を「左傾冒険主義」、ソ連を「右傾修正主義」と規定 ● 北朝鮮、統一問題に関して、自主的な解決を主張しないと朴正熙を批判	● 経済建設と国防建設併進を再強調 ● 「自主独立外交」路線の確立 ● 金英柱と金正日による金日成に対する個人崇拝競争		● 7月12月:「音楽教育における主体」 ● 南朝鮮でのアメリカの事大主義思想の蔓延を批判、民族主体意識を高めよう ● 「自主性を擁護しよう」
1967	● 「すべての民族は平等で、自己の運命を自らが決定する民族自決の真正な権利」	● 党の「唯一思想体系」が確立	● 自力更生の精神	● 主体思想をすべての部門で巧みに具現。各国の自主的力量、党の「唯一思想体系」を徹底的に立てること。「すべての民族は平等で、自己運命を自身が決定する民族自決の真正な権利」、「社会主義制度の偉大な生活力は、勤

				労者たちが自己運命の主人として、祖国と人民のために、自身の幸福のために、自覚的に熱情と創発性を発揮」
1970		● 朝鮮労働党第 5 次大会		● 党規約で「主体思想」を指導思想にすると規定 ＊69～71 年：主体思想の理論体系化作業（黄長燁）
1972	● ニクソン訪中、米中国交回復 ● 「7・4 南北共同声明」	● 日本『毎日新聞』社のインタビュー:「主体思想に基づいた朝鮮労働党の対内外政策」と主体→「主体思想」		● 1 月 10 日：「主体思想は、わが党の唯一指導思想で、朝鮮民主主義人民共和国のすべての指導的指針」 ● 主体思想は一言でいうと、「革命と建設の主人は人民大衆で、革命と建設を進める力も人民大衆にある思想」「自分の運命の主人は自分自身で自己運命を改革する力も自分自身にあるという思想」肉体的生命より社会政治的生命が優越、細胞理論
1973	● 6 月 23 日：チェコで「祖国統一五大方針」を発表 ● 10 月 28 日：韓国と国連同時加入することに反対	● 金正日が徐々に権力を掌握、金日成に対する神格化 ● 主体的な軍事学		● 3 月 14 日：「主体思想は、すべての勤労者たちが革命と建設で主人たる立場と態度、主人たる態度は事大主義と教条主義に反対するだけでなく、自分の職場で主人らしく働き、国家社会の共同財産を惜しみ、愛すること」。主体思想はわが党の唯一指導思想。 ● 10 月 11 日:「主体思想は、

				長期間に渡り、革命闘争過程で創造されたマルクス・レーニン主義的な革命思想。主体思想は、革命と建設で提起される問題を自らの頭で考え、判断し、自らの力で解決していくことを要求し、すべてを自国の革命と利益、人民の利益に服従させることを要求」
1974	● 1月18日:朴正熙「南北相互不可侵協定」締結提議 ● 1月26日:労働新聞「南北相互不可侵協定」締結拒否 ● 金日成、「二つの朝鮮」に対して反対			● 「全社会を金日成主義化するための党思想事業が直面するいくつかの課業について」=「金日成主義」宣布。マルクス・レーニン主義を創造的に適用する意味での範囲
1977	● 朴正熙、「先平和、後統一」政策を強調 ● 12月10日:金日成が東ドイツで「北南と東西ドイツの差異点を強調」		● 「主体農法」発表	● 9月5日:社会主義教育の指導思想は、共産主義と主体思想 ● 「認識の主体は、人間自身である」
1978	● 6月23日:朴正熙「南北経済協力機構」構成提議 ● 6月30日:北朝鮮、「南北経済協力機構」拒否	● 9月9日:民族理念に立脚した統一を主張	● 自国の原料に依拠した工業発展、工業の自主性と主体性	● 9月9日:「主体思想を確固たる指導的指針とし、全社会を主体思想化するのは共和国政府の最終目的」
1980	● 9月28日:全斗煥政権との対話拒否	● 10月10日:朝鮮労働党第六次大会=「高麗民主連邦共和国」方案を提議		● 10月10日:「主体思想は、すべてを人間中心に考え、人間のために奉仕する人間中心の世界観、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命学説。

				自主的立場、創造的立場、三大革命路線」。主体の思想、理論、方法。唯一思想体系は、主体の思想体系。主体的な冶金法、鋳物方法、大自然改造事業、合成ゴム工業、科学繊維工業、育種方法、栽培方法、主体農法。主体思想を唯一指導思想に徹底 ＊主体思想は人間中心の哲学
1982	● 1 月 22 日：全斗煥「民族和合民主統一方案」発表 ● 1 月 26 日：北朝鮮は「民族和合民主統一方案」拒否	● 主体的な戦法、 ● 自主路線の正当性を強調		● マルクス主義との関係を明かし、独創性を強調 ● 「主体思想について」人民大衆は自己運命の主人で、歴史の創造者。ラティアメリカも。
1984	● 1 月 10 日：北朝鮮「朝韓及びアメリカ三者会談」を提議 ● 11 月 15 日：第一次北南経済会談			● 中央の唯一的指導と地方の創発性、「人間がすべての主人ですべてを決める」「領導芸術とは、集団と大衆を動かし、導いていく方法・手腕である」「大衆の中に入り、彼らの意見を丁寧に聞き、群衆の創発性を高く発揚させ、群衆を動かし、提起された問題を解いていくのが領導芸術」
1985	● 12 月 27 日：金日成が 1988 年オリンピック共同開催案に言及			● 愛国心：祖国、社会制度―首領。党と首領に対する忠誠心。主体は愛国の象徴で、その集大成である。主体は愛国で愛国は主体である

出所：筆者作成。

＜資料2＞朝鮮社会科学院金日成･金正日主義研究所研究員への聞き取り調査結果（「主体思想」に関する現地での集中講義）

はじめに

朝鮮社会科学院金日成・金正日主義研究所（旧主体思想研究所→金日成主義研究所）研究員への聞き取り調査（「主体思想」に関する現地集中講義の受講）は、2015 年 11 月初旬に NEAR センター現地調査で朝鮮社会科学院を訪問した際、同院の科学指導局・沈昇建（シム・スンゴン）局長が機関間の学術交流の一環として提案したことが契機となっている。その後、2016 年 6 月に筆者の指導教官が訪朝した際に、改めて朝鮮社会科学院側に集中講義受講の申し入れを行い、これが認められることとなり実現した。

集中講義は、あらかじめ筆者が主体思想研究に関連して問いたいこと（質問事項：以下の太字部分）を文書に整理して先方へ提示し、それへの回答を講義者が講義するという形で基本的には進行した。当日、アドリブ的に質疑応答を行ったが、その回答もあらかじめ行った質問事項への回答部分に収めている。

集中講義の受講は、大変貴重な機会となり、本博士論文執筆の多大な助けとなっただけでなく、主体思想研究の他に類を見ない資料にもなると考えられる。そこで、講義中に録取した内容を翻訳し、資料として掲載することとした。

- **社会科学院主体思想研究所講義Ⅰ**
- 日時：2016 年 8 月 22 日（月）11:00～12:30
  場所：高麗ホテル 2 階接見室
  講義者：朝鮮社会科学院 金日成・金正日主義研究所 教授・博士 キム・ヒョンウ
  （同席者：朝鮮社会科学院対外事業処 部員 金正国、朝鮮国際旅行社 案内員 朴成日、朝鮮国際旅行社 案内員 金正姫）

１．主体思想が形成された背景について

あなたが提起した質問には、3 つの問題があると思う。第一は、主体思想の形成過程、すなわち主体思想を創始した社会・歴史的環境について、第二は、主体思想が創始されたのちに、国内外状況に合わせてどのように発展されて来たのかについて、つまり発展過程について、そして第三に、主体思想の構造がどうなっているのかということについてである。

主体思想が形成・創始された社会歴史的環境についてどう理解すべきか。ここでは形成過程ということよりも、首領様、将軍様が労作によって主体思想を創始した歴史及び実践的な環境と条件が何かについてお話ししたいと思う。主体思想の創始をめぐる社会歴史的な環境を語る際に、第一に、代々わが革命が如何なる環境下に置かれ、それゆえにどのような環境において主体思想が出てきたのか、第二に、世界的な革命発展が如何なる状況下に置かれていた際に、主体思想が創始されたのか、これら二つの側面から論じことができ

るだろう。そのためには、まず主体思想とは何か、主体思想の具体的な要求は何かということを具体的に知っておくべきです。

首領様は、「革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にあるという思想である」、これを言い換えれば、「自分の運命の主人は自分自身であり、自分自身の運命を開拓するのも自分自身である」という思想が主体思想であると仰いました。一言でいうと、首領様はそのように主体思想を定式化なさいました。主体思想の重要な要求は、まず全てにおいて人民大衆を中心に据えて考え活動することと、革命と建設で自主的な立場と創造的な立場を堅持することです。自主的は立場と創造的な立場を堅持するというのは、革命と建設で提起される全ての問題を自ら考え、自らの力で解決していく、そのような立場と態度を持つことです。もう一つは、革命と建設において何よりも自国の実情に合わせて全てを行うべきだということです。さらには、人民大衆の力を発揮させ、人民大衆の創造的な闘争により、革命と建設で直面する全ての問題を解決すべきだということです。これが、主体思想の重要な要求です。主体思想が創始されようとしていた当時、このような思想が出てくるのを時代が要求していました。

当時の国際的な環境は、一般的にマルクス主義でもいいし、レーニン主義でもいいし、労働階級の革命思想は、いつでも出てくるのではなく、革命発展と歴史発展の一定の要求を反映して創始されます。それが労働階級の革命思想創始の一般的な合法則性だと言えます。例えば、マルクス主義は、欧州の資本主義国における労働階級の革命闘争が歴史的な課題として出現し、昂揚されていた当時の環境を反映して登場しました。また、レーニン主義の場合も、資本主義が帝国主義に変容し、ロシアで資本主義に反対する闘争が昂揚される環境の中で出てきました。労働階級の革命思想は、必ず一定の歴史的また革命発展という要求を反映して出てくるのが創始の一つの合法性とも言えます。このような見地から見ると、主体思想もまた、革命発展と歴史発展の一定の合法則性によって誕生しました。合法則性とは何かと言うと、世界的に見れば、偉大な首領様が革命闘争の道に立ち上がった際、搾取と圧迫に反対する労働階級と人民大衆の闘争が世界的な範囲で多様に展開されていた環境が存在していました。

具体的に言うと、首領様が主体思想を創始したのは、1930 年のことになりますが、吉林を中心に革命を行った時期、1930 年代を前後に全般的な世界革命運動の発展実態は、まずロシアではすでに社会主義革命が勝利していたし、初めて勝利した社会主義の影響力が強化されるとともに、ソ連が政治、経済、軍事的に社会主義力量を強化していた時期でした。また、資本主義諸国では、労働階級の革命闘争が急激に昂揚していた時期でした。とくに注目すべきことは、植民地・半植民地人民たちの解放闘争が急激に昂揚されていたということです。これは、マルクス・レーニン主義が出てきた時とは全く異なった特殊な革命運動発展での状況であると言えます。マルクス・レーニン主義の場合は、欧州の資本主義国で労働階級の革命闘争が強化されていた時期でした。また、レーニン主義の場合は、ロシアで資本主義に反対する労働階級の闘争が強化されていた時期でした。その当時、アジア、

アフリカ、ラテンアメリカなど、世界の諸地域で植民地・反植民地下の人民たちはそれこそ眠っているような状態でした。こうした時期に比べて、首領様が革命活動に立ち上がった当時は、植民地・半植民地において外来帝国主義の植民地支配に反対する解放闘争が急激に昂揚していた時期でした。世界の多くの国々で、革命と反革命の対決が激化し、長い間自主権を蹂躙された被圧迫人民たちが解放闘争・階級解放と民主解放のために広範に立ち上がりました。このような歴史的な環境だったのです。

このように世界的な範囲で、人民大衆たちの革命闘争が多様にかつ幅広く展開されたという環境は、革命の発展に何を要求したでしょうか。それは、各国の人民たちが主人らしい資格を持って、全てを自らの実情に合わせて解決していくことを基本とする革命と闘争を切迫に要求したのです。何故かと言うと、マルクス主義あるいはレーニン主義の場合は、主に労働階級が資本主義に反対する闘争をどうするかという問題を明らかにし、また当時はこのような方向で国際党が存在し、国際党では統一的な革命路線も提示しました。しかし、当時は革命闘争において社会主義革命のための闘争を行う国もあれば、資本主義に反対して闘争する国もあり、さらには植民地からの民族解放のために闘争する国もありました。このように、革命闘争の環境が非常に複雑なのに、それを統一的な中央組織から指令を下し、あれこれ指示するのは困難極まりなかった。つまり、各国の人民たちが自国の革命に対して主人らしい資格を持ち、革命で提起される全ての問題を自らの頭で考え、自らの実情に合わせで解決しなければ、革命の建設過程における曲折を解決できない国際的な環境が醸成されていたということです。従って、このような問題を解決しようとすると、どのような思想が切実に必要だったのでしょうか。

人民大衆が自主的にかつ創造的に革命運動を展開していく、そのことがもっとも切迫して要求された環境というのが、わが革命が要求した主体的な環境と言えます。この当時、なぜ人民大衆が自主的にかつ創造的に行うことを切迫して要求したかと言うと、それは一言でいえば、わが革命の歴史的な特殊性、革命の複雑性、艱苦性にありました。歴史発展の特殊性とは、わが国では昔から事大主義が出てきて、革命闘争に深刻な害毒的影響を及ぼしました。簡単に事大主義の歴史を見てみると、元々封建社会において我が国では事大主義が根深く蔓延っていましたが、高句麗時代には事大主義がなかったのです。高句麗は東方強国と言われ、自らの尊厳を振るい、その後の新羅封建統治から事大主義が出てきました。このように封建社会がずっと維持され、結局は朝鮮封建王朝（以前は「李朝」と呼んでいましたが、敬愛する元帥様が朝鮮封建王朝と呼び慣わすよう教えられたので、現在は「朝鮮封建王朝」と言います）に至り、極度に達しました。結局は、わが国が日本の奴らに食われ、国が滅ぼされた悲劇的な後日の禍をきたしました。このように国を滅亡させた事大主義は、首領様が革命の道に立ち上がるその当時も依然として蔓延っていました。もっと言えば、当時において民族解放運動をしていたという民族主義者たち、そしていわゆる共産主義運動をしていたというマルクス主義者たち、つまりわが革命に少なくない影響を及ばしたこのような民族主義運動と共産主義運動においても事大主義から免れ得ない

有様でした。事大主義とは結局、大国に対して盲目的に崇拝し従う外勢依存思想であり、自らの力を信じずに他人の力だけに依拠する虚無主義思想であって、このような事大主義思想では革命をすることができません。

次に、わが革命の複雑性とは、当時の我が国の革命が欧州やその他の国の革命とは異なり、反帝民主主義解放課業と反封建民主主義課業を同時に遂行すべきであったというとても複雑な革命だったということです。欧州のような資本を清算する社会主義革命でも、その他の国のような封建主義から資本主義に移行するブルジョア革命でもなく、帝国主義に反対する反帝民主主義解放課業と反封建民主主義課業を同時に遂行すべきだったのですが、従来の理論を見ると、すなわちマルクス主義革命理論では、この複雑な展開をどう遂行すべきかという処方が示されていませんでした。従って、この複雑な革命課業をただ自らの頭で考え、わが国の実情に合わせて革命の性格や革命の動力、革命の対象を規定して、革命の路線と政策もわが国の実情に合わせることこそ、この複雑な革命課業を成功裏に遂行する環境が醸成され得るということだったのです。

最後に、艱苦性とは、足爪まで武装された強盗「日帝」との熾烈な対決を意味します。このような強大な敵と闘うことにおいては、如何なる他力をもってしてもできません。このようなわが革命の特殊性と複雑性、艱苦性は、結局何を要求したのでしょうか。余所の国よりも、余所の国の革命よりも、主体を立てる問題、すなわち革命と建設で提起される全ての問題を自らの頭で考え、自らの実情に合わせて路線と力を養い、また自らの力で解決する主体を立てる問題を切迫に要求したのです。わが革命の特殊な環境は、わが国のような状況ではさらに主体思想のような新しい革命指導思想の登場を切迫して要求することとなりました。

以上は、主体思想が創始された社会歴史的な環境、客観的な条件です。のちほど、主体思想がなぜ朝鮮で誕生したのかについて申し上げますが、その際に重要なのは、この思想は首領様が創始したということです。一般的に、革命発展、歴史発展の要求が提起されたので、結局は主体思想のような新たな思想を創始する問題が時代の切迫的な要求により提起されたということになります。第一には、当時の時代の要求であり、第二には、わが革命の要求ということです。従って、主体思想は新たな主体時代の革命と発展の要求を反映して誕生した思想です。特に、わが革命の実践的な要求を反映した思想であると言えます。

２．国内外情勢に合わせて発展してきた展開過程について

国内外情勢に合わせて発展してきた展開過程は、以上でお話ししたように、首領様が革命の道に進み出られて、吉林を中心として革命活動を展開されていた時期に主体思想を創始されました。その主体思想を具現して革命闘争を行っている過程で、主体思想の内容をさらに豊富にされ、発展させて、わが革命の指導思想というだけではなく、世界が公認する指導的思想としての面貌を持つようになりました。一般的に、革命の指導思想はどのような思想も同じですが、ある時点で一気に完成された形で出ることはありません。必ず一

定の歴史的、時代的な条件に基づいて出てきた後に、長い間の闘争を通じて真理性の検証を受け、内容がより豊かになることによって、全一的な体系として完成されます。

このような革命発展の合法則性から見ると、首領様が革命の道に進み出て、その初期に主体思想を創始した後、各段階の革命闘争と政治、経済、軍事、文化などの全ての分野での事業を勝利に導く過程で自ら豊富な経験を積み、この経験を一般化させ、主体思想を絶え間なく深化、発展させました。主体思想が深化、発展した内容というのは、一般的に首領様が主体思想を創始した後、各段階の革命闘争と社会生活の全ての分野、すなわち政治、経済、軍事、文化などの全ての闘争を成功裏に領導する過程で、主体思想の真理性が検証されたのみならず、豊富な経験を積み、この経験を一般化させ、主体思想を絶え間なく深化、発展させて、全一的な体系に完成しました。

主体思想の発展において忘れてならないのは、首領様が創始した主体思想を偉大な将軍様が、また今日敬愛なる元帥様が絶え間なく深化、発展させているということです。一般的に、労働階級の首領が創始した革命思想は、首領の尊名とともに定式化され、それを深化発展させるのは、労働階級の革命から見ると、首領の後継者によって成されます。マルクス主義の場合、マルクスの学術を思想として体系化したのにはレーニンがいましたし、レーニン思想をレーニン主義に体系化したのにはスターリンがいました。結局、労働階級の革命思想の発展史をみると、首領の創始した思想を定式化、深化発展させたのは首領様に忠実な後継者によってだということが分かります。

このような合法則性から見ると、主体思想は首領様が創始し、その後の革命と建設の過程で継続的に深化、発展し、将軍様が首領様の尊名と結合させて「金日成主義」と定式化し、そして新しい原理で主体思想を体系化させ、それを全面的に深化発展させました。このような、不滅の功績を成したのです。そうであれば、偉大な将軍様が主体思想を深化、発展させた内容とは何でしょうか。偉大な将軍様が成した偉大な功績は、首領様の革命思想を首領様の尊名と結合させて「金日成主義」と定式化し、そして新たな原理で主体思想を体系化させ、それを全面的に深化発展させたことです。それで、首領様も生前に、「自分がわが人民に蒔いた主体思想の種を発芽させ、豊満な実をつけて、満開の花を咲かせたのは金正日同志」だと仰いました。結局、主体思想の深化、発展について話す際、首領様が深化、発展させたと当時に、偉大な将軍様が主体思想を深化、発展させたことについても忘れてはなりません。偉大な将軍様が首領に対する絶え間ない忠誠心と優れた思想的な叡智を持っていたからこそ解決できたのです。また、首領様と将軍様が創始し、深化発展させた主体思想を今日では敬愛なる金正恩同志が絶え間なく深化、発展させていらっしゃいます。

特に、ここでは首領様の思想を首領様の後継者が絶え間なく深化発展させた問題をどのように理解するかについて、首領の後継者が首領の思想をどのように継承発展させていくのかについてお話ししておきましょう。第一に、首領の後継者は首領に対する忠実性がもっとも高くなければならないということです。首領に対する絶え間ない忠実性を持った領

導者だから、首領の思想をそのまま受け入れ、それを絶え間なく深化発展させることができます。国際共産主義の歴史から見ても、革命の裏切り者は、皆一様に首領の思想を抹殺してきました。第二は、後継者の優れた思想理論的な叡智です。特殊な思想理論的な叡智を持っているからこそ、首領様の思想を完全に把握でき、首領様の思想をどう発展させていくかという明らかな方向も分かり、また思想理論的な活動を展開することができます。展開過程を各段階に分ける場合、解放前の祖国解放を実現するための時期、解放後の反帝反封建民主主義革命段階、戦後の社会主義革命段階、社会主義建設段階に分けられます。展開過程を分野で分けることはできません。政治、経済、軍事、文化など、社会生活のすべての分野で展開されています。

３．主体思想の全体的な構造について

現在、「主体思想」という場合に、党の文献でも、首領様の労作でも、将軍様の労作でも良いのですが、主体思想は固有な意味での主体思想と、全体的な「金日成主義」、現在は「金日成―金正日主義」ですが、首領様の革命思想全般を主体思想と表現する主体思想とに分けられます。首領様は、自らが発出した革命思想全般をわが党の革命思想あるいは主体思想と表現しました。将軍様は、主体思想と金日成主義を違う意味として表現しました。固有な意味での主体思想の構造と、首領様の革命思想を主体思想と理解する場合の構造をどう理解するかは注意が必要です。

固有な意味での主体思想は、偉大な将軍様の労作『主体思想について』の構造がそれを意味します。そこでは、主体思想の哲学的原理、社会歴史的原理、指導的原則の 3 つから成り立っています。主体思想の哲学的原理では、主体思想が如何なる世界観に基づいているのか。社会歴史原理では、主体思想が如何なる社会歴史観に基づいているのか。指導的原則では、哲学的原理、社会歴史原理を具現するために、党と国家建設で守るべき指導的原則とは何かということです。

革命と建設における指導思想としての主体思想の構造がなぜこうなったのでしょうか。それを以て、党と国家が革命と建設を導いていくべきだからです。一般的に、哲学的原理とか、社会歴史的原理だけでは、主体思想あるいは指導思想が自らの役割を充分に果たすことができません。それで、主体思想は革命の指導思想としての構造を備えるために、指導的原則が提起されたのです。指導思想になるためには、一般的な原理だけではなく、それを具現する原則まで与えるべきです。従って、主体思想の指導的な原則が主体思想の重要な構成を成すこととなったのです。これが、一般的にマルクスあるいはレーニン主義のような、労働階級の指導思想と区別される指導思想としての主体思想の構成・体系的な特徴と言えます。

革命と建設の指導的な原則まで与えたのは、革命と建設において例えば主体思想の哲学原理あるいは社会歴史的原理に基づいて革命と建設を行うためには、具体的に党と国家がどうすべきか明らかにする必要があるからです。それに対する指導的原則です。指導的原

則には大きく 3 つありますが、それは自主的な立場を堅持する原則、創造的な立場を堅持する原則、思想を基本にする原則です。それら原則の中で、自主的な立場を堅持する原則として、思想での主体、政治での自主、経済での自立、国防での自衛があります。思想分野、政治分野、経済分野、軍事分野で主体思想を具現しようとしたら、どのような原則を守るべきなのか、これを明かしたのが主体の自主、自立、自衛です。

創造的な立場を堅持する原則には、人民大衆による方法と実践に合わせて行う方法の 2 つがあります。つまり、人民大衆の創造的な力を発揮して、革命と建設を行うにはどうすべきか、どのような方法で行うべきかということには、人民大衆の創造力を発揮させるために、実情に合わせて行う方法と人民大衆による方法があるということです。革命と建設は、人民大衆の思想的な役割を推進する事業であるから、人民大衆の思想意識的な役割を高めるためには、原則として人間改造事業が政治的に重要となります。これらが主体思想の指導的原則に属していますが、この原則が出ることによって、主体思想が革命と建設における指導思想としてその面貌を完全に備えることができました。以上が主体思想と金日成主義を区別して論じる際の固有の意味での主体思想です。

他方、金日成主義を主体思想として表現する場合も多いです。対外的にも過去には、首領様の革命思想の全てが主体思想だとよく言われました。これは、金日成主義、今日で言えば金日成・金正日主義を念頭に置いたものですが、金日成・金正日主義の構造は先に述べた構造とは異なります。金日成・金正日主義は、「人間中心の哲学思想」です。指導思想としての主体思想とは何かという場合には、第一に「人間中心の哲学思想」が金日成・金正日主義の構造に入ります。そこには、哲学的世界観、社会歴史観、指導的原則、革命観、人生観などの全てが「人間中心の哲学思想」に含まれます。第二に、「人民大衆中心の革命理論」には、革命の原理、民族解放、階級解放、戦略と戦術、社会主義・共産主義建設理論、世界革命、全社会の自主化のための理論、すなわち首領様、将軍様が明らかにした革命理論の全般が含まれます。第三に、「人民大衆中心の領導方法」、これが金日成・金正日主義の構造に入ります。これはマルクス・レーニン主義にはなく、金日成主義にだけある新たな構成体系ですが、革命と建設を労働階級が党の領導下で、どのような方法及び如何なる領導芸術と繋がっているか。また、革命と建設において党の領導が如何なるものであるのか。さらに、どのような領導体系によって如何なる領導芸術で大衆を導いていくべきか、そうした革命と建設へ大衆を導いていく党の領導方法が「人民大衆中心の領導方法」です。

これをマルクス主義と比べてみると、マルクス主義は主に学術的な構成体系になっていますから、哲学、政治経済学、科学的共産主義となっています。金日成主義は、学術的な構成体系ではなく、革命の指導理論、指導思想、革命と建設を正しく導いていくための指導思想としての構成体系からなっているので、「人間中心の革命哲学思想」は指導思想であり、「人民大衆中心の指導理論」は指導理論であり、「人民大衆の指導方法」は指導方法です。要するに、革命と建設を正しく導いていく指針としての面貌を持つ完成された構成体

系なのです。主体思想の構成体系は何かと問われれば、その主体思想が金日成主義の構成体系なのかあるいは固有の意味での主体思想の構成体系なのかを区別する必要があります。また、一般的には、首領様の思想を独創的な思想だと話す際、内容と構成体系が独創的だと話す際、いずれにしても金日成主義の構成体系を念頭に、内容と構成体系が独創的だと言えます。

このように見るとき、先軍思想は、金日成主義の構成体系の中で、先ほど「人間中心の哲学思想」、「人民大衆の革命理論」、「人民大衆中心の領導方法」と分けましたが、その中で先軍思想は革命理論に属します。先軍思想の内容を見ると、先軍革命理論を明らかにした部分と革命の主力軍の問題、すなわち軍事を前に立て、革命軍隊を核として革命建設全般を推し進めていくという部分がありますが、いずれにせよ先軍革命理論に含まれます。また、先軍政治理論は、先軍政治がどのような政治で、それが社会主義の基本政治方式であるということを明らかにしています。その意味でも、先軍革命思想は、革命理論を解釈する際の先軍革命思想として解釈できます。

「社会政治的生命体」は、社会歴史観において歴史の主体というのがありますが、歴史の主体が一般的に社会主義の担当者であるのですが、それが首領様によって意識化、組織化される際に、歴史の自主的な主体を指し、歴史の自主的な主体は一つの生命体だと言う。そこで、社会政治的生命体という表現があり、また「人間中心哲学思想」の中に含まれるのが、哲学理論、社会歴史観、革命観、人生観だと述べましたが、その人生観の中で社会的な生命問題を論じる際、社会政治的生命は社会政治的集団から授かった生命であると説明されます。集団と言うと、社会政治的生命体を指します。社会政治的生命体は、首領様の領導を受ける社会政治的集団を指し、その集団が個人に与える生命が社会政治的生命であります。この社会政治的生命が人間に固有な生命で、永生する生命であるのです。一般的に、社会政治的生命体は、社会歴史原理を展開する際、歴史の主体からでも言えるし、主体思想で明らかにした主体の革命的人生観からでも言えるし、社会政治的生命を論じる側面からも社会政治的生命体を論じられます。

「党の唯一領導体系」は、金日成主義の構成体系にそくすと、「人民大衆中心の領導方法」です。その第一が領導本質と原則であり、第二が領導体系です。領導体系の中で党が革命と建設を正しく領導するには、どのような領導体系を立てるべきか、そこで「首領の唯一領導体系」、「党の唯一領導体系」が論じられます。第三が領導芸術です。領導芸術は幹部らが如何なる作風で、どんな品性を持って働くべきかを明らかにするものです。

４．主体思想は人民に対してどのように教育され、受容されているのかについて

わが国で主体思想の教養がどのように行われているか。主体思想は、時代と革命発展の要求を反映した、わが時代の唯一の指導思想です。革命と建設の指導思想とは、革命と建設を導く党だけが知っており、大衆を導けば良いと理解するかもしれませんが、そうではありません。党と国家の指導思想でありながら、人民たちが自らの思想として受容すべき

人民たちの思想です。人民たちの思想として主体思想を受け入れさせる問題が主体思想教養で解決すべき重要な内容となります。わが国では、主体思想が人民の思想であり、人民たちの全ての考えと活動において指針とすべき思想となっているので、社会の全ての成員がこれを自らの思想として受け入れ、それに基づいて全ての考えと活動を行うために、主体思想教養を強化しています。

一言でいうと、わが国で、わが党で行われている思想教養は全て主体思想教養だといって過言ではありません。忠実性教養、階級教養、金正日愛国主義教養など、最近敬愛なる元帥様が五大教養について仰いましたが、忠実性教養、社会主義に対する信念教養、金正日愛国主義教養、反帝国主義教養、道徳教養など、総体的にはこれら全てが主体思想教養に位置付けられます。主体思想教養の様々な形態が以上のような教養です。我が国では主体思想教養と異なる他の如何なる教養も存在しません。唯一思想教養、これが主体思想教養です。

他の形態の教養は、主体思想教養として一般化されています。主体思想をわが人民が自らの確固たる思想として受け入れる教養であります。主体思想教養をわが人民が自分の思想として受け入れるために、これを受け入れ、全ての事業と生活での指針とするために主体思想教養を強化していますが、その内容を見ると、まず主体思想の原理を認識させる原理教養を強化しています。原理教養とは、主体思想の哲学的な原理、主体思想の社会歴史的原理、主体思想の指導的原則は何かを原理的に教えることを言います。具体的には、主体思想の様々な形態を主体思想として一貫させるための忠実性教養、革命伝統教養も全て主体思想に武装させるための教養です。また、党政策教養も主体思想で武装させるための教養です。その他に、反帝階級教養、集団主義教養、金正日愛国主義教養、道徳教養、信念教養など、様々な教養形態がありますが、その全てが主体思想で武装するために行われる教養です。

主体思想は人々の活動において多様に具現していくべき性質のものであることから、それに合わせて各分野、各活動で主体思想を具現させるための教養を施しています。階級教養も、集団主義教養も、主体思想の原理教養を強化していますし、忠実性教養、党政策教養、革命伝統教養など、その他のすべての教養を多様に行いながら、全てが主体思想教養に一貫させていけるよう志向しています。この教養がどのような体系を通じて行われているかと言うと、我が国の教育体系では、小学校から大学までの教育体系を備えていますが、この教育機関体系での重要な教育内容の一つが政治思想教育です。社会主義教育の内容は、政治思想教育、科学技術教育、体育教育と「智・徳・体」を標榜していますが、ここに言う政治思想教養の内容が主体思想教養です。我が国では、小学校から大学に至るまで、政治思想科目がいくつかあります。政治思想科目は主体思想で学生たちを武装させるための教育内容になっています。

ご存じのように、我が国ではすべての人民たちが一生勉強できる教育体系になっています。いわゆる、「勤労者ための学習網」と言えます。「勤労者ための学習網」を通じて、主

体思想教養が正常に行われています。「社会教育網」、すなわちテレビやラジオ、新聞などを通じて、日常的に主体思想教養が多様に行われています。これもご存じのことと思いますが、我が国では、誰でも一定の政治組織に属しています。党は党組織に、青年たちは青年同盟組織に、女性たちは女性連盟になどです。政治組織に加入していない人はいませんが、政治組織で行う政治活動の一つの側面が思想生活です。思想生活は、要するに主体思想で武装するためのもので、主体思想の要求通りに生き、活動する側面から政治組織で行う多様な生活ということです。

このように、わが国では教育機関、教育体系を通じて、また政治組織教養を通じて、さらに一般社会教養網を通じて、思想教養、主体思想教養がずっと行われます。従って、わが国において主体思想は、わが人民全てがもっとも重要な自らの生活の要求として受け入れます。ただ主体思想の要求通りに生き活動するのが、わが人民の習慣化された生活になっています。首領様も、将軍様も、「人民大衆に対する最大の愛は、彼らを自主的な思想で武装させることである」と仰っています。というのは、人々が思想的に病み、思想的に変質すると、社会主義人間としては奇形な人間、死んだ人間と同じだからです。結局、人々を愛し、慈しむ最大の表現は、彼らを自主的な思想で武装させ、自主的な人間にさせることです。それが人民大衆に対する最大の愛です。

偉大な首領様たちの人間愛の崇高な政治により、誰でも真の自主的な人間として生きることができます。それは主体思想で武装し、それに基づいて全ての生活をするから、わが国では革命の全ての分野で、人々の精神力が高度に集中され、世界を感嘆させる奇跡を演じました。秘訣はここにあります。

政治思想科目には、大学の場合は主体哲学、主体政治経済学、偉大な首領たちの革命歴史を教える革命歴史、革命歴史は主体思想を創始し、主体思想を具現させる闘争だから、首領様たちの重要な科目として教えています。首領様たちの労作が主体思想の叢書と言えます。首領様たちの労作を学年によって、学部の特性によって、基本的に自分の専攻学部、専攻学科に合うものを基本にしつつ、全ての人が同時に知るべき労作として講義されます。小学校や中学校では、社会主義道徳、首領様の革命歴史などの科目が政治思想科目になっています。主体思想教養は、主体思想体系に含まれるのではなく、教養とは主体思想の原理や要求を人々に教え、それで武装させるという教養事業です。教養と教育は同じ意味です。教育とは教えること。党あるいは政治組織が人々を対象に、主体思想の原理を教えるのが教養事業です。

我が国で、主体思想教養が唯一の思想教養となり、主体思想で武装させるための教養事業が整理立てられた体系を通じて体現されているが、これは人民に対する最大の愛として実践されています。人々の活動で思想は重要な役割果たします。資本主義国では、ブルジョアたちが人々をブルジョア思想で教育し、自分の思想で武装させようと努力しています。しかし、それは思想教養事業ではなく、反動的な思想を強制的に注入させるものです。注入させるのになぜ入らないか。それは人民大衆が自分の思想ではないから、自分の利益に

合わないから受け入れない。その点、主体思想は人民大衆の思想です。人民大衆はそれが自分の利益のために服務する思想だと分かるから簡単に受け入れ、それを自分の考えと活動の指針にします。我が国で行われる思想教養事業は、資本主義国での反動的な搾取階級が反動的な思想を人民大衆に強制的に注入させるのとは区別できるということに特徴があります。どの階級でも自らの思想で動くという点、大衆を自らの意図で動かそうとする点が搾取階級と異なります。人民大衆の思想にそぐわない思想は、絶対に人民大衆に入りません。

- **社会科学院主体思想研究所講義Ⅱ**
- 日時：2016 年 8 月 22 日（月）16:00～17:30
  場所：高麗ホテル 2 階接見室
  講義者：朝鮮社会科学院 金日成・金正日主義研究所 教授・博士 キム・ヒョンウ
  （同席者：朝鮮社会科学院対外事業処 部員 金正国、朝鮮国際旅行社 案内員 朴成日、朝鮮国際旅行社 案内員 金正姫）

１．主体思想の基礎、真髄は何かについて

主体思想の基礎とは何かと言う場合、主体思想の哲学的原理とは何かということと同義です。それは、「主体思想は人間がすべての主人であり、すべてを決定する」という哲学的原理に基づいています。哲学的原理とは、世界に対してもっとも正しい一般的な観点、立場を明らかしたもので、それを世界の一部である社会に具現させた、社会の本質と社会の合法則性を明かしたのが社会歴史観で、さらに指導的原則は、社会歴史的原理に基づいて、党と国家が堅持すべき原則とは何かを示すものである。主体思想をこの 3 つの構成要素から見ると、一番基礎となるのが哲学的原理です。これに基づいて、主体思想を展開する際、主体思想の哲学的原理を挙げ、それからこれに基づいて導出された社会歴史的原理を言います。哲学的原理は、大きくは世界に対する見解と立場ですが、見解は哲学的原理それ自体、すなわち「人間がすべての主人であり、すべてを決定する」ということです。

換言すると、世界で人間が主人の地位を占め、世界発展で人間が決定的な役割をする。これが主体思想で明らかにした世界に対する見解です。この見解から出てきた観点と立場が、人間の利益から出発して、人間の活動を基本にしつつ、世界の変化と発展に結果するという観点と立場です。このような世界に対する見解、観点、立場からすれば、社会とは何か、また社会運動とは何でしょうか。社会とは、人間が社会財産を持ち、社会関係と結合して生活する集団世界です。それでは、社会運動はどう発展するかというと、社会運動は「人民大衆が自主的に、創造的に、意識的に行う運動である」ということになります。これが、主体思想が明らかにした社会発展の主要な合法則性です。

自主的な運動の中から、指導的な原則に基づいて、自主的な立場を堅持する原則として主体、自主、自立、自衛の原則が出てきました。創造的な運動の中から、創造的な立場を

堅持する原則として、実情に合わせる原則と人民による原則が出てきました。意識的な運動の中から、思想を基本にするための原則として、人間改造先行、思想事業先行原則が出てきました。要するに、こうした主体思想を成す 3 つの構成体系を見ると、哲学的原理が一番の根本に置かれていることが分かります。この原理は、人間の運命開拓から見ると、「人間が自らの運命の主人で、自らの運命を開拓する力も自分自身にある」という原理により具体化されます。「人間が全ての主人である」とは、「人間が自らの運命の主人は自分自身である」ことを意味し、「人間が全てを決定する」とは、「自らの運命を開拓する力も自分自身にある」ということになります。従って、主体思想の核はと言うと、「人間が自分の運命の主人で、自分の運命を開拓する力も自分自身にある」ということになります。

２．主体思想あるいは金日成主義で真髄とは何かについて

金日成主義には、主体思想、革命理論、領導方法があるが、そのなかで主体思想が真髄となります。主体思想に基づいて革命理論も展開し、領導方法も展開されます。他方、主体思想で基礎となるのは、「人間が全ての主人であり、全てを決定する」という哲学的原理です。

３．主体思想はどのように朝鮮で定立されてきたのかについて

主体思想のような偉大な思想がわが朝鮮で誕生した重要な根拠あるいは理由は、一言でいうと、人類が初めて奉じた天才的な思想理論家である偉大な首領金日成同志をわが人民が、また朝鮮が奉じたから、わが朝鮮で主体思想が創始されることになりました。偉大な金日成同志を奉じることにより、わが国が主体思想の祖国に成り得たし、わが人民は主体思想が創始した祖国で生きる大きな栄光を掴むことになりました。

何故かと言うと、前述したように、主体思想が創始された社会歴史的な環境と条件について、すなわち当時の世界革命がどのような状況下に、わが革命はどのような状況下に置かれていたのを述べました。これは、新たな思想、つまり主体思想が創始できた一つの客観的な条件です。このような客観的条件は、周知の通り、全般的な世界の多くの国がそういう条件にあったし、わが国もそういう状態に置かれていました。従って、この客観的な条件によって、必ずわが国で主体思想ができたかというと、そうではありません。客観的な状態下において、我々が偉大な首領金日成同志を首領様に奉じ、その首領様が時代を代表する主体思想を創始したから、わが国で主体思想が誕生したのです。

これは労働階級の思想が創始される一般的な合法則性から見ても、妥当な根拠だと見ることができますが、一般的に労働階級の革命思想は、卓越した首領たちによって創始されるのが常識です。なぜなら、人民大衆の志向と要求を反映し、具体的には労働階級の志向と要求を反映し、時代を代表するような人民の思想は、どんな個別の成員にも出せないからです。それは、人民大衆の個別の成員たちは、時代の流れについて、また包括的にその時代の人民の志向と要求を把握するのが難しいからです。これは唯一、それこそ千里慧眼

を持った卓越した首領だけが把握でき、その要求を捕捉したところに基づいて、新たな人民大衆の志向を反映した思想が出せるのです。

歴史的に見ると、労働階級の革命思想は、首領たちによって創始されています。マルクス主義は、マルクスが当時の労働階級の要求を捕捉する能力と資質を持った首領だったので、それを出すことができました。レーニン主義も同じです。結局、新たな労働階級の思想が創始される要因を見てみると、首領の出現が決定的な要因であり、新しい思想が出てくる社会歴史的条件の醸成というのは客観的な要因に過ぎません。如何に客観的な条件が醸成されても、卓越した首領を奉じないと、時代を代表する思想が出てくることはありません。

これに関連して、先行理論では、マルクス・エンゲルスの場合、時代が要求すれば誰でもその時代を代表する思想を立てることができるし、首領になれるという見解を提出しましたが、これは時代を代表する思想とその思想を創始する首領との関係を正しく答えているとは言い難いです。如何に歴史が要求し、時代が要求しても、首領が出現しないと新しい革命思想は誕生しません。我が国の発展歴史を見ても、先に述べた条件が発生し、環境は醸成されていましたが、偉大な首領が革命に進み出る以前には、その時代の要求、わが人民の要求を誰も捕捉できませんでした。従って、新しい思想が出ることもありませんでした。

このように、主体思想が朝鮮で創始されたのは、明らかに時代を代表し、偉大な思想を生み出すことができる天才的な思想理論家である偉大な金日成同志を奉じだから、我が国が主体思想の祖国になることができたのです。これは、百数十年に渡る共産主義の歴史を見ても、卓越した首領たちによって革命思想が形成されてきたことが自明であり、合法則性に見合っています。

４．主体思想が創始できた思想理論的な前提は何か。思想精神的な源泉は何かについて

偉大な首領様が主体思想を創始できた思想精神的な源泉は、不撓不屈の革命闘志である金亨稷先生の「志遠」の革命思想です。これが首領様をして主体思想を創始できた思想精神的な源泉です。金亨稷先生の「志遠」の思想のうち、重要なものの一つが民族自主的思想です。金亨稷先生は、朝鮮国民会を創立して、当時の我が国の民族解放運動における活動家として行動しつつ、そこで仰った内容を見てみると、「徹底的に朝鮮人自身で自立独立を成すべきである」との思想を終始一貫して強調されました。もう一つは、民衆重視思想です。民衆は当時貧しく、卑しめられる存在でしたが、そうした広範な民衆の発動力を取り込み、民衆の力を動員してこそ国の独立を達成できるという民衆重視思想を強調しました。「志遠」の思想において今一つ重要なことは、「百折不撓」の闘争精神、革命的同志愛、継続革命の精神です。「南山の青い木」という詩歌をみると、「私が戦いで倒れても／代を継いで／必ず独立が成されるべき」という継続革命の思想が込められています。継続革命の思想のような崇高な革命精神などが「志遠」の革命思想には含意されていますが、民族

自主思想も、民衆重視思想も、そして「百折不撓」の闘争精神、革命的同志愛、継続革命の精神もまた思想精神的源泉になっています。首領様はこうした金亨稷先生の「志遠」の思想を幼い頃から教育され、「志遠」の思想で育ち、そうして首領様は「人民大衆の力を信じ、人民大衆を発動させて革命をすべき偉大な思想、事大主義に反対し、我々自らの力で行うべきだ」という主体思想のような新しい思想を打ち立てることができました。要するに、思想精神的な源泉は、「百折不撓」革命闘志であった金亨稷先生の「志遠」の思想だと言えます。

５．主体思想を創始する際の思想理論的な存在は何かについて

それは、先行思想を深く研究し、それを我が革命に適合させながら、不合理な部分と新しくすべき部分は何かを把握する過程です。思想理論的な存在は、先行したマルクス主義の理論であったと言えます。基本は、思想精神的な源泉を基礎にした「志遠」の革命思想で、これが首領様をして主体思想を創始できた思想精神的な源泉と理論的前提だと理解できます。一般的に、首領が革命思想を創始しようすると、優れた思想理論的叡智を持つべきです。首領様が創始できたということで重要なことは、思想理論的な源泉に基づいて、優れた思想理論的な叡智を持っていたことです。我が国の革命運動のみならず、世界革命の実態についての前途を長期的に俯瞰し、それを一般化させ、その前途を明らかにする思想を打ち立てた、優れた思想理論的叡智を持つ特殊な存在が、主体思想のような偉大な思想を創始できた重要な要因です。

６．主体思想を創始する過程はどうであったのかについて

『回顧録』と『主体思想について』に主体思想の二つの出発点が記載されています。それが二つの真理なのですが、その二つの真理を見つけたことが主体思想のような新たな思想を打ち立てることとなった重要な出発点です。一つ目は、「革命の主人は人民大衆で、人民大衆の中に入って彼らを組織、動員させることこそ、革命で勝利できる」という真理、これを首領様が見つけました。吉林を中心に革命活動を展開していた時期、吉林での革命活動の前後のこの時期、わが国の反日解放運動と共産主義運動の実態を分析したことに基づいて、見つけた真理です。この時期、民族主義者たち、初期共産主義者たちは、人民大衆と離れていました。人民大衆と離れ、上層部だけが集まり領導権争いに明け暮れ、派閥闘争ばかりして、大衆とは完全に分離していました。大衆を自らの領導権を奪うための一つの手段にしていました。民族主義者の場合には、人民大衆つまり同胞大衆を団結させて革命を行おうとはせず、軍資金徴収の対象にしか扱わなかったのです。もちろん、人民大衆を革命の主人に扱おうとする観点はありませんでした。人民大衆と離れ、領導権争いと派閥闘争ばかりしていた当時の民族解放運動、共産主義運動の実態を首領様は横目に見ながら、革命の主人は人民大衆だから、人民大衆の中に入るべきだという観点を発見しました。人民大衆の中に入って、人民大衆を組織し、そして動員させて革命を呼びかけること

でこそ革命が勝利できるという真理です。この真理を、当時の現実を通じて体得しました。これが「革命の主人は人民大衆で、革命を推進する力も人民大衆にある」という偉大な主体思想を打ち立てた重要な契機となる真理の一つです。

もう一つの真理は、当時のわが国においては、民族解放運動と初期共産主義において事大主義が蔓延っていたことと関係があります。国際党を見ると、国際党において朝鮮には派閥が多すぎ、1925 年に朝鮮共産党が創建されますが、3 年後には、自分こそが正統派なのだ、自分こそが朝鮮共産党を代表するのだと言って、派閥が対立し、これは党ではないと国際党を除名させられました。これは、わが国の共産主義運動の歴史から見ても、朝鮮民族という民族的な自尊心から見ても、相当な恥部です。これほど、事大主義が蔓延っていたのです。自国の革命をうまく遂行できるのであれば、誰がそれを行っても関係ないはずなのに、大きな国の国際党から承認を受けることだけに集中し、自国の革命を自ら遂行しようという観点は全く存在しませんでした。民族主義者の場合も、大国がひしめく欧州、イギリス、アメリカなどに依存して、何とか独立ができないかという事大主義の観点が見られました。あるいは、実力を養い、列強の助けを受けつつ、独立を達成することができないかという事大主義の観点も多かったです。

民族主義者でもいいし、初期共産主義運動者でもいいのですが、自分の力を信じて、自国の革命は自分が責任を持って自らが遂行すれば、誰が承認してもしなくても関係ないのに、国際党に承認を受けることだけに集中する有様で、また自分の力を信じず、外勢の力を借りて独立ができないかという事大主義の観点に深く染まっているような実態だったのです。そうした実態に鑑みて、首領様は、革命は誰かが承認して行うものではないし、また誰かが代わりにしてくれことでもない。ただ革命は自らの信念によって、自らが責任を持って遂行するべきである。そうするとその革命は自然に認められ、助けが得られると考え、事大主義思想を徹底的に無くすべきだと思うようになったのです。徹底して自らの信念により、自らが責任を持って革命をすべきだという真理を、このような過程を通じて体得しました。これがもう一つの真理です。

革命の主人は人民大衆だから、人民大衆の中に入って、彼らを組織動員し、革命をすべきだという真理を見つけ、革命は誰の承認を受けるためにするものではなく、自分が責任を持って、自分ですべきだという真理を見つけました。このような出発点における真理に基づいて、首領様は『回顧録』で述べておられますが、吉林を中心に革命活動をなされながらこの真理を見つけ、1 年間の獄中生活の過程で、この真理に基づく主体思想を完全に成熟させたのです。

その後、牢獄から解き放されるや否や、活動の舞台を広げつつ、1930 年 6 月に卞倫において「朝鮮革命の進路」を発表し、主体思想を具現させた主体的な朝鮮革命路線を打ち出しました。この卞倫の会議は、主体思想の創始を宣布した歴史的な会議になります。要するに、二つの真理を発見したことに基づき、1930 年 6 月に行われた卞倫会議で主体思想が誕生し、主体的な革命路線が宣布されたと理解すればよいです。

我が国の学者でもいいし、学生でもいいのですが、主体思想が具体的にいつ創始されたのかとよく聞かれます。その質問に対して言うのは、思想はある日、1 日か 2 日の間に、出てくるものではないということです。一定の歴史的な経緯、闘争を体験しながら、新たな思想は生み出されます。その意味で、主体思想が時期的にいつ創始されたかと言うと、偉大な首領様が吉林を中心に革命活動を展開していた時期に、主体思想の真理を見つけ、創始することになったということです。また、主体思想が創始されたのを宣布したのは、1930 年 6 月の卞倫会議だということになります。この主体思想の創始の宣布とともに、主体思想を具現した朝鮮革命の路線が具体的に宣布され、朝鮮人民の具体的な路線もまた、すでに主体思想を具現させた路線として出ています。つまり、革命路線の中に主体思想の原理が含まれているのです。この卞倫会議で主体思想の諸原理について、つまり人民大衆が革命の主人であるという思想をはじめとする主体思想の原理がすでに闡明にされました。このように卞倫会議は、主体思想の原理と主体思想の革命路線が誕生し、宣布された会議でした。

７．主体思想の発展過程と成立過程はどのようなものかについて

首領様が主体思想を創始した後、各段階の革命闘争を通じて、主体思想は継続的に深化し、発展していきます。解放後、戦争期間、戦後において主体思想は、革命実践の中でその経験を取り入れ、内容を豊富にし、発展させていますが、その際には未だ首領様は、自分が創始された思想を主体思想とは表現しませんでした。単にわが党の革命思想、党の路線と政策というふうによく仰いました。多くの場合、マルクス・レーニン主義に基づいたわが党の革命政策というふうに表現し、これは首領様が謙虚にそう表現したものです。主体思想という表現を使ったのは 70 年代に入った頃からで、その際にわが党の革命思想は主体思想だという表現を使いました。その時にはすでに、主体思想とは何かを定式化し、主体思想の創始過程についても話されました。首領様の思想を主体思想としながら、それを完全に全一的に体系化されたのは偉大な将軍様であり、それが偉大な将軍様の労作『主体思想について』で示され、首領様もその労作を満点の労作だとおっしゃいました。

首領様の思想である主体思想を首領様の尊名と結合すべきだ。これは、マルクス・レーニン主義とは異なる思想だ。従って、首領様の尊名と結合して見て、理解し把握すべきだとして「金日成主義」を宣布したのは将軍様でした。その歴史的な過程を見ると、すでに偉大な将軍様は、金日成総合大学で革命活動を展開されている中で、首領様の労作を一心不乱に研究しつつ、マルクス・レーニン主義と比較考察しながら、首領様の革命思想は新しく、時代の要求を反映させた新たな思想であることを洞察されました。大学での革命活動を終わらせ、党中央で事業をする時、1964 年 6 月からですが、すぐに労働階級の革命思想史、100 年史を全て検討します。マルクス、エンゲルス、レーニンの労作を全面的に分析しながら、労働階級の革命思想史、100 年史を深く分析したのです。それに基づいて、首領様が打ち出した思想は、マルクス・レーニン主義と区別される、新しくて独創的な思想で

あるという結論を得ました。こうして、1974 年 2 月に首領様の思想を金日成主義だと宣布します。「全社会を金日成化させるのがわが党の最高綱領である」と宣布し、首領様の思想が金日成主義として定式化され、首領様の革命思想で全社会を一色化させるのがわが党の最高綱領であることを宣布しました。これが偉大な将軍様によって実現されたのです。

その後の将軍様の思想理論活動は、全て首領様の革命思想を新たな原理により内容を豊富にし、定立体系化する過程として一貫しています。その過程では、首領様がとくにお考えにならなかった問題を将軍様が新しく提議し、主体思想を発展、豊富化させる歴史的な要求を実現していきます。

現在、我々が首領様の革命思想を「金日成・金正日主義」だと言うのは、金正恩同志がそう呼ぶべきだと仰ったからです。首領様が創始した主体思想を首領様と将軍様が革命の発展段階に従って、またわが革命実践で成し遂げてきた豊富な経験を一般化させる過程を通じて、発展・深化させました。従って、主体思想、金日成主義を「金日成・金正日主義」と呼ぶようになったのです。これは、マルクス・レーニン主義思想を「マルクス・レーニン主義」と呼ぶのとは違います。マルクスとレーニンは時代的に異なる人で、レーニンがマルクス主義を政治的な条件に合わせて深化、発展させたから、マルクス主義にレーニンの名前を合わせて、マルクス・レーニン主義だと言いますが、「金日成・金正日主義」は、首領様が創始し、首領様と将軍様がともに深化、発展させた思想なので、金日成・金正日主義なのです。

「金日成・金正日主義」を定立、発展させる過程は、偉大な首領様が主体思想を創始し、首領様と将軍様がそれを革命闘争経験に基づいて一般化し、わが革命の実践によりわが革命を勝利に導く過程で発展、深化させ、全一的な思想理論体系として成立、完成したという流れになります。現在は、敬愛なる金正恩将軍様が首領様と将軍様が成し遂げてきた思想業績を総称して「金日成・金正日主義」だとし、「金日成・金正日主義」としたのは、首領様が打ち立てた思想を将軍様がさらに発展・深化させる業績を挙げたからです。

もとより、将軍様がご存命の時から、わが人民たちは首領様の思想を「金日成主義」ではなく、「金日成・金正日主義」と呼ぶべきだと主張していましたが、将軍様は拒みました。「金正日主義」はどこをどう掘っても金日成主義しか出てこないとして、「金日成主義」でいいと仰ったのです。しかし、実は首領様の思想である主体思想を深化、発展、定立、体系化してきた業績はすべて偉大な将軍様が成したことです。従って、主体思想あるいは金日成主義を二人の尊名を結合させて、「金日成・金正日主義」と呼ぶのは我々にとって至極当たり前のことです。このような時代と人民大衆の願いを反映して、敬愛なる元帥様が「金日成・金正日主義」と呼ぶようにしようとしました。

８．主体思想の論理性、合理性はどのようなものか。主体思想の科学性とは何かについて

主体思想の科学性の問題で言うと、主体思想は内容と構成体系が革命の指導思想として、労働階級の革命の発展においてもっとも高い段階を示す完成された思想であるということ

です。具体的に、労働階級の革命の発展でもっとも高い段階を示す完成された思想であることを、どのような側面から言えるのか。主体思想の構成体系には、固有な意味での主体思想と、広い意味での主体思想である「金日成・金正日主義」があります。その二つの側面のうち、固有な意味での主体思想で言えば、その内容から見ると哲学的原理及び社会歴史的原理があり、人間が生きている現社会の本質的特徴と社会的運動の特性に合わせて、世界歴史観と社会歴史観を明らかにしたということが言えます。主体思想の哲学世界観は、世界に対する観点、立場、見解を明らかにしたものです。

これをマルクス主義の哲学的世界観と比べてみると、マルクス主義の哲学的世界観は、「世界は物質から成り、変化・発展する」。これでは人間が生きている現実の本質的な特徴を明らかにできません。なぜなら、人間もそうですが、自然界に存在的なものは皆、物質である。ここには、発展レベルが異なり、また世界発展で互いに異なる役割をするという今日の世界の実状が表せません。人間が生きている今日世界も、人間が発生する以前の世界も全て含まれますが、他方で今日の世界に対して正しい見解を導けません。今日の世界は、人間が世界の主人の地位を占め、世界発展で人間が決定的な役割をするという重要な特徴があります。従って、世界に対する正しい見解は、人間が生きている今日に対する見解を明らかにしている主体の哲学的原理だけが、今日の世界の本質的な特徴をもっとも正しく明らかにしている原理だと言えます。

観点と立場も同じです。世界に関する観点と立場ですが、マルクス主義によると、世界は物質からなり、変化発展する互いに関連づけられた観点、つまり唯物弁証法的な観点を与えることで終わりました。人間が具体的に今日の世界でどう自分の運命を開拓していくべきか、また運命を開拓するためには具体的にどうすればいいかなどという具体的な方法が示されていません。これに対して主体思想は、人間を中心に、人間の利益から出発し、人間の活動を基本にして、世界に対する変化と発展を見ます。このため、人間が決定的な役割をすることに立脚して、人間の活動を強化する側面から人間の役割を高める方法として、世界の変化と発展、人間の運命を開拓して行くことを明らかにしています。従って、この観点を基本に、運命の開拓問題を明らかにしているので、現実の世界で人間の運命の開拓活動をもっとも正確に示していると言えるでしょう。

例えば、自分が自らの運命の主人で、自らの力で自らの運命を開拓していくべきだということを教えているから、ただ黙っているのではなく、自らが主人になって、運命を主動的に開拓すべきだという観点と立場を持つことができます。すなわち、人間の運命を開拓できるもっとも正しい観点と立場を与えているということになります。このような意味で、主体思想が明らかした哲学的原理は、世界に対するもっとも正しい観点と立場を与える完成された立場だと言えるのです。

社会歴史的原理も、社会に対する本質と社会運動の合法則性を明らかした原理です。マルクス主義は、社会というのは土台と上部構造からなり、変化と発展は自然の法則のように客観的な法則によって行われると言います。つまり、社会的存在が一次的で、社会存在

の変化、すなわち物質的条件の変化によって社会が発展されるという社会的見解を打ち出しましたが、これは社会運動も自然の運動もまったく同じ原理で説明していることになります。社会運動だけが持っている固有な特性は説明されていません。社会は如何なる自然的な存在とも異なり、人間というもっとも発展した存在が生き、その人間の活動は自然の活動とは根本的に異なる特性を持っています。主体の社会歴史原理よって、人間が生きている社会と、人間の運動である社会運動の固有の特徴による社会運動の合法則性が明らかされたから、社会を改造し、変革していく活動をもっとも正確に遂行できる原理を明らかにしたと言えます。その意味で、主体思想で明らかにした社会歴史的原理は、もっとも完成された科学的な社会歴史的な原理だと言えるのです。主体思想の内容から見ても、哲学的な原理も、社会歴史的原理も、世界の本質と社会の本質、社会発展の合法則性を今日の世界と人間が生きている人間の活動の固有な合法則性を明らかにする完成された原理であるので、もっとも完成された科学的な原理だと言えます。

主体思想の構成体系から見ると、一般的に世界観と社会観を与えるに止まらず、党、国家建設で堅持すべき原則まで明らかにしているから、革命の指導思想として備えるべき完成された構成体系を持った思想であると言えます。このような視点から、主体思想の固有な意味での構成体系が完成されていると言えます。

広い意味での主体思想である「金日成・金正日主義」もまた、その内容と構成は完成されたもっとも高い水準の科学的な革命思想であります。まず内容から見ると、真髄を成している主体思想は、新しい独創的な思想です。次に、革命理論、特に領導方法の内容が斬新で独創的です。そして、革命理論から見ると、マルクス・レーニン主義の革命理論は、主に欧州の資本主義国、またロシアを端緒に展開された資本主義国における社会主義革命をどう遂行するかを明らかにしたものと見ることができます。マルクス・レーニン主義の場合、反帝反封建民主主義理論のように、植民地反封建社会で革命運動をどうすべきかという内容がなく、とくに社会主義・共産主義運動の理論がありません。また、主に社会制度を改革、変革させるための理論のみがあり、他の問題、すなわち人間をどう改造すべきか、自然をどう改造すべきかという理論がありません。このような限界を有しています。

他方、主体革命理論は、全ての段階の革命理論と全ての分野の革命理論を明らかにし、全ての段階と全ての分野での戦略まで教えています。このような意味で、金日成主義が明らかにした革命理論は、完成された革命理論だと言えます。全ての段階とは、社会主義革命のみならず、社会主義建設段階、その後の反帝反封建民主主義段階を指します。これは、資本主義国で革命をする理論だけでなく、植民地・半植民地段階で革命する国の革命理論まで包括するものです。また、全ての分野とは、自然を改造する理論、社会を改造する理論、人間を改造する理論を包括しています。

さらに、内容面での独創性、とりわけ領導方法は、先行理論において全くなかった理論です。先行理論では、学術的な構成体系になっているから、哲学、政治経済学、科学的社会主義理論から成り立っています。主として、学問的な構成体系ですから、革命を行う過

程で如何なる原理に基づいて遂行するべきかという理論だけであって、大衆を如何に発動させるかについては明らかにしていません。これは当該歴史的条件と関連しています。欧州の資本主義国では、革命の動力が明らかです。プロレタリアたち、すなわち資本主義国家で生産手段を持っていない無産者、無産者である労働階級を革命の動力と見なしています。彼らを決起させて革命を勝利させる以外にありません。ロシアの場合も同じです。労働者や貧農が革命の基本動力になっています。従って、彼らをどう革命で導いていくべきかの問題が特に提起されないわけです。

これに対して、我が国のように、反帝反封建民主主義革命、社会主義革命を継続して行う場合、革命の動力性が非常に複雑です。反帝反封建民主主義革命の場合、労働者、農民だけではなく、さらに良心的な民族資本家、宗教人、知識人など、広範な階級と階層が革命に参加します。特に、社会主義、共産主義建設の場合には、広範な群衆が動員され、それによって行われるべき創造的な事業であるから、革命の動力構成が広範な条件下で、広範な大衆を導き、推進する革命を正しく遂行するには、大衆をどう導くかという大衆領導方法の問題が切迫して要求されることになるわけです。従って、金日成主義では、領導方法問題が重要な構成体系の一つになりました。広範な領導すべき大衆が歴史舞台に出現しすることによって、そのような下で革命と建設を推進している今日の条件に合わせて革命と建設を行うための指導的指針となったのです。このように、主体思想、金日成主義のいずれもがその内容と構成体系において、時代の要求に合わせ、また革命での指導思想としての要求に合わせ、内容と体系を成しているので、これ以上完成され、科学的な革命思想というのはもうないでしょう。

９．主体思想は朝鮮民族及び朝鮮の発展過程の如何なる特性に結びついているかについて

主体思想とわが民族的特性の結びつきについて見ると、この思想をわが人民が簡単に受け入れ、それを自らの思想として成立できた第一の理由は、前述した事大主義によって国が滅び、「日帝」の植民地統治下で全ての民族的「賤待」と蔑視を受けたことが背景にあります。封建士大夫によって我が国が滅び、およそ 40 年もの間、植民地下での生活を強要されました。このような、骨髄に染み入った教訓から、絶対に事大主義を許容してはいけないと。それでわが人民は、事大主義に反対し、主体を立てるべき主体思想に対して絶対的に共感するのです。

第二は、わが国の解放後、わが革命の過程をみると、海外で革命運動をした人々、中国やソ連で革命運動をした人々が多く帰国してきました。首領様は彼らが新しい祖国に力を尽くしたいとしてやって来たし、また過去に「日帝」に反対して闘争を行ったので、皆に重要な地位を与えました。しかし、これらの人々が事大主義をもたらしてしまいました。ソ連から帰国した人々は、ソ連に対する事大主義と教条主義が酷く、中国から帰国した人々は、中国に対する事大主義と教条主義が酷かったのです。それによって、我々は戦争期間中も重大な被害を受け、とりわけ戦後の社会主義革命の渦中で、事大主義、教条主義が蔓

延り、相当にわが革命と建設において痛手を被りました。その人たちは、幹部の地位を占めながらも、首領様の意図とは異なる事大主義、教条主義の過ちに陥り、その過程でわが人民の首領様の思想とは対立しました。結局、事大主義、教条主義に陥るのは、敵側に行くことと同じです。それで、そうした人びとは、宗派分子、反党宗派分子に全部陥り、その過程を目撃した我々は、事大主義、教条主義により解放前も国が滅び、解放後も戦争期間も戦争復旧建設期もこのような事大主義、教条主義のせいでわが革命に大きな痛手を受けるのかという思いで、それを徹底的に排除し、主体を立てるべきだと、主体思想で武装され、主体を立てるべき信念が確固に固まることとなりました。

このように、わが民族の特性を見ると、歴史的には事大主義により国が滅び、また解放後も、事大主義と教条主義によって革命と建設に害毒が及んだということが言えますが、他方でわが人民は、その過程を通じて事大主義と教条主義はわが人民にとって禁物であり、主体を立てるべきだという一つの信念を受け入れ、その要求通りに生き、活動してきたという意識的な努力も見られます。従って、その思想を教養する、つまり主体思想教養体系を受け入れやすく、それが正当で偉大な思想ということを生活の体験を通じて感じたわけです。

宗派主義者たちが戦後の時期において、もちろん主体を打ち立てることに対しては、首領様が主体思想を創始し、主体的な革命路線に基づいて抗日革命闘争を展開し、解放後には反帝反封建民主主義運動もなされ、戦争も経験しましたが、戦後のある一時期、事大主義と教条主義の影響が酷く現れました。その際に、首領様は主体を打ち立てる問題をもちろんそれ以前から強調していましたが、戦後にはもう耐えられない問題として表出し、1955年４月の全員会議で、「教条主義と事大主義を退治し、思想事業で主体を打ち立てる」という路線を提示なされました。戦後とは、わが国での社会主義革命建設時期ですが、この時期にはもう事大主義と教条主義を許容していては、わが革命と建設を前進できなくなっていました。従って、その時から主体を打ち立てる問題を特に強く押し出しました。

先ほど述べた、中国・ソ連から帰国してきた人たちが、中国・ソ連を後ろ盾にして、大国の指示通りに盲目的に我々を従わせようと陰謀を策動しました。これによって、わが革命と建設がまともにできませんでした。一つ例を挙げます。以前に首領様は、我が国の現実的な要求に基づいて経済建設を進める際に、重工業を優先的に発展させ、軽工業と農業を同時に発展させるという路線を提起しました。しかし、大国ではこうした路線を展開したことがなく、マルクス・レーニン主義でもこうした発想はなかったのです。それで、事大主義者、教条主義者らは、中国やソ連、とりわけ革命の元祖であるソ連でもこうした路線を展開したことがないのに、小国でかつ後進的に革命を行っている朝鮮でこの路線を進めるのは通じないと主張しました。重工業を優先的に発展させると言うが、機械から飯が出てくるのかと。また、人民生活が貧しいので、援助をもらい軽工業品、食料品の生産を進めて、人民を生かすべきではないかいと。このように偽善ぶって人民に同情しつつ、わが党の路線に反対したのです。この時期、事大主義者は皆、大国を後ろ盾に、大国の操縦

と助けを受けました。

首領様がこうした状況下で打開を図っていく過程は、本当に抗日戦争に匹敵するほど辛かった時期でした。この時期、首領様は、宗派主義者がそのように挑戦してきた状況で、信じられるのはただ人民大衆しかないと仰いました。56 年 12 月の全員会議が開催されたあとに「降仙製鋼所」を訪ねられ、労働階級にわが党がこのような経済建設路線を出したが、大国と宗派分子らはけちを付ける、ほかのところで支援してくれるところもない、信じられるのは労働階級のあなたたちしかない、だから、あなたたちが党の経済建設路線を実践し、それを通じて証明することではないかと仰いました。

首領様が 57 年からの第一次五か年間計画を遂行するのに、鋼鉄が 1 万トンあれば国が一息つくところ、1 万トンを生産する方途がありません。ソ連が資材をくれると約束したのに、わが国が重工業を優先的に発展させ、軽工業と農業を同時に発展させるという路線を出すと、色々と口実を設け、それを断ったと首領様が仰った。これに対して労働階級は、「宗派分子者らをここに送れば、電気炉に投げ入れてやる。首領様が要求するのならば、1 万トンどころか、10 万トン生産しよう」と応じ、元々6 万トンの生産能力を有する機械から、12 万トンの鋼鉄を作り出すのに成功しました。そのようにして、党の政策と路線を擁護しました。これこそ、主体思想で武装された労働階級の闘争の結果だと言えます。

このように、わが人民は「日帝」の統治に反対するだけではなく、戦争期間と戦後の社会主義建設の全過程で、事大主義者らとの闘争の中で、革命を前進させていきながら、主体を徹底して打ち立て、ただ自らの力のみを信じ、自らの力で革命をするという真理を生活の中から体得しました。主体思想はわが人民が生活を送るなかで信念に転化させたと見ることができます。わが人民・革命の事大主義と教条主義との戦いの中で前進してきたこの過程が、特にわが国で主体思想を信奉し、主体思想の要求通りに考え、行動することを切迫して要求したのです。

１０．主体思想の普遍性と特殊性はどのように言うことができるか（主体思想が朝鮮で創始されたので、朝鮮革命の指導思想としての意味を有することとなったわけではなく、世界の人民が共感する普遍的な思想であるとなぜ言うことができるのか）について

主体思想が朝鮮革命の実践に基づき創始されたのは事実ですが、そうだからと言って、主体思想が朝鮮の特殊な環境に見合った思想と考えるのは正しくなく、世界全ての国の革命発展の共通した要求を反映している思想であると考えなければなりません。そうした共通の要求が朝鮮の革命においてもっとも明らかに提起されたに過ぎません。つまり、主体思想は、世界的な運動の普遍的な要求も反映しながら、朝鮮の特殊な現実と連関しています。ここで、主体思想が全ての国の革命運動の共通する要求を反映している普遍的な真理性を持った思想だと言うのは、主体思想が主体時代の要求を反映しているということです。主体思想とは、ただ我が国の革命発展の特性を特徴とするものではなくて、今日の時代の一般的な特徴を表して、主体時代と表現しています。あるいは、自主性の時代とも表現で

きます。

主体時代の要求を反映する普遍的な思想という場合、主体時代とは、自主性の時代とも言えますが、その特徴は人民大衆が世界の主人、自己運命の主人として登場した新しい時代のことです。これは、わが国のみならず、全般的な世界がそうなっています。植民地・半植民地人民だけではなく、資本主義条件にいる人民だけでもなく、世界の広範な人民大衆が自らの運命の主人として登場し、運命の主人としての自らの地位を守るための闘争を開いていく時代なのです。これは過去と比べるなら、主体時代の以前は、人民大衆が支配階級の搾取と圧迫の対象として、彼らが未だ自らの運命の主人だとの自覚はなかったので、運命の主人に登場して運命を開拓する闘争を展開せきなかった時期であり、ただ歴史の対象として、搾取と圧迫の対象として、無言の中で生きた時期でした。しかし、今日の世界は、それとは異なる広範な人民大衆が主人として登場し、自らの運命は自らが握っていく新しい時代を特徴としています。さらに言えば、人民大衆が自らの運命の主人として登場しただけでなく、自らの運命を自主的に、創造的に開拓して行く時代です。運命を開拓する時期においては、広範な人民が資本に反対するとか、帝国植民地の支配と隷属に反対して闘争するとか、自らの運命を開拓するための人民大衆の闘争が様々な様相を見せています。すなわち、世界の広範な人民は、如何なる国の人民たちも、自主性の蹂躙を許さず、自らの運命は自らが開拓して行く多様な闘争を広範に展開している今日の時代、自主性時代が特徴であると言えます。このような、運命の主人として登場し、自らの運命を自主的に創造、開拓する時代の要求を反映したのが主体思想です。

従って、このような時代の要求を反映した主体思想は、普遍的な真理性を有する偉大な思想であると言えます。普遍的な真理性を持っているということは、現在世界の主人として登場した世界の広範な人民たちが主体思想を信奉し、従っていることで証明されます。大陸ごとに主体思想を研究する組織があり、多くの国にもそれがあり、地域にもそれがあります。これは、主体思想を見習い、運命の開拓を指針とする世界人民の志向と要求が非常に高くなったことを意味します。その意味で言うと、主体思想は我が国で創始された思想ではありますが、世界人民の要求と志向に見合う普遍的な真理性を有する思想であることが分かります。繰り返しますが、世界の広範な大陸、地域、国で主体思想の研究組織が存在し、主体思想を信奉する人々が沢山いて、主体思想を習い、それを直接的に自らの生活において指針としながら闘争する国が、急速に増えている現実を見れば明らかです。

マルクス主義は一般的に国際労働階級の思想だと言われていますが、マルクス・レーニン主義が世界各国に伝播したのは、主体思想が世界各国に伝播したのに比べると、国の数も地域も半分に及びません。このように、主体思想は世界人民の間で共感を呼び起こし、それに倣うのが世界的な趨勢であると言えます。運命の主人として登場し、自らの運命は自らで開拓していくという現実の特徴を反映した思想であるから、人民たちは時代の特徴を反映している主体思想に倣い、自らの運命開拓の指針とする志向を持つ、これが世界的な趨勢です。

以上のように、主体思想は時代の要求を反映し、世界的な真理性と普遍性を有する思想であり、実際に各国が現在革命を遂行進めている状況を見ると、主体思想に基づかなくては革命と建設を成功裏に遂行できません。例えば、まず主体思想は革命と建設を遂行する際に、自国の実情に合わせて自らの力で行おうとすることを要求します。それを前提に世界各国の革命闘争を見ると、世界の数多くの国々の革命と建設においては、具体的な条件が同じというところは一つもありません。民族解放闘争をする国、民族の独立を達成した後に新たな社会建設をする国、社会主義を建設する国など様々です。また、社会主義を建設する国や新たな社会を建設する国であっても、社会地理的な条件などの具体的な条件が全て異なります。このような異なる条件下において唯一な処方はありません。ただ自国の実情に合わせて自らの力で遂行すべきだという理念しか通じません。全ての国の革命と建設の環境と条件が異なるという事情は、革命と建設が自国の具体的な実情に合わせて、自らの力ですべきだという主体思想の要求が貫徹される重要な要因になります。さらに言えば、革命と建設を遂行するに際して、国と民族を単位にそれが遂行されています。また、その国の革命と建設の遂行状況を見ると、その国の人民、その民族、彼らが主人になって革命と建設を遂行しています。これは世界全ての国で革命が遂行される様子です。このことは、それ以前の時期、欧州の資本主義国で同時に革命が行われた時とは異なり、また同じ課業に対して、上から一つの指令により、同時に同じ革命課業を遂行した時とは異なります。従って、現在においては、各国の主人はその国の人民であるという理知しか通じません。また、各国の人民が主人となり、自国の革命は責任を持って遂行すべきだという理知しか適合しません。このような思想こそ、全ての国の革命を成功裏に遂行させる指針となり得ます。主体思想はまさにこのような理知を明らかにしているから、国と民族を単位に展開されている現時代の革命発展の要求に合わないはずがないのです。主体思想こそ、今日のわが時代の革命運動で、普遍的な指導思想としての特徴を持っていると、正確に捉えることができます。

主体思想を研究する際に留意すべきことは、主体思想が朝鮮で創始されたから、朝鮮の指導思想として朝鮮革命にだけ妥当性を持ち、朝鮮革命の指導思想としてだけの意義があるように理解すべきではないということです。そうではなく、現在の世界が置かれている環境と条件に鑑み、世界の全ての国でこのような思想を指針にしてこそ、様々な環境と条件下で、国と民族を単位に革命をする世界各国が自国の革命をうまく展開することができるということです。我が国朝鮮で創始された思想でありますが、しかし主体思想は普遍的な真理性を持った世界運命の唯一の指導思想である。その証明が世界のほとんどすべての国に主体思想研究所があり、主体思想研究組織が存在し、主体思想を普及、研究するのが世界的な趨勢であるという現実です。普遍的な真理性を持った思想ではないと、世界の広範な地域と国でそれを研究、普及する活動をしないでしょうし、できません。これは我々が強要してすることではなく、それをしようとする人びとが自らの体験に基づいて、主体思想だけが我々が将来的に生きていく道を明らかにしてくれていると実感したから、研究

組織が出てきたのです。

このように見ると、主体思想は、現実の様々な条件下で革命と建設を行う国々において、唯一守っていくべき指導的な指針であります。社会主義を建設するために闘争する国だけでなく、社会主義革命を遂行する国でも、新たな社会を建設する国でも、あらゆる国で指針とすべき指導的指針なのです。過去、ソ連が存在し、東欧がソ連の下に置かれていたときには、主体思想を研究する組織がありませんでした。しかし、現在では、ロシア、東欧各国、西欧の資本主義国にも主体思想の研究組織があります。これは、それらの国でも主体思想が共感を受け、主体思想こそが人民大衆の運命を開拓して行くもっとも正しい道を照らしている指針であることが認められているからです。

１１．経済強国として発展する上での主体思想の役割とは。経済分野において主体思想は如何に具現されているのかについて

経済強国建設は、結局のところ、主体思想を具現した経済建設ということです。経済建設と主体思想との関係を考える際に、一般的に言うと、経済分野で主体思想を具現するための原則は、経済的自立を実現するということです。これが、経済分野において主体思想を具現するための原則です。経済的自立を実現するとは、言い換えれば、経済建設で自立的な民族的経済を建設すべきだということです。自立的な民族的経済を建設するとは具体的にどういうことかと言うと、一言でいえば、「自分の足で歩いていく経済」のことです。まず誰のために服務するのかと言えば、自国の人民のために服務する経済であります。そして、自国の資源と自国の人民によって発展する経済であります。一般的に、自国の経済を建設することは、自国の人民のために建設することではないかと言われますが、存外そうでもありません。資本主義国では、ブルジョアたちが経済発展をするのは、人民のためではなく、利潤追求を目的にしているからです。これに対して、自立的民族経済は、徹底して人民の利益のために、自国の人民が自主的で幸福な物質的生活を享受するために経済を発展させます。従って、自立的民族経済建設では、自国人民の利益に抵触し、人民の利益に助けを与えない経済は発展させません。

また、経済建設において原料、資材をどうするか。外部の支援に頼って経済を運営するか、あるいは自力で経済を運営するのかが非常に重要ですが、自立的民族経済建設では、徹底して自国の資源と人民の力によって、経済を建設していきます。このように言うと誤解されるのが、そうだとすれば、国際的な経済交流あるいは経済建設支援や協力は排除するのかということです。排除するのではなく、軸をどこに置くかということが問題なのです。自国の資源に依拠するが、しかし他国の助けをもらわないということではありません。他国の助けをもらうこともあるが、主なことは自らの力で行う。つまり、他の国と経済交流を行う場合、自国に必要なものだけを受け入れ、自らの経済を強化するものだけを受け入れ、「有無相通ず原則により、ないものは受け、あるものはあげる」ということです。この方向で経済を運営するのが自立的な民族的経済だと言えます。

経済分野において主体思想を具現すると言う際、自立的民族経済を建設すること、すなわち自国の人民のために服務し、自国の資源と人民の力によって発展する経済を建設する原則を堅持するのが、経済を建設する際に主体思想を具現し、主体思想の要求通りに経済を発展させていく方向であり、原則です。実際に、私たちの経済強国建設においてこのような原則をどう具現しているのでしょうか。経済強国建設で自立的民族経済を建設する路線、この路線を徹底して堅持する方向で、経済強国建設を行う闘争を展開しています。敬愛なる元帥様は、第七次労働党大会の報告で、我々が建設する経済は如何なる経済であるかについて、明白にして下さいましたが、それは「我々が建設する経済強国は、自立性と主体性が強く、科学技術を基本生産力にして発展する国である」というものです。これは、我々が建設する経済強国とは、自立的民族経済を発展させ、強い自立的民族経済を持った国を作るのが、我々が言う経済強国であるという意味です。

このような意味ですから、我々が言う経済強国は、いわゆる資本を投入して経済大国だとする国とは根本的に異なります。経済強国建設おいて経済問題を確固たる主体的な立場から、我が人民の自主精神とわが人民の創造的精神、我々の科学技術の威力によって成し遂げていく原則が経済強国建設において一貫的して堅持されています。

我が国は、人民経済の自立性と主体性が強く、先端科学技術に基づいて発展する経済へ進み出る問題、特に自立的な民族経済建設では原料、資源は自国のそれによって、自らの力ですると言いました。敬愛なる元帥様が経済建設を行うにあたって、中核的な問題は何かを明らかにしましたが、それは原料、燃料、設備を国産化することであると仰いました。他国の原料、燃料、資材をもって経済発展するのは、経済強国建設ではありません。徹底的に原料、燃料、資材を国産化すべきです。従って、敬愛なる元帥様は、現在工場や企業所を現地指導しながら、新たに現代化することについて基礎的な演説を行いつつ、原料、燃料、資材の国産化をもっとも強調し、それが現代化の証であると述べています。これは、経済強国建設において主体思想の要求に従っているということを意味します。経済強国の本質は、自立性と主体性が強く、科学技術を基本生産力として発展するということであり、それが我々の建設する経済強国であります。従って、徹底的に主体思想の要求を具現した経済強国、これが一般的な経済強国とは区別されうる、わが国での経済強国の姿です。

１２．経済建設において原料、燃料、資材の国産化を実現するとしているが、国内資源は限られており、これをどう解決するのかについて

前述の自立的経済建設で、他国との経済交流のことを述べました。この経済交流を通じて、解決すべきことは解決する。しかし、すべてを依存する方向ではなくて、なるべく我が国自身で解決する方法があるならば、解決していくという原則です。本当に解決できない問題は、他国との経済交流でも通じて解決するが、なるべく我が国自身で解決する。

例えば、現在の鉄生産でコークスを使うのは、どの国でも一般的な趨勢です。しかし、首領様がいらっしゃる時から、コークスの問題で我々の鉄生産が多く支障を受けていまし

た。それで、首領様が「主体思想を信奉する人々は、主体鉄を生産すべきだ」という遺訓を残されました。それで、わが国の金属工業部門では、その問題を解決するためにずっと努力をして、「黄海製鉄所」において主体鉄生産の溶鉱炉を作り出すことに成功しました。もうコークスを使わず、わが国が保有する有煙炭で銑鉄を生産する道が開かれたのです。

このように、他国に全て依存していた問題をわが国の原材料で解決する方向を研究し、最大限我が国で解決することを志向しています。中核的な問題は、資材、設備を国産化するということです。こうして研究事業を行い、我が国の原料、資材で生産できるものは、全て我が国で生産するよう転換させるほうが安全ですから。コークスは我が国にありません。これまでは中国から輸入してきました。しかし、主体鉄溶鉱炉が成功し、この問題が解決されました。

これ以外にも、設備などを国産化する事業がずっと行われていて、例えば「平壌国産工場」は、全て我が国の設備、科学者、技術者、大学生たちを動員して、我々が研究して作った施設です。科学者、技術者、大学生たちが動員されれば、設備は十分に我が国で国産化する可能性があります。すでに、偉大な将軍様がいらっしゃる時に、CNC 化の火焔を燃やして下さいました。少なくない設備を国産化する問題は、代々我々の力で進んでいます。今後も、経済強国建設で直面する問題に対して、設備を国産化することについては、確固として進めていくことができます。これこそ、主体思想を具現していることと言えるでしょう。

設備や科学技術において先端を突破するための闘争を開きながら、新たな成果が数多く出てきています。去る 70 日戦闘期間にも数多く出てきましたし、現在 200 日戦闘を遂行していますが、200 日戦闘期間にも数多くの新たな成果が出ています。国防科学分野では、とくに確固たる先端技術が出てきています。

200 日闘争期間において、工場での任務は数値で表すから分かりやすいですが、先生のように研究をなさっている場合にはどうなりますか。我々には具体的な執筆課題があります。課題としてどのようなテーマで、どれぐらい執筆することにしたか、これを 200 日戦闘期間に前もっていつまで執筆するという目標を立てます。研究者たちは研究者としてどのような研究課題をこの期間に行うかという目標があります。

- **社会科学院主体思想研究所講義Ⅲ**
- 日時：2016 年 8 月 23 日（火）16:00～17:30
  場所：高麗ホテル 2 階接見室
  講義者：朝鮮社会科学院 金日成・金正日主義研究所 教授・博士 キム・ヒョンウ
  （同席者：朝鮮社会科学院対外事業処 部員 金正国、朝鮮国際旅行社 案内員 朴成日、朝鮮国際旅行社 案内員 金正姫）

１．主体思想の具体的な役割について

この問題を理解するためには、まず一般的に思想が人間の活動と如何なる関係にあるかを理解した上で、主体思想がわが人民の生活で如何なる役割を果たしているのかについて答える必要があると思います。

一般的に、思想意識の役割を論じる際、人間の活動において思想意識は決定的な役割をすると言われます。思想意識が決定的な役割をするという理論は、主体思想によって初めて明らかにされた独創的な考えです。なぜなら、過去において人間の活動で主要な役割をする要因が何かを論じた見解をみてみると、観念論の場合は別として、唯物論的な見解から見ても、人間の活動に影響する決定的な要因は、客観的な物質的条件から見出しました。客観的な物質的条件とは、経済制度、社会の物質生活など、人間の意識以外の客観的物質諸要因を合わせて客観的物質条件と言います。客観的な物質的条件が人間の活動で決定的な役割をするという立場から、唯物論の見解では人間活動の決定的な要因を把握しました。

これは正確な言い方ではありませんが、もちろん人間が物資的な世界で生き、物質的環境で自らの運命を開拓するので、物資的世界の影響を受けるのは事実です。人間は自然環境で生きていますから、自然地理的な条件によって、人間活動に有利な条件も、不利な条件も、備えることができます。また、社会制度、経済制度のような社会的な制度も、人間が一定の経済制度で生きているために、経済制度が人間の活動に様々な影響を与えることも事実です。つまり、人間が一定の物質的条件で生きながら、客観的な物質的条件の影響を受けるのは事実であるものの、客観的な物質的条件が実際に人間の活動に及ぶ影響を見ると、直接的にそれが左右するのではなく、人間の意識を通じて、客観的な物質的条件が人間の活動に一定の影響を及ぼすのです。従って、同じ物質的条件で生きる人間だとしても、意識的なレベルによって、客観的物質的条件の影響を受ける程度が異なります。このため、客観的物質的条件が人間の活動に決定的な影響を及ぼすのか、客観的な物質的条件が有利か不利かによって人間の全ての活動が左右されると見なすと、断片的な見解だと言わざるを得ません。物質的な条件は、結局人間の意識を通じて、人間の活動に影響を与えるということであり、意識を通じて影響を与える時の意識とは、結局思想意識だからです。

思想意識は、人間の要求と利害関係を反映したものですが、この要求と利害関係を反映した意識は、客観的な実態をそのまま反映した知識とは区別されます。一般的に、知識は客観的な諸条件をそのまま、つまりその本質を反映したのが知識であり、客観的環境に対する利害関係を反映するのが思想意識です。要するに、要求と利害関係を反映する際に、一定の物質的条件がある時、これが自分自身に有利か不利か、有利であるとすれば、この有利な条件をどう自分自身にもっと有利に利用するか、不利であるとすれば、この不利な条件をどう有利な条件に変えるか。このような客観的条件に対する人間の利害関係を人間の意識が反映した時、それを思想意識だと言うことができます。従って、主体思想もまた思想であるから、要求と利害関係を反映した意識だと見るべきです。その際、要求と利害関係は何かと言えば、人民大衆の要求と利害関係を反映した思想が主体思想だと言えます。

人間の要求と利害関係を反映している、このような思想意識が人間の活動で決定的な要

因になっていると言えるのです。人間の要求と利害関係を反映する思想意識が、なぜ人間の活動で決定的な役割をするのでしょうか。この要求と利害関係によって、人間の活動の目的と方向が決まるからです。自分自身がどのような思想を持つかによって、その思想の内容とレベルによって、自然を改造する運動をするとか、社会を改造する革命闘争に参加するとか、具体的に自然を改造する事業をどの程度、どのレベルでするか、あるいは革命に参加すれば、革命闘争にどのような目的を立て、それを達成するか、民族解放の目的か、あるいは階級解放の目的のために革命に参加するかなど、人間が行う全ての過程が人間の思想意識によって、その活動でどのような目的を立てるかという問題によって決まるのです。要するに、人間の活動が動物の活動と区別されるのは、目的を立て、その目的によって活動するからで、これが人間活動の重要な特性ですが、人間活動の目的をどう立てるのかは思想意識によって決まります。従って、人間活動において思想意識が決定的な役割をすると言えるのです。

別の側面からも、人間活動で思想意識がなぜ決定的な役割をすると言えるのかを述べることができます。知識は客観的な世界を反映した知識だと言いましたが、知識は人間活動で一定の目的達成のための手段となりますが、知識をどこにどれくらい使うか、人間の知識をどのくらい体得できるか、体得した知識をどこにどう使うかは思想意識が決定します。従って、如何に知識があっても、思想意識レベルが低いと、高い知識を崇高な目的には使えません。人間の活動において目的を立て、その目的を達成するために自らの知識を使っていく全過程を思想意識が規定するので、思想意識が人間活動で決定的な役割をすると言えます。一般的に、人間の活動で決定的な役割をするのが思想活動なのです。

こうした原理に基づくなら、主体思想は今日わが人民の活動でどのような役割をしているのでしょうか。一言でいうと、わが人民は今日主体思想で武装し、全ての思考と活動を主体思想の通りに行っています。主体思想は主体時代の要求を反映した、我が革命の指導思想であると同時に、世界の進歩的な人民たちが共感し、倣う世界的な指導思想だと言いましたが、党と国家、革命の指導思想という側面のみならず、人民大衆の世界観にもなっています。従って、指導思想のみならず人民大衆の世界観にもなったことは、主体思想がマルクス主義と区別されるもう一つの特徴だと言えます。人民大衆が持つべき思想の一つが主体思想であります。

それではなぜ、人民大衆の世界観になっているのか。それは人民大衆の要求と利益を反映し、それを徹底的に擁護する思想だから、人民大衆の世界観になっています。主体思想が人民大衆の世界観になっているから、人民大衆が自らそれで武装し、それを自らの思想にしようと意識的に努力しています。マルクス主義は主に学説的な体系で、哲学でも、政治経済学でも、科学的社会主義でも、科学理論を探求する人々にとっては関心が大きく、その面でマルクス主義という先行思想は多くの場合、平凡な人民大衆の中にあって広範に普及されませんでした。知識層や革命の指導的人物たち、一定の学識がある人々の中では研究され、普及されました。しかし、広範な人民大衆に普及し、人民大衆の中に浸透され

ることはなかったのです。なぜなら、マルクス・レーニン主義は科学的な学説であり、人民大衆の世界観になっていないという限界があります。それとは異なり主体思想は、人民大衆の志向と要求を直接に反映している世界観であるから、広範な人民大衆の中に広く浸透し、人民大衆がそれを自らの世界観、自らの思想として感じる、新しくて独創的な思想になりました。このように、主体思想は、革命の指導思想というだけでなく、人民大衆の要求と利益を反映した人民大衆の世界観であり、さらにわが人民たちが主体思想で武装し、主体思想に基づいて行動するという思想になりました。

実際、わが人民が主体思想で武装し、全ての思考と活動を主体思想の要求通りに行うというのは、具体的にどのような内容になるでしょうか。人民大衆が行う活動は、大きくみると、自然と社会と人間を改造する活動、古い制度を新しい制度に変える革命活動、自然を改造して生産力を発展させ、物質的な富を増大する活動、人間自体をより信念の強い存在として育てる活動、これら３つが人民大衆の行う主な社会的活動の分野だと言えますが、このような自然改造、社会改造、人間改造のような人民大衆が行う社会的活動の全ての工程が、全て主体思想の要求に従い、主体思想で武装された人民大衆が、主体思想の要求通りに展開されています。

例えば、「黄海製鉄連合企業所」の労働階級が主体鉄を生産し、主体鉄溶鉱炉をはじめとして主体鉄生産体系を鉄生産体系として確立したことは、首領様が「主体思想で武装された人は主体鉄を生産すべきだ」という教示の通り、主体思想を具現したものと言えます。この教示を受けた人々は、主体思想で武装したので、主体鉄を生産すべきだという確固たる観点に立って長い間闘争し、結局主体鉄生産工程を完全に研究することができました。これは工場での労働階級の例です。

農業では、「主体的農法」を徹底的に貫徹させ、わが国の実情、自然、地理的な条件、各地域の土壌条件に合わせ、農事をすることについてが主体思想の重要な要求です。これをを貫徹し、農事も一律的ではなく、自らの地方、地方でも地帯によって違う地帯性、地域的特性に見合う種子を選び、そこに見合う農事法により、農事を主体農法の要求通りに行います。もちろん、一定の自然、地理的な条件の中で自然災害が起こり、農業生産が増大できなかったこともありましたが、とにかく主体農法があったから、不利な自然、地理的な条件でも、収穫を高める道を探し出すことができました。

単純に言って、自然を改造する活動、すなわち農場でも、鉄を生産する現場でも、その方法や活動において、徹底的にわが人民は主体思想で武装され、主体思想の要求通りに活動が行われるこというこを明らかにしています。もちろん、他の芸術活動や教育事業も、徹底して主体の理論に基づき、主体思想の要求通りに行います。こうしたことを総体的に言えば、人間改造事業なのですが、それは主体思想の要求に従い、主体の方法論で行います。過去には主体芸術を発展させ、主体芸術で文化芸術革命を起こし、今日では教育で主体教育事業を行い、主体教育が全面的に発展することにより、教育事業で大きな転換を起こしたということがあります。このように、わが人民が行う政治、経済、文化、全ての社

会生活分野で成し遂げられた成果は、全て主体思想で武装し、主体思想の要求通りに我が人民が活動し、闘争した結果です。従って、主体思想は今日わが人民の生命でありかつ生活となっています。生命という場合、主体思想で武装され、それで生き活動するので、真の主体的人間として生きていることを指します。生活とは、生活実践が具現され、輝かしい生活力を発揮していることを意味します。結局、主体思想はわが人民の生命で生活なのです。

現在、我々は社会主義強盛国家闘争を行っていますが、強国建設もやはり敬愛なる元帥様が人民大衆の無限の精神力を推進力として展開を図っています。これはわが人民の持っている主体思想を推進力として建設するのが社会主義強国だという意味です。主体思想はこのようにわが人民の確固たる世界観となり、生活と生命となって、それで武装された人民の精神力により社会主義強国が進み、わが人民の全ての社会生活がここに集約されて先進、発展しています。その根元に、偉大な将軍様の、また今日では敬愛なる元帥様の主体の思想論があります。それは、思想が基本であり、思想がすべてを決定するという考えです。「思想が基本で、思想が全てを決定する」ときの思想とは、わが人民の主体思想を念頭に置いています。

最近、敬愛なる元帥様は、一般の生活の中でまったく不可能なことを「卵で岩を砕く」と言いますが、元帥様は「卵を思想に漬けると、岩をも砕くことができる」との独創的な主体の思想論を展開されています。人民大衆が高い精神力で武装すれば、どのような不可能もあり得ないということです。敬愛なる元帥様は、普通では「卵で岩を砕けない」という常識も、思想を介せば不可能なことも可能になるという、思想意識の重要性を述べられたのです。「卵を思想に漬けると、岩をも砕くことができる」、「自動拳銃を思想に漬けると、如何なる現代的な武装装備より威力がある」と仰いました。我々は徹底的に革命と建設で思想論を重視し、思想論を握り今日の社会主義強国を建設します。思想を基本にするのは、主体思想を確固たる指針とし、主体思想で武装された人民大衆の力が強国建設の決定的な力であり、この力を発動すると社会主義強国建設で如何に複雑で難しい問題をも乗り越えられるからです。わが人民の生活の中で、主体思想は主体の思想論が重要な基礎になるという思想です。

このように、思想意識が決定的な役割をするという問題をよく理解しなければなりません。観念論では思想自体がある種の創造をしたように言われ、また宗教では神様や超人間的な存在が世界を創造したとか、人間の全ての活動を左右したとか説明される場合もあります。思想理念の一次性によって、全てが左右されるという観念論と区別されるのは、観念論では精神、理念自体が人間と分離し、分離された理念、精神自体がある種の創造活動をするように説明します。しかし、主体思想論での思想の決定的な役割は、思想意識という人間の意識の中の一つの内容が人間の活動を組織、統制するという、思想意識それ自体がある創造的な行為をするのではなく、思想意識が人間の活動を調節、統制する作用を通じて、思想意識が決定的な役割をすると考えます。その意味で、意識、理念それ自体があ

る創造的な活動をするという観念論と主体の思想は明確に区別されます。

思想意識が人間の活動で目的をどのように立て、その目的を実現する方向で自らの能力を如何に発揮するか、思想意識が調節、統制するので、人間の活動の全般が思想意識によって調節、統制されることになります。従って、思想意識が決定的な役割をすると考えるのです。人間と分離したある意識自体の活動ではなく、人間の活動に作用して、人間の活動を調節する要因として作用することによって、思想意識が決定的な役割を果たします。このように、主体の思想論と観念論、宗教とは完全に区別されます。思想意識が決定的な役割する際、思想が基本であり、思想が全てを決定する際、それを絶対に人間の活動と分離されたある思想・精神が、ある創造的な役割すると説明するのは、主体思想の本質を正確に理解したとは言えません。また、主体思想を誹謗する反動的な思想理論家たちは、思想意識が決定的な役割するのは観念論ではないかと難癖をつけてきますが、主体思想を扱き下ろす反動的者たちを倒すためにも、主体思想の本質を徹底的に理解し把握することが重要です。

２．主体思想はマルクス・レーニン主義を継承・発展させた思想であると言われている。マルクス・レーニン主義からすると、経済的構造が上部構造の土台になっている。しかし、朝鮮では経済強国が実現するのに先立って、思想・政治・軍事強国が達成されている。これを思想的にはどのように解釈すればよいかについて

主体思想は、マルクス・レーニン主義を継承・発展させた思想であると仰いましたが、それは正しい表現ではありません。そのように言うと、主体思想の独創性を正しく説明することができなくなります。それでは、どのように表現すべきでなのか。継承・発展ということで表現できるのは、こういうことです。つまり、レーニン主義はマルクス主義を継承・発展させたと言えます。レーニン主義とマルクス主義は、もちろんレーニン主義は帝国主義時代のマルクス主義として、帝国主義の時代に合わせてマルクス主義を継承・発展させたと言えます。その理由は、根本原理や体系、根本的な問題、それはマルクス主義とレーニン主義は同じだったからです。思想の哲学原理とその哲学原理が出てきた哲学的な根本問題、つまり根本問題と哲学原理から見ると、マルクス主義とレーニン主義は同根です。マルクス主義も哲学の根本問題は、物質と意識との問題であり、レーニン主義と同じです。また、マルクス主義も哲学の根本原理は、物質の一次性と意識の二次性の原理であり、レーニン主義と同じです。従って、哲学の根本問題と哲学原理、哲学体系と内容は、マルクス主義とレーニン主義は同じなのです。そういうことで、レーニン主義はマルクス主義を継承・発展させたと言えます。

それでは、マルクス・レーニン主義と主体思想を比べてみましょう。マルクス・レーニン主義と主体思想は、まず哲学的な基礎となる哲学原理を見ると、哲学の根本問題が異なっています。マルクス主義の哲学における根本問題は、物質と意識の問題であり、主体思想では、世界において人間が占める地位と役割の問題が根本問題です。また、マルクス主

義では、「物質の一次性と意識の二次性の原理」として哲学の根本問題を明らかにしましたが、主体思想では、「人間が全ての主人であり、全てを決定」するとして哲学の根本問題を明らかにしました。要するに、この二つの思想における根本問題と根本原理を比べてみると、一方は物質と意識の関係を明らかにし、他方は世界で人間が占める地位と役割を明らかにしたということです。言い換えれば、世界で人間が占める地位と役割を明らかにしたというのは、物質と意識の関係を明らかにしたことを発展させたものではなく、それが明らかにされた条件下で、新たに明らかにされたということなのです。

「物質の一次性と意識の二次性」というマルクス主義の根本原理も、主体哲学の根本原理と比べてみると、「物質の一次的な原理」が発展して、「人間が全ての主人であり、全てを決定する」との原理が出てきたのではありません。この「人間が全ての主人であり、全てを決定する」という原理は、「世界は物質から成り立っており、物質が一次的」だという唯物論原理が明らかにされたという基礎から、新たに明らかにされた原理です。先にも哲学の根本問題が新しいと述べましたが、「世界において占める人間の地位と役割」問題そのものが新しい根本問題であり、根本原理とはその根本問題を解き明かした原理です。従って、根本問題自体がマルクス主義哲学で明らかにした根本問題とは異なり新たなものですから、主体思想の根本原理も、マルクス哲学の根本原理とは異なる新たな根本原理ということになります。このように、根本問題と根本原理自体がマルクス主義とは違います。

主体思想もマルクス主義も、全般的な体系と内容は、哲学原理から展開されていきます。哲学原理は、哲学の根本問題を明らかにしたものであり、それが根本原理となります。根本問題、根本原理が主体思想とマルクス主義では根本的に異なるので、それに基づいて展開される構成体系と内容も、マルクス・レーニン主義は根本的に異なるということになります。

マルクス・レーニン主義は、哲学、政治経済学、科学的社会主義学説という主に学説として、科学的理論体系を持っているのが特徴です。これに対して主体思想は、思想、理論、方法という革命の指導思想としての構成体系を持っています。このように、主体思想とマルクス・レーニン主義を比べてみると、根本問題、根本原理が異なり、それに基づいて展開される構成体系と内容も異なります。このような相違が存在するのに、主体思想がどうしてマルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想だと言えるのでしょうか。主体思想は、マルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想ではなく、独創的で新たな思想なのです。こうした理由から、偉大な将軍様は、主体哲学は独創的で新しい革命哲学であると規定して下さいました。主体思想がマルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想ではなく、独創的で新たな革命哲学であるということは、偉大な将軍様が思想理論活動を展開する過程で、主体思想について正しい理解がなされてこなかったことに鑑み、改めて規定して下さったのです。

偉大な将軍様が主体哲学はマルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想ではなく、独創的な思想であることを明らかにしてくれる以前までは、わが学者たちも主体思想はマ

ルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想だと考え、わが時代のマルクス主義あるいは朝鮮に創造的に適用されたマルクス主義だとの表現を数多く用いました。それを偉大な将軍様は、これは主体思想を独創的な思想として考える表現ではなく、マルクス・レーニン主義を継承、発展した思想と捉える表現であって、そのような表現を使ってはいけない。主体思想がマルクス・レーニン主義を継承・発展させた思想であるとするのは、主体思想とマルクス主義を、マルクス主義とレーニン主義のように、根本原理と根本問題が深化、発展されたように見る表現である。従って、そのように考え、そのように表現するのは正しい表現ではないので、規定し直して下さったのです。あなたが論文を書く際も、このような表現を使わないでください。「主体思想は、マルクス・レーニン主義を継承・発展させた思想」という表現ではなく、「主体思想は独創的で新たな思想」であるという表現をするすべきです。それは何度も言ったように、根本問題と根本原理が異なるからです。そのように、主体思想の全般的な体系と内容は新たに展開されました。以上のような意味で、主体思想は独創的な思想です。

それでは、主体思想が独創的な思想だからと言って、マルクス・レーニン主義と何ら連関性もないかと言えば、そうではありません。主体思想は、マルクス・レーニン主義を継承、発展させた思想ではありませんが、マルクス・レーニン主義と一定の継承関係はあります。従って、マルクス・レーニン主義と主体思想との関係を理解する際には、継承の側面と革新の側面の両面をともに見るべきです。

継承という場合に、マルクス・レーニン主義において哲学の根本問題を提起する際には、物質と意識の関係だと言い、それが明らかにされた条件下で、主体哲学は地位と役割の問題を明らかにしました。物質は一次的なもの、世界は物質からなり、物質一次的な原理が明らかにされた条件下で、「人間が全ての主人であり、全てを決定する」ことを導きました。結局は、主体思想はマルクス・レーニン主義で明らかにされたこのような理論を前提に、それを新しい問題として展開し、発展させました。この意味で、マルクス・レーニン主義と主体思想には一定の連関がある。また、主にマルクス・レーニン主義も主体思想も、労働階級の歴史的使命と労働階級、解放階級に服務する使命、労働階級の革命思想であるという思想的な特性では共通性があります。マルクス・レーニン主義と主体思想は、労働階級が革命運動に服務する階級的理念と使命を共有しており、一定の深い連関を持っていて、主体思想がマルクス・レーニン主義をある程度発展させた内容が少なくありません。このように、マルクス・レーニン主義で提起された内容を新たに解釈、展開した部分もありますが、主体思想の基本内容になるわけではありません。従って、総体的に言うと、一定の連関があり、その意味で主体思想とマルクス・レーニン主義の継承関係問題を設定し、論じることはできます。しかし、やはり革新の側面、独創的な側面が基本であり、柱となります。

そういうわけで、主体思想は自らの固有の原理により展開され、体系化された独創的な思想であると見なければなりません。「固有の原理により展開され、体系化された独創的な

思想」とは、内容は数多いのですが、根本問題も、根本原理も新しく革新的で展開されたということ、また社会歴史的な歴史観での社会運動の合法則性もやはり主体思想が新たに明らかにした固有の原理です。「社会運動は人民大衆の自主的で創造的な運動である」。これは全て主体哲学に固有の原理です。その他、革命理論、領導方法もマルクス・レーニン主義では論じられなかった新しい内容が展開されています。これが基本です。

今後も、主体哲学または主体思想を解釈する時には、先行思想との関係問題を論じることもありますが、その時の表現としては、主体思想はマルクス・レーニン主義と一定の階級的理念、使命の共通性による連結があり、主体思想はマルクス・レーニン主義で提起された問題を一定程度発展させた側面もある。だからと言って、マルクス・レーニン主義を一定程度発展させた内容が主要な内容を成しているわけではない。主体思想は自らの固有の原理で展開され、体系化された独創的な思想である。このように表現すべきです。このように解釈すれば、主体思想と先行思想との関係がどのようなものかを正確に解釈できます。主体思想は、独創的で新たな体系として展開されたということ、マルクス・レーニン主義が提起した内容は数多くの限界があったこと、マルクス・レーニン主義をそのまま主体思想において革命理論を展開するとか領導方法を展開した部分というのはないこと、これらが重要です。

それでは次に、マルクス・レーニン主義において経済的な構造の土台が上部構造となっている問題について見てみましょう。マルクス・レーニン主義では経済的構造の土台が上部構造となっている問題を提起し、それに基づいて社会発展過程を説明しましたが、これは主体思想の原理と合うのか、合わないのか。このことについては、マルクス・レーニン主義において経済的構造の土台が上部構造となっている問題はどのように提起されたのかを具体的に掘り下げれば分かると思います。

マルクス主義では社会を論じる際に、社会を構造的に見ると、土台と上部構造の統一体だと見なした。ここで、土台とは社会の支配的な生産関係の総称です。上部構造とは、建物で言うと、生産関係が基礎・土台、上部構造は建物の上に立つという形式です。上部構造を土台に反映した社会意識とその意識に相応する機関、組織を上部構造の概念に入れて論じられています。マルクス主義における上部構造を見ると、土台は生産関係の総称、つまり社会的存在、上部構造はそれに相応する構造、機関、すなわち社会的意志だと理解します。上部構造には政治制度も入りますが、なぜ社会的構造に当たる政治制度を上部構造に入れたかと言うと、政治制度は土台を通じて一定程度人々の思想に影響を与え、意識が上部構造という機構を通じて土台に影響を及ぼすので、意識の作用を保障するという意味で、政治制度も上部構造に入れ、それを総称して社会意識として論じました。つまり、土台に対する意識の作用を保障する意味で、土台を社会存在に入れず、上部構造の概念に入れて論じました。このように、土台と上部構造とを分け、社会的存在、社会的意識の二つの軸により、土台が上部構造を規定し、土台で規定される上部構造はここに反作用されます。

要するに、上部構造に対する土台の作用は基本作用で、上部構造が土台に与える影響は反作用です。作用があれば反作用があるという物理学の法則をそのまま当てはめました。それで、土台に対する上部構造の作用は反作用であると。従って、土台である生産関係が一次的で、上部構造が二次的であると言います。上部構造も土台も内容は数多いですが、土台である社会存在の中には生産関係、自然、地理的条件も様々ですが、その基本は経済制度で、上部構造である社会意識も組織機構など、哲学、芸術、宗教、文学など数多いですが、その基本は思想です。このように、マルクス主義における土台と上部構造の関係は、結局基本となる経済制度と思想意識との関係問題ということになります。土台と上部構造の関係を具体的にマルクス主義では、土台である生産関係は生産力の発展によって生産関係が発展する、そして土台が変わると、土台の発展に合わせた形で思想意識である上部構造が変わると言います。土台は上部構造を規定するが、その土台は生産力の発展によって進展します。

このように、マルクス主義では、社会が発展する過程を生産力の発展が基礎となり、それに見合う生産関係が進展し、それに合わせて思想意識が進んでいく。その意味でマルクス主義は、生産力の発展が社会発展の基礎となる理論です。生産力の発展によって生産関係が進展し、生産関係である土台に合わせて、上部構造である思想意識が発展するというマルクス主義の理論は、現実的な社会発展過程に照らし合わせたとき、これと適合するか否か。もしも現実的な社会発展過程に適合するとすれば正しい理論であり、適合しないとすればとその理論には限界があるということを意味します。

それでは、マルクス主義の土台と上部構造の理論を社会発展の過程に適応させてみましょう。適応させてみるとどのような不合理があるでしょうか。社会発展の過程がそのようになっていないという結果になります。まず、社会制度はもちろんのこと、資本主義社会が発展する過程を見ても、資本主義的な生産関係が出てきてから生産力が出てきますので、それゆれそのあとに資本主義思想が登場してきたのか。そうではありません。資本主義社会が確立されてきた過程を見ると、封建社会の中でブルジョア思想が先に出現し、ブルジョア思想に依拠しながらブルジョアたちが封建制度に反対するブルジョア革命を遂行することになります。これに広範な反封建力量を結集し、ブルジョア革命を通じてブルジョア政権を建てます。もちろん、ブルジョア革命が遂行される以前にも、資本主義的生産関係が出現したということはあります。しかし、それは資本主義経済制度ではない。資本主義的な経済関係ではあるが、資本主義経済制度ではない。資本主義経済制度になるには、それが封建社会生活全般を包括すべきであるが、全般を包括する堅固な経済制度にはなっていません。まだ、封建社会で発達した資本主義的な生産関係、資本主義経済制度とは言えません。

制度の確立過程に着目するならば、ブルジョア制度の過程も、ブルジョア思想が登場してきてからブルジョアがブルジョア革命を通じて、ブルジョア政権を建て、すなわち資本主義的な政治制度を打ち立ててから、一定の歴史的な経緯を通じて、資本主義が発達しつ

つ、産業革命が起きるわけです。つまり、産業革命を経てから資本主義経済とその制度が確立します。敷衍すれば、まずブルジョア思想が登場し、ブルジョア思想を持った人たちがブルジョア革命を通じ、資本主義制度が立てられてから、資本主義経済制度が誕生するのです。マルクス主義理論では、生産力の発達によって経済制度が確立し、それに合わせて政治制度と思想が出てくるということになると、合わなくなってしまします。このような資本主義制度が確立されていく過程を見ても、とりわけ社会主義の確立過程を見てもそうなのですが、マルクス主義における土台が上部構造を決めるという理論がそぐわないというのが明らかです。

社会主義の確立過程の場合、まず搾取と圧迫に反対する運動の中から社会主義思想が登場する。主体思想もまた、まず反帝反封建民主主義運動を遂行する中で登場してきたので、主体思想は典型的な社会主義思想と言えるでしょう。搾取と圧迫に反対する闘争する中で社会主義思想が生み出され、この社会主義思想を持った人々が党を組織し、党が大衆を意識化、組織化させて革命の主体的力量を作ります。そのあと、組織化、意識化された大衆が革命を通じて古い制度を覆して社会主義制度を打ち立てます。つまり、社会主義政治制度が作られるわけです。社会主義政権が成立した後、社会主義革命を遂行する活動を通じて、社会主義経済制度が確立します。これは我が国の歴史的発展過程を見れば明らかです。

1930 年代に主体思想が創始され、首領様が広範な反帝民主主義力量を団結させて、祖国解放の闘争を通じ、祖国を解放させました。祖国を解放した後、まず民主主義政権を樹立し、次に諸民主主義改革を実施し、民主主義制度を確立する。民主主義制度が確立する過程は、民主主義政権が誕生して民主主義経済制度が確立し、文化制度も確立される過程です。社会主義制度が確立される過程を見ると、その力量が社会主義政権を 1947 年 2 月に創設し、その後社会主義革命を一貫して遂行するが、社会主義革命が戦後普遍的になり、1958 年 8 月にそれが完全に達成されます。つまり、生産関係の社会主義的改造が終わり、社会主義経済制度が確立しました。

このように、社会主義制度が樹立される過程を見ても、社会主義思想が最初に出てきて、社会主義思想を持った闘争を通じ社会主義政治制度が樹立され、その後社会主義政治制度と関連して社会主義経済制度が確立されます。この展開は、マルクス主義理論における生産力の発展によって生産関係が改変され、その生産関係である経済制度が確立された後に、政治的上部構造により思想が変転し、政治制度が変わるという説明と合いません。社会主義制度が成立してからの社会主義の発展過程でも同じです。社会主義の発展過程もまた、社会主義思想で武装された人々によって、社会主義政権が維持、強化発展され、その社会主義政権の機能と役割が高くなり、社会主義経済制度の発展も成し遂げられることになります。従って、社会発展の現実的な発展過程を見てみると、マルクス主義は生産力の発展が社会発展の基礎になると説明したが、実際には社会発展の基礎は生産力ではなく、人間の発展が基礎となります。人間が先進思想を有して古い政治制度、政権を覆し、新たな政治制度を樹立してから、経済制度が建てられるという過程がよく分かります。繰り返しま

すが、土台と上部構造の理論関係に関して、土台の発展によって上部構造が発展するというのは、現実の社会発展の状況とは合いません。もちろん、影響を与えている側面はありますが、社会が発展する過程を見ると、先に生産関係が発展し、上部構造が改変されるのではなく、その反対に、上部構造に属する人々の思想レベルが高くなり、人々の力の存在が発展してこそ、政治制度及び経済制度である土台が変化します。これが現実的な過程なのです。

以上のように、マルクス主義の土台と上部構造に関する理論を社会発展の現実的な過程に照らしてみると合わないのです。従って、これをもって社会発展の過程を説明するのは多くの不合理な点があります。マルクス主義は、物質と意識の関係の問題を哲学の根本問題とし、物質の一次的原理よって世界を説明しました。さらに言うと、この原理をそのまま社会歴史を説明するに援用しました。すなわち、社会発展に対する見解も唯物論的な見地から説明すべきだとし、観念論に対して唯物論的な社会歴史的基本任務であったので、物質が一次的であるという原理をそのまま移行して社会的存在を設定し、社会存在が一次的であると説明しました。同様に、意識が二次的であるという原理をそのまま移行して、社会意識が二次的であるとして社会存在が発展の基礎になると言い、それの発展によって社会が進展すると説明しました。このように、社会発展における唯物的立場を徹底的に固守し、唯物論的社会歴史観を人々に与えようとする意図から、土台と上部構造の関係を展開しました。

確かに、土台と上部構造に関する理論は、唯物論的な見解を合理化させるには何らの支障もなく社会を説明することができます。しかしながら、社会発展の現実的な過程を具体的に分析してみると、そのような唯物論的な立場で社会発展の現実的展開を説明するのには不合理です。要するに、唯物論的な社会歴史観を確立するには、一理があるし、また妥当性があると見なすこともできますが、社会発展の現実的な進展を説明するのには合わない点が多く不合理です。土台と上部構造に関する理論は、機械的に現実の社会発展の実態を説明するには合いません。

３．朝鮮では経済強国が実現するのに先立って、思想・政治・軍事強国が達成されている。これを思想的にはどのように解釈すればよいかについて

土台と上部構造に関する理論とは異なりますが、それに関連していると見ることはできます。「主体思想論の原理」と「政治決定的役割に関する原理」、「革命は銃で開拓され、前進され、完成される銃哲学原理」、この三つの原理に基づいて、経済強国が実現するのに先立ち、思想・政治・軍事強国を建設することがなぜ重要なのかを説明することができます。

まず、思想意識が決定的な役割をするという「主体思想論の原理」に基づいて、社会主義社会を発展されるためには、人民大衆を思想的に武装させ、彼らの精神力を最大限に発揚させるのが、社会主義建設で成果を生み出すためのもっとも優先的な任務です。従って、わが国では思想強国、すなわち全社会の思想的な一色化を実現し、千万軍民を一心団結さ

せる思想強国の課業をもっとも重要な強国建設の優先課題として提起し、遂行することになりました。思想強国の課業を優先的に遂行することは、「主体思想論の原理」に従うと、人々が思想の強者にならなくては、経済強国、軍事強国などの強国建設も出来ないという前提に立っている考えです。

政治強国建設は、「政治が社会生活で決定的な役割をする」という主体の政治理論に基づく、重要な問題としての政治強国問題です。政治は、階級あるいは社会の共同利益に合わせて、人々の行動を統一的に組織、支配する社会的な力です。社会生活において政治は、行動を統一的に組織、支配し、また社会を動かす力であるから、経済、文化よりも社会生活において主導的、決定的な役割をすると言えます。どの社会でも、まず人々が思想的に武装されたのちに、その国の党と国家の政治が良くなりますし、そうであるべきです。自主的な政治になってこそ、経済、文化、社会生活の全ての分野が発展し、活力に溢れます。自主的な政治ではなく、他国の動向ばかりを気に掛ける隷属的な政治、事大主義的な外勢による政治が行われれば、世界生活の全般は崩壊状態に陥ります。主体思想では政治での自主、すなわち自主的な政治を実施して初めて、経済的自立が実現し、国防において自衛が実現するというように、全て政治の自主によって他のことが保障されると考えます。政治的に自主独立国家にならないと、経済的に他国に依存し、国防分野でも他国に隷属させられるという結果になります。従って、政治は社会生活において決定的な意義を持つ分野となる、つまり政治が社会生活で決定的な役割をすると主張するのです。

政治が社会生活において決定的な役割をするのですから、社会を発展させるためには自主的な政治を行うべきです。政治強国を建設するとは、その重要な内容は政治での自主的な原則を徹底して貫徹させる国、政治的自主性が強い国として建設するというのが政治強国建設の本質です。自主的な政治を実施する国を作る、自主的な政治を実施する国とは、政治を実施する際に徹底して、「自国の人民の利益を擁護し、自国の人民の力による」政治をすること、自らの民族の民族的独立と自主権を徹底的に固守すること、そして絶対に他国に隷属されないことが政治的自主性を堅持する国の徴表だと言えます。政治での自主という原則に基づいてこそ、社会生活の全ての分野で、主体思想を具現し、経済、軍事を発展させていくことができ、それがもっとも根本的な原理ですから、わが国では政治強国の問題がもう一つの重要な優先的な課業となっています。

政治強国問題、すなわち政治において自主的な原則を堅持するというのは、首領様が革命を勝利へ導いた過程、解放後に政権を樹立し、新たな社会を建設してきた過程において一貫して堅持してきた問題です。政治強国の問題は、このようにかなり以前から解決してきた問題です。全社会の一心団結を実現し、人民大衆の政治的地盤を強化するのが、政治強国の側面の一つですが、これは長い歴史的過程を通じて、実現されてきました。自主的な政治を実現する問題は、首領様が新たな社会を建設していく全ての過程で一貫して堅持した原則でした。

次に、軍事強国問題ですが、「革命は銃から生まれ出て、開拓され、完成される」という

「銃哲学」、「銃原理」に基づいて、軍事強国問題が経済強国問題よりも優先的な課題となりました。「革命は銃から生まれ出て、開拓され、完成される」というのは、一般的に革命闘争における一つの公式、革命の一般原理です。抗日闘争も武装を行い、武装闘争を遂行したので勝利を収めました。また、革命後に革命武力を創建し、革命武力を強化することに優先的に注力したので、米帝に反対する 3 年間の祖国解放闘争に勝利することができました。その後も、米帝と南朝鮮傀儡徒党が新たに強化してくる戦争策動も退けながら、社会主義革命を勝利に導いてきました。「銃によってのみ革命が開拓され、前進され、勝利できる」という「銃原理」を、実際の革命実践に具現した軍事強国問題を優先的に解決すべきとしてきました。

軍事強国というのは、自国を帝国主義の包囲から保衛することです。このような、軍事強国を建設することこそ革命を守り、社会主義を守るのです。特に、今日のような唯一我が国が帝国主義の包囲の中で、社会主義を固守していくという厳酷な条件下では、強力な軍事強国ではなければ、帝国主義の孤立圧殺に勝ち、社会主義革命を完成することはできません。そこで偉大な将軍様は、「革命は銃から生まれ出て、開拓され、完成される」という「銃原理」は、社会主義建設段階では、「軍隊は党であり、国家であり、人民である」という原理として具体化されたのです。革命軍隊、強力な銃器がなければ、党は自らの存在を維持できず、国家も存在維持できず、自主的な人民もあり得ません。強力な革命軍隊がなけれは、社会主義政権も人民もあり得ないという重要な真理です。社会主義全般を導いていく威力的な党も、強力な軍隊があってこそ維持される。「主体思想の原理」、「政治決定的な役割に関する原理」、「革命は銃から生まれ出て、開拓され、完成される」という銃器哲学の原理に基づいて、経済強国を建設する前に、政治思想強国、軍事強国問題を解決しなければならないので、この問題が先に立つという問題になったわけです。

このように、政治思想強国、軍事強国問題を重ね合わせて考えてみると、いずれもが革命の主体を強化するための事業であると言えます。一般的に革命の主体というのは、首領、党、大衆の統一体であると言えます。先軍時代にあって革命の主体とは、首領、党、軍隊、人民の統一体です。革命の主体を強化する事業は、政治思想強国、軍事強国を通じて成し遂げられます。革命の主体を強化する事業が政治思想強国、軍事強国問題で解決すべき問題だというのは、革命の主体を強化する事業が社会主義建設と革命において如何に重要な問題であるかということであり、それゆえ社会主義のための闘争における根本問題だということになります。社会主義のための闘争における根本問題とは、革命主体をしっかり作らなくては、社会主義政権を樹立する事業で勝利できないということです。また、革命の主体を強化する事業を不断に強化しなくては、社会主義社会を建設できず、その優越性を発揮できないということです。その意味で、革命の主体を強化する事業は、社会主義のための闘争における根本問題だと言うのです。

この革命の主体を強化する事業が社会主義のための闘争における根本問題だというのは、わが革命闘争の実践から明らかに出てきました。つまり、過去に社会主義を建設した国々、

社会主義が挫折した国々の教訓を通じて、革命の主体を強化する事業が社会主義のための闘争において根本問題となるのだということが明確に明らかにされたわけです。社会主義を建設した国々においてそれが挫折した根本原因は、革命の主体を強化し、主体の役割を強化する事業を根本問題として設定できなかったからです。多くの国々で社会主義が挫折し、社会主義の地球上での終末を告げるブルジョアや帝国主義者が蔓延る中で、唯一我が国だけが社会主義の旗を最後まで固守し、社会主義のための闘争を一貫して前進できた重要な要因は、革命の主体を強化する事業を根本問題にしてきたからです。

革命の主体を強化する事業は、我が国において抗日闘争時期から終始一貫ずっと続けてきた事業です。主体を強化する事業を根本問題に革命と建設の中で先に立たせ、ここに大きく注力してきたので、他国では社会主義が挫折しましたが、我が国だけは社会主義を最後まで固守し、今日は社会主義強国の高い目標を提起し、闘争できる段階に至っているのです。

社会主義建設において根本問題となる革命の主体を強化する事業が、政治思想強国建設と軍事強国建設です。従って、経済強国問題を解決する前に、政治思想強国建設と軍事強国建設を解決しなければなりません。それは何度も言うように、主体を強化する事業において主体を強化する事業が社会主義革命建設での根本問題となるからで、これを前に立たせなければならないからです。偉大な将軍様が辛い「苦難の行軍」時期に、わが人民が草木を代用食品にして食事を済ませるという状況に血涙を流しながら、「私は国防の強化のために資金を回した」と仰いましたが、これはもちろん資金を経済建設に回せば、一時的に人民たちの生活が楽になるかもしれませんが、そうなると帝国主義者の侵略策動に結果してしまうことを阻止する苦渋の選択だったのです。従って、将来の担保となる国防建設に資金を支出し、偉大な将軍様が先軍政治もお開きになり、国防を強化し、わが革命武力を百戦百勝の強国に育てる偉大な業績を挙げられたのです。以上のような原理に基づいて、偉大な将軍様の先軍領導、先軍政治の偉大性も導き出された領導であることを認識いただければよいと思います。

４．主体思想において「自主」とはどのような意味を持つ言葉なのか。「主体」と「自主」はどのように使い分けて考えればよいかについて

主体思想のみならず、一般的に社会科学者たちが表現は同じであるが、異なる意味として使われる場合が多いようです。どのような意味で用いるのかをよく考えてみて、概念を使います。その意味で、「自主」と「主体」の意味はこれをよく理解してから、正しく使う必要があると思います。

まず、「自主」という表現は、自ら主人になるという意味です。自ら主人になるという意味において主体思想では、主に三つの意味で「自主」という表現を使います。第一に、自主は、人間あるいは人民大衆が世界と自らの運命の主人として有する性質、権利、立場ということで用いられます。例えば、人間が持つ性質としての自主性、世界と自らの運命の

主人になるという性質、また自らの問題は自らが主人として処理していくべき権利を表す自主権、そして主人として必ず持つべき立場としての自主的立場です。このように、主人として持つ性質、権利、立場を語る時、「自主」という言葉を使う場合があります。第二に、人民大衆が主人になるための運動、生活、偉大な事業を語る際に、「自主」という概念を使う場合があります。例えば、人民大衆の自主性を実現するための運動の場合、自主的な運動、自主的な要求を実現するための主人としての生活である場合の自主的な生活、主人になるための偉大な事業である自主偉業、人類自主偉業、わが人民の自主偉業などです。第三に、一定の歴史的な時代を特徴として表象する自主、例えば人民大衆が主人として登場し、人民の役割を遂行する我が時代を特徴とする自主時代、人民大衆が主人として登場した時代としての自主時代など、自主は自らが主人になるという意味を持っているので、以上のような場合に「自主」という言葉を用いて表現します。しばしば自主という言葉を用いるのは、「自主性」という性質を表現して使う場合が多いです。あるいは、「自主権」、「自主的な立場」、「自主的な運動」、「自主的な生活」などです。

これに対して「主体」とは、第一に、自然の運動と区別される社会運動の担当者を意味する言葉、すなわち歴史の主体、革命の主体、社会発展の主体など、一定の社会運動をになっていく担当者という意味で用いられます。マルクス主義では、物質は全ての変化の主体です。従って、マルクス主義では、主体という概念を一般的な運動の担当者、自然の運動でも、社会の運動でも関係なく、物質が全ての変化の主体であるとし、一般的な運動の担当者を「主体」の概念で捉えました。しかし、主体思想では、全ての運動の担当者ではなく、社会運動の担当者だけを主体という概念で捉えています。前述の「革命の主体を強化する問題が社会主義革命では根本問題である」というように、これは革命という社会主義社会建設、社会主義運動の担当者を念頭に置いて、主体という言葉が使われています。担当者である首領、党、大衆を強化する問題です。第二に、「革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にある」という主体思想です。つまり、「革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆にある」という思想を表現する述語として「主体」という概念が用いられているということです。先に社会運動の主体を語る時に「主体」を用いると言いましたが、歴史の主体の場合には、人民大衆を念頭に置くことになりますから、どの運動でも主体は人民大衆です。そして、人民大衆が主人であり、人民大衆が推進する力を持っているという思想を表現するので、「主体」思想と表現します。これが二番目です。第三に、革命と建設で党が堅持している党の自主的で創造的な原則と立場を表現する際の述語として使います。例えば、主体的な立場、主体を打ち立てるという具合にです。

このように、「主体」と「自主」は主体思想においてもっとも数多く使われる概念で、また様々な概念として使われます。従って、様々な場合によってこの二つの概念を正しく使うという問題が重要となります。概念を正しく使ってこそ、主体思想の内容を正確に解説することができるし、自ら理解することができるし、他の人に理解させることができます。

例えば、「社会運動の主体は人民大衆であり、社会運動の主人は人民大衆である」というのは間違いです。「主人」の場合は、一定の地位を表現する概念ですから、革命と建設の主人は人民大衆であるという場合、革命と建設の地位を明らかにする意味としては、主人は適合します。このように、「主体」と「主人」、「主体」と「自主」という概念を正しく使うべきです。

５．宗教は主体思想の教育体系に含まれないのかについて

わが国では宗教を教育するということはありません。法的には、「信仰の自由を許容する」ということになっていますが、教育は施しません。以前、金日成総合大学の歴史学部に宗教科というのがありましたが、それは我が国に宗教人が数多くやって来て、彼らとの対外事業を行うために専門家を育てなければならず、それで設置されたものです。如何なる宗教人も養成されるものではなく、宗教を教育するということは、宗教を信じさせるということだと思いますが、人為的に宗教を信じさせるということはあり得ないことだと思います。

朝鮮にも外国人が多いし、彼らの必要を実現するために教会はあります。しかし、我が国の人々がそこに救いを求めに行って、宗教を信じるということは、率直に言ってありません。なぜなら、「主体思想は、人民の自らの要求と利益を反映した思想」であり、「自ら受け入れる思想」だからです。それゆえ、思想を信じさせ、従わせることが重要となりますが、宗教も同様にそれを信じさせようとすると、それは意図的になります。人々が宗教を信じる重要な理由というのは、搾取社会のような状況では、人々が貧しく、虐待を受け、無権利の中で、人々は自らの運命を開拓する道がなく、運命の開拓を委ねる依りどころもない、それで宗教でいうところの神様でも信じなければということで救いを求めに行くことになる、そのような理由です。このように、人々が日常生活で考えているのは、自分の運命がどうなるか、誰が自分の運命を開拓してくれるかということです。その意味で言うと、思想が人民大衆の心情を把握するためには、彼らに運命開拓の道を正しく明らかにするべきであり、そうすることです。それは個人でも集団でも同じです。

先ほど、マルクス主義は広範な人民大衆の中に浸透できなかったと申し上げましたが、「物質は一次的で、意識は二次的である」ということを如何に語ったところで、圧迫され搾取された人民大衆が自分の運命はどうなるかについての答えが直接に出てきません。それで、広範な大衆はその思想を死活的なものとして受け入れない。しかし、主体思想では、「革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推進する力も人民大衆である」ことを明らかにしています。言い換えれば、「自分の運命の主人は自分自身で、自分の運命を開拓する力も自分自身にある」というのが主体思想の核、真髄です。つまり、主体思想はその思想自体が「運命の主人になりなさい」ということ、「ハナニム」（神様）を信じなくても、自分自身が運命の開拓者である、「ハナニム」が自分の運命を開拓してくれるわけではない、「自分自身が自らを信じ、自らの力で開拓していきなさい」ということを明らかにし

てくれる思想です。このように、運命開拓を指針とする偉大な思想があるにもかかわらず、なぜ虚構である神様を信じますか。信じなさいと言っても信じられるものではありません。他国には宗教もあり、それを信じる人もいますが、我が国にはいません。我が国の人々は宗教を信じません。

（金正国氏の発言）他国の人々が信じている宗教、仏教でも、キリスト教でも、イスラム教でもよいですが、自分たちが信じる存在を立てて、人々がそれに倣い、人間として高尚な道徳を持った存在として生きるべきだと言います。我が国では政治思想教育だけでなく、思想教養のすべての体系で、社会主義・共産主義的人間、自主的な人間となるために、人々が道徳的な見地からどう生きるべきか、義務をどう執行すべきか、集団の中でどう生きるべきかを教育しており、仏教を信じて、仏教的な教理による修養と同じように、現在我々も主体思想教養事業が全ての面で施されています。我が国に教会があるのは、とくにロシア正教ですが、ロシアの大使館の人々が礼拝に行く場合もあるし、祖国統一のために国際交流を強化していますが、他国から来る人々は宗教を信じる人もいて、その人たちのためにあるという側面もあります。私たちは彼らに自分たちの思想を強要しません。我々が思想を強要したとしても、全ての人々が主体思想を信じるとは限りませんから、他国の人々が来ると、統一的連帯を強化するためにはそのような施設が必要です。我が国の人々をそこに行かせて、信じさせようとする意図ではありません。宗教を奨励したりはしていませんが、反対したりもしません。

総体的に言って、我が国では主体思想が誕生し、つまり首領様が主体思想を創始し、我が国での特殊な環境で創始されたとはいえ、植民地下に置かれた国の人々にも多く啓蒙され、自らの運命は自らが開拓して、社会主義革命を急ぐ環境下で多大な力を与えることになりました。人々は宿命論的ではなく、何か努力して創造し、力を尽くす場合、もっと立派なものを掲げることができるということで思想的に覚醒し、全ての人々が「全体は一人のために、一人は全体のために」というスローガンの下で力を合わせ、我が人民が豊かになる国をともに作ろうとすることに主な重点を置きます。自分の幸せだけでなく、全ての人々が立ち上がっています。現在は、全ての人々が同じように豊かになることは難しいですが、社会主義強盛国家の場合、社会主義革命をする国々で条件が難しくても、その良好な理念において人民がもっとも豊かになるべきものであるということです。お金持ちが特殊階級を占めたり、権力者が豊かになったりする国ではなく、人民が豊かになる社会を建設することに全てを集中させ、現在は確かに辛いですが、全ての人々がみんなのために立ち上がること、このように社会主義思想で武装させ、自分一人だけ良い暮らしになるためではなく、みんなが努力して明日のもっと良い楽園を建設するために立ち上がろうとしているのです。この側面での教育、教養です。

全ての人々がその方向で努力すれば、必ず建設できます。主体思想は各個人、各集団に自らの運命は自らが開拓すべきだとして、集中的に教育、教養して立ち上がらせる。思想

を発動することにおいて他国と少し異なるのは、何かをする前に思想事業を常に優先するということです。これは、思想事業を先に行うことがもちろんお金になり豊かになるという金銭的なことを強調するものではなく、これをすることが思想教養事業において如何に重要なのかを前提にしているのですが、それによって本当に、現在我が国で世界を驚かせるような変革的な成果が見られる。それは単純に機械的な設備とか、現代的な設備ではなくて、本当に全ての人々が発揚されて、荷物一つ持っていく人、その他各自が立ち上がって創造するのです。他国が驚くのは、思想を発動させて人々の積極性を発動させ、創造性を発揮させるということが現実に成果を上げているからです。特に、現在のように制裁もあり、統一もなされていない難しい条件で、主体思想生活力が成果として現れています。

従って、我々は自信を持ち、今後も思想を優先にして、社会主義建設を行って行くでしょう。このような角度から主体思想を考えてみて下さい。朝鮮はなぜ主体思想をするか、主体思想はどう具現されているのか、主体思想の生活力はどう現れているのかという具合にです。今回の朝鮮労働党第７次大会報告でも、我が元帥様が特に強調した部分は、我々はもう政治思想強国、軍事強国の列に堂々を立っているということです。しかし、経済の側面でまだ足りない部分があると直接に指摘なさいました。これからは、経済建設と人民生活向上に全国が立ち上がろうとして、思想を発動させつつ、70 日闘争に続き、200 日闘争が展開されています。

さて、そこで宗教の教理を見ると、単純に言えば、文字面から言うと、悪いところはありません。例えば、善とか、誠実とか。しかし、宗教や思想がこの世界に登場した際には、人々に宗教や思想を利用して、ある個人や組織が自らの思い通りにしようと企図した場合が多いです。国ごとに自己の特殊性に見合う宗教を作って、それを人々に信じらせてから、これを利用して、人々が他の考えをしないように、あるいは自分がすることが一番いいことだと信じさせ、思いのままに利用する、そういう側面が多々ありました。教理上、悪くないものであればあるほど、否定しにくいものであればあるほど、そういう側面がある。

このように、宗教は一つの思想、一つの世界観により、ある歴史の一時期、一定の社会発展の中で、支配階級の手中に掌握され、利用されました。被支配階級の思想であるかどうかに関係なく、一定の思想であるから、思想は何らかの利害関係を反映し、また人々がその思想に従うかどうかは、自らの利害関係と連結されているかどうかを基準に決定されます。貧しい人々が宗教を信じたのも、生活上の利害関係からそれを信じました。そのような条件で、思想が人民大衆の心情をつかみ、人民大衆の中に浸透しました。思想は、人民大衆の利害関係を反映すべきである。そして、直接に人民大衆に自らの運命を開拓できる道を教えるべきである。主体思想が巨大な生命力をもって広がっているのがそれです。すなわち、人民大衆の利害関係を反映し、人民大衆に自らの運命を開拓できる道を教えている。その点で言うと、マルクス主義は人民大衆がどうすれば豊かになるかということにおいて、直接的に分かりにくいです。

６．マルクス主義における事物の対立や統一の側面から見ると、それは主体思想の場合に弊害となる部分があるのではないのかについて

マルクス主義には対立物の統一論がありますが、それはマルクス・レーニン主義が資本主義社会の階級的矛盾と階級的闘争の原理を証明するために、対立物の統一と闘争の法則を出しました。元来それはヘーゲルから出てきた理論です。ヘーゲルは、理念の法則としての理解でしたが、マルクス主義はそれを唯物論的に改造して、資本主義社会の階級的矛盾と階級的闘争法則を定立化させるために、対立物の統一と闘争の法則を編み出しました。しかし、対立物の統一と闘争の法則が今日の視点ではそぐわないです。特に、社会主義社会の現実を説明するには、対立物の統一と闘争の法則は意義がありません。主体思想では、対立物の統一と闘争の法則については言及しません。全てが対立し、統一されている際、社会主義社会は利害関係の共通性で一つに統一されていますが、互いに対立的なものがあるとする場合、社会主義社会の姿を説明できないからです。対立物の統一と闘争の法則をもって、社会主義社会の現実、特に主体思想のある特徴を図ろうとするのは間違いです。

主体思想を説明する際に、偉大な将軍様は、絶対にマルクス主義の枠組に合わせてはいけないと仰いました。マルクス主義の枠組に合わせて解釈する偏向が過去に我が学会においてもたくさん見られました。それゆえ、それで、「主体の唯物論」や「主体の弁証法」などとして、主体思想をマルクス主義の枠組に合わせて解釈ししようとしました。しかし、これまでにも述べてきたように、主体思想は根本原理からして新しく、独創的な思想でありますので、マルクス・レーニン主義とは異なる自らの固有の原理で体系化され、完成された独創的な哲学です。従って、マルクス・レーニン主義の枠組に合わせて、主体思想を説明するのは適合しようがありません。特に、現在我が統一問題を論じることにおいて、各層、各段階の民衆を全て統一させるべきなのに、対立物の統一と闘争法則は如何なる意義も持ちようがありません。社会主義社会の統一と団結が社会主義社会の基本になっているのに、対立物の統一と闘争法則をどう適応させるというのでしょうか。

７．党創建事績館において、首領様が平壌市市民の歓迎式で「お金のある人はお金を出し、能力がある人は能力を出し、知識のある人は知識を出し…」との演説を行ったと伺いました。中国の毛沢東もまた、演説で同じことを言っています。これは、国際共産主義運動から出てきた言葉なのかについて

マルクス主義にはそのような内容はなく、首領様が解放後、各層の広範な群衆を民主主義統一戦線に立ち上がらせ、彼らを新たな祖国建設の助けとするために、そのスローガンを出しました。資本家も知識人も労働者も関係なく、とにかく新たな祖国建設を志向する人々はみんな団結しよう。団結して、自らの置かれた状況下で、自分の能力を新たな祖国建設に捧げようという意味です。過去のように、革命の主力は労働階級であるとか、あるいは労働階級と貧農であるとかいうこととは異なります。これは、我が革命の特性に見合うよう、広範な階級と階層を革命の動力に見なす観点から出たものです。その意味で、我

が党のバッヂは、労働者、農民、インテリを象徴する土、鎌、筆からなっています。革命の動力を反帝反封建民主主義段階で広範な反帝民主主義力量を革命の動力に規定した首領様の独創的な思想が具現されたスローガンだと見ることができます。毛沢東もそういう内容を言ったのかどうかはよく分からないですが……。

（金正国氏の発言）ご存じのように、中国では最近、10 年くらい前から「三個代表思想」が出てきました。これについて、我々も多くの関心を持ちました。中国では改革開放後、個人企業も知的文化人もたくさん輩出してきました。以前は金持ちを我々は民族資本家と言いましたが、彼らも革命の動力にするか、闘争の対象にするか、そういう問題が数多く提起されました。「三個代表思想」では、先進文化を代表する存在を作り、個人企業者も中国の特色ある社会主義建設に貢献する対象として、再び抱きこみました。

首領様が先ほどの演説で仰ったことのうち重要なのは、「知識ある人は知識を出し」というところの知識ある人、すなわちインテリです。古い社会におけるインテリたちをどう処理するかという問題で、従来のマルクス主義では、固陋のインテリたちは利用してから切り棄てましたが、首領様は一時的な利用ではなく、革命の動力として共産主義まで連れて行く立場を明確にしました。我が国では、解放後も古い封建社会でのインテリたちが動揺するということはないです。従って、社会主義建設段階から今日に至るまで、一貫して労働者と農民とともに堂々たる革命の主人として生きています。